

## 満洲スポーツ史話 (II)

高 嶋 航

### 第9話 スケートI (前期)

#### (1) 満洲スケートの起源

日本のスケートの歴史は満洲をぬきにして語ることはできない。実際、『日本スケート史』や『日本のスケート発達史』は、スポーツ史には珍しいことだが、満洲の歴史に紙幅を割いている<sup>1</sup>。これは、前者には小池富治、後者には河村泰男と満洲にゆかりの深い人物が執筆陣に入っているというのが直接の原因だが、そうした人物が執筆陣にいるということ自体が、日本スケート史における満洲の役割の大きさを物語っている。ただ、これらの本で描かれる満洲のスケートは当事者の回顧にすぎず、断片的であり、当事者の記憶の及ばない時代（1920年代以前）はほとんど触れられていない。

満洲のスケートに関する最も古い記録は日露戦争中の1904年12月に遡る。奉天会戦の直前、奉天南方の半拉山子にいた従軍記者海南生の便りによると、彼が11月30日に東京から受け取った荷物の中にスケート靴が入っていた。「氷上運動は十年前の頃小生札幌に在りて盛んに之を試みし最も愉快、活潑なる寒地的の遊戯なり、今や幸にしてスケートの来着に接す以て満洲の氷原に応用し以て十年前の学生時代を偲ばんとす」と海南生は記す<sup>2</sup>。海南生こと小西和は1891年に札幌農学校に入学している。彼が書き送った「右翼軍葉書便り」は1905年3月まで『東京朝日新聞』に掲載されるが、その後満洲でスケートをしたという記述はない。

1908年1月、満鉄副総裁国沢新兵衛を会長とする大連スケート倶楽部が設立された。会員は特別、通常、臨時に分かれ、特別会員は創立費5円と毎月会費1円、通

<sup>1</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』日本スケート史刊行会、1975年；日本スケート連盟編『日本のスケート発達史：スピード・フィギュア・アイスホッケー』ベースボール・マガジン社、1981年。

<sup>2</sup> 海南生「右翼軍葉書だより」『東京朝日新聞』1904年12月12日。

常会員は毎月会費1円、臨時会員は毎回20銭をそれぞれ納付することとされた<sup>3</sup>。ちなみに朝鮮では、1908年2月11日に平壤の大同江で日本人が運動会を開くという記録があり、満洲と同じか、それより早くからスケートが始まったことがわかる<sup>4</sup>。

大連スケーティング倶楽部は設立後すぐに競技会を開催した。北公園の特設リンクで開かれたこの競技会では、大勢の見物人が見守るなか、大連キリスト教会のトマス・C・ウイン、アメリカ領事のグリーン、大連税関長の黒沢礼吉らが出場した<sup>5</sup>。ウインは1887年に来日し、長年にわたって金沢で布教していたが、日露戦争後に来満、大連で布教活動に従事していた<sup>6</sup>。ウインの三男モールによれば、これまで大連ではスケート靴を購入できなかったが、十字堂（自転車店）がアメリカ式のスケート靴を取り寄せることになったというから、スケートはアメリカ式だったことがわかる<sup>7</sup>。

『満日』に掲載されたこのモール・ウインの記事を目にした公主嶺の「大関生」なる人物は、15年前の思い出話を『満日』に寄稿した。中学生（北鳴学校）だった1893年ころ、彼は教頭の新渡戸稲造がアメリカから取り寄せたスケートを借りて中島遊園地を滑った。小学校を過ぎた函館では、外国人がスケートをしており、大関生自身も「ゲロリ」と称する下駄スケートで雪道を滑走した経験があったので、すぐに滑れるようになったという<sup>8</sup>。新渡戸は1891年に札幌農学校に赴任するが、そのときアメリカから持ち帰ったスケートを紹介、これが日本におけるスケートの起源のひとつとされる。

1909年1月に大連スケーティング倶楽部が制定した定書によると、会員になるには特別会員の紹介と幹事会の承認が必要であり、特別会員は入会金5円、会費1期4円も

<sup>3</sup> 「北公園の氷上り」『満日』1908年1月3日。なお、大連図書館には、大連スケーティング倶楽部編『大連スケーティング倶楽部報告：明治四十三年一～三月・第三次』1910年なる冊子が所蔵されるが未見である。

<sup>4</sup> 「氷上運動」『大韓毎日申報』1908年2月6日；손환『한국근대스포츠의발자취』경인문화사、2020年、39-40頁。

<sup>5</sup> 「スケーティング倶楽部開会式」『満日』1908年1月20日。

<sup>6</sup> 中沢正七編『日本の使徒トマス・ウキン伝』長崎書店、1932年。

<sup>7</sup> 「スケーティング遊戯」『満日』1908年1月20日。

<sup>8</sup> 大関生（在公主嶺）「スケーティング」『満洲日日新聞』1908年2月2-14日。白田明によれば、「ゲロリ」という呼び方は長野県佐久地方、青森県上北郡、福島県会津地方などに見られるという（「長野県に於ける下駄スケートの歴史」『信濃』49巻7号、1997年7月）。

しくは月2円、通常会員は会費1期1円50銭もしくは月80銭、満鉄見習および小児は月30銭を納めることとされた。また非会員は1回券(20銭)を購入すれば入場できた<sup>9</sup>。1909年度シーズンは1910年1月から3月まで活動し、特別会員は70名、通常会員は80名を数えた。会費は通常会員が2円、満鉄見習および学生小児は1円であった<sup>10</sup>。

のちに満洲スケート界の元老となる東瀬戸庄吉は、この年に西公園見島製氷所裏の池で滑っている人を見て驚き、気でも狂っているのではないかと考えた。鹿見島出身の東瀬戸にとって、凍った池さえ驚きだったのだから無理もない。池を滑っていた人物は、西公園にあった農事試験所の技師琴坂幸太郎で、東瀬戸は琴坂から靴を借りて滑ってみるが、こけてばかりで立つことさえできない。その後、東瀬戸は琴坂と同じ靴を北海道から取り寄せ、毎日スケートにいそしんだ。その靴は前後が反り上がり、真ん中には台があって、そこに足を載せて紐でくくりつけるというものだった。ある日、ウイン親子がスケートをしにきたが、その靴はスケートの刃が靴に固定されているうえに銀色に輝いていた。これに「垂涎おく能はず」となった東瀬戸はウイン博士を通じてアメリカにスケート靴を注文、翌冬にその靴を手に入れ得意満面に氷上を滑った<sup>11</sup>。

大連スケート倶楽部は1911年度シーズン(1911年12月開始)に会費を値下げし、特別会員が3円、通常会員が1円50銭となった<sup>12</sup>。子供の会員が増えて、特別会員50人、通常会員80人、学生子供は45人となった。1912年度シーズンには、さらに会費が値下げされ、特別会員が2円、通常会員が1円、学生子供が50銭となった。この背景にはスケーティング倶楽部が「年々衰頹の傾き」にあるとの認識があり、国沢副総裁の尽力で会員数を300人にまで伸ばした<sup>13</sup>。東瀬戸によれば、リンクの片隅には音楽隊がいて、「プカプカドンドンやり出すと皆が出てすべ」ったという<sup>14</sup>。

<sup>9</sup> 「北公園の氷滑り」『満日』1909年1月6日。

<sup>10</sup> 「氷滑発会式」『満日』1910年1月17日。

<sup>11</sup> 「スケート夜話」『満日』1928年12月21-22日。

<sup>12</sup> 「氷滑り始まる」『満日』1911年12月21日。

<sup>13</sup> 「北公園の氷滑」『満日』1912年12月30日。

<sup>14</sup> 「スケート夜話」『満日』1928年12月21日。

次に大連以外の地域に目を向けてみよう。1921年に撫順小学校長平岡数馬（のち安東氷滑研究会長）が述べたところによると、営口の遼河、安東の鴨緑江では「久しき以前」から欧米人がスケートをしていたが、それが邦人の運動となったのは1910年のことだったという<sup>15</sup>。

実は安東ではもっと早くから日本人がスケートをしていた。『大連新聞』の記事によれば、1906年には「市内有志が浦塩からスケートを輸入しはじめ下駄スケートでやつたものであつた、それが次第に一般に普及されるやうになり」とあり、安東は満洲氷滑発祥地とされている<sup>16</sup>。別の説ではこうである。安東郵便局の千葉茂雄（岩手県出身）は、ウラジオストクから安東にやって来た石川用之助が氷滑りをやると耳にして、一緒にやろうと誘った。1907年のことである。石川はウラジオストクから、千葉は内地から、それぞれスケートを取り寄せた。千葉のは「かうべ台」（下駄の一種）に鉄がついたもので、つま先で走って、その勢いで滑るものだった。千葉は石川の前で滑ってみせたが、石川は「これは幼稚だ」と問題にしなかった。2週間後に石川のスケートが届き、千葉と一緒に鴨緑江で滑った。千葉はぜひそのスケートが欲しいと言ったが、氷の季節が終わるところだったので、そのままになった。翌年にハルビンからスケートを取り寄せ、それを益田商店が売るようになってスケートが盛んになった（ハルビンでは1907年もしくは1909年に最初のスケート大会が開かれている<sup>17</sup>）。1908～1910年ころ、安東新報社が2度にわたって氷上運動会を開催、模擬店が出されて料理屋の芸者が接待をして賑わった<sup>18</sup>。安東スケート界の重鎮河原地近重によれば、「ロシヤ育ちの石川用之助」がスケートを始めたのは1909年冬のことで、これを見た少年たちがそのスケートを見本にして鍛冶屋に造らせ、翌年には約20人のスケーターができたという<sup>19</sup>。1909年2月21日に鴨緑江で氷上競技が開かれ、日本人、中国人、韓国人数千人

<sup>15</sup> 平岡数馬「南満洲は東亜に於ける氷滑の最好適地」『満日』1921年1月30日。

<sup>16</sup> 「満洲氷滑発祥地だと老人連意気込む」『大連新聞』1933年11月24日。

<sup>17</sup> 李述笑編『哈爾濱歴史編年』哈爾濱出版社、2000年、36頁；黒竜江省地方志編纂委員会編『黒竜江省志・体育志』黒竜江人民出版社、1997年、225頁。

<sup>18</sup> 「座談会 鴨緑江と氷滑」『満日』1943年2月1日。「千葉茂雄」は、原文では「千葉茂」となっているが、『旧植民地人事総覧』関東州編、日本図書センター、1997年、43頁により正した。「安東新報社」は、原文では「安東新聞社」となっているが、同社は1912年に設立され時期的に合わないので、安東新報社（1906年設立）に改めた。

<sup>19</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、龍溪書舎、

が来会したという記事が『東京朝日新聞』で報じられていることから考えて、石川がスケートを始めたのは1907年以前の可能性が高いであろう<sup>20</sup>。

満鉄附属地でスケート普及に尽力したのは満鉄運動会支部だった。たとえば安東では、1911年以降、満鉄運動会安東県支部が氷上運動会を主催するようになる<sup>21</sup>。他の満鉄附属地も同様で、1912年には遼陽、鉄嶺、撫順でも、満鉄運動会支部の主催でスケート競技会が開かれた<sup>22</sup>。大連では大連スケーティング倶楽部が存在したこともあって、満鉄運動会にスケーティング部が設置されるのは1915年と遅かった<sup>23</sup>。満鉄運動会奉天支部の「滑冰会」には1915年時点で男女260人の会員がいたという<sup>24</sup>。

## (2) スケート競技の発展

附属地対抗のスケート競技は1912年2月の撫順スケート大会に大連軍が参加したのが最初だろう。「満洲に於けるスケーティング<sup>マ</sup>会の覇権は、大連と撫順との両選手の手に分はれ」たが<sup>25</sup>、大連軍は1912年から1914年まで3連敗を喫した。

1915年2月の撫順スケート大会には奉天から26名が参加した。このなかには山口清治、杉田卯吉ら満洲医大の学生が含まれていた<sup>26</sup>。満洲医大生は半月ほど前にも修学旅行で撫順に来ていた。

あの時分の撫順は奉天より遙かに文化都市の様に思はれたね。市街も奉天以上に整ひ建物も立派、病院の規模も大きいし。第一に我々を喜ばしたのは当時の奉天にはスケートリンクなどないのに撫順には立派に出来て居た事だ。あの時分はまだ我々は今のスケート器具など知らず。奉天では寄宿舎の東方の池で靴のままか

---

1977年（1939年刊の複製）、793頁。

<sup>20</sup> 「鴨緑江氷上競技」『東京朝日新聞』1909年2月23日。日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』301頁には、『スケート年鑑』を引用して、1904年12月に石川が滑ったとするが、これは早すぎると思われる。

<sup>21</sup> 「氷上運動会」『満日』1911年2月19日。

<sup>22</sup> 遼陽は『満日』1912年2月2日、鉄嶺は『満日』1912年2月6、8日、撫順は『満日』1912年2月17、18、20日。

<sup>23</sup> 「満鉄氷滑部」『満日』1915年1月13日。

<sup>24</sup> 「奉天の氷滑会」『満日』1915年1月20日。

<sup>25</sup> 河本生「スケーティング大会の記」『撫順』17号、1914年3月18日。

<sup>26</sup> 空閑生「スケーティング大会記」『撫順』28号、1915年2月18日。

下駄で滑つて居たのに、こゝでは正式のスケートで滑つて居たので東北出身の諸君中には早速これを借用して滑つた人もあつた<sup>27</sup>。

それから半月経って、山口、杉田（秋田県出身）らは撫順に遠征にやって来たのである。それまで3連敗を喫していた大連軍は1915年の撫順スケート大会に出場しなかった。肩すかしを食らった撫順側は「到底撫順軍に敵し難しと自ら卑うしてか遂に今回は戦を避けた」と受け取ったが<sup>28</sup>、そうではなく、その翌週に奉天で開催される満洲氷滑大会で「積年の恥辱を雪」ごうとしていたのだ<sup>29</sup>。この大会は最初の全満規模のスケート大会で、大連をはじめ、長春、鉄嶺、撫順、遼陽、安東から選手が参加した。会場は満鉄スケート場、1周250mで、四隅に「特製弧形の長椅子」が置かれ、コーナーワークを要求された<sup>30</sup>。大会は小学生の競技から始まった。大連ではいまだ男子生徒すらスケートをしていない状況で、満鉄附属地では女子生徒も盛んにスケートをしていたことを『満日』は特筆している。続いて、各地の代表選手による連絡滑走が行われた。撫順と大連が激しく競ったが、4人目で大連がリード、大連チームアンカー「斯界の大將軍」東瀬戸庄吉がリードを守り切り、4度目の挑戦で初めて撫順を破った。大連軍は東瀬戸（中央試験所）以外の4人はすべて大連工業学校の生徒だった<sup>31</sup>。その後も競技は続き、最後の「十週滑走」は安東の河原地近重が2位以下の選手を半周あまりリードして悠々とゴールした。狭いリンクで練習をしている他の都市の選手と違って、安東の選手は広大な鴨緑江で練習している関係で長距離が得意だったという<sup>32</sup>。次年度の大会は、大連が主催することを申し出たが、安東や長春の代表が遠すぎると反対し、奉天開催に決まった<sup>33</sup>。

1916年度シーズンはヨーロッパでの大戦の影響で、ハルビンに注文したスケートが

<sup>27</sup> 黒田源次編『満洲医科大学二十五年史』満洲医科大学、1936年、359-360頁。

<sup>28</sup> 空閑生「スケーティング大会記」『撫順』28号、1915年2月18日。

<sup>29</sup> 「熱心な練習」『満日』1915年2月14日。なお、大会の名称については、「満洲氷滑大会」のほか、「奉天氷滑大会」「奉天の満鉄スケーティング大会」などと報じられた。

<sup>30</sup> 河村泰男「満州におけるスケートの発達」日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』301-306頁所収。

<sup>31</sup> 「奉天氷滑大会」『満日』1915年2月23日。

<sup>32</sup> 「奉天氷滑大会（続）」『満日』1915年2月24日。

<sup>33</sup> 「明年氷滑大会」『満日』1915年2月26日。

届かないというハプニングがあった<sup>34</sup>。恒例の奉天でのスケート大会はなぜか開かれず<sup>35</sup>、安東運動団と満鉄運動会安東支部の主催で満鮮スケート大会が開かれた<sup>36</sup>。開催地の安東をはじめ、満洲の奉天、撫順、遼陽、長春、朝鮮の龍山、新旧義州から参加者500人、観衆は3500人（一説に8000人）という大規模な大会だった。呼び物の「各地連絡滑走」（1500ヤード）は撫順が優勝し、昨冬奉天に譲った覇権を奪回した。最後の「四十二週滑走」（3600ヤード）は安東の本山健次が優勝した<sup>37</sup>。当時、安東の本山兄弟はスケート界を風靡し、大会では「櫓に一杯」ほどの賞品を持って帰ることもあった。のちにオリンピックとなる木谷徳雄は本山兄弟の指導を受けて育ったという<sup>38</sup>。

1918年から満洲スケート大会と満鮮スケート大会が別々に開催されるようになり、前者は撫順満鉄運動会の主催で開かれ、大連、遼陽、奉天、公主嶺、長春から選手が参加、撫順が優勝した<sup>39</sup>。後者は鴨緑江のコンディションが悪く中止となる<sup>40</sup>。満洲スケート大会は撫順で3回開催されたあと、1921年以降は満洲医大久保田晴光が中心となり、奉天新聞社の後援を得て全満洲スケート大会として開催されるようになる。今回より優勝旗が作製され、4連覇を飾った撫順の名前が縫い込まれた<sup>41</sup>。満鮮スケート大会は1919年も中止されたが<sup>42</sup>、1920年以降、毎年鴨緑江で開催された。この両大会は満洲における二大スケート大会となり、のちには満洲体育協会が両大会の主催者に加わることになる。

大連中学校教諭山本芳松は、スポルディング社のカタログを入手し、それまで満洲で使われていたスケート靴はフィギュア用で、これとは別にスピード用の靴があるこ

<sup>34</sup> 清公「スケーティング会の記」『撫順』52号、1917年2月18日。

<sup>35</sup> 「各地通信・奉天」『満日』1917年1月16日は、「紀元節前後競技会を開くべし」と記すが、結局開かれなかったようである。

<sup>36</sup> 「江上氷滑大会」『満日』1917年1月30日；「満鮮氷滑大会」『満日』1917年2月1日。

<sup>37</sup> 「鴨緑江上健児の群」『満日』1917年2月13日；高井生「満鮮氷上大運動会の記」『撫順』53号、1917年3月18日。

<sup>38</sup> 「座談会 鴨緑江と氷滑」『満日』1943年2月1日。

<sup>39</sup> 「満洲氷滑大会」『満日』1918年2月5日。

<sup>40</sup> 「鴨江氷滑中止」『満日』1918年2月8日。

<sup>41</sup> 斎藤兼吉「第7回全満洲氷上選手権競技大会に対する所感と各競技一覧」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』247-251頁所収。

<sup>42</sup> 「氷滑大会撫順に変更す」『満日』1919年2月3日。

とを知った。スピード用はブレードが長いので「ロング（スケート）」と呼ばれた。内地の運動具店では売っていなかったので、山本は英語の先生にロングスケート2足分の注文を依頼、体育堂が上海の外国商店から取り寄せたものを手にした。1921年12月のことである。山本は大連中学の学生徳永誓と相生由太郎<sup>43</sup>に新しいスケートを履かせ走法を研究した<sup>44</sup>。この証言は半世紀もあとになされたもので、額面通りには受け取れない。たとえば、体育堂が開店したのは1922年3月である。ロングスケートの輸入元も、岡部平太はカナダあるいは欧州、石原省三はノルウェーと述べている<sup>45</sup>。岡部は1921年9月、山本は同10月に来満し、1922年は彼らにとって満洲で最初のスケートシーズンだった。このシーズンはスケートに慣れるのに精一杯だったのではないだろうか。岡部は「鏡が池一周約三百メートルが転ばずに行ける様になるまで凡そ一シーズンを費した」と述べている<sup>46</sup>。ロングスケートの存在が満洲スケート界に知られるのは1922年度シーズンであり、1922年の晩秋か初冬にロングが大連に上陸したと考えられる。岡部は「あの物々しい薄い歯のロングを見た時こんなもので滑れるかなあと心配し」と、その当時を回想している<sup>47</sup>。

1923年1月、大連の選手はロングを引っ提げて奉天の全満スケート大会と鴨緑江の満鮮スケート選手権大会に参加した。両大会でロングを履いていたのは大連の選手だけだった。というのも、大連中学の生徒の発案で、大連の運動具店に輸入されたロングを大連の選手が買い占めてしまったからである。結果は、大連中学の徳永誓、佐川親雄らを主力とする大連勢が圧倒的な強さを発揮し、いずれも初優勝を遂げた<sup>48</sup>。当時

<sup>43</sup> 相生由太郎は当時大連商業会議所会頭で、ここではその長男四郎（大連中学生）を指す。四郎はのち由太郎に改名した。

<sup>44</sup> 山本芳松「体育に命を賭けて五十年」『体育の科学』19巻3号、1969年3月；同「随想：われ、生けるしるしあり」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中 創立五十周年記念』大連一中校友会、1970年、44-46頁所収。

<sup>45</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて（C）」『満日』1930年11月24日；同「日本スピードスケーティングの世界的開眼」（未刊稿）；河村泰男「満洲におけるスケートの発達」。岡部からみた満洲のスケートについては、拙著『国家とスポーツ：岡部平太と満洲の夢』KADOKAWA、2020年、175-187頁を参照。

<sup>46</sup> 岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

<sup>47</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて（C）」『満日』1930年11月24日。

<sup>48</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて（C）」『満日』1930年11月24日；同「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。



の大連中学の生徒はみなスケートをぶら下げて登校し、休み時間になるとあちこちでヤスリをかける音が鳴っていたという<sup>49</sup>。

奉天のリンクは狭いため、大連の選手はカーブを跳びだすものもいたが、それでも優勝した<sup>50</sup>。鴨緑江の大会について、のちに早大に進んで日本のアイスホッケー界を牛耳ることになる小西健一（当時、大連中学生）は、氷が堅いうえに砂塵がまかれた状態でエッジがたちまち丸くなり、滑るというより陸上を走るようなスケートになったこと、上流からの向かい風が強烈でバックストレッチが苦しかったことを大会の印象として書き残している<sup>51</sup>。

この大会は運営方法の点でも画期的だった。全満競技連合委員として大会運営に携わった岡部は、1周400mのリンク（例年は300mだった）、出発の合図、決勝の方法などすべて陸上競技の形式に改めた。その後、岡部は「今日から見たら物笑ひになるかも知れぬがそも／＼日本に於ける信頼し得るスケート記録の最初のものとして永久に保存さるべき文献的記録」であろうとこの大会を振り返っている<sup>52</sup>。なお、この大会の優勝者を日本スケート大会に派遣する計画があったが、立ち消えになったようである<sup>53</sup>。

「武器の差」で負けた各地の選手は、翌シーズンからさっそく「庖丁」のようなロングスケートに鞍替えした。小学校を卒業したばかりだった木谷徳雄は安東運動協会スケート部に所属していたが、部からロングスケートを配給され、それで練習を始めたという<sup>54</sup>。「武器の差」で勝った大連の覇権は1回で終わった。

撫順、安東、奉天の後塵を拝していた大連では、1920年代前半に次々と競技会が創設された。1922年1月、南山スケート会主催の第1回関東州スケート大会が開かれた。

<sup>49</sup> 入江一郎「大連一中雑感」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中 創立五十周年記念』137-143頁所収。入江は第7回生で1923年入学。

<sup>50</sup> 北河清「アイスホッケー部創立のころ」輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ：満洲医科大学史』満洲医科大学史編集委員会、1978年、599-604頁所収。

<sup>51</sup> 小西健一「思い出」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』870-871頁所収。

<sup>52</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて (B)」『満日』1930年11月23日。

<sup>53</sup> 「鴨緑江上満鮮氷滑大会出場選手猛練習を続く」『大連新聞』1923年1月13日。日本スケート大会がフィギュアスケートの大会であることが判明したためか。スピードスケートの全日本大会は1924年2月に諏訪で開かれたのが最初である。

<sup>54</sup> 木谷徳雄「スケート界の思ひ出、ロングスケート」『満日』1938年1月16日。

岡部平太によれば、遼東新報には次のような記録が掲載されたという。

大人	十周	一着	徳永
老人	十周	同	杉野
スネーク		同	杉野
大人	二十周	同	徳永

徳永は大連中学の徳永誓、杉野はかつて撫順スケート界で活躍した杉野謙三である。「この頃は距離の観念なく時間の観念もなかった」ようで「何周何周」といって競争していたと岡部は述べる<sup>55</sup>。これはやや言いすぎで、この1週間後に開かれた第4回満鮮スケート大会では、300m リンク 15 周の競技で10分34秒の新記録が出たと報じられている<sup>56</sup>。ただ、リンクの大きさや距離を統一するという観念がなかったことはたしかである。この満鮮スケート大会の様子は活動写真に撮影され、東京平和博覧会に出品されて満蒙宣伝の一端に供された<sup>57</sup>。

翌1923年、関東州スケート大会（大連スケート大会）は大連スケート会の主催で、満鮮スケート大会の予選として開かれた<sup>58</sup>。選手、中等学校、小学校の男女別に100m、1600mなどの距離を定めて実施されたのは、岡部のアドバイスによるのだろう。

1924年2月には満日が全満洲スケート大会を開催する。大阪朝日新聞社、大阪毎日新聞社からメダルが寄贈され、一般男子85名、女子40名、小学生50名が参加した<sup>59</sup>。1925年の第2回全満洲スケート大会は、大連スケート大会の1週間後に開催されたが、全満洲スケート大会は「真のスポーツとして競技的観念の下に挙行」することを強調していた<sup>60</sup>。実際、大連スケート大会が依然として400m、1600mのように陸上競技式の距離で開催されたのに対して、全満洲スケート大会は500m、1500mとスケートの国際競技規則に基づく距離を採用していた。これには洋行から戻った岡部平太の経験が生かされたのだろう。ただ、残念ながらリンクそのものは地形の関係で第二セミナー

<sup>55</sup> 岡部平太「スケート界を顧みて (B)」『満日』1930年11月23日。

<sup>56</sup> 「満鮮スケート大会」『大連新聞』1922年2月2日。

<sup>57</sup> 「鴨江の氷滑大会を活動写真に撮影し」『満日』1922年1月28日。

<sup>58</sup> 「雪達磨のスケート」『大連新聞』1923年1月15日。

<sup>59</sup> 「我社氷滑大会」『満日』1924年2月1日；「我社主催のスケート大会」『満日』1924年2月2日。奉天の全満洲スケート大会（奉天新聞社主催）と同日開催であった。

<sup>60</sup> 「全満スケート大会の申込み殺到す」『満日』1925年1月20日。

クルが狭い変則的なものとならざるをえなかった<sup>61</sup>。

大会の参加者はのべ 385 名に達した。注目は奉天中学勢で、5000m で多田満洲男が満鉄育成学校の藤好佐一郎と、10000m で崔禧元が大連中学の牧定夫とデッドヒートを繰り広げた。奉天中学陸上競技部の選手だった河村泰男はこのシーズンにスケート部の先生に誘われて本格的にスケートを始めたので、メンバーには入っていない。奉天中学の生徒はすぐ近くの満鉄スケート場を我が物顔に使うことができた。彼らはタイムを計る時、つねに「世界記録と比較して其の秒差を論じ合」った。「高い目標」と「純情の努力」を通じて、河村をはじめ、大沢義一や多田満洲男ら優秀な選手が生み出されたのである<sup>62</sup>。

今大会の記録は、「本年諏訪湖にて開かれたる日本スケート協会主催第 2 回選手権競技大会に於ける記録を悠々として破つた」<sup>63</sup>。参考までに 1 月 17 日に諏訪湖で開催された日本スケート会の競技会、25 日に大連で開催された全満洲スケート大会と同日に安東で開催された満鮮スケート大会の記録を掲げておく (表 9-1)。

表 9-1 日満スケート記録

種目	日本スケート会競技会	全満洲スケート大会	満鮮スケート大会
500m	小口亀三郎 1 分 5 秒	佐川親雄 54 秒 8	小山猛 54 秒 0
1500m	小林喜也雄 2 分 58 秒 5	中野善栄 3 分 1 秒 4	小山猛 2 分 53 秒 4
5000m	潤間留十 11 分 19 秒 2	藤好佐一郎 10 分 15 秒 6	木谷徳雄 10 分 42 秒 2
10000m		牧定夫 21 分 32 秒 4	木谷徳雄 22 分 1 秒 4

全満洲スケート大会の優勝者は大連の選手、満洲スケート大会の優勝者は安東の選手である。この時点で両者は互角の戦いを演じていた。ちなみに当時の世界記録は 500m が 43 秒 4、1500m が 2 分 17 秒 4、5000m が 8 分 26 秒 5、10000m が 17 分 22 秒 6 であった。

1926 年 1 月の満鮮スケート大会は、満洲体育協会主催の全日本スケート選手権大会として開催された。「全日本」と冠したのは、諏訪や朝鮮からも選手を呼ぶ予定だった

<sup>61</sup> 「第二回全満大会で初めてスケートの真意義が見えた」『満日』1925 年 1 月 27 日。

<sup>62</sup> 河村泰男「スケート・シーズン外の準備運動」『満日』1935 年 3 月 31 日；同「満洲におけるスケートの発達」。

<sup>63</sup> 「全満スケート大会」『満日』1925 年 1 月 23 日；「陽光に輝く銀盤の池、観衆を酔はす氷上の妙技」『満日』1925 年 1 月 26 日。

からである。このころには諏訪の選手も満洲の記録を意識せざるをえなくなっていた。前にも諏訪のエース潤間兄弟を満鮮に送りこもうとしたことがあったが実現せず、今回も潤間兄弟は行く気満々だったが、満洲と諏訪の対決はまたもや実現しなかった<sup>64</sup>。

岡部平太は大会に先立って安東に来て、リンクの整備を指揮していた。鴨緑江の水に一周 500m のコースを描き、シャベルで表面を削り、コテ（鉄板のうえで炭火を燃やし、その熱で表面をなめらかにする）を当てるのである。岡部ら満洲の関係者が全日本大会を開こうとしたのは、日本にまだスピードスケートの全国統括団体が存在せず、一日も早くヨーロッパのスケート界との接続を考えていたためであった。この大会を機に、スケートの統括団体を結成し、ヨーロッパ遠征を敢行しようと考えていたのだろう（あるいは2年後の冬季オリンピックを念頭に置いていたかもしれない）<sup>65</sup>。

「全日本」スケート選手権大会では佐川親雄が 500m バックで、飯村敏子が 1500m で、木谷徳雄が 10000m で、それぞれ日本新記録をマークした<sup>66</sup>。しかし、その3日後に諏訪で開かれた全日本スピードスケート選手権獲得競技大会では、番外出場の牛山昌人が 500m で 50 秒 6、潤間留十が 1500m で 2 分 53 秒 6、金子武康が 5000m で 10 分 15 秒 8、小池富治が 10000m で 20 分 54 秒 2 と、「諏訪青年のためにキエンをあげ」、「満洲をして睦若たらしめた」のであった<sup>67</sup>。満洲と諏訪の直接対決は 1928 年を待たねばならない。

### (3) 女性のスケート

満鉄附属地では早くから女子小学生がスケート競技会に参加していたが、大連では 1920 年代に入ってようやく競技会で女子選手の姿が見られるようになる。競技会で女子種目が採用された最初は、1923 年 1 月の大連スケート会主催の関東州スケート大会であろう。100m で宮崎マスヨ（22 秒 6）、400m で高橋ヨシ子（1 分 39 秒）が優勝した<sup>68</sup>。先述のとおり、この大会は満鮮スケート大会（安東運動団・全満競技連合主催）

<sup>64</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』153、161-162 頁。

<sup>65</sup> 岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

<sup>66</sup> 「鏡のやうな鴨緑江上で全日本スケート大会」『大連新聞』1926 年 2 月 2 日。

<sup>67</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』161-162 頁。

<sup>68</sup> 「雪達磨のスケート」『大連新聞』1923 年 1 月 15 日；MK 生「関東州スケート大会」『読書会雑誌』

の子選会という位置づけで、全満競技連合（1922年8月設立）の女子スポーツ振興路線を反映したものと推測できる<sup>69</sup>。

第2回関東州スケート大会では、弥生高女の飯村敏子が100mを15秒8、400mを1分10秒2のタイムで優勝した<sup>70</sup>。その翌月、満日の主催で開かれた第1回全満洲スケート大会には神明高女、弥生高女、旅順高女の女子選手約40名が参加した。女子の種目は100m、100mバック、400mで、いずれも弥生高女の飯村敏子が優勝した<sup>71</sup>。翌1925年1月、『満日』に「女子競技に付ての私の希望」という投書が掲載され、満日主催の大会で女子も男子と同じく800、1200、1600mの距離を採用してはどうかと要望した<sup>72</sup>。この要望を受けてだろうか、同じ日の『満日』の紙面には、全満氷滑大会の予告が出され、女子部は500mと1000mで実施されることが記されている<sup>73</sup>。その翌々日に開催された大連スケート会主催のスケート大会でも女子1600mが採用された。優勝はもちろん飯村だった<sup>74</sup>。

飯村敏子は2年前、父にスケート靴を買ってもらってからスケートを始め、練習わずか4、5回で関東州スケート大会に出場、100m2位、400m3位の成績を収めた。この当時、弥生高女では4、5人くらいしかスケートをしていなかったという<sup>75</sup>。ライバル校の神明高女では1920年12月にはすでに100人余りがスケートをしていたから<sup>76</sup>、弥生高女はずいぶん遅れを取ったことになる。しかし、弥生高女のほうでも1925年1月には150人余りがスケートをするようになっており、その翌月には鏡ヶ池で校内スケート大会が開催された<sup>77</sup>。飯村によると、スケートをやるのはおもに1、2年生で、3、4

10巻2号、1923年2月。

<sup>69</sup> 全満競技連合（のち満洲体育協会）の女子スポーツ振興については、本稿でも追って取り上げる予定だが、さしあたり拙著『国家とスポーツ』173-175頁を参照されたい。なお、満鮮スケート大会では女子種目は採用されなかった。

<sup>70</sup> 「スケート大会成績」『大連新聞』1924年1月22日。「大連スケート大会」と称する記事もある。

<sup>71</sup> 「成功したる我社スケート大会」『満日』1924年2月4日。

<sup>72</sup> 大連在住者「女子競技に付ての私の希望」『満日』1925年1月16日。

<sup>73</sup> 「人気湧く！全満氷滑大会」『満日』1925年1月16日。

<sup>74</sup> 「四百米決勝に見事記録を破る」『満日』1925年1月19日。

<sup>75</sup> 「内地へ帰ればスケートが！」『満日』1925年1月27日。

<sup>76</sup> 「燕の如き女学生百余名、鮮かな氷滑の練習振り」『満日』1920年12月16日。

<sup>77</sup> 「男子の運動熱に連れて女子の運動も盛になる」『満日』1925年1月17日；「市立高女氷上運動会と学芸会」『大連新聞』1925年1月28日。

年生は転ぶのがいやでありあまりやらなかった。飯村自身は毎日2時間練習し、アイスホッケーもやりたいが、女性でだれもやらないので、と語っている<sup>78</sup>。飯村の躍進は翌シーズンも続き、鴨緑江で開催された全日本スケート大会では、1500mで4分を切り、3分58秒4の新記録を出した<sup>79</sup>。

#### (4) 小学生のスケート

1920年に満鉄学務課長に就任し、満洲教育界を刷新した保々隆矣は、小学校のスケートの起源についてこう語る。

スケートが満洲に流行したのは当時からであるが、其の元祖は遼陽の外国人牧師であり、これを師として当時遼陽の小学校長であつた鈴木君が学童や青年を奨励し、更に同君が撫順に転任して後撫順の学校に流行させて居た。丁度その折私は入社したので、これを見て直に追加予算で各学校に至急スケート場を設けしめた<sup>80</sup>。

鈴木重憲は、1911年に遼陽小学校長となり、1915年に撫順小学校に転任したから、スケートの起源はこの間に求められる。保々は知らなかったようだが、じつは満鉄は1909年来、「寒国生活に慣れしめ且つ寒威に対抗し堅忍不拔の気象を養成する」ことを目的にして、各附属地の小学校でスケートを奨励していた<sup>81</sup>。最初は保護者の理解を得るのに苦勞した。転んだときの衝撃を和らげるため、綿入れの鉢巻をつけさせたが、腰にも座布団式の布団をつけさせよという要求が出たという<sup>82</sup>。

スケート靴はあるにはあったが値段が高く、普及の障害となっていた。下駄スケート登場前の様子を森川義金はこう語る。

今日子供達もあまり喜ばない座金附のものか靴底をはさむ短い重いドイツ品が一般に用ひられて居た、それも大衆向きではなく良家、金持の子供達が漸く持つて

<sup>78</sup> 「内地へ帰ればスケートが!」『満日』1925年1月27日。

<sup>79</sup> 「鏡のやうな鴨緑江上で全日本スケート大会」『大連新聞』1926年2月2日；「安東鴨緑江上の日本スケート選手権大会」『満日』1926年2月2日。

<sup>80</sup> 保々隆矣「思ひ出るまゝ」荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』満鉄地方部学務課、1937年、1-13頁所収。

<sup>81</sup> 「小学校の冬期遊技」『満日』1909年12月9日。

<sup>82</sup> 平岡数馬「学校は沙漠のオアシス」荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』55-60頁所収。

居る程度の贅沢品で、僕も最初の冬は友達から借りて一、二度滑らして貰つただけであつた、今から考へれば靴は大きいし、刃を磨く等と云ふことはやらない時代だから随分横滑りがひどくて具合が悪かつた様に思ふ<sup>83</sup>。

同じ記事で、森川は「明治四十何年か」に初めてスケートを見たと言っている。当時スケート靴はいくらぐらいしたのか。1912年にスケートを始めたという高橋俊夫は、当時朝鮮の龍山にいて、安物のスケートをぶらさげて得意になっていたが、安物といつても2円50銭だった<sup>84</sup>。1916年に開店した大連の山本運動具店は、当初スケート靴を4円50銭で年間300台ほど売っていた<sup>85</sup>。満鉄社員の給与が1カ月6～7円の時代である。

1913年に満鉄の教育関係者は、日本の東北地方の竹製のスケートとヨーロッパ式のスケートを折衷した下駄スケートを創案し、十字堂（自転車店）に作らせた。満鉄は1足50銭のこの下駄スケートを沿線各地の小学校に配布し、スケートの裾野は一挙に広がった<sup>86</sup>。瓦房店小学校訓導だった生田美記によれば、秋田出身の訓導佐藤藤太郎が下駄スケートを「満洲へ始めて輸入した」という<sup>87</sup>。生田と佐藤の二人が瓦房店小学校で同僚だったのは、1910年から遅くとも1913年春までなので、佐藤が持ち込んだ下駄スケートをもとに独自の下駄スケートを創案したのかもしれない。森川義金によれば、下駄スケートを自作するものも少なからずいたようである。

電線の太い鉄の針金を適當の長さに切つたものを丸太を半分に分けて作つた下駄の台の凸面に取付けたもの、又は土木工事に使ふカスガイを一足分何処からか無断で失敬して来て厚い下駄の様な台に打付け焼火箸で穴をあけ或は鍛冶屋に頼んでもう少し気のきいた恰好の金具を作らせ、之を下駄に取付けた<sup>88</sup> スケート等・・・・・・・・。

1910年代後半に奉天で小学校時代を過ごした小西健一は、奉天小学校の校庭に散水

<sup>83</sup> 「スケート界の思ひ出を語る【8】『満日』1937年12月8日。

<sup>84</sup> 「スケート界の思ひ出を語る【1】『満日』1937年11月27日。

<sup>85</sup> 「スケート夜話」『満日』1928年12月23日。

<sup>86</sup> 「勇壯で簡易な嚴寒の遊び、沿線小学のスケーティング」『満日』1913年11月29日。内地ではもっと早くから下駄スケートが使用されていた。長野県諏訪郡中州小学校では1900年に下駄スケートを購入し、授業で使っている（臼田明「長野県に於ける下駄スケートの歴史」）。

<sup>87</sup> 生田美記「明治時代の回想」荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』51-55頁所収。

<sup>88</sup> 「スケート界の思ひ出を語る【8】『満日』1937年12月8日。

してスケート場をつくり、最初は下駄スケート、その後は座金のスケートで滑ったという<sup>89</sup>。森川義金も、下駄スケートに続いて、日本製の座金付スケートがたくさん市場にでてきて、見かけは外国製と大差がなかったが、完成度が低く、「不愉快極まりない代物」だったと述べている<sup>90</sup>。

1921年1月、第1回満鉄沿線小学校聯合氷滑大会が奉天で開催された。満鉄学務課の飯河道雄視学によれば、「予て附属地の各学校から冬季運動奨励の意味を以てスケート大会を適當の地で開催されたき旨の希望申込」があり、学務課が検討のうえ開催したものである<sup>91</sup>。満鉄附属地の各小学校尋常科5年生以上、公学堂4年生以上の児童による選抜競技会で、北は公主嶺から南は瓦房店に至る15校から約200人の小学生が参加、観衆は3000人を数えた。各選手は和服や洋服などバラバラの服装をしていたが、安東小学校だけが「白で背に安の字を染出した赤色のスケート服」で揃えていた。注目目の優勝旗争奪戦を制したのは安東小学校で、撫順小学校は僅差で及ばなかった<sup>92</sup>。

鞍山小学校長八木寿治によれば、リンクは100m足らずでカーブが急なため、カーブで倒れなかったものが勝つという状況だったという。大半は下駄スケートだったが、まれに「本スケート」「靴スケート」のものがおり、これはあまりに有利だから除外しようという議論がなされた。下駄スケートにもさまざまな型があったが、腰の高い安東型が好評だったようである<sup>93</sup>。

河村泰男によれば、各校選手は校長と父兄に引率され大会に参加、色別のちゃんちゃんこを着て防寒帽の上に同色の鉢巻を締め、頬を真っ赤にして滑ったという<sup>94</sup>。河村は尋常6年生だった第2回大会に出場したと思われる。前年の安東小学校にならい、各校ともユニホームを着用するようになったのだろう。河村泰男、石原省三ら満洲の一

<sup>89</sup> 小西健一「思い出」。

<sup>90</sup> 「スケート界の思ひ出を語る【8】」『満日』1937年12月8日。

<sup>91</sup> 「沿線児童の氷滑大会」『満日』1921年1月14日。1923年以降は主催者が南満洲教育研究会第一部に変わった。

<sup>92</sup> 「日に光る銀盤上を二百の健児」『満日』1921年1月25日。

<sup>93</sup> 八木寿治「満鉄教育の特殊性」荒川隆三編『満鉄教育回顧三十年』146-155頁所収。

<sup>94</sup> 河村泰男「満洲におけるスケートの発達」。河村は1919年に第1回大会が開かれたとするが誤りである。



流選手の多くはこの大会で活躍した経験を持つ<sup>95</sup>。関東州ではやや遅れて1924年から大連奨学会の主催で市内小学校の連合競技会が開かれる<sup>96</sup>。

#### (5) 大連のスケート場 (I)

大連でスケートが始まった当初、大連には池が3つあった。西公園西の児島製氷所裏の池、西公園南の逢坂町貯水池（のち春日池）、南山麓満洲牧場の池（のち鏡ヶ池）である。北公園を拠点にしていた大連スケート倶楽部は1913年度シーズンを最後に名前が見られなくなり、翌年1月に設立された満鉄運動会スケーティング部に引き継がれたようである。同部は児島製氷所裏と春日池を拠点とした<sup>97</sup>。しかし次のシーズンは春日池が製氷のため使用不能となり、やむなく鏡ヶ池で練習を始めたが、こちらも製氷に使用されることになり、北公園に貯水してスケート場を作った。この年はあいにく暖冬で結氷が遅れ、1月23日になってようやく開場となった<sup>98</sup>。1916年度シーズンは大連民政署から鏡ヶ池を借り受けることができ、仕度部屋や運動器具などを整備した<sup>99</sup>。1918年度シーズン、満鉄運動部は児島製氷所裏の池を市民に無料で開放した<sup>100</sup>。

鏡ヶ池は通信管理局が費用を徴収して管理した。1920年度シーズン、通信倶楽部（通信管理局は1920年に通信局に改編された）は、ここに電灯を設置するなど千数百円をかけてスケート場を整備した。これを指揮した通信局用度係の林儀作は安東でスケート場の整備に携わった経験を持っていた。8000坪の広さの南山麓氷滑場は、当時大連で最も設備の整ったスケート場となった<sup>101</sup>。一般市民もひと冬1円を払って南山スケート会の会員になれば、このスケート場を使うことができた。1920年12月末時点で、会員数は400人（うち61名が三井物産関係者）に上り、600人に達する勢いと報じられた。

<sup>95</sup> 石原省三「満洲スピードスケート界」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』884-885頁所収。

<sup>96</sup> 「御成婚記念に各学校連合スケート大会」『大連新聞』1924年1月26日。

<sup>97</sup> 「満鉄氷滑部」『満日』1915年1月13日；「北公園の氷滑」『満日』1916年1月11日。

<sup>98</sup> 「北公園の氷滑」『満日』1916年1月11日；「北公園氷滑開場」『満日』1916年1月23日。

<sup>99</sup> 「南山麓の氷滑場」『満日』1916年12月20日。

<sup>100</sup> 「氷滑場竣成す」『満日』1918年12月15日。

<sup>101</sup> 「赤十字満洲支部が貧困窮迫者を収容し無料で施療する」『満日』1921年12月8日；「通信倶楽部竣成」『大連新聞』1920年11月21日；「スケートの宣伝」『大連新聞』1920年12月13日；「満洲大陸冬季運動の精華、爽快極る氷滑り」『満日』1920年12月12日。

一方、兎島製氷所裏は、大連の学校で唯一氷滑部をもつ工業学校用のスケート場となっていた<sup>102</sup>。

1921年度シーズンには、満鉄運動会が南山麓スケート場を経営することになった。満鉄運動会氷滑部幹事鈴木正雄によれば、10年前にスケートを始めたころには満鉄の課長や重役も熱心だったが、最近では会社の頭株に熱がないので振るわなかったところ、新社長の早川千吉郎が大いに奨励しているとのことであった。南山麓スケート場は満鉄本社に近いということもあり、昼休みや勤務後には満鉄社員が大勢やって来た。満鉄運動会は春日池も第二会場として経営し、南山スケート会の会員は1000人を超えた<sup>103</sup>。

1922年度シーズンには満鉄に代わって大連市長村井啓太郎を会長とする大連スケート会が南山麓スケート場の運営を引き継いだ。大連市は会費の徴収を基本的に廃止し、鏡ヶ池東側に設置した400mコースのみ1円の会費を取ることにした。スケート場には休憩所だけでなく、甘湯、甘酒、汁粉、うどん、そばの売店が設けられ、市民が気軽に利用できるようになった<sup>104</sup>。1923年度シーズンには兎島製氷所裏の潤れ池約800坪に水1000トンを注いで小中学生専用のスケート場を設置、大連奨学会がこれを運営した<sup>105</sup>。

1924年度シーズンを前に、「民衆スケート場は何処に在るか」という投書が『満日』に掲載された。大連では市内にあるわずか2、3のスケート場が学生や某団体の専有物となっており、真に開放された自由スケート場が一つもない。そのため、この投書の主は、昨シーズンは南山麓の隙間（鏡ヶ池の無料区域）と山城町大連病院裏の埋立地で「辛くも運動慾を満たしたのであるがそれは決して愉快なものではなかつた」と述べ、スケートを奨励するなら民衆スケート場を設置すべきだと主張する<sup>106</sup>。こうした声を受けてか、大連スケート会は1924年度シーズンから鏡ヶ池と春日池を無料で公開するこ

<sup>102</sup>「南山氷滑会積極的発表」『満日』1920年12月26日。

<sup>103</sup>「赤十字満洲支部が貧困窮迫者を収容し無料で施療する」『満日』1921年12月8日；「南山麓氷滑会」『満日』1921年12月25日。

<sup>104</sup>「南山麓地スケート会」『大連新聞』1922年12月17日；「今年の氷滑は盛んだ」『満日』1923年11月1日。

<sup>105</sup>「伏見台や第三小学校のために規模を拡大する」『満日』1924年11月6日。

<sup>106</sup>氷滑生「民衆スケート場は何処に在るか」『満日』1924年11月23日。

とにした<sup>107</sup>。しかし、翌シーズンにはふたたび会費を徴収するようになる。会費を徴収して入場者を制限しないと、場内の秩序と氷のコンディションを保つことができなかつたからである<sup>108</sup>。大連のような狭隘で人口の多い都市では、スケート場の量と質のバランスを取ることが難しく、スケート場の入場料問題はこのあとも尾を引くことになる。

1925年度シーズン、満鉄運動会はロシア町（北公園）のテニスコートをスケート場として整備した。北公園は大連におけるスケート発祥の地であるが、池の自然氷に人気を奪われていた。今回は「最新式の方法」を採用することで、毎日新しい氷の上でスケートができるようになった。「最新式の方法」とは、1924年に洋行した岡部平太がカナダで習得した製氷術である。岡部は帰国後に氷のつくり方をごく簡単に説明した文書を満鉄各支部に送付したが、時期が遅くよい結果が得られなかった。そこで、1925年度シーズンから本格的にカナダ式の氷づくりを実践することになり、シーズン直前に『読書会雑誌』でその方法を詳しく説明した。岡部によれば、これまで満洲では堤を築いて水を流し込み凍るのを待ったが、これでは表面だけ凍って、その下は水が地面に染みこむために空洞ができてしまう。この空洞を修理するのが大変だった。上から凍らせる満洲とは反対に、カナダでは下から凍らせる。すなわち、地面に薄く水をまいて凍らせる作業を繰り返していくのである。これは手間がかかるが、いったん氷盤ができると、あとは毎晩竹箒で表面を削って平らにし、水をまいておけば、日々真新しい氷で滑ることができた<sup>109</sup>。

## 第10話 スケートⅡ（後期）

### (1) ルシチャイに学ぶ

1926年の年末、大連の鏡ヶ池と春日池のスケート場が開場した翌日に、大正天皇が亡くなった。待ちに待ったスケートシーズンが始まったと思った矢先の出来事であっ

<sup>107</sup>「冬の戸外運動スケーティングの爲め」『大連新聞』1924年11月27日。

<sup>108</sup>「いよ／＼廿五日からスケート場開き」『満日』1925年12月16日；「二十五日からスケート場開く」『大連新聞』1925年12月25日。

<sup>109</sup>岡部平太「スケート・リンクのつくり方」『読書会雑誌』12巻10号、1925年10月；同「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

た。1926年度シーズンのスケート大会はすべて中止になった。安東で開催される予定だった全日本スピードスケート選手権も中止された<sup>110</sup>。満洲スケート界にとって不幸なシーズンではあったが、一方で翌年以降の大いなる飛躍が準備されたシーズンでもあった。すなわち、ロシア人ルシチャイによって本場ヨーロッパのスケート技術がもたらされたのである。

1927年1月30日、奉天で全満スケート記録会が開かれた。体育奨励のための記録会ならば差し支えなからうということで開かれたのだが、実質的には競技会だった。奉天中学の多田満洲男は500mで52秒の新記録を打ち立てた<sup>111</sup>。それでも、世界記録の44秒と比べると、時間にして8秒、距離にして7、80mもの差がある。また、5000mの世界記録は1周（500m）の平均51秒であるから、日本選手は最初の1周すらついていくことができない。満鉄運動会の岡部平太にとって、外国選手と満洲選手の間になぜこれほど大きな差が生じるのかは数年来の疑問であった。技術か、氷質か、体力か、計測方法か、金具か……。この疑問を解決するために、岡部は毎年安東に出かけて、外国の本を見ながら、木谷徳雄や石原省三ら安東の選手と試行錯誤を繰り返した。第1カーブの入口から出発してみたり、500mの直線コースを作ってみたり、外国選手のトレースを氷上に描いてそこを滑らせてみたりした。しかし、記録は伸びない。疑問は深まるばかりだった<sup>112</sup>。

奉天の記録会の翌々日、外国選手の滑走ぶりを目にするのが近道だと思い立った岡部は、そのままハルビンに向かった。ハルビンには、東清鉄道の鉄道員でルシチャイという青年がいた。ルシチャイは世界選手権にも参加したことがあり、500mを47秒台で滑ることができた。競技場に現れたルシチャイは恋人や友人を大勢連れていた。岡部と勝負するつもりだったらしい。岡部が立派なスケート靴を持っているのを見て、ルシチャイはますます闘志を燃やしたが、そうではないと説得して、岡部の前で滑ってもらった<sup>113</sup>。

<sup>110</sup>「内地スポーツ界第一期服喪五十日間」『満日』1926年12月28日；「諒閣中には満洲の氷滑大会」『満日』1926年12月29日。

<sup>111</sup>「奉天体育主催の氷滑記録大会」『大連新聞』1927年2月1日。

<sup>112</sup>岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

<sup>113</sup>岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」；「スケートの秘訣は「我流」をすて、」

ルシチャイの滑り方は満洲選手の滑り方とまったく違っていた。岡部は一目見るなり、この滑り方こそが満洲選手が外国選手に及ばない原因だと直感した。満洲の選手はエッジに乗り切れず、コーナーでスピードを削がれた。木谷とルシチャイが500mの直線コースで滑ると、木谷が0.2秒ルシチャイを上回るのだが、周回コースだとルシチャイが1秒以上もの差で悠々と勝った。記録を短縮するには、フィギュアとカーブの科学研究が必要である——これが岡部の結論だった<sup>114</sup>。

岡部は満鉄に東清鉄道と交渉してもらい、ルシチャイを連れて奉天、安東を回ることにした。奉天のリンクは変則的だったため、さすがのルシチャイも滑りにくそうにしていたが、その無理のないフォームを見た満洲の選手たちは、驚き喜んだ。同地で指導を受けた多田によれば、ルシチャイは彼らの滑り方を「ピッチばかり上げて、滑っていないし、まるで板の上でスケートをバタ…バタと、叩いているようだ」と評したという<sup>115</sup>。

これまで満洲の選手はそれぞれ我流で滑り、都市によっても滑り方に違いがあった。とりわけ走行中の手の位置は選手たちの頭を悩ませていた。「ある処は中腰の処もあるし、ある地方は手を左右にやけに振つたり、或る地方は又両手を同時に前後に振つて前に行つた時丈けは艶をつけるつもりか額の処に一寸合掌を組んで見たり……」<sup>116</sup>。最後のは少しわかりにくいだが、木谷徳雄によると、ロングスケートはストロークが伸びるため、手を振ると足の動きと合わなくなるので、「両手を前に振り出し額の前で一度ストツプをさせ、それから又頭の上まで振り上げ」てみたところ、調子が良いので1年ほどこの「奇妙な振り方」で走ったのだった<sup>117</sup>。

ルシチャイは、500m以外は、両手を腰の後ろで組み、体重の移動だけで滑った。「大体に於てルスチャイのフォームが満洲選手全部の根本となっていることは否み難い」と木谷辰巳が述べるように、満洲の選手はこぞってルシチャイをまねた。そればかりか、

---

『満日』1927年2月18日。

<sup>114</sup>「スケートの秘訣は「我流」をすてゝ」『満日』1927年2月18日。

<sup>115</sup>河村泰男「満州におけるスケートの発達」；「哈爾濱氷滑界一流の選手来る」『満日』1927年2月16日。

<sup>116</sup>木谷辰巳「満洲に於けるスケートの沿革と発達」『スケート年鑑』1号、1941年（日本スケート史刊行会編『日本スケート史』にも同文が収録される）。

<sup>117</sup>木谷徳雄「スケート界の思ひ出 ロングスケート」『満日』1938年1月16日。

ルシチャイに学んだ技術は、満洲選手を通じて、朝鮮、内地へと伝わっていくことになる。もちろん、外国人とは体格が違うことから、日本人に見合ったフォームに改良されていったのではあるが<sup>118</sup>。

## (2) 内地との対決

互いに意識しつつも、長らく隔絶されてきた満洲と内地のスケート選手がついに顔を合わせるときがきた。1928年1月14日に諏訪湖で開催した第1回全日本氷上競技選手権大会がそれである。主催者は大日本氷上競技連盟であった<sup>119</sup>。

日本のスケート団体で最も早くに誕生したのは日本スケート会である(1920年設立)。一方、早大、慶大、東京帝大、日本歯科医学専門学校の学生が中心となって、1924年に全国学生氷上競技連盟が創設された。こちらはスピード、ホッケー、フィギュアの競技を統括する学生団体として発足したため、フィギュアスケート同好者による親睦団体であった日本スケート会とは反りが合わなかった。1928年のサンモリッツ冬季オリンピック開催を控え、スケートの統括団体の組織が目指された結果、1927年11月に大日本氷上競技連盟が設立された。ところが、日本スケート会は大日本氷上競技連盟への参加を拒んだ(翌年に大日本スケート連盟を創設する)<sup>120</sup>。岡部は両者の調停に努めたが失敗に終わる。大日本体育協会は5名のスケート選手(うち2名が満洲のスピード選手)を派遣するつもりだったが、結局、日本スケート界は内紛によりオリンピック初参加の機会を逸したのだった<sup>121</sup>。

全日本選手権に派遣された満洲チームは、監督が林田学、選手は佐川親雄(大連)、多田満洲雄(奉天)、大沢義一(奉天)、木谷徳雄(安東)の5人で構成された。これを迎えうつ内地側は諏訪の潤間留十・正見兄弟らに加えて、早大の小西健一(大連中

<sup>118</sup> 木谷辰巳「満洲に於けるスケートの沿革と発達」。

<sup>119</sup> 1914年に満鉄の氷滑視察員木島半次郎が諏訪を訪れたという記録が諏訪側に残っているが、満洲側では確認できない(日本スケート史刊行会編『日本スケート史』88頁)。

<sup>120</sup> 日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』113-114頁。

<sup>121</sup> 「新に組織される全日本氷上連盟」『満日』1927年10月27日:「スケート連盟、選手派遣で紛糾」1927年11月10日:「全国氷上連盟協議会開催」『大連新聞』1927年11月2日:河久保子朗「日本のスケート選手は何故瑞西に行けなかったか」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』197-199頁所収。

学出身)、明大の金子武康らオールジャパンにふさわしい顔触れだった。勝負は最初の500mで決まった。佐川が50秒8で優勝、以下、木谷、大沢、多田と満洲勢が51秒台で続いた。内地の選手は54秒を切るのがやっとだった。「あけて口惜しや余りにも満洲軍は強く、諏訪勢は惨敗した」のだった<sup>122</sup>。

翌日の1500mは木谷が2分44秒4で優勝、以下、大沢、金子、潤間留十が続いた。続く5000mも木谷が制した。3日目の10000mは接戦だった。優勝した木谷と潤間の差はわずか2mであった。内地の選手は満洲の選手から多くを学んだ。たとえばスタートで内地選手は小さな蹴りでバタバタと飛び出すが、満洲選手は長いストロークで静かに出る。ストロークの長さは満洲選手が平均25尺、内地選手は平均18尺、水泳に例えると前者がクロール、後者が犬かきということになる<sup>123</sup>。要するに、満洲選手がルシチャイから学んだことを、今度は内地選手が満洲選手から学んだのである。

内地選手を圧倒した満洲選手の次なる目標は、2月12日にハルビンで開催される日露対抗だった。もともと「日露支対抗」大会として開く予定だったが、ロシア人の体育協会と中国当局の間にトラブルがあったため白露系の選手しか出場せず、ルシチャイも不在だった<sup>124</sup>。ハルビン市民は日本人選手があまりに小さいので問題にはなるまいと予想していたが、結果は日本の圧勝に終わった<sup>125</sup>。500mは石原省三が50秒8で優勝したが、ロシア選手は57秒6もかかった。1500mは木谷の2分41秒6に対して、ロシア選手は3分31秒とまったく相手にならず、5000mと10000mはロシア側が棄権した。満洲の選手は外国人にも勝てるという自信を強く持った<sup>126</sup>。満洲体育協会は、日露対抗に勝利すれば、翌年に満洲単独で世界選手権に参加する計画を立てていた<sup>127</sup>。その決意には、オリンピックに参加できなかった悔しさがにじみ出ている。しかしながら、世界選手権参加は簡単なことではなく、その実現までに3年を要することになる。

1927年度シーズンは全満都市対抗氷滑大会、中等学校連合氷滑競技など全満規模の

<sup>122</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』185頁。

<sup>123</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』188頁。

<sup>124</sup> 「沿線のスケート熱」『満日』1928年2月15日。

<sup>125</sup> 日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』117頁。

<sup>126</sup> 木谷辰巳「満洲に於けるスケートの沿革と発達」。

<sup>127</sup> 「全日本氷滑の覇権掌握」『満日』1928年1月21日；「日露競技と世界大会派遣」『満日』1928年2月3日。

新たな競技会が創設されたが、注目に値するのは女子選手の台頭である。1月22日に奉天で開かれた全満スケート大会で塩谷緑は1500mを3分44秒で滑り、飯村敏子が持つ日本記録3分58秒を大きく更新、さらに2月5日の満鮮氷滑大会では3分38秒をマークした。塩谷は安東第五小学校6年生、兄の猛もスケート選手であった。父の塩谷孫七は、安東スケート界の先達石川用之助（大和湯経営）、河原地近重（満鉄）らとともに、スケート場の手入れや、スケーターの指導などに尽力し、安東スケート界の発展に貢献した<sup>128</sup>。

1928年度シーズンの開幕を前に、満洲体育協会はクラス・ツンベルグの招聘と斎藤兼吉の欧州派遣を発表した。ツンベルグは1928年の世界選手権で総合優勝したフィンランドの選手である。このときの記録は500mが43秒1、1500mが2分18秒8、5000mが8分32秒6、10000mが17分34秒8であった。残念ながら、この世界的選手を満洲に招聘することはできなかったが、満洲教育専門学校教授斎藤兼吉の派遣は実現した。その目的は、フィギュアスケートの競技、スケートの製作、スケートリンクの管理を研究することだった<sup>129</sup>。

1929年1月19日、柳沢敏文率いる早大スケート部が大連にやって来た。内地からの最初のスケート遠征であった。一行には小西健一、牧定夫ら満洲出身の選手も多く含まれていた<sup>130</sup>。24日に全大連、28日に全奉天とのスピード競技が行われ、早大は大連に20対13、奉天に17対16で勝った。早大チームはその後、安東に向かい、大日本氷上競技連盟の第2回全日本氷上選手権大会に参加した。諏訪からはスピード競技の潤間兄弟、小池富治、浜一正が来ていた。こうして、内地勢と満洲勢の2度目の対戦の火蓋が切られることになる<sup>131</sup>。

本大会に先立ち、満洲側は2000円を投じて会場を整備した。1万人収容可能な観覧

<sup>128</sup>河村泰男「満洲におけるスケートの発達」：「氷滑の天才、塩谷ミドリ嬢」『満日』1928年2月13日。

<sup>129</sup>「世界氷滑界の権威者ツンベルグ氏招聘」『満日』1928年11月27日；「ウィンタースポーツ研究に欧州へ」『満日』1928年12月5日。斎藤は翌年6月末に帰国する（「豆自動車に鉤をつけ氷滑場の手入れ」『満日』1929年6月29日）。ツンベルグの招聘については、「世界的氷滑選手、この冬来満せん」『満日』1929年11月15日も参照。

<sup>130</sup>「早大氷滑部選手きのふ来連」『満日』1929年1月20日。

<sup>131</sup>以下、本大会の記述は日本スケート史刊行会編『日本スケート史』207-212頁に拠る。



席などその大がかりな設備は内地の選手を驚かせた。初日 (2月2日)、気温は零下23度まで冷え込み、堅い氷と強い風が諏訪選手を苦しめた。500mと5000mは1～4位までを満洲勢が独占した。5000mでは諏訪のホープ小池が石原と同じ組で走った。小池は途中まで石原を抑えて健闘したが、9週目で転倒し、無念の涙を飲んだ。それでも10分7秒8は小池の自己ベストだった。河村泰男 (奉天)、塩谷猛 (安東)、潤間留十が出走した次の組では、役員の不注意で3人は10周のところ11周走らされ、10周終了時点のタイムを採ることになった。安東選手団から強い抗議が出たと岡部は記すが、この種の競技会にはあるまじき失敗である。

2日目の1500mも満洲勢が1～4位を独占、諏訪勢は10000mに最後の望みを託した。第1組は1位の塩谷でも20分39秒と振るわなかった。続く第2組では諏訪と満洲の有力選手がデッドヒートを繰り広げた。満洲各地から駆けつけた同郷人の応援を受け、小池は3週目から敢然と先頭に立って力走する。19週目、池見正信 (大連) が小池の前に出て進路を抑え、その間に石原、木谷、大沢が小池を抜き去った。1位は石原で19分57秒4、ついに20分の壁を破った。2位木谷、3位大沢、4位小池も19分台でゴールし、4人が日本新記録を出すというハイレベルなレースとなった。

今回から採用された女子種目では14歳の塩谷緑の活躍が目立った。500mでは予選で1分4秒と日本記録を更新、決勝ではさらに1分1秒に記録を伸ばした<sup>132</sup>。1500mでも3分30秒6で自身の持つ日本記録を更新し、「氷上に於ける人見絹枝」と称された<sup>133</sup>。

岡部はこの結果に満足しなかった。これらは「単に日本記録を破つたに過ぎず世界記録に達するまでには尚非常のへだたりがある」からである。このときの岡部が見るところでは、その原因は氷質だった。人造水であれば、日本選手が世界記録に近づくことは何でもない。翌年は鴨緑江に世界的選手を招いて日本選手と競わせたい。あくまでも目指すのは世界——岡部らしいコメントである。岡部はまた諏訪の選手は小池を除いてみな満洲のフォームになっていると評した<sup>134</sup>。これに発憤してか、小池はこの

<sup>132</sup> 諏訪の男子選手が56秒8～59秒0の記録に終わったことを考えると、彼らにとって同じ大会での塩谷の記録は「驚異的レコード」に思えただろう。

<sup>133</sup> 高野運太郎「満洲初等教育の現在と将来 (八)」『満日』1929年8月24日。

<sup>134</sup> 岡部平太談「遺憾にたへない」『満日』1929年2月4日。

年に奉天に移り住み、野田運動具店で働きながらフォームの研究を続けた<sup>135</sup>。

1929年11月、大日本スケート連盟と大日本氷上競技連盟の合同が実現し、大日本スケート競技連盟が成立した。その記念すべき第1回選手権大会は、スピードが1月12、13日に八戸で、フィギュアとアイスホッケーが1月18～20日に日光で、それぞれ開催されることになった。しかし、満洲体育協会はもはや満洲と内地のこの第3回目の対決に興味を持っていなかった。次に目指すべきは世界であり、わざわざ八戸まで出かける必要はない。そのため、安東の木谷、石原、大沢、吉岡正隆、奉天の河村、小池は個人として参加した。しかし、大会直前になって満洲体育協会から「選手権大会出場認めぬ、すぐ帰れ」との電報が送られてきた。1週間後に奉天で開催される全満選手権に欠場されたら困る、というのがその理由だった。幸い、大日本スケート競技連盟役員らの斡旋で出場は認められた<sup>136</sup>。

この大会には、満洲、朝鮮、諏訪、北海道、東北の各地域と、明大、東洋大から男女40名の選手が参加した。インカレが直前にあったため、大学選手は少なかったが、記念すべき第1回選手権大会にふさわしい顔触れが揃った。大会劈頭の500mでは木谷が48秒の日本新記録で優勝、2位の河村、3位の大沢と吉岡も日本新記録だった。この種目を得意とする石原は転倒して記録なしに終わったが、競技後に独走し47秒7の日本最高参考記録をマークした。その他の種目も満洲勢は圧倒的な強さを発揮した。総合優勝は木谷が獲得した。奉天代表として参加した小池はフォーム改良がうまくいかず、不振に終わった。女子は地元選手のみで、500mの優勝タイムが1分26秒5と、満洲選手の記録に遠く及ばなかった<sup>137</sup>。

1月26日、第7回全満氷上競技選手権大会が開かれた。洋行帰りの斎藤兼吉は奉天医大のトラックに散水してダボスやサンモリッツと同じようなリンクを作り上げた。しかし、よい記録は出なかった。1つには、全日本選手権に参加した選手が八戸から汽車を乗り継いで戻ったものの、地元で数日の休養しかとれず、疲れ切った状態での出場となったからである。さらに運営上の問題もあった。斎藤によれば、この大会は

<sup>135</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』240頁。小池は奉天で2シーズンを過ごしたのち、内地に戻った（河村生「奉天のスケート界に呼びかける」『大連新聞』1932年12月4日）。

<sup>136</sup> 河村泰男「満洲におけるスケートの発達」。

<sup>137</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』235-241、254-258頁。

奉天体育協会の関係者が主体となって運営してきたのだが、いつのまにか満洲体育協会が主導権を握り、「ただ単に勝敗を決裁する入学試験か何かのように変って終った」。役員は選手のことを考えず、プログラムにも無理があった。斎藤が丹念につくったりリンクも、降雪のためにインコースの内側に雪垣ができ、選手はそれを避けてやや外側を滑ったから記録が伸びなかった。せっかく斎藤がヨーロッパから持ち帰ったノウハウをこの大会では十分に生かしきれなかった<sup>138</sup>。

記録の面で成果が出たのは、2月9日の全奉天スケート大会だった。奉天高女の井上浩子が500mで1分0秒2の日本新記録を樹立した。奉天高女では今シーズンから校庭にリンクをつくり、学校をあげてスケートに取り組んでいた<sup>139</sup>。

### (3) 世界に挑む

1930年度シーズン、世界進出を目指す満洲体育協会はいよいよ満洲選手をヨーロッパに派遣することになった。その予選会の会場となったのが新設の奉天国際運動場であった。この競技場は、そもそも冬季にスケート場として利用するという岡部の要望を受けて、注意深く設計されたものである。奉天に少し先んじて大連運動場もスケート場として営業していたが、こちらはフィギュアとアイスホッケーが主体であった。岡部はカナダ流の技術で入念にリンクを作成したが、試合当日の朝、リンクに立って驚いた。氷の表面が黒ずんでいるのだ。その正体は市内各戸から排出される煤煙だった。すぐに苦力を呼んで洗浄作業を行った<sup>140</sup>。

予選の結果、木谷徳雄と石原省三が派遣されることに決まった。総合4位に終わった河村泰男は、500mと1500mで優勝したことから、自費での参加を求め、許可された<sup>141</sup>。斎藤兼吉が監督として選手を率いることになっていたが、直前になって校務の関係で辞退したため、岡部が監督を引き受けることになった。出発1週間前のことだった。ルシチャイを連れて回ったときに使った日露会話の本も忘れてシベリア鉄道に乗り込

<sup>138</sup> 斎藤兼吉「第7回全満氷上選手権競技大会に対する所感と各競技一覧」。

<sup>139</sup> 「奉天高女生スケート練習」『満日』1930年1月16日。

<sup>140</sup> 岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

<sup>141</sup> 河村泰男「満州におけるスケートの発達」。

むという慌てようだった<sup>142</sup>。

ストックホルムに着いたのは満洲を出てから13日目のことだった。同地で開かれるヨーロッパ選手権が遠征最初の試合で、番外競技に参加することになった。岡部らは東洋からの珍しい客人として注目の的となった。スウェーデンの皇太子と皇女までが握手を求めにきた。500mはツンベルグが44秒4で制した。番外競技では500mに河村、石原、5000mに木谷が出場、いずれもヨーロッパの選手を破り、観衆の大歓声を浴びた。翌日の1500mで木谷は2分34秒6の日本新記録をマークした。

河村が発直前の奉天で出した記録は500m50秒、これに対してこの年1月にツンベルグが出した世界記録は42秒6、距離にすると80mの差になる。しかし、同じリンクでの記録は河村が47秒9、ツンベルグが44秒4、その差は2秒5、距離で25mしかない。異なるリンクで作られた記録は、実力を判定する基準にはならない、これが岡部の結論であった。

ヘルシンキで開かれた国際競技会で石原は500m46秒6を出し、この種目で3位、総合で6位に入った。しかし、石原は体調を崩し、2月21日にヘルシンキで開かれた世界選手権にはベストの状態では臨むことができなかった。この大会には、フィンランド、オーストリア、ノルウェー、スウェーデン、オランダ、エストニア、日本の7か国が参加した。500mでは木谷が47秒2で8位、石原と河村が47秒6で9位だった。日本のスケート界は短距離では確実に10位以内に入ることができる実力がある——彼我的記録の差に頭を悩ませていた岡部にとって、この事実が確かめられただけでも大きな収穫だった。木谷は1500mで9分36秒1、5000mで2分33秒9、10000mで19分25秒3で、総合成績11位と活躍した。遠征中、3人の選手は全種目の日本記録を塗り替えた。

この遠征旅行によって日本→満州とヨーロッパ→世界との間のスピードスケートのトンネル開さく工事は通じたわけである。明るい光線はこのトンネルを通じていくらかでも日本に射し込んで来る。私個人にしてみればこれだけのトンネル工事

<sup>142</sup> 岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。岡部はほかに「スケート欧州遠征断想記」を『満日』に連載している（1931年2月13日-3月1日）。拙著『国家とスポーツ』でもヨーロッパ遠征について詳しく紹介した。

に大正十年から昭和六年の今日までちょうど一〇年かかった。こんな嬉しいことはめったにない<sup>143</sup>。

これが岡部の総括である。残念ながら岡部自身は満洲事変で謹慎の身となり、この経験を次のシーズンに生かすことができなかつた。また内定していたオリンピック監督も辞退を余儀なくされた<sup>144</sup>。

木谷、石原、河村の3人がレークプラシッドへ向かつたのは、満洲事変の3カ月後（満洲国建国の3カ月前）のことだつた。競技団体間のごたごたのためサンモリッツ冬季オリンピック参加を逃した日本スケート界にとって、レークプラシッド冬季オリンピックは初めてのオリンピックだつた。スピードの選手は満洲の3人に諏訪の潤間留十を加えた4名だつた。スピードではアメリカ式のオープンコースで試合が行われることになり、セパレートコースに慣れていたヨーロッパの選手が反発、いざこざがたえなかつた。日本選手も不慣れなオープンコースの戦いに順応できず、全種目予選落ちという結果に終わった<sup>145</sup>。

もしレークプラシッド冬季オリンピックで女子競技が実施されていたら、日本は優勝したかもしれない。1929年度シーズンに彗星の如く現れた井上浩子の活躍は、1930年シーズンにも見られた。1月17、18日に諏訪湖で全日本選手権大会が開催され、満洲からは大沢、小池ら男子選手に加えて、井上が唯一の女子選手として派遣された。井上は大会でも唯一の女子選手だつた。500mを独走し、58分8秒の日本新記録を樹立、2月の全奉天スケート大会でその記録をさらに5秒短縮した。女子スピードスケートは世界記録が発表されていなかったが、1931年秋に国際スケート連盟理事会は女子の公認記録を発表、ポーランドのソフィア・ネーリングヴァの500m1分2秒と1500m3分28秒が世界記録とされた。この報に接した満洲のスポーツ関係者は色めき立つた。井上の記録はいずれもこれを上回っていたからである（1500mは3分21秒）。岡部は「実はずっと以前から私は満洲女子スピードは世界いづこの国よりも進歩して居やしないかと思つて居た……ヨーロッパの女子は大抵フィガーをやつて居るからこの様な結

<sup>143</sup> 岡部平太「日本スピードスケーティングの世界的開眼」。

<sup>144</sup> 「馮を過信した罪」『満日』1932年1月12日。

<sup>145</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』303-307頁；日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』207-208頁。

果になつたのだと思ふ」とコメントし、女子選手をヨーロッパに派遣することを提案した<sup>146</sup>。井上もぜひレークプラシッド冬季オリンピックに出たいと考えていたが、結局女子選手はひとりも派遣されず、「誠に此の機会を失つた事は残念であつた」と井上はのちに語っている<sup>147</sup>。

1932年の第3回全日本選手権大会（本来、鴨緑江で開催される予定だったが、満洲事変のため諏訪に変更された）は、暖冬のため諏訪湖が使えず、蓼の海で開かれたが、コンディションが悪く、スピード競技は途中で中止となった。満洲からは井上浩子、井上和歌子、瀧三七子の3人の女性選手が派遣され、悪条件のなか、瀧が64秒、井上和歌子が64秒6、井上浩子が68秒5の記録を残した。4位に入った地元選手のタイムは80秒2だったから、いかに満洲の3人が速かったかがわらう<sup>148</sup>。

#### (4) 大連のスケート場 (II)

1926年度シーズンの開幕を前に、大連の中小学校連合会はスケートの会費制度の撤廃を大連民政署に要求した<sup>149</sup>。シーズンが開幕してまもなく、大連民政署は大連スケート会に対して、有料リンクは貸下条件に違反すると苦情を呈し、いったん開場した鏡ヶ池と春日池のスケート場は閉鎖に追い込まれた。2週間ほど揉めた揚げ句、鏡ヶ池に400mの有料リンクをつくり、それ以外は無料とすることで解決、1月11日よりふたたび開場した<sup>150</sup>。翌シーズンは鏡ヶ池に2つのリンクをつくり、東側を有料、西側を無料としたほか、満洲体育協会の林田学主事が弥生池を当局から借り受けて、無料で開放した<sup>151</sup>。1928、29年度シーズンには、弥生高女、神明高女、大連一中、常盤小学校、大広場小学校など、各学校の校庭でも小規模ながらスケートリンクが作られるようになる<sup>152</sup>。ただ、夏のプールの場合(第15話参照)と同様に、水道代の問題は悩みの種だっ

<sup>146</sup>「スピードでは世界第一位」『満日』1931年10月27日。

<sup>147</sup>「スケート界の思ひ出を語る【12】」『満日』1937年12月19日。

<sup>148</sup>日本スケート史刊行会編『日本スケート史』314頁。

<sup>149</sup>「スケーティングと会費制問題」『満日』1926年11月13日。

<sup>150</sup>「鏡ヶ池スケート場、二年越の紛争解決」『大連新聞』1927年1月9日。

<sup>151</sup>「鏡池の氷滑場は西側を無料公開」『満日』1927年12月17日；「弥生池リンク」『満日』1927年12月23日。

<sup>152</sup>「冬の体育にスケートを奨励」『満日』1930年12月6日など。

た<sup>153</sup>。

1930年度シーズンにはさらにスケーターの選択肢が広がる。大連スケート会、関東庁、満鉄の合同で大連運動場内にホッケーとフィギュア用のリンクがつくられた<sup>154</sup>。満鉄運動会はロシア町リンクと前年から運営している星ヶ浦リンクに加えて、連鎖街にもリンクを開設した。鏡ヶ池はフィギュア専用リンクとして無料で開放された<sup>155</sup>。大連のリンクは例年年末に開場し、2月中旬まで利用される。閉場の時期が近づくと、大連放送局が大連市内8か所のスケートリンクの状態を放送した<sup>156</sup>。

ところで、1930年度シーズンを迎える前に、鏡ヶ池をめぐって一悶着あった。関東庁が道路改修のため鏡ヶ池の一部を埋め立てるというのである。この話を聞きつけた岡部はすぐさま関東庁に抗議した。関東庁では御影池学務課長と山本寿喜太体育研究所主事が竹内徳亥土木課長のもとを訪れ、「鏡ヶ池と心中の覚悟という剣幕」でこの件を問いただすと、埋立予定地は鏡ヶ池の子供の遊び場所であり、埋立には池の土を使うので、これまで泥が溜まっていたところがリンクになるのだから、むしろリンクは拡張されるとの説明を受けた。「見くびつちやいけない僕だつてスポーツマンだぜ」と竹内の言だったが、どうやらそううまくはいかなかったようである<sup>157</sup>。1938年に岡部は満洲スケート界の凋落の原因としてこう語っている。

大連のスケート場を今日の様に見る影もないものにして終つたのは関東庁の土木が黙って道路改修をやつて鏡ヶ池の三分の一を埋めて終つたことである。くだらない自動車道路の一本や二本造る為にこれから後何代も何代も残つて行く発言権なき大連の子供達は永久にリンクを奪はれて終つたのである。それは将来に於ける満洲スケート軍の有力部隊を全滅させたことになるのである<sup>158</sup>。

最後に道具について見ておこう。

「お父さん、僕ロングが良いよ、こんなけちなのぢやあ競争出来やしないよ、ねえ口

<sup>153</sup>「大連教育座談会」『南満教育』110号、1931年11月。

<sup>154</sup>「スピードからフィギュア時代へ」『満日』1930年11月9日。

<sup>155</sup>「連鎖街のリンク華々しく開場式」『満日』1930年12月31日。

<sup>156</sup>「氷滑場の状態、ラヂオで放送」『満日』1931年2月11日。

<sup>157</sup>「道路改修で大連スポーツ界が思はぬ儲けをする一件り」『大連新聞』1930年7月3日。

<sup>158</sup>岡部平太「満洲スポーツ界に苦言を呈す」『満日』1938年2月1日。

ングを買ってよ<sup>159</sup>」。かつては下駄スケートで満足していた大連の小学生だが、1920年代も終わりに近づくころには、ロングやらフィギュアやらを所望するようになった。山本運動具店だけで一冬に3000足、満洲全体では8000足のスケートが売れたという。そのうちロングは1割程度を占めた。1928年度シーズンのスケートの価格は、2円前後の鉄製のものから、10円くらいするアルミ製のものまでであった。ホッケー用は8円70銭から13円50銭、フィギュア用は9円70銭から20円であった<sup>160</sup>。1920年代半ばより、運動具店だけでなく靴屋でもスケートを売られるようになったが、靴屋は靴の売れ行きを伸ばすため、スケートは儲けを犠牲にして安い価格で売り出したため、値下げ競争が激化した<sup>161</sup>。1930年度シーズンには、練習用が1円80銭から2円90銭、スピード用が7円から11円50銭、フィギュア用が7円から13円、ホッケー用が5円50銭から7円50銭と随分安くなった。一番売れるのは、練習用のものだった<sup>162</sup>。

こうして、大連ではますます多くの人たちが、安全かつ手軽にスケートを楽しめる環境が整った。奉天や安東など他の都市でもスケートの環境は整備されていった。1927年時点で、満洲のスケーターは約3万5000人とされていた<sup>163</sup>。これは満洲の日本人人口の15%に当たる。スケートは満洲の日本人の間で最も普及していたスポーツのひとつだった。

## 第11話 スケートⅢ（アイスホッケー）

『日本のスケート発達史』によれば、1915年に奉天で開かれた第1回満洲氷上運動会がアイスホッケー競技の最初の記録である。同年1月には平沼亮三がアイスホッケー用具一式を購入して諏訪湖スケート会に寄贈、河久保子朗らが早速パックを打ち合い、「本邦最初のアイスホッケー」として日活フィルムに収められた。また、1917年版ア

<sup>159</sup>「年々殖えるスケートの需要」『満日』1929年12月3日。

<sup>160</sup>「冬季運動の用具とその値段」『満日』1928年11月9日。

<sup>161</sup>「年々殖えるスケートの需要」『満日』1929年12月3日。

<sup>162</sup>「近づくスケートのシーズン」『満日』1930年12月4日。

<sup>163</sup>岡部平太「冬の満洲とスケート礼賛」『満日』1927年1月8日；満蒙文化協会編『満蒙年鑑』昭和三年版、645頁。



メロカ・アマチュア・ホッケーリーグの競技規則が1918年12月18日付で発行されていた。そのうえで『日本のスケート発達史』は、1923年の北海道帝大の本科と予科の試合を「わが国で初めてのアイスホッケーの試合」、翌年に諏訪湖でおこなわれた早大対松本高校、慶大対東京帝大の試合を「初めての対校の公式試合」、1925年の第1回全国学生氷上競技選手権大会(松本市郊外六助池)を「わが国におけるアイスホッケーの幕開け」と位置づけている<sup>164</sup>。

満洲は日本のアイスホッケーの源流の一つとされているわけだが、アイスホッケーの記録自体はさらに遡る。1908年1月に大連スケーティング倶楽部が第2回氷上競技会を開催、その種目のなかに「ホツキー」が含まれていた<sup>165</sup>。翌年の競技会でも「ホツキーゲーム」が行われ、アメリカ領事グリーン、満鉄の太田〔毅〕、内田〔満直?〕、小野木〔孝治〕、山木、島〔竹次郎〕、菅原らが「能く技に熟」していたという<sup>166</sup>。1915年の満洲氷上運動会でアイスホッケーが行われたかどうかを同時代の文献で確認することはできないが、その直前に開かれた旅順中学の校内運動会で「ホツケーゲーム」が実施されていることから、満洲氷上運動会で行われたとしても不思議ではない<sup>167</sup>。ただし、本格的な競技というよりは、遊戯に近いものだったと考えられる。

1921年10月に大連中学に赴任した山本芳松は、英国式のアイスホッケーが日本語に訳されている小冊子を手に入れた。さっそく上海にスティックを注文したところ、陸上ホッケー用のスティックが送られてきた。これではうまくいかないので、体育堂に依頼して上海からアイスホッケー用のスティックを取り寄せてもらった。1922年の冬のことである。山本は1923年12月に『満日』で「氷上に汗するアイスホッケーを陰鬱で寂寞な冬の満洲生活に薦めたい」と語っている。翌年秋に外遊から戻った岡部平太が、現在欧米ではカナダ式のアイスホッケーを採用しているとの情報をもたらしたので、七人制の英国式から六人制のカナダ式に変更した<sup>168</sup>。

<sup>164</sup> 日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』124-125頁。

<sup>165</sup> 「スケーティング倶楽部発会式順序」『満日』1908年1月18日；「北公園の競技会」『満日』1908年1月30日。

<sup>166</sup> 「北公園の氷滑り」『満日』1909年1月19日；「氷滑競技大会」1909年2月13日。

<sup>167</sup> 「中学氷上運動会」『満日』1915年2月8日。

<sup>168</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」『体育と競技』8巻5号、1929年5月；同「体育に命を賭けて五十年」；同「氷上に汗するアイスホッケーを陰鬱で寂寞な冬の満洲生活に薦めたい」『満日』

1921年春に大連中学に入学した庄司敏彦がアイスホッケーの真似事をしたのは1922年のことで、柳の枝でつくったスティックでゴム毬を打ち合って遊んだ。翌年、大連一中と大連商業がアイスホッケーのスティックを取り寄せたところ、大連商業には「本物」が来たが、大連一中には19世紀終わり頃に使われていた古い形式のもので、陸上ホッケー用のスティックに似ていた（山本が上海から取り寄せたと証言したスティックだろう）。靴はスピードスケート用のを使っていた。大連商業と試合をしたところ、庄司の挙げた一点が決勝点となり、大連中学が勝ったという<sup>169</sup>。庄司のいうこの試合は、1924年1月20日の大連スケート大会と考えられる<sup>170</sup>。

庄司の1学年先輩にあたる小西健一は、ロシア人の手でホッケーが普及されはじめ、陸上ホッケーのスティックに似たバンデーのスティックと現在のスティックが入り交じり、「ルールも皆目わからずただ氷上をパックを持って走ると云った状態」だったと回想している<sup>171</sup>。

同じころ奉天でもアイスホッケーが始まった。1922年に満洲医大予科に入学した北河清によると、満洲医大では久保田晴光教授が「外人団」チームを呼んで練習試合をするからということで、奉天体育協会でアイスホッケー用のスティックを12本購入した。さっそく「外人団」（ムクデン倶楽部）との試合をしたが、満洲医大は1対12で大敗した。主将のパーカーひとりにしてやられたという<sup>172</sup>。1923年に満洲医大予科に入学した森川義金の記憶によれば、北河や奥沢とアイスホッケーをやろうという話になり、柳沢敏文が『運動界』に連載したアイスホッケーの手引きみたいな文章を唯一の手掛かりとして研究した。1924年1月にムクデン倶楽部と最初の試合が行われたが、森川は所用で参加できなかった<sup>173</sup>。その翌月3日に奉天で開かれた第4回全満スケート大会では在奉外人万国倶楽部員（ムクデン倶楽部）がアイスホッケーの試合とフィギュ

---

1923年12月9日。

<sup>169</sup> 庄司敏彦「私とアイスホッケー」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』881-882頁所収。

<sup>170</sup> 「氷上の妙技、大連スケート大会」『満日』1924年1月21日；“Last Sunday's Skating Meet,” *Manchuria Daily News*, January 22, 1924.

<sup>171</sup> 小西健一「思い出」。バンデーとは北欧で行われているイギリス起源のアイスホッケーに似た競技である。

<sup>172</sup> 北河清「アイスホッケー部創部のころ」。

<sup>173</sup> 森川義金「スケート界の思ひ出を語る【9】」『満日』1923年12月9日。柳沢の文章とは、柳沢敏文「スケート講話アイス、ホッケー」『運動界』4巻2号、1923年2月であろう。

アを試みたという<sup>174</sup>。

以上から、満洲の日本人の間でアイスホッケーの試合が行われるようになったのは1924年に入ってからとってよからう。スポーツの神様といわれる岡部ですら、1924年2月にカナダで初めてアイスホッケーを見たのだった<sup>175</sup>。

1924年、満洲医大では奉天体育協会からスティックを譲り受け、正式に部が発足した。スティックはカナダ製で「テープを巻いて大事に大事に」使った。キーパーの防具はフィールドホッケーのものをを用いた<sup>176</sup>。フェンスは丸太をくくりつけて作った。隙間にバックが入り込むとスティックで掻き出さねばならないが、敵が近づいてくるので焦ってスティックを折ることもしばしばだった<sup>177</sup>。

創部まもない1924年12月、満洲医大の選手はムクデン倶楽部にコーチを受けに行った。森川によれば、主将のパーカーは「自分等のチームが負けないうに」バックハンドシュートだけしか教えなかったが、それでもなかなか習得できなかった<sup>178</sup>。1925年2月の第5回全満スケート大会で満洲医大はムクデンクラブと対戦し、1対12で惨敗した<sup>179</sup>。その半月前には大連スケート大会でもアイスホッケーの試合が行われ、大連商業、大連一中、満鉄育成学校が参加、大連商業が優勝している<sup>180</sup>。撫順でも2月7日のスケート大会で全撫順と満洲医大の間で、撫順最初のホッケー戦が行われている<sup>181</sup>。

1925年春、満洲医大予科に進学しラグビー部に入った庄司は、その年の秋に怪我を

<sup>174</sup>朝日新聞社編『運動年鑑』大正十三年度、朝日新聞社、1924年、400頁。対戦相手がなく模範試合をしたということだろう。

<sup>175</sup>岡部平太『世界の運動界』目黒書店、1925年、110頁。岡部は1923年12月7日に大連を出発、欧米視察に向かった（『満日』1923年12月2日）。岡部はアイスホッケーの競技規定を翻訳、朝日新聞社編『運動年鑑』大正十三年度、533-537頁に掲載された。

<sup>176</sup>北河清「アイスホッケー部創部のころ」。黒田源次編『満洲医科大学二十五年史』298頁によれば、部の創設は1925年だったという。

<sup>177</sup>森川義金「スケート界の思ひ出を語る【10】」『満日』1937年12月10日。

<sup>178</sup>森川義金「スケート界の思ひ出を語る【10】」『満日』1937年12月10日。

<sup>179</sup>朝日新聞社編『運動年鑑』大正十四年度、419頁。このスコアは、北河が言及した1年前の練習試合と同じである。たまたま同じなのか、北河の記憶が混乱しているのか、現時点では判断できない。

<sup>180</sup>「四百米決勝に見事記録を破る」『満日』1925年1月19日。

<sup>181</sup>「スケート大会開催」『満日』1925年2月1日；「梅野礦長の筆に成る龍躍鳳舞の盃」『満日』1925年2月10日；「撫順スケート大会」『大連新聞』1925年2月3日。

してアイスホッケー部に転じる。彼はそこでも怪我をし、最初のシーズンを技術とルールの研究に費やした。庄司はレフリーをしながら、パーカーから多くの技術を学んだ<sup>182</sup>。北河もムクデン倶楽部から「ほとんどコーチらしいコーチは受けていない」として、見よう見まねで覚えたと述べている<sup>183</sup>。この点は、先述の森川の証言と食い違いが見られる。森川によれば、2年目にはフォアハンドシュートを教わった<sup>184</sup>。

1926年1月、満日主催の第3回全満スケート大会アイスホッケー競技に大連商業AB、教専、満洲医大、大連一中の5チームが参加した。満洲医大と大連一中の試合は2度の延長でも決着がつかず、日没のためついに引き分けとなった。満洲医大はそれ以上大連に滞在ができず棄権した。中学生に勝てなかったことから、満洲医大の実力はまだ突出したものではなかったことがわかる。この大会の3日後、天津スケート団が来連した。同団は天津在住日本人のフィギュアとアイスホッケーの選手で構成され、前年末に天津にいった岡部がフィギュアとアイスホッケーの技術向上のために呼び寄せたものだった<sup>185</sup>。大連では教専を5-0、大連商業を7-0で撃破、奉天では満洲医大に5-0で勝ったが、ムクデン倶楽部には0-2で敗れている<sup>186</sup>。

岡部がアイスホッケーのレベルアップのために採った次の手段が東京帝大のアイスホッケーチームの招聘だった。1926年12月25日に来連予定だったが、大正天皇の容態悪化を受けて遠征は中止となった<sup>187</sup>。このシーズンは諒闇のためスケート競技会がほとんど実施されなかったが、1927年1月20日に奉天体育協会が開催した全満スケート記録会では満洲医大が安東に21対0、外人団に8対0で圧勝した。満洲医大が外人団に圧勝したのは、山口清治助教授によれば、満洲医大のキャプテン北河清の技倆が完成に近づきつつあることと、外人団が前年より明らかに弱くなっていることが原因

<sup>182</sup> 庄司敏彦「私とアイスホッケー」；同「満洲医科大学とアイスホッケー」日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』306-310頁所収。

<sup>183</sup> 北河清「アイスホッケー部創部のころ」。

<sup>184</sup> 森川義金「スケート界の思ひ出を語る【9】」『満日』1937年12月9日。

<sup>185</sup> 「天津スケート選手が大連で模範的妙技を」『満日』1926年1月7日。

<sup>186</sup> 朝日新聞社編『運動年鑑』大正十五年度、358頁；「天津スケート団、教専を零敗せしむ」『満日』1926年1月22日など。

<sup>187</sup> 「アイスホッケーの強豪帝大軍」『満日』1926年12月15日；「帝大ホッケーチーム来満中止」『満日』1926年12月24日。

であった<sup>188</sup>。

1927年12月、ついに東京帝大が満洲にやってきた。内地遠征を控え、「内地チームの強さに対して全く無知」だった満洲医大は、部員の奥沢を安東に派遣、安東中学との一戦を偵察させた。その返事を一日千秋の思いで待ったが、「アンシンセヨ」とのこと、実際、東京帝大は満洲医大の相手ではなかった<sup>189</sup>。東京帝大を9対0で破った満洲医大は、12月31日に初の内地遠征に出発した。

第3回インターカレッジ大会は松原湖で開かれた。初日のスピード競技こそ惨敗したものの、本職のアイスホッケーでは東北帝大を16対0、早大を12対0、慶大を7対3で優勝した。庄司によれば、内地の大学チームはフォアハンドシュートができず、満洲医大がリンクの端から端まで飛ばすシュートに「大分ガックリした」という<sup>190</sup>。満洲医大はその翌週に諏訪湖で開かれた全日本氷上選手権を棄権した。大会当局者の不誠意と諏訪湖のコンディションの悪さが原因だった<sup>191</sup>。アイスホッケーに優勝した早大には大連中学出身の小西健一がいた。東京在住の小西によれば、氷に乗ることができる時間はよくても一冬で3週間程度であった<sup>192</sup>。満洲選手はこの2～3倍は滑ることができたので、当然有利だった（内地に室内リンクができるとこの利点はなくなった<sup>193</sup>）。満洲医大アイスホッケー部はインターカレッジに優勝したことで、学内での待遇が良くなり、高いフェンス、夜間照明、練習時間の延長などの便宜を得た<sup>194</sup>。

1929年1月、満鉄運動会の招聘で早大氷滑部が来連、大連で満鉄育成学校、大連一中を破った。監督の柳沢敏文は大連のアイスホッケーについて、リンクが粗悪でとくにフェンスがひどい、ルールに対して不正直で不忠実であると注文をつけた。もっとも、ルールに関しては、日本では大日本氷上競技連盟と学生氷上競技連盟の2つのルール

<sup>188</sup> 山口生〔山口清治〕「スケート漫談(四)」『満日』1927年2月17日。

<sup>189</sup> 北河清「アイスホッケー部創部のころ」。

<sup>190</sup> 庄司敏彦「満州医科大学とアイスホッケー」。

<sup>191</sup> 日本スケート史刊行会編『日本スケート史』187頁。

<sup>192</sup> 小西健一「思い出」。

<sup>193</sup> 日本最初の室内リンクは1925年7月に開園した市岡パラダイスの北極館である(1930年閉園)。翌年には中之島の朝日会館にスケート場が併設された(黒田勇『メディア スポーツ 20世紀』関西大学出版部、2021年、148-153頁)。東京では、1932年に山王会館スケート場、1933年に芝浦スケート場、伊勢丹スケート場がオープンする。

<sup>194</sup> 庄司敏彦「満州医科大学とアイスホッケー」。

が混在して困った状況ではあるが、と満洲の状況に理解を示している<sup>195</sup>。その後、奉天へ移動した早大は奉天中学を22対1、奉天外人団を2対1で破ったものの、満洲医大には0対6で完敗、さらに2月に鴨緑江で開かれた第2回全日本氷上選手権大会でも満洲医大に0対8と惨敗した。満洲医大は安東を9対0で下し、前年に棄権したこの大会で優勝した。

1929年4月に満洲医大を卒業し大連病院に勤務していた北河清は、その年の8月に後輩の大賀潔（満洲医大4年生）と連れだつて岡部平太のもとを訪れ、事実上日本一となった満洲医大が次になにを目指せばよいのかを相談した。岡部から「ヨーロッパへ行ってこい」と言われて驚いた2人は、さらに「この計画は大変なことだがやってみる価値は充分にある。もし出来なくても計画し努力したと云うことが一生のうち何かの役に立つ」と畳みかけられ、ついにその気になった<sup>196</sup>。問題は資金だった。千数百円もあればチームで遠征できる日本と違って、ヨーロッパへの旅費は1人分でさえ1200円と見積もられた（結局、13738円かかった<sup>197</sup>）。岡部は、「満鉄運動会の今年の残金が四千五百円ある、これを全部やる。次に張学良から二千元（これは御承知のように現金でなかったが）、関東庁から五百円、朝日新聞社から五百円計七千五百円は俺が責任持つ」から、あと半分をなんとかしろと2人に言った。部員たちは満洲医大の関係者に寄附を募った。満洲医大交響楽団は演奏会を開いて資金を集めてくれた。それでも足りない部分はアルバイトや自己負担でまかなった<sup>198</sup>。

満洲医大の十川弥市教授が監督を務め、満洲医大OBの北河清（主将）、稲葉喜久、在学生の大賀潔、林清一、庄司敏彦、高橋寿夫、西内豊比古、平野進、木下昌樹がメンバーに選ばれた。ベルリン留学中の山口清治は現地で合流しコーチを務めることになっていた。一行は12月25日に奉天を出発したが、おりしも北満で中ソ戦争が勃発していたため、シベリア鉄道に乗るには敦賀からウラジオストックを経由しなければ

<sup>195</sup> 柳沢敏文「私が見たる大連のアイスホッケー界」『満日』1929年1月27-28日。

<sup>196</sup> 北河清「大連一中出身者を主力とした満洲医大アイス・ホッケー部の欧州遠征記」大連一中創立五十五周年記念誌編纂委員会編『柳緑花紅 大連一中創立五十五周年記念誌』大連一中校友会、1973年、40-42頁所収。

<sup>197</sup> 「アイスホッケー部欧州遠征報告発表」『大連新聞』1930年4月1日。

<sup>198</sup> 北河清「アイスホッケー部創部のころ」。張学良の2000円がいかなる形で渡されたのかは不明。

ならなかった。大量の食料を持ち込み、ベルリンまでの19日間をすべて自炊で通した。前年秋に日独競技が開かれたこともあって、ドイツでは大いに歓待された。初戦はドイツ代表との戦いで、熊のような大男を相手に4対15で大敗した。ミュンヘン、ダボスを経てシャモニへ、ここでヨーロッパ選手権大会に参加した。暖冬のため一週間近く試合ができなかったが、これはよい休息になった。その後、ロンドンまで北上、ケンブリッジ大学との試合は遠征中唯一の学生チームで大いに張り切ったのだが、延長の末4対5で惜敗した。最後に訪れたメードリングではゲーデンホーフ・カレルギー伯爵宅でもてなされた。伯爵の妻は日本人で、次男リヒャルトは欧洲連合の父と称される。満洲医大は同地で遠征中唯一の勝利を挙げている。奉天に帰着したのは3月5日、71日間の遠征だった(表11-1)<sup>199</sup>。

表 11-1 満洲医大ヨーロッパ遠征成績

月日	滞在地	対戦相手	スコア
12月25日	奉天		
1月15日	ベルリン	全ドイツ	4-15
1月16日	ベルリン	全ベルリン	2-12
1月19日	ミュンヘン	全ミュンヘン	0-1
1月20日	ミュンヘン	全ミュンヘン	1-5
1月23日	ダボス	全チェコスロヴァキア	2-12
1月24日	ダボス	全スイス	0-8
1月31日	シャモニ	全ポーランド	0-5
2月7日	ロンドン	全イギリス	1-7
2月8日	ケンブリッジ	ケンブリッジ大学	4-5
2月13日	ウィーン	全オースタルー	4-7
2月14日	ウィーン	全ウィーン	1-5
2月15日	メードリング	全メードリング	1-0
3月5日	奉天		

ウィーン、ダボス、シャモニで少年ホッケーチームを見て感銘を受けた北河清は、翌シーズン開始前に『満日』で次のように訴えた。現在満洲医大が優位を占めているが、世界的進出を望むなら、中学から来る既成の選手が必要であり、小学校時代からス

<sup>199</sup>北河清「大連一中出身者を主力とした満洲医大アイス・ホッケー部の欧洲遠征記」；北河清「満洲医大アイス・ホッケー部の欧州遠征記」日本スケート史刊行会編『日本スケート史』900-906頁所収；大賀潔「スケート界の思ひ出を語る【5】」『満日』1937年12月1日；庄司敏彦「満洲医科大学とアイスホッケー」。

ティックを握ったことのあるものが必要であり、「根本を小学校生徒に望まなければならない」。同時に、北河は少年用のアイスホッケー規則を作成し、満洲体育協会、満鉄体育会、玉沢運動具店で無料配布した<sup>200</sup>。満洲医大の遠征の影響からか、このシーズンはホッケーが大いに流行った。

本年はホッケーの需要が減切り多くなつて、ホッケー全盛時代を現出せんとしてゐる、値段は昨年あたりに比べるとグツと安く……ホッケー用が五円五十銭位から七円五十銭位までである。靴は子供用のものが五円以上、大人用ものが六円以上、ホッケーの道具はステッキが一円二十銭から四円五十銭、グローブが十二三円、胸当が二十円前後、脛当が二十二円から二十七円、バツクが五十銭と七十銭の二種、スケートはやはり練習用のものが何と言つても需要が最も多いさうである<sup>201</sup>。

「世界的進出」を目指す満洲医大の次の目標はオリンピックだった。1932年2月にアメリカのレークプラシッドで開催されるオリンピックに向けて、満洲医大の学生たちは練習を続けたが、大日本スケート競技連盟が十分な費用を調達できなかったため、アイスホッケーチームの派遣が見送られ、チャンスを逃した<sup>202</sup>。1936年2月のガルミッシュ・パルテンキルヘン冬季オリンピックにはヨーロッパ遠征メンバーだった庄司敏彦と平野進に加えて、木下梢、早間雅博、本間悌次の3人の満洲医大生が日本代表に選ばれた。

最後に、大連 OB アイスホッケー倶楽部に触れておきたい。この倶楽部は1930年12月に設立された社会人チームで、満洲医大 OB の酒井幸雄、北河清、大賀潔をはじめ、岡部平太（主将）、飯沢重一、林田学、宮畑虎彦らスポーツ界の錚々たる面々がメンバーであった<sup>203</sup>。1931年1月7日、大連 OB アイスホッケー倶楽部は満洲医大予科と対戦する。この試合には女優夏川静江がOBチームを応援するため来場することになっていた。夏川は満日主催の映画週間に出演のため、1月3日に来連していた。熱烈な夏川ファ

<sup>200</sup>北河清「アイスホッケーに就て」『満日』1930年12月6-10日。満洲体育協会は「少年アイスホッケー規則」を制定し、翌年1月に発表した（『満日』1931年1月8-9日）。

<sup>201</sup>「近づくスケートのシーズン」『満日』1930年12月4日。

<sup>202</sup>「医大ホッケー軍、明春米国へ遠征」『満日』1931年2月16日。

<sup>203</sup>「銀盤上に跳躍のシーズン近づき」『満日』1930年12月3日。



ンだった岡部はわざわざ奉天まで出向いて夏川を迎えている。5日には夏川の歓迎会が開かれるが、岡部や満映所長の芥川光蔵らがその発起人に名を連ねていた。6日には夏川が水明荘の岡部の自宅に招待され、内地の人には珍しかったジンギスカン鍋を味わっている<sup>204</sup>。夏川はそのまま岡部邸に泊まったので、翌日岡部と夏川は連れ立って試合に臨んだのだろう。ゴールキーパーを務めた岡部はさぞかし張り切ったと思われるが、若い連中に攻め込まれ、0対8の惨敗に終わった<sup>205</sup>。

## 第12話 スケートIV (フィギュアスケート)

日清戦争のころ、北大の学生たちの前でアメリカ人宣教師がアウトエッジで滑り、学生の驚異的となった。これを契機にフィギュアの研究するものが現れたという。仙台でも佐藤幸三、田代三郎、河久保子朗ら二高の学生たちがフィギュアを研究していた。東京帝大に進んだ河久保らは活動の場を諏訪湖に移した。河久保は1914年にアメリカのスケートに関する本 (*A Handbook of Figure Skating*) を手に入れ、1915年に東文堂から『スケーティング』という本を刊行、愛好家必携の書となった。1920年秋にはフィギュア愛好家を中心にして日本スケート会が組織された。同会は1922年2月に諏訪湖で国際ルールに準拠した初のフィギュア競技を開催した。この時審判を務めたのは交野政邁、河久保、田代、柳沢敏文の4名であった。この年の暮れにドイツから帰国した外交官佐久間信が諏訪湖で本場のフィギュアを披露し、日本スケート会会員を指導した。1917年に東京帝大を卒業後、外務省入りした佐久間は、最初の任地安東でスケートに出会う。スケートにはまった佐久間は次の任地ベルリンでコーチについてスケートの技術を学び、本場の技術を持ち帰ったのである<sup>206</sup>。内地と外地のスポーツはさまざまな形で結びつき、互いに影響を与えていたといえよう。

大連では1908年に大関生なる人物が「スケーティング」と題する記事を連載、曲滑

<sup>204</sup>「村田氏歓迎会」『満日』1931年1月2日；夏川静江『私のスタヂオ生活』第4巻、佐々木静江、1933年、13-15頁。

<sup>205</sup>「新春劈頭のホッケー戦挙行」『満日』1931年1月7日；「医大予科軍振ひ8-0で大勝す」『満日』1931年1月8日。

<sup>206</sup>日本スケート連盟編『日本のスケート発達史』119-123頁。

りや「字形を氷上に印する」ことにも触れており、フィギュアに相当する滑りがすでに知られていたことがわかる<sup>207</sup>。

1915年2月に開かれた旅順中学の氷上運動会のプログラムにはフィギュアスケートがあり、「フィギュアは滑走の基本的模型を演ずるもの」と『満日』が解説している<sup>208</sup>。この前後のことと思われるが、のち大連スケート界の大御所となる東瀬戸庄吉はフィギュアとの出会いを次のように回顧している。

米国船のエンジニアをやつて居た瑞典人がすべりに来たが驚くべし自分達が今まで知らなかつた方法ですべる、まわらない英語で聞いたりたづねたりした結果アウトカーヴだと云ふことが解つた、之が僕達が規則的にフィギュアスケーティングのコーチを受けた最初だつた<sup>209</sup>。

1918年の南満工業学校のスケーティング大会でもフィギュアがプログラムに含まれていた。「最後の特別フィギュアに於ては全校を通じて最も優秀な者のみが各自得意の妙技を氷上に演ずる」と、フィギュアは大会を締めくくる注目のプログラムであった<sup>210</sup>。

本格的にフィギュアスケートが紹介されたのは、1923年1月の『満日』の記事「冬期の戸外運動スケーティングに就て」だったのではないだろうか<sup>211</sup>。この記事は河久保子朗『氷滑』（1917年刊）に依拠しつつ、フィギュアスケートの基本概念や注意点、さらには練習の方法を概説した。

1924年冬になって、満洲でもフィギュアを試みるものがちらほら現れはじめる。岡部平太は「目下諸外国におけるスケートはフィギアーに重きを置き盛んに其普及を図つて居るのでわが満洲に於ても本年から之が選手権大会を開いて男女共にやつて見たいと思つて居る」と述べ、フィギュアの普及に意欲を示した<sup>212</sup>。

翌1925年1月、大連スケート会主催の氷滑大会でフィギュアスケートが採用された。

<sup>207</sup> 大関生「スケーティング」『満日』1908年2月2-14日。

<sup>208</sup> 「氷上運動会」『満日』1915年2月14日。

<sup>209</sup> 「音楽隊入りでブカ／＼／ドン／＼／」『満日』1928年12月22日。

<sup>210</sup> 「工業氷滑大会」『満日』1918年1月20日。

<sup>211</sup> 「冬期の戸外運動スケーティングに就て」『満日』1923年1月13-14日。

<sup>212</sup> 「鏡の表面を燕のように滑走する満洲の冬が来た」『満日』1924年12月11日。

満洲で最初の日本人によるフィギュアスケートの競技会である。初代チャンピオンとなったのは満鉄社員の貝通丸秀雄だった<sup>213</sup>。2月に奉天で開かれた第5回全満スケート選手権大会でもフィギュアスケートが採用された。1位は奉天の堀崎、2位は安東の東原、3位は大連の貝通丸だった<sup>214</sup>。1926年1月に岡部が呼び寄せた天津スケート団（第11話参照）は、大連でフィギュアスケートの講習もした<sup>215</sup>。

冬の満洲は風が強く、ゆっくりフィギュアを楽しめないばかりか、風で姿勢が乱れてしまう——満洲でフィギュアが発達しないのは設備に問題があると考えた岡部は、1926年の年末、露西亜町のテニスコートに覆いをかけて屋内スケート場をつくった。1927年の正月は稀に見る暖かさで、大連の他のスケート場は氷が解けて滑走に適さなかったが、ここ露西亜町のスケート場だけは安全で氷の状態もよかったことから、多くの人が押し掛けた。ところがある日大雪が降って、雪の重みで小屋がつぶれてしまい、約3000円の損害を蒙った（これにこりてしばらく同様の試みはなされなかった）<sup>216</sup>。

満洲のスピードスケートを世界の水準になんとか近づけたいと考えていた岡部が、ハルビンに赴いてロシア人青年ルシチャイの滑りを見たのは1927年2月のことである（第10話参照）。岡部はスピードスケートの記録短縮のためにはフィギュアとカーブの科学的研究が必要となることを確信した。かくして、フィギュアは満洲の多くのスピード選手にとっても重要なものと位置づけられることになった<sup>217</sup>。しかしながら、フィギュアスケート競技そのものに人気が集まることはなく、出場者にはプログラムを理解していないものすら少なくなかった。満洲医大助教授の山口清治は、完全なコーチを得られないにしても、せめて書物の一冊くらい目を通しておいてもらいたいと注文をつけている<sup>218</sup>。山口は南満医学堂を卒業後、大連医院に就職、京都帝大医学部留学を経て、満洲医大に招聘され、「日本一流の選手よりも各地におけるスケーターの師とし

<sup>213</sup>「四百米決勝に見事記録を破る」『満日』1925年1月19日。

<sup>214</sup>朝日新聞社編『運動年鑑』大正十四年度、419頁。

<sup>215</sup>「銀盤上の妙競技」『満日』1926年1月22日。

<sup>216</sup>「理想的の大リンク」『満日』1926年12月15日；「凄じい繁昌の露西亜町スケート場」『満日』1927年1月3日；岡部平太「冬の満洲とスケート礼讃」『満日』1927年1月8日；「露西町リンク日曜の賑ひ」『満日』1927年1月10日；「朝から晩まで大賑ひ」『満日』1927年1月24日。

<sup>217</sup>「スケートの秘訣は「我流」をすてゝ」『満日』1927年2月18日。

<sup>218</sup>山口生〔山口清治〕「スケート漫談（三）」『満日』1927年2月16日。

て仰がれ殊にフィギュアでは常に審判又は指導者として迎へられ」る人物であった<sup>219</sup>。

1929年1月、満鉄運動会の招聘で早大氷滑部（アイスホッケー）が来連した。チームを引率した柳沢敏文はフィギュア選手として有名な人物だった。2月に安東で開かれた第2回全日本氷上選手権大会に出場した柳沢は、フィギュアの部で優勝した。2位は奉天の酒井幸雄、3位は大連の山田隆一郎だったが、柳沢の得点294.5点に対して、酒井は207.25点、山田は112.2点で、その差は歴然である<sup>220</sup>。

1929年から1930年にかけて、大日本スケート競技連盟主催の第1回全日本選手権大会における満洲スピード勢の勝利、満洲医大アイスホッケー部のヨーロッパ遠征、と満洲スケート界の躍進が続いたが、ひとりフィギュアだけは「殆んど行き詰りの状態」で、わずかに満洲医大の久保田晴光、山口清治の熱心な奨励研究によって命脈が保たれていた。岡部はその原因として、リンクの不完全とダンスへの曲解を挙げ、渡欧する山口がフィギュアスケートの最新技術をもたらしてくれることを期待した<sup>221</sup>。

1930年度シーズンを前に、『満日』は「スピードからフィギュア時代へ」と銘打ち、満鉄運動会の岡部、高橋俊夫、満洲体育協会の林田学らがアイスホッケーとフィギュアスケートの普及に全力を注ぐべく、大連運動場のテニスコートにアイスホッケーとフィギュアの専用リンクをつくる予定であると報じた<sup>222</sup>。さらに『満日』は飯沢重一「フィガースケーチング」を連載、飯沢はスピードやホッケーの面白さは若い人たちに限られるが、フィギュアスケートは体力のない30歳を過ぎたお父さんたちにも心ゆくまで享楽を与えてくれる、とその魅力を訴え、初歩的な技術を紹介した<sup>223</sup>。飯沢は長野県上諏訪の出身、松本高校時代はちょうど諏訪のフィギュアスケート勃興期にあたる。1929年1月の全満選手権で飯沢はフィギュア3位に入賞しており、腕前も確かだった。のち飯沢は満洲国、そして戦後日本のスポーツ界で重要な役割を果たすことになる<sup>224</sup>。

<sup>219</sup>「満洲の運動家、山口清治博士」『満日』1927年12月30日。

<sup>220</sup>「内地選手全く振はず満洲軍の独り舞台」『満日』1929年2月4日；*Manchuria Daily News*, February 4, 1929.

<sup>221</sup>岡部平太「奉天医大氷滑部の満洲遠征を送る」『満日』1929年11月28-30日。

<sup>222</sup>「スピードからフィギュア時代へ」『満日』1930年11月9日。

<sup>223</sup>飯沢重一「フィガースケーチング」『満日』1930年11月25-26日。

<sup>224</sup>満洲国では大満洲帝国体育連盟理事、満洲国足球協会理事長、戦後は日本体育協会専務理事を

1931年1月には大連アスレチック倶楽部の主催でフィギュアコンテストが開かれた。詳細は不明ながら、Aクラスで1、2位、Bクラスで1～4位の名前が挙がっている。得点差を見る限り、参加者がこの6名だけだった可能性もある<sup>225</sup>。また、この4日後に奉天で第8回全満氷上選手権大会でもフィギュア競技には6名しか参加者がいなかった<sup>226</sup>。

満洲事変を経た次のシーズンにはフィギュアの競技会がほとんど見られない。一方で、1932年1月に大連ファイガースケーティング倶楽部が創設され、ローラースケート場を利用して屋内専用リンクを新設、翌月には大連で初となるフィギュアスケートの講習会を実施した。しかし、参加者は男女10名余りしか集まらなかった<sup>227</sup>。どうやらフィギュアスケートは満洲っ子の肌にならなかったようである。

## 第13話 スキー

満洲の冬は長く厳しいが、雪は思ったほど降らない。スケートがいち早く盛んになったのに比べて、スキーの始まりは遅く、一部の人々に限られていた。

「愈々到来したスキー季節、内地では頗る盛ん、満洲でも始めたい」という記事が『満日』に載ったのは1919年12月のことである<sup>228</sup>。しかし、その後実行に移された気配はない。1924年、欧米視察から戻った岡部平太は満洲にスキーを導入しようと考え、試行錯誤を繰り返した。岡部は毎朝通勤の電車から星ヶ浦ゴルフ場のスロープを眺めてはどこかでスキーはできないかと思い巡らし、1926年冬には金山から九寨まで足を延ばしたが、「重いスキーを担いで停車場から一里も一里半も雪を踏んで歩いて見たが満洲の雪にはどうもスキーが乗らない。バフリ、バフリとスキーが雪の中にめ入り込むだけで五尺とは滑れない」という状況だった。さんざん見て回ったあげく、大連附近

---

務めた。

<sup>225</sup>「美しいフォームに観衆の総て魅了」『満日』1931年1月22日。

<sup>226</sup>これに対して、スピードは180名、ホッケーは8チームが参加した（「新進選手の飛躍期待さる」『満日』1931年1月24日）。

<sup>227</sup>「ファイガースケーティングクラブを組織」『満日』1932年1月21日；「ファイガースケーティング講習会を開催」『満日』1932年2月6日；「ファイガースケーティング講習会」『満日』1932年2月9日。

<sup>228</sup>「愈々到来したスキー季節」『満日』1919年12月30日。

の丘陵のほうがまだまだというのが岡部の結論で、匙を投げてしまった<sup>229</sup>。

同じころ、旅順では関東庁土木課長竹内徳亥がスキーを試みていた<sup>230</sup>。弘前生まれの竹内だが、スキーにはまったのは1916年、官僚となって初めて赴任した樺太でのことである。爾来5年間、勤務（10時から14時まで）の余暇にスキーを思う存分楽しんだ。満洲に来てからはスキーに恵まれず、代わりにスケートを覚え、それが楽しみになった、とのちに語っている<sup>231</sup>。

満洲のスキーは1927年度シーズンに転機が訪れた。その立役者は満洲医大の黒田源次教授である。黒田は京都帝大で心理学を専攻、卒業後は同大医学部で研究を続け、ドイツ留学を経て、1926年5月に満洲医大教授に就任した。満洲医大では東洋史、考古学、美術史などの研究も行い、発掘事業にも参加した。1937年に満洲史学会を設立、戦後には奈良国立博物館の初代館長も務めた<sup>232</sup>。大学時代、伊吹山や妙高山でスキーに親しんだ黒田は、満洲の雪が「水気少くスキーにはこの上もない良質」であるにも関わらず、スキーが行われていないことに鑑み、1926年度シーズン以来、スキーができそうな場所を探してまわっていた。1928年1月になって、奉天体育協会の木谷辰巳や野田運動具店主らと奉天スキー同好会を組織、同好会のメンバーと撫順の老虎台、鞍山、奉天の東南にある陳相屯などで練習をしたほか、スキーの普及にも熱心に取り組んだ<sup>233</sup>。

2月19日、満日の主催、満洲スキー倶楽部（奉天スキー同好会）、奉天体育協会、野田運動具店、奉天鉄道事務所の後援で第1回全満スキー大会が開かれた。『満日』紙上では、スキー大会の予告や前況がたびたび掲載され、黒田博士も「満洲のスキーに就いて」を寄稿するなど、大々的なキャンペーンが張られた<sup>234</sup>。開催地は当初陳相屯を予

<sup>229</sup> 岡部平太「冬の満洲とスケート礼賛」『満日』1927年1月8日。

<sup>230</sup> 「満日スポーツ座談会（二）」『満日』1928年3月3日で、出席者の一人が「関東庁の竹内土木課長は昨年旅順ですべつてあつたさうですよ」と語っている。

<sup>231</sup> 「体育一家言」『満日』1941年11月20日。

<sup>232</sup> 砂川雄一、砂川淑子『有馬源内と黒田源次：父子二代の100年』増補改訂版、砂川雄一、2014年。

<sup>233</sup> 「満洲医大でスキー部を新設」『満日』1928年1月8日；「スキー術を紹介する」『満日』1928年1月10日；「会合と催物」『満日』1928年1月15日；黒田源次「満洲のスキーに就て」『満日』1928年2月17日。

<sup>234</sup> 「第一回全満スキー大会開催」『満日』1928年2月13日；「満洲に初めてのスキー大会前況」『満日』1928年2月17日；黒田源次「満洲のスキーに就て（上）」『満日』1928年2月17日；「スキー大会の参加者歓迎」『満日』1928年2月18日；「見物は寒くはない全満スキー大会」『満日』

定していた。陳相屯の駅長上野国雄はスキー愛好者で、奉天鉄道事務所が後援することになったのも、上野の働きかけと思われる。

が、積雪の関係で姚千戸屯駅南の歪頭山に変更となった。歪頭山は北斜面に500mのスロープを有し、積雪量が十分で、岩石の障害が少なく、地形が複雑で、駅のすぐそばにあり、奉天からは汽車で約70分、まさに理想的なスキー場と目されていた<sup>235</sup>。旅順から竹内徳亥、大連から林田学（満洲体育協会主事）、臼井亀雄（満日編輯長）、奉天から満洲医大の久保田晴光、黒田源次教授らが出席、競技者は約50名で見学者も300名にのぼる盛況であった。鞍山からも鞍山中学校の矢沢邦彦校長と山本芳松、三宅欣吾教諭が参加した。競技は直滑降200mと直滑降500mの2種目で、竹内徳亥らによるテレマークの実演があった<sup>236</sup>。

1928年2月末に大連のスポーツ関係者が集まって座談会が開かれたさい、スキーの話題が出た<sup>237</sup>。

米野豊実「僕は明治四十四年ごろ高田でスキーを履いた一人なんですが、聞けば満洲の雪がスキーに適さないといひますネ、スキーに雪は乾燥してゐる方がよく信越地方の雪より北海道、樺太地方の雪がいゝと言はれる位であるから満洲でやれぬ筈はないと思つたのですが、臼井君は今年安奉線の歪頭山で開催された満洲最初のスキー競技会へ出掛けたんですがドウです満洲でスキーがやれますかね、また発達の可能性がありますか」

臼井亀雄「僕はカラ素人で判りませんが、兎に角滑れた事実からして僕は満洲でもスキーは出来ると思ひますネ、その辺は体協の林田さんの御意見を……」

林田学「事実滑れました、やれると思ひます」

岡部平太「ホントに滑つたのですか」

林田、臼井「すべれますヨ」

岡部「満洲のスキーは競走よりか楽しみにといつた方がいゝんじゃないのですか、尤も乗れないと断定は出来ませんがネ」

---

1928年2月18日；柳舸「スキー大会に際して」『満日』1928年2月19日など。

<sup>235</sup>『満蒙年鑑』昭和四年度版、508頁；「満洲に初めてのスキー大会前況」『満日』1928年2月17日。

<sup>236</sup>「姚千戸屯に於る満洲スキー大会」『満日』1928年2月20日。

<sup>237</sup>「満日スポーツ座談会（二）」『満日』1928年3月3日。

白井「伊吹に勝るとも劣らぬ位にスべれるといふことは奉天医大の黒田博士の説  
でした」

岡部「滑れるところでスキーの方は切上げやう」

米野「しかし満洲の雪に乗れるといふことが決つたらスキーは実用化する必要が  
あると思ふ、馬賊討伐などには具合が宜いと思ふ」

山本寿喜太「ソウだ滑れ、ば大いに旺にすべしだ、スケートより男性的でいゝか  
らネ」

満洲でのスキーに懐疑的な岡部に対して、全満スキー大会に参加した白井と林田を  
はじめ他の人たちが期待をもって語っている様子がかがえる。周知の通り、日本の  
スキーは1911年(明治44年)1月12日にオーストリア・ハンガリー帝国の軍人テオド  
ル・エドラー・フォン・レルヒ少佐が高田の第13師団で陸軍軍人に指導したのが最初  
といわれる<sup>238</sup>。レルヒは民間人を対象とした講習会や競技会を開催したが、この新しい  
スポーツを紹介・奨励したのが『高田日報』だった。米野は1911年春に『高田日報』  
の記者となるので、自然とスキーに親しんだに違いない<sup>239</sup>。

日本最初のスキー講習会に参加し、1月21日に開かれた日本最初のスキー競技会の  
第三班(下士及甲種講習員)で優勝した金井勝三郎は、スキーの技術書を書くなどスキー  
の普及に大きく貢献した人物だが<sup>240</sup>、中国や満洲とも関係が深い。金井は上海の東亜同  
文書院を卒業し、第13師団で中国語教師をしていた。北海道、樺太、青島などで記者  
を務めたのち、大阪で外地新聞の大阪支局を担当するかたわら、「中国の新聞等への内  
地からの広告送稿と、大陸への企業進出や商品販路拡大に伴う翻訳業務」を行う日華  
社の社長を務めた。1934年12月に金井は満洲国通信社大阪支社長に招聘された<sup>241</sup>。米

<sup>238</sup>ただし、それ以前にもスキー導入の試みはなされていた(新井博『レルヒ 知られざる生涯：  
日本にスキーを伝えた将校』道と書院、2011年、76-79頁)。

<sup>239</sup>米野は1892年に新潟県岩船郡関谷村に生まれ、1911年に正則英語学校高等科を卒業、高田日  
報編輯長、やまと新聞政治部次長、中央新聞政治部長、日本電報通信社編輯次長などをへて、  
1927年10月に満日社に入った(『満洲紳士縉商録』日清興信所、1927年(不二出版、2009年  
の復刻版を利用))。

<sup>240</sup>金井勝三郎編『スキー滑走』田中鉄工場、1914年；新井博「樺太に於けるノルウェー式スキー  
術の導入と普及について：金井勝三郎の大正4年から大正6年における活動を中心に」『日本  
スキー学会誌』9巻1号、1999年。

<sup>241</sup>木原勝也「満洲国通信社の広告業進出を阻んだ大阪・日華社のプレゼンス：昭和初期の中国大



野も日本のスキーの揺籃時代を回顧した文章のなかで、とくに金井を「我国のスキー史に特筆さるべき功労者」と評価している<sup>242</sup>。

スキーは軍隊と関係が深い。先の座談会でも米野が馬賊討伐への活用を提案していた。実際、満洲事変では、高田連隊の伍堂上等兵がスキーの腕前を生かして活躍したことが「スポーツと戦争」というタイトルで『大連新聞』に報じられている<sup>243</sup>。のちには関東軍も対ソ戦に備えてスキー部隊を編成することになる<sup>244</sup>。

1928年4月1日、撫順体育協会にスキー部が設立された<sup>245</sup>。同年秋までに会員は30名に達し、撫順炭鉱長山西恒郎、同次長久保孚、同経理課長大垣研らゴルフ好きの大部分が参加した<sup>246</sup>。撫順体育協会が障害物を取り除くなどスキー場の整備をした結果、1929年初には毎日50名のスキーヤーが練習に励む盛況を呈した<sup>247</sup>。同年2月には老虎台で州外スキー大会が開かれ、撫順から80名、奉天から15名が参加した<sup>248</sup>。翌年度のシーズンには、日曜日になると130名ものスキーヤーが老虎台に押し寄せ、うどんとそばの出張販売店が開かれた<sup>249</sup>。老虎台なら大連からも夜行を使って土曜夜に出て月曜の朝に帰ることができた<sup>250</sup>。撫順体育協会スキー部は1931年6月に全日本スキー連盟に加盟する（同連盟に加盟する満洲で唯一の団体）。会員は89名に増えていた<sup>251</sup>。

1928年11月、大連でもスキー団体組織の動きが見られた。新潟県高田郷友会の席上、大連スキークラブを組織するとの話が出た<sup>252</sup>。日本にスキーを紹介したレルヒ少佐の高

陸における通信業のビジネス環境』『インテリジェンス』17号、2017年。

<sup>242</sup> 米野豊実「我スキーの揺籃時代を語る」『協和』164号、1936年2月15日。

<sup>243</sup> 『大連新聞』1931年11月30日。

<sup>244</sup> 「武を練る関東軍の威容、スキー部隊」『満日』1942年3月16日。

<sup>245</sup> 文部大臣官房体育課編『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』昭和七年度、文部大臣官房体育課、1931年、124頁。

<sup>246</sup> 「スポーツと戦争」『満日』1928年11月11日。

<sup>247</sup> 「高まつたスキー熱」『満日』1929年1月10日。

<sup>248</sup> 「牡丹雪に恵れてスキーヤー狂喜」『満日』1929年2月24日。

<sup>249</sup> 「スキーの全盛時代が来た」『満日』1929年12月17日。

<sup>250</sup> 「雪の少い満洲にもスキー熱が台頭」『満日』1931年1月1日。

<sup>251</sup> 文部大臣官房体育課編『本邦ニ於ケル体育運動団体ニ関スル調査』昭和七年度、124頁；同、昭和八年度、121頁。

<sup>252</sup> 1928年末の時点で、関東州在住の日本人約10万人のうち、新潟県出身者は約2000人だった（都道府県別15位）。

弟たる木暮広三郎が大連に居たというから驚きである。木暮は先述の日本最初のスキー競技会の第一班（歩兵、四十四年専習将校）で優勝した実力者だった<sup>253</sup>。先述の米野もその場に居合わせたはずだ。この翌月の『満日』に大連南山麓市営住宅裏のほとんど傾斜のない雪原を滑るスキーヤーの写真が掲載された。写真には3人しか見えないが、この日スキーをしたのは、大連窯業柳沢勇夫専務取締役、満洲体育協会林田学主事、満日米野編輯局長、満日立上武三記者の4人であった<sup>254</sup>。

1928年以降、毎年11月下旬になるとスキーの便りが新聞に載せられ、スキーは満洲の冬の風物詩の一つとなった<sup>255</sup>。しかし、スケートに比べると、スキー愛好者の数は微々たるものだった。1929年12月の記事によると、大連の運動具店では一昨年からスキーを店頭に置いているが、数えるほどしか売れないという。スキーを買うのは内地でスキーに親しんだ経験を持ち、雪が降った日にスキーを履いて雪の上に立つだけでもよいというような人たちだった。ただし、沿線（おそらく奉天や撫順）では昨年頃から相当に売れていた<sup>256</sup>。ちなみに、大連の体育堂では以下のようなスキー用具が販売されていた。

白平形スキー十二円五十銭、白山形スキー<sup>ママ</sup>十四円五十銭、茶山形スキー十六円五十銭、美津濃ヒツコリスキー、十六円五十銭、体育堂特製スキー九円五十銭、スキー用杖一円八十銭——二円五十銭、スキーロー一個四十五銭、スキーオイル一ビン四十五銭<sup>257</sup>

スケートなら2～3円で安価な靴が買え、近所で楽しめることを考えれば、道具も高く、場所も限られるスキーは敷居が高かったであろう。満洲国成立後、日本人の活動範囲

<sup>253</sup> 中浦皓至「日本初のスキー競技会に関する文献的研究」『スキー研究』7巻1号、2010年；同「レルヒによる日本初のスキー講習会に関する再検討：高田における明治44年度の第1回スキー講習会」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』104号、2008年3月。

<sup>254</sup> 「滑べる！滑べる！スキーの試み」『満日』1928年12月19日。米野豊実「我スキーの揺籃時代を語る」には別の角度からの写真が載っている。

<sup>255</sup> 「町のうはさ」『満日』1928年11月18日；「スキー時季来る」『満日』1929年11月23日；「老虎台のスロープにスキーヤーは躍る」『満日』1930年11月22日など。スキーの活動が少ないわりに『満日』にスキーの記事が多いのは、編輯局長がスキー好きだったことと無関係ではなからう。

<sup>256</sup> 「年々殖えるスケートの需要」『満日』1929年12月3日。

<sup>257</sup> 「雪の少い満洲にもスキー熱が擡頭」『満日』1931年1月1日。

が北に広がると、次々とスキー場が開設されスキーが盛んになるが、1930年冬の時点でスキー場と呼べるのは陳相屯、歪頭山、老虎台の3か所しかなかった<sup>258</sup>。

## 第14話 水泳

### (1) 遠泳

大連では、1908年に満鉄が夏家河子海水浴場を整備したり、満鉄社員が水泳倶楽部(のち水泳部<sup>259</sup>)を結成したり、南満洲教育会が毎年集団水泳を実施したりと、早くから水泳が盛んだった(第15話参照)。シーズン初めには、各種の競技が行われたが、スイカ割りや「水中打球仕合」など余興的なものが多く、泳ぐ速さを競う場合も、距離を定めて記録を取るような発想はあまりなかったようである<sup>260</sup>。

遠泳会は合格、不合格という判定の仕方、級の授与、隊列を組んで泳ぐことなど、競技というより武術に近いものだったが、距離は「マイル」で表示されていた(測定値ではなく概数だろう)。満洲で確認できる最初の遠泳会は、1913年の水泳場閉会式に挙行された8マイル遠泳である。満鉄、大連医院、工業学校、若葉会、中学校の選手ら20名が参加したが、波浪と潮流のため脱落者が相継ぎ、往路を完泳したのはわずか3名、復路は中止となった。満鉄副総裁で満鉄運動会副会長の国沢新兵衛は選手一同に対して、「此勇気の精神は独り水泳にのみならず諸般の事に当りて忘るべからず」とその健闘を称えた<sup>261</sup>。

1914年、満鉄水泳部は1マイル、3マイル、5マイルの遠泳と遊泳大会を開催した。3マイルは100名中73名、5マイルは46名中17名が成功した。「五哩競泳は従来大遠泳としてあつたのだが、最早五哩は大遠泳に値しないやうになつた」という水泳師範の言葉から、今後はさらに距離を伸ばすつもりだったことがわかる<sup>262</sup>。

<sup>258</sup>「満鉄沿線に只三つのスキー場」『満日』1930年12月16日。

<sup>259</sup>満鉄水泳部は1913年に設立、幹事は谷直諒、村田懿磨、大淵三樹だった(「水泳開場延期」『満日』1913年7月21日;「応援歌に激励されて」『満日』1921年8月11日;「水泳大会を見て」『読書会雑誌』8巻10号、1921年10月)。

<sup>260</sup>「水泳倶楽部発会式光景」『満日』1908年8月4日。

<sup>261</sup>「名残の遠泳」『満日』1913年8月25日。

<sup>262</sup>「三哩競泳大成功」『満日』1914年8月2日;「五哩中遠泳会」『満日』1914年8月10日;「海

1915年には従来の1マイル、3マイル、5マイルに加えて7マイルの遠泳会が挙行され、63名の選手が挑み、3マイルに14名、5マイルに3名、7マイルに8名が合格した。水泳師範の言葉では、水温の関係で「満洲の海で七哩以上は無理であらう」とのことだった<sup>263</sup>。注目すべきは満鉄水泳部主催の水泳大会で、50m、100m競泳や選手連絡競泳など、本格的な競技が実施されていることである（ただしタイムは計らなかったようである）。なかでも選手連絡競泳は注目を集め、南満工業学校、大連商業学校、見習学校、養成所から各5名の選手が出場、商業学校が優勝した<sup>264</sup>。

1916年には10マイルの遠泳が計画されたが、天候やコレラの影響で中止となった<sup>265</sup>。1917年8月12日、いよいよ10マイルの遠泳が実施された。参加者21名が浜町海岸に集合し、体温低下を防止するため結髪用のピンツケを体中に塗った。またサメよけに「恐ろしく長い褌」を着用した。白い褌の端を垂らしながら泳ぐのである。準備が済むと、ランチに乗ってスタート地点の柳樹屯へ向かった。柳樹屯では小学生が国旗を振って歓迎し、中国人も多数見物に来ていた。参加者は遥か遠くに見える浜町海岸の煙突を目指して泳ぎ始めた。昼食は伝馬船の縁につかまって、粥を食べた。ふたたび隊列を組んで泳いでいると、大きなサメが現れた。選手らは密集し、ランチが激しくスクリューを回転させて周囲を旋回した。サメが去ったあと、ふたたび泳ぎ始めた。最後に落伍したのが最年少の堂島筑紫だった。予定の時刻にゴール到着は困難と判断されたため、残る6名の選手はいったん船に乗って移動し、ふたたび泳ぐこと一時間、多数の見物人が待ち受けるゴールに到着した<sup>266</sup>。この失敗に懲りてか、翌年以降、10マイル遠泳は実施されなくなる（「満洲に於ては不可能」とされた10マイル遠泳が復活するのは1927年で、女性1人を含む35名が成功する<sup>267</sup>）。

---

上の武者振」『満日』1914年8月11日。

<sup>263</sup>「蒼波を蹴破る七哩」『満日』1915年8月16日。

<sup>264</sup>「浜町游泳大会」『満日』1915年8月21日；「水中尚陸上の如し」『満日』1915年8月23日。

<sup>265</sup>「大連湾横断水泳」『満日』1916年8月3日；「十哩遠泳彙報」『満日』1916年8月4日；「十哩遠泳延期」『満日』1916年8月6日；「十哩遠泳会」『満日』1916年8月13日；「虎疫予防の為十哩遠泳延期」『満日』1916年8月14日。

<sup>266</sup>「大連湾横断の壮挙」『満日』1917年8月9日；「悲壮なりし十哩遠泳」『満日』1917年8月13日；堂島筑紫「大連湾横断」『協和』3巻22号、1929年7月15日。

<sup>267</sup>「海の勇士十哩を泳破」『大連新聞』1927年8月8日；「十五歳の少女十哩を泳ぎ切る」『満日』1927年8月8日；「黒石礁水泳場閉場式を挙行」『大連新聞』1927年9月3日。

(2) 満洲水泳界の全盛期

1921年8月初め、満鉄水泳部は青島体育協会から8月14日に開催する水泳大会に選手を派遣するよう要請され、快諾した。さっそくメンバーが選定され、監督に関屋悌蔵、選手に和田次衛、小松喬太郎、萩正明、勝谷史朗、上野鼎象が選ばれた。和田はこの年春に横浜商業学校を卒業して満鉄に入社、5月に上海で開催された極東選手権競技大会で水泳の日本代表チームをキャプテンとして率いた。水府流太田派の妙手で、満洲にクロールを紹介した。関屋もやはりこの年に東京帝大を卒業して満鉄に入社、7月に来連したばかりだったが、学生時代に水泳をやっていたことから、監督を任されたのだった。関屋の「青島遠征記」によれば、上海の極東大会で短距離用と思われていたクロールや水府流小抜手が1マイルにも用いられたことに注意し、この二つの泳法を研究することが泳ぎ仲間の課題となっていた。関屋は、泳ぎの真の目的は「距離だとか時間だとかで数字的に評価される様な薄つぺらなものではありませんまい」としつつも、極東大会やオリンピックで戦いを挑まれている以上、「遣らなければならない」と述べている<sup>268</sup>。満洲の水泳界でタイムがようやく報道されるようになるのも、和田や関屋の来連が大きいだろう。

猛練習を積んで青島に向かった大連チームは大勝を収めた。青島側は唯一、エドモンドというイギリス人が気を吐いて、200mで1位、50mで2位に入ったが、あとは大連勢が上位を独占した。なかでも、50mの和田の記録29秒8は、極東大会記録30秒を破った、あるいは日本記録を破ったと報道されたが、これは正しくない。たしかに第5回極東大会の記録は50ヤード28秒2、50mに換算すると30秒を超える。しかし第5回大会の成績はことのほか悪かったのであり、第3回大会で斎藤兼吉がマークした50ヤード26秒6(50m換算29秒1)を極東大会記録とすべきである。また50mについては、東京YMCAの浅田による29秒0が大日本体育協会によって公認されている。

青島の水泳選手は臥薪嘗胆、1年間猛練習を積み、1922年8月に来連、満鉄運動会主催の水泳大会に参加したが、ふたたび満鉄に惨敗した<sup>269</sup>。

1922年は水泳の競技化という点で重要な年だった。天の川プールが完成し、クロー

<sup>268</sup> 関屋悌蔵「青島遠征記」『読書会雑誌』18巻10号、1921年10月。

<sup>269</sup> 「大連軍の連戦連勝」『満日』1922年8月21日；『満蒙年鑑』大正十二年版、815頁。

ルが奨励された。若葉会（満鉄見習学校）の佐藤真美はその年、浜町水泳場でクロールを始めたが、「頭を水中に入れて泳ぐこの泳法では、潮水が目にしみて痛く、練習を終るころは、誰の目も赤く充血していた」。夕方になると寒くて水に入る気がしなかったが、藤森千春先生に容赦なく突き落とされた。そんな彼らの楽しみは、水泳部の予算で飲ませてくれる1杯2銭の飴湯だった<sup>270</sup>。四高武道師範だった藤森は1913年に嘉納治五郎の命で来連、満鉄武道教師を務めながら水泳の指導にも熱を入れていた<sup>271</sup>。

新設天の川プールで開かれた最初の競技会は、8月13日の遼東新報社主催中学校生徒競泳大会だった。若葉会は1年生の荻清と2年生の佐藤の活躍で、ライバル大連中学と大連商業を抑えて大勝した<sup>272</sup>。後輩荻の後塵を拝した3年生の萩正明は、秀才でいつも哲学書を読むような少年だったが、このあとしばらくして東京の中学に移り、大本教の本部を訪れたあと消息を絶ったという<sup>273</sup>。

1922年8月30日に発会式を挙げた全満競技連合は、その翌日に全満水泳選手権大会を開催した。この大会は翌年5月に開かれる極東大会の満洲予選も兼ねており、満洲各地から60名余りの選手が集結、白熱したレースが繰り広げられた。この大会で活躍したのは弥生高女の飯村敏子と神明高女の杉江正子で、飯村は50m自由形を49秒2、50m平泳ぎを1分4秒、杉江は100m平泳ぎを2分15秒2で泳ぎ、内地の記録を上回ったと報じられた<sup>274</sup>。飯村は1919年夏、長春の小学校に通っていたときに、星ヶ浦の集団水泳に参加し、初めて水泳を経験した。その後、父が大連本社に転勤したのに伴い、大連に移り、満鉄の関屋悌蔵や岡部平太の指導を受けて力を伸ばした<sup>275</sup>。

銓衡の結果、9名の選手が満洲から極東大会全日本予選に派遣されることになった<sup>276</sup>。全日本予選は1923年5月初めに実施される。5月初めといえば、大連ではまだ寒

<sup>270</sup> 佐藤真美「水泳部の思い出」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』佐藤真美、1982年、129-135頁所収。

<sup>271</sup> 「昔はこれでも(31)」『満日』1936年8月15日。

<sup>272</sup> 佐藤真美「水泳部の思い出」。

<sup>273</sup> 朝倉幸一「片山義勝先生の思い出」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』37-39頁所収。

<sup>274</sup> 「女も交る差手拔手」『満日』1922年9月1日；「競泳に光る総裁賞」『満日』1922年9月1日；「全満水泳大会」『大連新聞』1922年9月1日；「全国女子競泳の記録を破る」『大連新聞』1922年9月1日。

<sup>275</sup> 「女子運動界の明星 飯村敏子」『サンデー毎日』3巻8号、1924年2月17日。

<sup>276</sup> 「全満水泳選手権全部九名決定す」『大連新聞』1922年9月7日。

くて泳げない。そこで前年の秋に予選を実施し、冬の間は保健浴場の温水プールでトレーニングをする計画だった。ところが、保健浴場の建設が遅れたため、3月になってようやく天の川プールで練習を始めた（第16話参照）。4月21日に内地へ向かった水泳の満洲代表は、和田次衛、荻清、佐藤真美、柳井巖、西垣順三の5名であった。水泳の予選は茨木中学プールで開かれた。満洲選手はみな予選を突破し、日本代表に選ばれた。荻が100ヤード背泳ぎで3位に入ったのが、満洲男子勢の最高位だった<sup>277</sup>。

満洲代表に選ばれた5人の男子選手のうち、3人（荻と佐藤は満鉄見習学校、柳井は大連商業）が中学生だった。満洲は水泳に適した土地ではなかったものの、この時期の中学校のレベルは全国的に見ても高かった。1924年夏、大連商業は第1回全国中等学校水上競技会に出場、柳井巖、市村勝治らの活躍で、茨木中学、浜松一中につぐ全国3位の好成績を取めた<sup>278</sup>。しかし、帰連翌日に開かれた遼東新報社主催、第3回全満中等学校水上競技大会では、大連商業は満鉄育成学校に大敗し、育成の3連覇を阻止できなかった<sup>279</sup>。1925年、大連商業はついに第4回全満中等学校水上競技大会で優勝、全国中等学校水上競技大会でも函館中学、茨木中学に次いで3位となった<sup>280</sup>。1926年、大連商業は全国大会に本郷義俊1人しか派遣せず<sup>281</sup>、翌年以降は全国大会への参加を見送った（大会そのものも東西対抗という形に変わった）。

大連商業と満鉄育成はよきライバルであった。大連商業は1925年から1927年まで全満大会3連覇を果たした。遼東新報社が満洲日報社と合併したため本大会はいったん中断したが、1929年に満洲体育協会主催で復活、復活後最初の大会は満鉄育成が制した。1930、31年は大連商業がこの大会を制す。1931年には関東庁体育研究所主催の関東州内中等学校水泳大会も開かれたが、こちらも大連商業が優勝している。大連一中には宮畑虎彦教諭がいて水泳を指導していたが、元オリンピック水泳選手でオリンピック日本代表のコーチでもあった宮畑を以てしても、大連商業と満鉄育成の牙城を

<sup>277</sup> 佐藤真美「水泳部の思い出」。

<sup>278</sup> 「大商は三着」『満日』1924年8月26日。

<sup>279</sup> 「水泳大会成績」『満日』1924年9月2日；朝日新聞社編『運動年鑑』大正十四年度、391-392頁。

<sup>280</sup> 「全満中等学校水泳大会大連商業優勝す」『満日』1925年7月31日；朝日新聞社編『運動年鑑』大正十五年度、276頁。

<sup>281</sup> 「名誉ある満洲代表選手」『満日』1926年8月9日。

切り崩すことができなかつた。大連一中が全滿の覇權を握るのは、宮畑の転任後であつた<sup>282</sup>。宮畑はこう語る。

私は前に「私が教えても勝たない・・・」といったが、実は「私がいたから勝てなかつた」のであつたことに、このとき気がついた。自信があり過ぎて、水泳選手に対し、厳しすぎたのである<sup>283</sup>。

### (3) 滿洲水泳界の衰退

1923年の極東大会日本代表に滿洲の複数の選手が選ばれたことを考えれば、この時点で内地と滿洲の差はそれほど大きくなかつたといえる。1924年に第1回明治神宮競技大会が開かれたときも、100m自由型で柳井巖が4位、800m自由型で坂西巧が4位、200m平泳ぎで北条寿夫が2位、100m背泳ぎで荻清が2位、坂西巧が3位、200mリレーで滿洲チームが2位で、地区別総合2位の活躍を見せた<sup>284</sup>。この大会で活躍した東京高師の宮畑虎彦、明大の小野田一雄はともにパリオリンピックの日本代表だったが、小野田は1925年に滿鉄に、宮畑は1927年に大連一中に奉職することになる。

1925年7月、滿洲体育協会の招聘で早大水泳部が来滿した。8種目で勝敗を争つたが、滿洲勢が首位を占めたのは50m自由型（小野田一雄）、200m平泳ぎ（北条寿夫）、200mリレー（早大と同着）の3種目で、あとは高石勝男ら早大勢が席卷した。それでも総得点は24対18で、なお対抗戦と呼ぶに相応しい試合だった<sup>285</sup>。

1929年8月にやはり滿洲体育協会の招聘で明大水泳部が来滿したときには、内地と滿洲の間には埋めがたい差が生じていた。9種目のうち滿洲勢が明大を抑えたのは50m自由型（宮畑虎彦）のみで、総得点は58対20と一方的な試合だった。アムステルダムオリンピック金メダリスト鶴田義行は20秒ものハンディをつけてのレースだっ

<sup>282</sup> 永山秀雄「黄金時代を築き全滿洲に覇を唱えた輝ける大連一中水泳部」昭久会編『昭久会 会報第43号 喜寿記念誌』昭久会事務所、1994年、178-179頁所収。

<sup>283</sup> 宮畑虎彦「その頃の思い出：西内校長のことなど」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中 創立五十周年記念』56-59頁所収。

<sup>284</sup> 地区別の順位は公式に出されるものではなく、滿洲側の認識である（「神宮競技に於る滿洲選手の成績」『満日』1924年11月11日）。

<sup>285</sup> 「二百米ブレストを除く外全部滿洲記録を破る」『満日』1925年7月18日。



たが、1着で悠々とゴールした<sup>286</sup>（鶴田は1932年春に満鉄に入社する）。『満蒙年鑑』はこの試合について、「実力相違のため対抗出来ず、終始明大選手の模範競泳の感があつた」とコメントしている<sup>287</sup>。明大の村松正一主将は、「満洲が予想外に強いのに驚きました、私達室内プールを多数に持つ東京の連中は殆んど一年中水に親しんでゐますがそれに対し僅か三ヶ月の短期間しか水に入れない満洲の人があられだけに戦えたのは全く粒の良さを物語るものであつて、もし満洲に室内プールが出来一年中水に親しめる様になつたならば現在の満洲の野球、陸上の様に日本で一番恐ろしいチームとして皆から注視されると思ひます」と満洲チームを持ち上げた<sup>288</sup>。村松のいうように、練習期間の短さは満洲水泳界の不振の最大の原因であつた。保健浴場の建設によって、このハンディキャップは克服されるはずだったが、不幸なことにさまざまな理由で保健浴場の経営が行き詰まり、その室内プールを活用することができなかった（第16話参照）。

1927年に岡部平太は満洲水泳界について、「満洲の水泳は一時非常に発達し内地のレベルに接近して来つたがプールの完備したものがなかつたために茲二三年と云ふものは漸次低下し」と現状を分析したうえで、「宮畑〔虎彦〕教諭の来任もありオリンピックに出場した小野田一雄氏奉天の斎藤兼吉氏等指導者も揃つたから今後の満洲水泳界の発達は目覚しいものがあらう」とその将来に期待を寄せた<sup>289</sup>。

1926年から1929年に満洲各地でプールが建設された（第15話参照）。それにともない、1927年以降、奉天、大連、鞍山、旅順などで市民水泳大会が開催されるようになった<sup>290</sup>。1931年に満鉄が実施した男性社員18864人、女性社員887人に対する運動調査では、現在水泳をしていると答えたのが男性5840人（31.0%）、女性101人（11.4%）、過去に水泳をしたことがあると答えたのが男性12241人（64.9%）、女性478人（53.9%）だった<sup>291</sup>。10年前の運動調査で水泳と答えた割合が12.9%だったことを考えると、水泳

<sup>286</sup>「全競技種目に満洲新記録」『満日』1929年8月16日；「五十九対二十で明大鮮かに勝つ」『大連新聞』1929年8月16日。明大の得点は『満日』が58点、『大連新聞』が59点とする。

<sup>287</sup>『満蒙年鑑』昭和六年版、554頁。

<sup>288</sup>「将来を期待」『満日』1929年8月16日。

<sup>289</sup>「東洋一と称せられる譚家屯のプール」『満日』1927年7月6日。

<sup>290</sup>奉天では1927年7月3日、大連では1927年8月21日、鞍山では1928年8月12日、旅順では1929年8月4日に開かれた。

<sup>291</sup>「興味ある満鉄の運動調査」『大連新聞』1931年7月14日。

の普及は目覚ましいものがある。しかも10年前、水泳を実践する人の割合は最も普及していたテニスの3分の1程度しかなかったのに対し、今回の調査ではテニスを上回り、男子社員では釣魚、遠足に次ぐ人気となっている<sup>292</sup>。ただ、水泳人口の増加は、記録の向上に結びつかなかった。1931年の調査で、競泳をしていると答えたのは男性169人、女性1人にすぎなかった。これはゴルフ（191人）とラグビー（124人）と同水準で非常に少ないといってよい。

1928年のある座談会で岡部は宮畑に「満洲の水泳が発達しないのはどうしたわけなんだ」と尋ねなければならなかった。これに対して宮畑は「僕が思ふには結局水泳選手の練習が足りないからなんでせう」と答えている<sup>293</sup>。1929年の年頭に太郎冠者なる人物も、満洲水泳界が「東洋一の大連水泳場も完備し、奉天等にも之に劣らないプールを有し、その上斎藤、小野田、宮畑等の名コーチを有する」にもかかわらず不振に喘いでいるのは、「一に学生達が真面目に練習しないのによる」と述べている<sup>294</sup>。宮畑自身も練習の質の問題ととらえていた。1931年に宮畑は「一年中泳いだとてさう成績のあがるものではない、スケートを見るが、冬の間だけで毎年目覚むるばかり進歩しつゝあるではないか」と記している<sup>295</sup>。たしかにスケートのシーズンは短い、満洲のシーズンは内地より長く、練習期間という点で有利だった。これを裏返せば、満洲の水泳は練習期間という点で不利だったということになる。

荻清は満洲水泳界の沈滞を打破するため満鉄運動会競泳部の設置を提唱した<sup>296</sup>。満鉄運動会には水泳部があったが、同部は水泳の普及に重点を置いていた。1931年4月に満鉄運動会大連支部幹事が発表されるが、そこに競泳部が新設されたことが確認できる。幹事は荻と高橋俊夫だった<sup>297</sup>。

表14-1は全日本選手権と全満選手権の4つの種目の優勝タイムを比較したものである。一見してわかるように、1925年を境に全日本選手権記録と全満選手権記録の差が

<sup>292</sup> 岡部生「社員の運動趣味」『読書会雑誌』9巻1号、1922年1月。

<sup>293</sup> 「満日スポーツ座談会（六）」『満日』1928年3月8日。

<sup>294</sup> 太郎冠者「昭和四年の運動界を迎へて」『満日』1929年1月2日。

<sup>295</sup> 宮畑虎彦「興味と刺戟与へねば駄目、満洲水泳界に望む」『大連新聞』1931年1月1日。

<sup>296</sup> 荻清「満洲水泳界の不振を見て満鉄競泳部の新設を思ふ」『協和』30号、1930年7月15日。

<sup>297</sup> 「満鉄運動会大連支部幹事」『満日』1931年4月14日。

拡大する。その後、それぞれの記録は向上するものの、差は縮まらなかった。もっとも、以上は男子の話で、女子の水泳はやや異なる経緯をたどった。

表 14-1 日満水泳記録

大会	種目	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930	1931
全日本	100m	1分9秒4	1分5秒2	1分9秒	1分3秒8	1分6秒8	1分6秒4	1分7秒	1分1秒8	1分0秒6	59秒2
	400m	6分7秒2	5分37秒4	5分53秒4	5分12秒4	5分20秒4	5分17秒6	5分27秒2	5分9秒6	4分56秒6	4分56秒4
	1500m	25分34秒4	23分27秒		22分47秒6	22分13秒4	21分47秒	22分42秒6	20分54秒	19分35秒2	20分2秒
	200m平	3分23秒4	3分10秒1	3分23秒4	3分12秒8	3分2秒	3分1秒	2分58秒6	2分57秒	2分55秒6	2分54秒
全満	100m	1分10秒8	未開催	1分9秒8	1分14秒5	1分13秒	1分10秒6	1分11秒2	1分7秒8	1分5秒6	1分0秒6
	400m	6分15秒4		6分18秒	6分2秒	6分25秒6	6分24秒7	6分7秒4	5分39秒8	5分52秒2	5分44秒6
	1500m	25分36秒2				26分27秒6	26分30秒6	25分	24分14秒7	23分18秒6	23分22秒6
	200m平	3分37秒8		3分16秒8	3分17秒2	3分16秒6	3分20秒3	3分20秒6	3分17秒9	3分14秒4	3分12秒2

#### (4) 女子競泳界の活躍

1922年8月の第1回全満水上選手権で女子選手は内地の記録を上回る好成績を出したにもかかわらず、その後発表された満洲代表のリストには、女子選手は含まれていなかった。全満競技連合は女子スポーツを奨励していたのに、これはどうしたことか。学校当局が輿論の動向を見きわめようと慎重な姿勢を崩さなかったからである。翌年3月になっても未定のままだったが、岡部平太の強い働きかけで、飯村と杉江を派遣することが決まった<sup>298</sup>。

極東大会で女子競技（テニス、バレーボール、水泳）が採用されるのは今回が初めてのこと、正式競技ではなくオープン競技という位置づけであった。水泳は日本選手のみで実施されるため、予選はなかった。飯村と杉江は岡部の引率で、5月13日に大阪へ向かった<sup>299</sup>。飯村は50mを38秒6、200mを3分37秒6で制し、杉江は100m平泳ぎで2位に入った。極東の女子水泳界に満洲の存在を知らしめた2人は、両高女の多数の職員生徒の歓迎を受けた。翌日、神明高女で開かれた杉江の歓迎会で、杉江は「満洲の選手といふので観衆は杉江、飯村両嬢を支那人と思ひ支那人にしてはよく日本人化したものだと言つたそうであるが斯うも満洲を理解せぬ国民の多いことは残

<sup>298</sup> 岡部平太「コーチとして始めて甜めた苦い経験」『体育と競技』2巻8号、1923年；「輿論が恐ろしさに満洲から極東大会へ婦人選手を出し度いは山々だが肚が決らぬ」『満日』1923年3月10日。

<sup>299</sup> 「必勝を期して」『大連新聞』1923年5月18日。

念だ」と語っている<sup>300</sup>。当時の日本人の満洲認識がうかがえる逸話である。だからこそ、満洲チームが内地に遠征するさいには、「満蒙宣伝」のためということがよく言われたのである<sup>301</sup>。

1925年のシーズンを最後に、飯村敏子は水泳界から引退し、テニスに専念することになる<sup>302</sup>。敏子は翌年春に弥生高女を卒業、同校の体操科助手に就任した<sup>303</sup>。敏子に代わって満洲女子水泳界を席卷したのが、妹の昌子であった。1925年8月23日に天の川プールで開かれた全満選手権の200m平泳ぎで、若干13歳の飯村昌子は3分54秒6をマークし、杉江正子が持つ日本記録を塗り替えた<sup>304</sup>。昌子はその秋に明治神宮競技大会に出場、200m平泳ぎで3位に入賞した。優勝したのは布施花子、タイムは3分46秒6だった<sup>305</sup>。1926年夏、昌子は全日本選手権に出場、200m平泳ぎに3分39秒4の日本新記録で優勝し、前年の雪辱を果たした<sup>306</sup>。昌子は翌年7月に記録を3分24秒8に縮め、全日本選手権を連覇、9月に3分23秒4の日本新記録を出した。昌子がこの大記録を出したのは、京都武徳会との対抗戦だった。京都武徳会水泳部は内地最強の水泳チームで、監督と選手5人が来満した。内地から初の女子チームの遠征であった。先述の通り、昌子が大記録を打ち立てたものの、試合そのものは29対6で京都軍の大勝に終わった<sup>307</sup>。

飯村姉妹は1928年に内地に去ることになる。「前大連市立高女の校長だつた土田先生のおいでになる文華高女に這入り機を見て私はポプラ倶楽部に入れて頂いて好きなテニスに精進する積りです、妹は今年アムステルダムで催されるオリムピック大会に水泳の方で出場出来ることに内定してをりますので、それを楽しみに致してゐます」

<sup>300</sup>「秩父宮に賞められて光榮に泣いた二選手帰る」『大連新聞』1923年6月3日；「けふ燦たる輝き載せて水の勇者凱旋す」『満日』1923年6月3日；「凱旋選手歓迎」『満日』1923年6月6日。

<sup>301</sup>「大連籠球団が極東競技大会予選会に」『大連新聞』1923年4月7日；「極東大会から一行今日凱旋す」『大連新聞』1923年6月7日など。

<sup>302</sup>「得意の水泳を思切つた飯村嬢」『満日』1926年10月10日。

<sup>303</sup>「黎明期に入った大連の女子競技」『満日』1926年4月8日。

<sup>304</sup>「二百米突平泳決勝で日本記録を破る」『満日』1925年8月24日。

<sup>305</sup>内務省衛生局編『第二回明治神宮競技大会報告書』内務省衛生局、1925年、208頁。

<sup>306</sup>「満洲代表飯村嬢日本記録を破る」『満日』1926年8月17日。

<sup>307</sup>「めざましい女子選手の活躍」『大連新聞』1927年7月18日；「飯村昌子嬢日本記録を作る」『満日』1927年8月1日；「二十九対六で京都軍大に勝つ」『満日』1927年9月5日。

と語っている<sup>308</sup>。敏子の言葉にあるように、昌子はオリンピックへの出場が期待されていたが、アムステルダムオリンピックに女子水泳選手は派遣されなかった。翌年、ハワイで開催される全米女子水上競技選手権大会の出場選手を选考する予選会が開かれ、昌子は200m平泳ぎでまさかの敗北を喫した。その相手は和歌山橋本小学校の前畑秀子、記録は3分21秒4だった。昌子は「足も手も昨年とは全く異つて悪くなつてゐる、あれでは今後これ以上の上達は不可能である」と酷評された<sup>309</sup>。しかし、昌子も派遣選手に選ばれ、前畑とともにハワイで活躍した。その後も昌子はいよいよ前畑を越えることができなかった。1932年春に心臓の病気を患い、同年12月に亡くなった。享年21歳<sup>310</sup>。

飯村姉妹が世話になった前校長土田忠二は、弥生高女の初代校長（任期は1919年から1927年まで）、スポーツに理解があり、テニスのデ杯選手太田芳郎を教員として招聘したりした<sup>311</sup>。土田の辞任後、弥生高女では土田の直系といわれる体操教師苗村茂の一派と、新校長一派とのあいだで確執が生じ、苗村の辞任という形で決着した。東京高師で岡部の同期だった苗村は、満洲体育協会理事として満洲女子スポーツ界を牽引する存在だった<sup>312</sup>。

一方、これまで水泳で弥生高女に圧倒されてきた神明高女は、1928年7月に校内プールが完成、9月にアムステルダムオリンピック水泳代表を迎えてプール開きを挙行、俄然スポーツ熱が高まった。1927年に片岡語咲、1929年に葛巻行徳が赴任し、両教諭の指導で水泳部はまたたく間に力をつけた。1929年9月の全満選手権でついに弥生高女を抑えて全満の覇権を握った神明高女は、全国女子中学校水泳選手権と明治神宮体育大会に出場すべく、内地へ向かった。遠征メンバーは、200mリレーを満洲新記録で制した三村忍子、越智美智子、吉井正子、島田光子の4名に杉山春那子と羽衣高女の下村久子を加えた6名、監督は片岡教諭だった。大阪に到着してすぐに参加した女子中

<sup>308</sup>「満洲の運動界と別れる飯村姉妹」『満日』1928年1月22日；「飯村嬢満洲を去る」『東京朝日新聞』1928年3月11日。

<sup>309</sup>西本竜三「全米女子水泳日本予選評」『読売新聞』1929年7月1日。

<sup>310</sup>「哀惜される故飯村昌子さん」『満日』1932年2月14日。

<sup>311</sup>「男子の運動熱に連れて女子の運動も盛になる」『満日』1925年1月17日。

<sup>312</sup>「苗村教諭の辞任内定で澄田校長排斥運動」『大連新聞』1928年4月29日；「暗闘の禍根を断つた市立高女」『大連新聞』1928年6月17日；「苗村氏送別会」『満日』1928年7月3日。

学校選手権では、神明高女の4名が200mリレーで優勝候補の市岡高女を大きく引き離して優勝した。明治神宮大会では、島田の代わりに下村を入れたメンバーで臨み、武徳会について2位の成績を収めた<sup>313</sup>。

1930年に新たに神明高女校長となった村井栄蔵は、体育衛生には関心があったようだが<sup>314</sup>、競技スポーツにはあまり積極的ではなかった。1932年春に村井校長はとつぜん「今後校外競技には一切出場しない」と声明し、満洲スポーツ界に衝撃をもたらすことになる<sup>315</sup>。

## 第15話 海水浴場とプール

### (1) 海水浴場

「こゝは輝く星ヶ浦、泳げうしほの波の上<sup>316</sup>」——海浜聚落の歌

大連市内から汽車で北へ向かうこと50分、夏家河子駅前に広がる砂浜と遠浅の海。1908年、満鉄はここ夏家河子に休憩所、脱衣所、売店などを設置し、満洲で最初の海水浴場を開設した<sup>317</sup>。さっそく、満鉄社員を会員、満鉄理事国沢新兵衛を会長とする水泳俱樂部が組織されると、会員はたちまち800名を数えた<sup>318</sup>。夏家河子ほど広くないが、大連市の南に横たわる南山の裏側にある老虎灘も、大連っ子に人気の海水浴場だった。しかし、いずれも市内から遠かったために、近場の海水浴場を求める声が高まった<sup>319</sup>。

1910年、南満洲教育会が小学生のために大連港の東にある寺児溝に脱衣所、休憩所

<sup>313</sup>「明治神宮大会派遣の女流水泳選手決る」『満日』1929年9月11日；「女子水泳選手元気で帰る」『満日』1929年10月6日；中山（杉山）春那子、佐々木（島田）光子「神明高女水泳部」満洲美会編『合歓の花：大連神明高等女学校創立70周年記念誌』満洲美会、1984年、128-129頁所収；中山春那子「日本一になった神明高女の水泳部」大連神明高等女学校同窓会満洲美会編『大連神明高等女学校創立八十周年記念誌』大連神明高等女学校同窓会満洲美会、1994年、119頁所収。

<sup>314</sup>「満洲の女性へ」『満日』1931年7月30日。

<sup>315</sup>「伝統を誇る神明高女の競技不参加問題に就いて」『大連新聞』1932年5月19日。

<sup>316</sup>「沿線児童の聚落」『大連新聞』1929年7月17日。

<sup>317</sup>「満鉄と海水浴場」『満日』1908年7月9日；「夏家河子の海水浴場」『満日』1908年7月15-17日；「夏家河子海水浴場成る」『満日』1908年7月29日。

<sup>318</sup>「水泳俱樂部発会式光景」『満日』1908年8月4日。

<sup>319</sup>海男児投「水泳場の設置」『満日』1910年7月16日。

を設けると、大連市内はもちろん、公主嶺、長春、撫順など沿線の各小学校の児童が集まり、海水浴を楽しんだ。その数は大連市内の男子児童 332 名、女子児童 127 名、沿線の男子児童 110 名、女子児童 40 名、合計 600 名以上であった<sup>320</sup>。満洲の夏の風物詩となる小学生の集団水泳の始まりである。

1911 年には場所を星ヶ浦に移し、1200～1300 名の小学生が水泳を楽しんだ。監督の教師を 2 名から 6 名に増やしたものの、全体に目が届くはずもない<sup>321</sup>。また寺児溝も星ヶ浦も牡蠣貝が多く、怪我をするものが続出した。そこで 1913 年には新設の満鉄運動会水泳部が浜町海岸に沈床を設置した。同部幹事の村田懿磨によれば、沈床とは「下と周囲を簀で囲ひ上手摺をつけて浮かしたもので、今でいふプール」であった。沈床の製作には千数百円かかり、村田らは「どえらいものをこしらへた」と随分怒られた。しかし、多くの小学生が利用し好評を博したことから、やがて重役たちも率先して便宜を図るようになったという。7 月 4 日から 8 月 24 日までの間にこの新しい水泳場を利用した人はのべ 10 万人を越えた。1 日平均 2000 人である<sup>322</sup>。いくら沈床が 200 人くらい乗ってもグラつかないといっても、これではあまりに多すぎる。

1914 年には人を分散させる措置が取られた。大連の 3 つの小学校のうち、第三小学校は老虎灘で、沿線から来る約 1000 名の児童は寺児溝で水泳をすることになった<sup>323</sup>。浜町の満鉄水泳場は料金を徴収することになった。1 シーズンで社員は 30 銭、見習と練習生は半額、社外は 1 円であった<sup>324</sup>。この措置は、人を減らすためというよりは、経費の補填が主たる目的だった。翌年は社員無料、社外 50 銭となったが、1916 年には社員 30 銭、社外 1 円に戻った<sup>325</sup>。

ところで、沿線児童の集団水泳とはどのようなものだったのか。1916 年の記録をも

<sup>320</sup>「遊泳場設置」『満日』1910 年 7 月 28 日；「児童の水泳場」『満日』1910 年 8 月 2 日；「生徒の水泳」『満日』1910 年 8 月 3 日；「水泳会閉会式」『満日』1910 年 8 月 14 日。

<sup>321</sup>「沿線生徒と水泳」『満日』1911 年 6 月 17 日；「小学校の水泳」『満日』1911 年 7 月 12 日；「連合水泳会」『満日』1911 年 7 月 28 日；「星ヶ浦の水泳会」『満日』1910 年 8 月 2 日。

<sup>322</sup>「今夏の海水浴場」『満日』1913 年 7 月 2 日；「昔はこれでも⑦」『満日』1936 年 7 月 21 日。

<sup>323</sup>「水泳場は浜町」『満日』1914 年 6 月 19 日；「沿線児童の水泳」『満日』1914 年 7 月 1 日；「老虎灘の水泳」『満日』1914 年 7 月 11 日。

<sup>324</sup>「満鉄水泳場」『満日』1914 年 6 月 29 日。

<sup>325</sup>「游泳季節来る」『満日』1915 年 6 月 7 日；「満鉄水泳部」『満日』1916 年 6 月 13 日。満鉄は沈床の設置に 1 年で 2000～4000 円を支出していた。

とに紹介しよう<sup>326</sup>。児童たちは数百キロの汽車の旅を終えて寺見溝の宿舎（検疫所）にやってくる。ある新聞記事が「小学児童が五百哩も出掛けて水泳をするといふのは如何にも大陸的<sup>327</sup>」と描写するように、それは海国日本では考えられない光景であった。もちろん、泳ぐのが初めて、海を見るのが初めてという児童も多い。この年は全部で600名、うち女生徒は200名であった。午前7時に起床し、ごはんと沢庵とみそ汁の朝ご飯を食べて、天気良ければ午前と午後に水泳をする。この時期に多い雨の日には自習をしたり、家族に手紙を書いたりして過ごす。3年前まではこっそりとお小遣いを持ってきて、氷水やらサイダーやらを購入して下痢になるような児童もいたが、嚴重に注意するようになったので2年前からはそのような児童はいなくなった。同じく2年前から父兄の付き添いもできなくなった。夕食のメインはチラシ寿司、魚の煮つけ、さつま汁、刺身などで、なかなか豪華である。食後は午後8時半の消灯まで自由に過ごす。こうした生活が2週間続き、初心者もたいていは泳げるようになる。水泳のほか、大連の見学などもあって、参加した児童にはよい思い出となった。集団水泳の経費は、大連での滞在費が1人1日23銭だったが、うち5銭は満鉄から補助が出た。また交通費は学校側が負担したから、参加に要する費用は3円程度、応募者が殺到したのも無理はない。

1917年には検疫所が使用できず、星ヶ浦にバラックを建てて宿舎とし<sup>328</sup>、翌年以降は星ヶ浦温泉ホテルを利用したが、それでも滞在費の負担は4円ほどだった<sup>329</sup>。この事業のため満鉄は1200名の児童に対して1万2000円を投じた。「臨海教育」と改称された1921年には、定員1500名、満鉄側経費は8000円であった<sup>330</sup>（1923年に「海浜聚落」と改称される<sup>331</sup>）。なお、身体が虚弱な生徒に対して満鉄は1918年より熊岳城で温泉聚落を実施していたが、こちらは定員が前後期あわせて240名であった<sup>332</sup>。

<sup>326</sup>「水泳児童生活」『満日』1916年7月12-14日。

<sup>327</sup>「沿線児童の水泳」『満日』1914年7月1日。

<sup>328</sup>「沿線児童水泳」『満日』1917年7月11日。

<sup>329</sup>「沿線学堂游泳」『満日』1918年7月16日。

<sup>330</sup>「沿線小学児童に臨海教育を」『大連新聞』1921年6月16日；「海水浴で小国民の身体を鍛錬せしめる星ヶ浦」『満日』1921年6月21日。

<sup>331</sup>「温泉海浜聚落」『満日』1923年2月28日。

<sup>332</sup>「温泉学校の決定」『遼東新報』1918年7月5日；南満洲鉄道株式会社編『南満洲鉄道株式会社



満鉄運動会の水泳部は水滑部とともに、広く社員以外の人々に門戸を開いた点で他の部と異なっていた。非社員であっても、会費を払えば、シーズンの間、会員になることができた。1917年の会員900名のうち、非社員は400名を占めていた<sup>333</sup>。会員数は時代が下るにつれて増加し、1921年に6000名<sup>334</sup>、1923年には8000名に達した<sup>335</sup>。その大部分は日本人であったと考えられる。当時の大連市の日本人人口は7万人だから、この数字がいかに大きいものかわかる。会員の多数を占めたのは学校生徒だったが、その割合を示すデータはない。男女比は1923年のデータから知ることができる。同年の6月下旬時点での会員数4000名のうち、1000名が女性だった<sup>336</sup>。

満鉄運動会水泳部が運営する浜町水泳場の利用者は、1921年で1日平均2500名と大いに繁昌していた<sup>337</sup>。しかしながら、大連港に位置するこの水泳場は、コレラや汚水などかねて衛生面で問題を抱えており、1923年を以て廃されることになった<sup>338</sup>。満鉄は浜町に代わる水泳場を黒石礁に造成し、1924年から会員に開放した。部費は1シーズン男子1円、婦女・学生・子供が50銭であった<sup>339</sup>。黒石礁はその名の通り岩がちの浜であったが、岩をダイナマイトで爆破し、砂を入れ、栈橋をかけるなどして整備され、大連屈指の海水浴場となった。市電終点の黒石礁駅から徒歩10分ほどの所にあり、入場には料金が必要だったが、1930年に無料で開放された。小野田一雄、和田次衛、寺島富一郎、島一郎など、錚々たる面々が水泳術を教えてくれるのも黒石礁の魅力であった<sup>340</sup>。

第二次十年史』下巻、原書房、1974年、1229頁。

<sup>333</sup>「浜町の水泳近し」『満日』1918年6月27日。

<sup>334</sup>「けふ開場 浜町海水浴場」『満日』1921年7月1日。

<sup>335</sup>「黒石礁に満鉄水泳場が移転」『満日』1924年1月22日。

<sup>336</sup>「五千人の会員で黒石礁に水泳場」『満日』1923年6月21日。タイトルに「五千人」とあるのは、7月1日の開場までに会員は5000人に達すると予測しているからで、実際に開場のさいには5000人に達している（「水花散る浜町水泳場」『満日』1923年7月2日）。その後さらに会員は増え、前注の記事に見えるように8000人に達した。

<sup>337</sup>「愈々開けた河童の世界」『満日』1922年7月2日。

<sup>338</sup>「水泳場衛生取締」『遼東新報』1918年7月11日；「五千人の会員で黒石礁に水泳場」『満日』1923年6月21日；「衛生上閉却し難い大連近海の海水調査」『大連新聞』1927年7月27日；「きたない、あぶない海水に浮く大腸菌」『大連新聞』1927年8月7日；「大連港内は非常に糞尿で濁つてゐる」『満日』1927年8月7日。

<sup>339</sup>「七月一日から満鉄の新水泳場」『満日』1924年6月22日。

<sup>340</sup>「関東州内海水浴場めぐり（二）」『満日』1928年6月23日；「海水浴場巡り（E）」『満日』1930年7月2日。

環境は抜群であったが遠いということで敬遠された夏家河子海水浴場も、1921年から頓に海水浴客が増えた。1922年6～8月の夏家河子駅の一般乗降客数は25592名、これに満鉄社員を加えると十数万人となることから、夏家河子海水浴場の1日平均利用者数は1000名を超えたと推測される<sup>341</sup>。満鉄は夏家河子沿岸の7000坪を海水浴場として整備してきたが、1923年にはその左右1万5000坪の土地を関東庁から借り受けて海水浴場を拡張<sup>342</sup>、1924年には宿泊機能をそなえた水明館を建設した<sup>343</sup>。1920年代には大連から夏家河子までの所要時間は30分に短縮されており、盛夏には1日10往復の臨時列車が運行された。海水浴客の汽車賃は割引され、往復で30銭しかかからなかった<sup>344</sup>。小中学児童の海浜聚落も従来の星ヶ浦、老虎灘に加えて、夏家河子で開催されるようになり、1924年にはこの3つの海水浴場で2000人以上の小中学生が水泳を楽しんだ<sup>345</sup>。

1929年8月に大連湾でコレラ騒ぎが起きたときなどは、夏家河子に2万人が押し寄せ、さすがの夏家河子も人で埋めつくされた<sup>346</sup>。1931年、夏家河子はシーズン全体で約20万7000人の海水浴客を迎えた。うち20万人が日本人（うち子供は13万人）で、中国人が5600人、欧米人が1350人であった<sup>347</sup>。

大連で最も人気のある海水浴場といえば、星ヶ浦であろう。大連市の南、大連富士の南麓、馬欄河河口の西に広がる海岸に満鉄が開発した一大リゾート地で、海水浴場、公園、ゴルフ場が整備され、ヤマトホテル、温泉ホテルなどの宿泊施設、星の家などの料亭、貸別荘が点在していた。1911年には市電が通じ、市内からのアクセスも良くなった。「プロレタリアの海水浴場<sup>348</sup>」夏家河子とは対照的に、「なだらかな緑のスロープに点見する赤、青の屋根、白堊の文化住宅、綺麗に刈り揃へた芝生」が広がる光景は、「植民地的気分に横溢した」とも形容され、別荘に滞在する外国人観光客の存在もエキゾ

<sup>341</sup> 1921年夏の乗降客数は7175人だったので大幅な増加だった（「今年の三倍に増加」『満日』1922年9月10日）。

<sup>342</sup> 「慌しく忍び寄る夏は遠浅の水明郷」『満日』1923年4月21日

<sup>343</sup> 「満鉄経営の夏家河子水明館」『満日』1924年7月25日。

<sup>344</sup> 「関東州内海水浴場めぐり（六）」『満日』1928年6月27日。

<sup>345</sup> 「海浜聚落終る」『大連新聞』1924年8月9日。

<sup>346</sup> 「「コレラ来」の声に淋しい海水浴場」『大連新聞』8月12日。

<sup>347</sup> 「夏家河子海水浴場の決算」『大連新聞』1931年1929年9月9日。

<sup>348</sup> 「天恵の夏家河子海水浴場設備」『大連新聞』1922年9月3日。

チックな雰囲気添えた。夏の休日ともなれば、星ヶ浦に2万人もの海水浴客が押しよせた。海水浴場は霞半島の東西で分かたれ、西側の海岸がまず発展したが、1920年代後半には貝殻や小石の少ない東側の海岸の開発も進んだ<sup>349</sup>。霞半島にはしばしば絵葉書などで取り上げられる後藤新平の銅像があった。朝倉文夫作のこの銅像は1930年11月3日に建てられた。

星ヶ浦という地名は、星ヶ浦海水浴場の西にある黒石礁の地名にまつわる伝説から満鉄の技術者木戸忠太郎（木戸孝允の養子）が名付けたものである。悪臭のひどい馬欄河も「天の川」という宇宙にちなんだ名前がつけられた<sup>350</sup>。ところで、「夏家河子（かかかし）」という地名は日本人には発音しにくく、1924年に『満日』が新しい名称を募集したことがあった。1万3000通の応募があり、静浦、白浜、月光里などが候補に選ばれたが、夏家河子に取って代わることができなかった<sup>351</sup>。

夏家河子は遠い、星ヶ浦は人が多い、老虎灘は狭いとして、1929年に満日社は傅家庄真砂浜に特設の海水浴場を開設した。ここは大連には珍しい白い砂浜と澄み切った美しい水に恵まれていたが、アクセスに難があった。満日社は桃源台停留所から馬車道を整備した。入場には、『満日』紙に掲載された「満日読者券」を提示する必要があった。これによって、「不潔なる人間の入場を防止するから一般に開放されてゐる海水浴場の如く時に不快なる臭気に接する事なく、真に同胞の親しい海水浴場として終日家族的に楽しむ事が出来る」と『満日』は述べており、日本人だけの海水浴場として開かれたことがわかる<sup>352</sup>。

<sup>349</sup>「海水浴場巡り (A)」『満日』1930年6月27日；「海水浴場巡り (B)」『満日』1930年6月28日。

<sup>350</sup>木戸忠太郎『集』達磨堂、1928年、107-115頁。

<sup>351</sup>「夏家河子に代る名の入選者発表」『満日』1924年7月11日；「語調の悪い夏家河子の名称を呼び易く改める」『満日』1927年8月7日；瓦房店ST生「夏家河子の改名について」『満日』1927年8月11日；「安楽椅子」『満日』1934年7月30日。

<sup>352</sup>「傅家庄真砂浦に満日海水浴場特設」『満日』1929年6月18日；「傅家庄海浜海水浴場開き」『大連新聞』1923年7月8日。なお、大連市史編集委員会編『続大連市史』大連会、2009年、249-250頁にも大連の各海水浴場の簡単な紹介がある。満鉄若葉会水泳部で活躍した佐藤真美は、天の川プールが実際には50mではなく45mだったと述べている（佐藤真美「水泳部の思い出」）。

(2) プール

1922年、大連西郊の沙河口第二発電所（天の川発電所）が建設された。その冷却池に目をつけたのが、いまだ設立の過程にあった全満競技連合の関係者で、スタート台などを整備して、50m プールに仕立て上げた。大連で最初の淡水プールである<sup>353</sup>。天の川プールの誕生によって、大連ではようやく本格的な水泳競技を開くことができるようになった。第14話で見た飯村敏子、杉江正子の活躍も「天の川貯水池のプールがあつたればこそ」であった、とは岡部平太の言である<sup>354</sup>。

飯村と杉江が極東大会から戻ってきた直後に、天の川プールは満鉄運動会の管轄となった。天の川発電所の負荷が増して冷却池の水温が上昇し、冷却装置を備える必要が生じたが、全満競技連合には資金がなかったためである<sup>355</sup>。天の川プールは大連運動場プールが完成する1927年まで、満洲競泳界の拠点として使用されたが、一部にごく弱い流れがあり、正確なタイムがとれないという欠点を持っていた<sup>356</sup>。

冷却池の利用は大連が最初ではなかった。鞍山では1921年に40万円を投じて製鉄所の冷却池5000坪を水泳場として整備し、一般に開放していた。この広大なプールには奉天など近隣からも学生が泳ぎに来ていた。視察に訪れた岡部平太は、脱衣場などの設備が不足し、交通の便が悪いという点を除けば、「理想的の水泳プール」だと高く評価した<sup>357</sup>。安東の六道溝にある満鉄発電所の冷却池もプールとして使われていた。もともと日本人だけが使用していたが、1922年夏に会費1元（満鉄社員は5角）で中国人にも公開されることになった<sup>358</sup>。

慢性的な水不足に悩む長春でも、1924年に満鉄発電所の貯水池を利用してプールがつくられた<sup>359</sup>。その翌年、プールを無料で開放したところ、入場者の半数以上が苦力や

<sup>353</sup>「天の川冷却池を利用し一般の水泳を盛んにしたい」『大連新聞』1922年7月12日。

<sup>354</sup>「必勝を期して」『大連新聞』1923年5月18日。

<sup>355</sup>「満鉄運動会が天の川水泳場を引取つて理想的に施設をなす」『満日』1923年6月30日。

<sup>356</sup>「百余の河童が鮮かな手並を見せて」『大連新聞』1924年8月25日；岡部平太「コーチとして始めて甜めた苦い経験」『体育と競技』2巻8号、1923年8月。

<sup>357</sup>「満洲第一の水泳場」『満日』1921年7月14日；「奉中水泳練習」『満日』1923年7月21日；「てらを生」『鞍山水泳場に就て』『読書会雑誌』10巻8号、1923年7月、13-14頁。

<sup>358</sup>「游泳場籌備公開」『泰東日報』1922年7月2日；「游泳場規定会費」『泰東日報』1922年7月16日。

<sup>359</sup>「計画中の三公園と水泳場」『満日』1924年2月19日。

ロシアからの避難民であった。これらの人々がプールを風呂代わりに利用したため、1カ月も経たないうちに会員制に改め、プールの周囲に垣を巡らして、1期50銭、1回10銭を徴取することになった<sup>360</sup>。1926年に新設された鉄嶺のプールも煉瓦の壁を周囲に巡らせたが、それはやはり不潔な中国人がプールに入ったり、洗濯をしたりして水が汚れないようにし、また盗難を防ぐためであった<sup>361</sup>。これらの事例は、プールを利用したのがほとんど日本人だったことを物語っている。中国人とのトラブルは随所で見られた。遼陽では苦力がプールに落ちて溺死し、遺族が弔祭料と慰謝料を求めて遺体の引き取りを拒否した(「函頼」と呼ばれる中国の伝統的な抗議のやり方である<sup>362</sup>)。満鉄は遺族に500円を払って遺体を引き取ってもらい、ようやくプール開きができた<sup>363</sup>。プール開きには若葉会水泳部が招待され、「クロールという新しい泳法」を披露した<sup>364</sup>。

水道水を利用したコンクリート製の最初のプールは奉天で設置された<sup>365</sup>。奉天でプール建設の計画が持ち上がったのは1923年春のことである。満洲医大の久保田晴光らが大人用(長さ50m×幅30m)と子供用(30m×20m)のプール建設を計画、満鉄と交渉したが、予算の都合で採択されなかった。同じころ、市民の側でもプール設置を求める運動がなされていた。そこで、満鉄と市民の案を合わせ2万円の予算でプール設置を満鉄に求めたところ、ようやく承認された<sup>366</sup>。1924年7月、奉天新公園(のちの千代田公園)の水泳プールが竣工、「満洲最初のプールであつたばかりでなく、恐らく日本内地を通じても東京、大阪を除いて淡水プールのトップを切つたもの」だった。記

<sup>360</sup>「長春短話」『満日』1925年6月7日；「苦力連が風呂代りに水泳場の大繁昌」『満日』1925年6月20日；「長春の水泳プール」『満日』1925年6月24日；「水泳プール愈々完成」『満日』1925年6月26日。

<sup>361</sup>「水泳プール設置場所決定」『満日』1926年6月20日。

<sup>362</sup>三木聰「伝統中国における函頼の構図：明清時代の福建の事例について」歴史学研究会編『紛争と訴訟の文化史』青木書店、2000年所収；上田信『死体は誰のものか：比較文化史の視点から』ちくま書房、2019年。

<sup>363</sup>「プールで溺死」『満日』1928年6月15日。

<sup>364</sup>佐藤真美「水泳部の思い出」。

<sup>365</sup>それ以前の状況は、福田実『満洲奉天日本人史：動乱の大陸に生きた人々満洲奉天日本人史』謙光社、1976年、136頁を参照。

<sup>366</sup>「新公園に水泳場」『満日』1923年3月10日；「水泳場設置要望」『大連新聞』1923年6月17日；「奉天水泳場設置計画」『満日』1923年6月28日；「来夏には大水泳場が出来る」『満日』1923年11月4日。

念すべきプールというわけだが、長さ 80m、幅 25m という変則的なプールで、100m の競技をするときは、折り返して 20m 地点でゴールしなければならなかった（のち 50m × 25m、30m × 25m、10 × 25m の 3 つのプールに作り替えられる）<sup>367</sup>。初年度の経費はわずか 800 円、会費は満鉄社員 1 円、非社員 1 円 50 銭で、会員は瞬く間に 600 名に達したが<sup>368</sup>、必要経費をまかなうことができなかつたようで、翌年には会費が大人 2 円 50 銭、学生子供 1 円と値上げされている<sup>369</sup>。1926 年の収入を見ると、会費 1700 円、補助金 2 万 500 円となっており、補助金頼みの事業であった<sup>370</sup>。その後、プールの経営は好転し、1930 年代半ばには、毎日平均 3000 人がこのプールを利用し、満鉄経営のプールとしては珍しく毎年黒字を出すようになっていた<sup>371</sup>。

撫順では 1921 年に永安橋に渾河の河水を引いて水泳場をつくった<sup>372</sup>。1926 年に 5000 円を投じてこれを改修し、50m × 120-130m ほどの区画に競泳場、児童遊泳場、一般遊泳場を設けた<sup>373</sup>。依然として渾河の水を利用していたが、衛生上の問題から 1927 年に上水道の水に切り替えた。ところが、一日に何千人と出入りがあるにもかかわらず、上水道不足で水を入れ替えることができず、そのうえ雨水が流入して、プールの水は汚水と化してしまった<sup>374</sup>。水質改善の必要性が何度も指摘されたが実現せず<sup>375</sup>、1929 年に 1 万 6000 円の工費を投じて西公園に新しいプールを設置した。大人用プールは 3000 トンもの水を必要とした。昼間断水がおこなわれるなか、注水作業は遅々として進まず、6 月末にプールが完成してからプール開きまで 1 カ月近くを要した。撫順体育協会会員は無料で利用できたが、それ以外は会費が必要で、満鉄社員は 1 円、非社員は 2 円、

<sup>367</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、757-758 頁。

<sup>368</sup> 「水泳プール」『大連新聞』1924 年 6 月 20 日；「水泳プール規定」『満日』1924 年 7 月 25 日；「街ある記」『大連新聞』1924 年 8 月 9 日。

<sup>369</sup> 「水泳プール開始」『大連新聞』1925 年 5 月 21 日。

<sup>370</sup> 「河童の天下近まる」『大連新聞』1927 年 5 月 31 日。

<sup>371</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、761 頁。

<sup>372</sup> 「撫順渾河畔に水泳場設置」『満日』1921 年 6 月 9 日。

<sup>373</sup> 「恵まれる河童連、盛大にプール開場」『満日』1926 年 7 月 10 日。

<sup>374</sup> 「永安橋のプール」『満日』1927 年 6 月 18 日；「永安橋プール一日開場」『満日』1927 年 7 月 1 日；「非常に賑ふ永安橋プール」『満日』1927 年 7 月 20 日；「水泳プール水に苦む」『満日』1927 年 7 月 30 日。

<sup>375</sup> 「来年度にはプールを改築」『満日』1927 年 9 月 2 日；「プールの不備」『満日』1928 年 7 月 16 日。

軍人学生 50 銭、小学生 20 銭だった<sup>376</sup>。

プールの建設という点で見ると、大連、旅順は満洲の他の都市に比べてかなり遅れていた。大連、旅順とも海に囲まれ、容易に水泳ができたこと、大連では不十分なながらも天の川プールを有していたことが原因だろう。

1926 年、関東庁は始政二十周年記念事業として旅順運動場を建設した。運動場に隣接するプールは長さ 80m で、うち 50m 分が競泳用、30m が児童と女性用とされた<sup>377</sup>。翌年には大連の譚家屯に大連運動場が建設され、競泳用プールが設置された。プールの建設費は 5 万円だった<sup>378</sup>。旅順、大連とも、10m のジャンプ台を備えていた（内地にはこの種の設備が 2 カ所しかなかったという<sup>379</sup>）。旅順では水泳は「奨励時代」であったから料金は徴収されなかった<sup>380</sup>。一方、大連運動場プールはオープン当初 1 期間 1 円を徴収した<sup>381</sup>。翌年は 50 銭に値下げされたが、その翌年には 2 円に値上げされた<sup>382</sup>。値上げの背景は指導員設置のためとされるが、水道代の問題もあったのではないかと大連運動場プールに必要な水の量は 2500 トンで 384 円。プールは水質を保つために 12 日前後で入れ替えが必要で、1928 年は水道代だけで 7200 円を要した<sup>383</sup>。当時の大連市全体の水道使用量は夏の一番多いときで 1 日 2 万 5000 トンだったから、プールは大連の水資源を大いに逼迫させた<sup>384</sup>。

水の問題は「川なく海なく水なく<sup>385</sup>」の長春で深刻だった。長春では 1929 年に 1 万

<sup>376</sup>「プール開き近し」『満日』1929 年 6 月 28 日；「今度の日曜プール開き」『満日』1929 年 7 月 19 日；「子供水泳プール廿一日から開場」『満日』1929 年 7 月 22 日；「プール開き」『満日』1929 年 7 月 29 日。

<sup>377</sup>「新設の旅順プール」『満日』1926 年 7 月 29 日。

<sup>378</sup>「東洋一の水泳プール」『大連新聞』1927 年 7 月 6 日；「東洋一と称せらる譚家屯のプール」『満日』1927 年 7 月 6 日。

<sup>379</sup>「旅順新プール跳込み台附設」『満日』1926 年 9 月 5 日；『満蒙年鑑』昭和三年版、629 頁。

<sup>380</sup>「旅順水泳プール開く」『満日』1929 年 6 月 9 日。

<sup>381</sup>「水泳練習開始」『満日』1927 年 7 月 21 日。

<sup>382</sup>「大連運動場のプール料金値下」『満日』1928 年 6 月 8 日；「水泳プール開く」『満日』1929 年 6 月 9 日。

<sup>383</sup>「安楽椅子」『満日』1929 年 6 月 15 日。

<sup>384</sup>「大連市民が使ふ水、一日約二万五千噸」『満日』1929 年 6 月 20 日。

<sup>385</sup>「苦力連が風呂代りに水泳場の大繁昌」『満日』1925 年 6 月 20 日。

3000円の予算でプールが新設された<sup>386</sup>。初年度の入場者は1日平均100人で、貯水池プール時代（1925年に1日平均480人）に比べて減少した。その主たる理由の一つは水質汚染である。水不足のために2カ月間に1回しか給水できず、水が汚れてしまった<sup>387</sup>。長春は附属地開設以来、水不足に悩まされてきたが、それに追い打ちをかけたのが、1928年の済南事変にともなう軍隊の移駐である。長春には3つの水源池があったが（貯水池プールは第二水源池の上流を堰き止めてつくられた）、フル稼働しても夜間の断水を免れることができなかった。附属地外の水源は、中国側との折衝が難航し、利用できなかった<sup>388</sup>。したがって、プールを新設したものの、早くも2年目の開業が危ぶまれた。プールから約900m離れた井戸より、消防用ホース51本をつないでの注水が試みられた。幸い雨が降ったこともあって、1カ月遅れでプールを開くことができた<sup>389</sup>。満洲のプールは6月中に開場するところが多かったが、6月は雨の少ない時期だったから、水を巡るトラブルは絶えなかった。

最後に、満洲における競泳用プールの設置状況をまとめておこう。表15-1から明らかのように、1920年代の後半にプールが各地で建設された<sup>390</sup>。1931年度には本溪湖でプール建設が予定され、満鉄地方事務所所在地のすべてにプールが備わるはずだった<sup>391</sup>（結局、完成しなかった）

<sup>386</sup>「プール竣工は七月までかゝる」『大連新聞』1929年6月20日。

<sup>387</sup>「プール閉鎖」『満日』1929年9月3日。

<sup>388</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、387-391頁；「給水に悩んで水源池増設」『満日』1930年3月1日；「水源池問題漸く円満に解決」『満日』1931年5月1日。

<sup>389</sup>「プール開き無期延期か」『満日』1930年6月10日；「プール開き来月上旬か」『満日』1930年7月15日；「プール開き廿八九日ごろ」『満日』1930年7月24日；「西公園プール廿七日から開場」『満日』1930年7月26日。

<sup>390</sup>満鉄が各地に設置したプールは、50m×17m、深さは1.2m～3mを標準としていたという（南満洲鉄道株式会社地方部編『地方経営梗概』昭和五年度、南満洲鉄道地方部庶務課、1931年、114頁）。

<sup>391</sup>「奉天の大競技場を初め運動諸施設を完備」『大連新聞』1930年4月10日。本溪湖のプールは結局完成に至らなかったようである。



表 15-1 プール一覧

プール開き	都市	所在地	経費*	サイズ**
1924.7.27	奉天	新公園 (千代田公園)	29,299 円	80 → 50
1925.7.5	撫順	永安橋		130x50
1926.7.28	公主嶺	電灯会社裏貯水池		25x15
1926.7.29	旅順	児玉運動場	22,056 円 (満日 1926.7.30)	50x20, 30x20
1926.7.30	安東	六道溝水源池		50x15
1926.8.14	鉄嶺	警察署下水ポンプ所構内	5,000 円 (満日 1926.8.14)	
1927.7.16	開原	清河寮横	7,000 円	50
1927.7.17	大連	大連運動場	50,000 円 (大連新聞 1927.7.6)	50x20
1927.7.20	鞍山	台町スケートリンク跡	7,000 円 (満日 1927.5.29)	
1927.7.21	遼陽	白塔グラウンド	7,000 円	50x16
1927.7.25	四平街	中央公園	7,000 円 (満日 1927.5.26)	50x16
1929.7.10	大石橋	盤麓街 25 番地		50x25
1929.7.25	撫順	西公園	16,000 円 (満日 1929.7.29)	50x18
1929.8.1	瓦房店	旭山公園	8,000 円	50x25
1929.7.7	長春	西公園	12,000 円 (満日 1929.9.3)	50x30
1930.7.23	營口	營口神社社務所裏手	12,822 円	50x18

\*注記のないものは『満鉄附属地経営沿革全史』に拠る

\*\*長さ (×幅)、単位はメートル

表 15-1 では示されていないが、競泳用プールに続いて、児童用プールの建設も進んでいた。小中学校でもプールを設置するところが増えてきた。大連の神明高女の石川義次校長は女子体育に熱心で、1925 年に着任してまもなく体育館をつくり、1926 年にプール建設の計画を立てた<sup>392</sup>。竣工は 1928 年 7 月、工費は 7000 円であった。「日本の女学校中三つしかないと云ふ自慢」のプールだった<sup>393</sup>。9 月 14 日には、神明高女の要請を受け、アムステルダムオリンピックに出場した高石、鶴田ら日本の水泳選手一行が真新しいプールで模範水泳を行った<sup>394</sup>。奉天高女も 1928 年に御大典記念としてプールを設置することを決めた。この前年から奉天高女の生徒は監督者同伴なしのプール利用を禁止されていたことも、この決定に影響しているだろう<sup>395</sup>。プールは経費 7000 円で 1929 年 7 月に完成した<sup>396</sup>。

<sup>392</sup>「神明高女のプール」『満日』1926 年 8 月 8 日。

<sup>393</sup>「神明高女の水泳プール」『満日』1928 年 7 月 31 日。

<sup>394</sup>「水中の妙技に感嘆の叫び」『満日』1928 年 9 月 15 日。

<sup>395</sup>「女学校生徒に単独水泳を禁止」『満日』1927 年 6 月 19 日。

<sup>396</sup>「御大典記念にプールを新設」『満日』1928 年 9 月 6 日；「奉天高女にプール新設」『満日』1929

安東高女でも1931年にプールが作られた<sup>397</sup>。安東の場合、六道溝のプールが遠くて不便だったという事情があったようで（市街地から2マイル半離れていた）、安東高女に続いて、大和小学校、朝日小学校、安東中学校に相次いでプールが設置された<sup>398</sup>。

満洲の内陸部は夏は暑いとはいえ、泳ぐのに適した時期は極めて短く、また泳げる場所（衛生的な河川や湖沼）も不足していた。スケートは満洲の自然環境に適したスポーツだったが、水泳は必ずしもそうとはいえない。満洲内陸部の水泳にどれほど困難が伴うかは、これまで見てきた通りである。にもかかわらず、大々的に海浜聚落が実施され、各地にプールが建設されたのは、内地の感覚を持ち込んだからであろう。

## 第16話 保健浴場

「保健浴場」とは聞き慣れない名称だが、今風の言葉に直せば、室内温水プールである。満洲では長い冬の間新鮮な空気に触れることができず、そのために10歳未満の児童の死亡率が高かった（多くが肺結核が原因）。大連医院副院長尾見薫博士は、外国の都市にある游泳浴場のような施設を作って、児童の死亡率を減らしたいと考えていた。そのことを聞きつけて、10万円を寄附したのが「成金」実業家森上卯平である。1917年6月のことだった<sup>399</sup>。尾見は大連民政署長大内丑之助と協議して、松公園（のち松林小学校）の約400坪の敷地に、游泳浴場、運動室、日光浴室からなる施設を建設することになった。同様の施設は日本では東京の基督教青年会館くらいで、もし完成すれば東洋一の施設となるはずだった。満鉄建築課長小野木孝治が設計を担当した<sup>400</sup>。

尾見、大内、小野木には共通点がある。いずれも後藤新平民政長官時代の台湾総督府に居た人物である。法律畑の出身だった大内は、後藤新平に請われ、1901年から1906年まで台湾総督府に勤務、1907年に渡満し、翌年に関東都督府参事官、1913年

年3月19日：「奉天高女の水泳プール」『大連新聞』1929年7月8日。

<sup>397</sup>「高女のプール廿日頃開場」『大連新聞』1931年7月17日；「高女校プール」『満日』1931年8月4日。

<sup>398</sup>「七道溝の苗地に理想的な大運動場」『満日』1931年4月18日；南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、794頁。

<sup>399</sup>「東洋一の游泳浴場」『満日』1917年6月10日。

<sup>400</sup>「保健浴場協議」『満日』1917年11月10日。

より大連民政署長を務めていた。尾見は京都府立医学校を卒業し、1903年に台湾総督府医学専門学校講師となり、ドイツ留学を経て、同校教授、1909年に大連医院に転じた。小野木は東京帝大建築学科を卒業、呉鎮守府から台湾総督府を経て、1907年に満鉄に入社、大連医院の建築を手掛けた。3人は後藤の下で長く働いた経験から、植民地の衛生に関心を持ったに違いない。

1917年12月、財団法人保健浴場が設立された。尾見によれば、保健浴場なる名称は欧米にも日本内地にもなく、「大連市の創作」であった<sup>401</sup>。おりしも大連には世界大戦による好景気のさなかで、不動産ブームが訪れ、建築資材が高騰しつつあった。当初の計画通りに建設するとなると、20万円以上が必要になると見積もられた<sup>402</sup>。そこで一部の関係者は低所得者層向けの貸長屋の建設に資金を活用してはどうかと提案した。ところが、寄附金は財団法人保健浴場が管理しており、簡単に流用できない仕組みになっていた。そうこうするうちに、1920年春のバブル崩壊を迎えた<sup>403</sup>。

その後も、森上の寄附金の使い道として、「基督教青年会館所属の公設食堂」や「婦人のための娯楽場」などの案が出されたが、そうこうしているうちに、建設予定地の松公園は第六尋常小学校の敷地に変更されてしまった。1921年3月には「世間からも忘れられんとす」とまでいわれた<sup>404</sup>。しかしこの前後に、保健浴場に関する記事が頻繁に現れており、むしろ世間の関心は高かったと評価すべきであろう。そしてそれは、大連市民の健康（保健）に対する憂慮を反映していた。おりしも、物価高騰が一段落し、保健浴場建設に向けて具体的な話し合いが始まっていた。そのさなか、森上卯平が関東州阿片事件で起訴された元拓殖局長官古賀廉造に贈賄したとして、旅順監獄に収監

<sup>401</sup>「認可された保健浴場」『満日』1917年12月13日。

<sup>402</sup>「保健浴場は『愈近く着工す可しと尾見博士談』」『遼東新報』1918年6月2日；「漸く建つらしい保健浴場」『遼東新報』1918年11月15日；「保健浴場立消えんとす」『遼東新報』1919年6月15日。

<sup>403</sup>「貸家建設計画」『東京朝日新聞』1919年7月4日；「米国式の保健浴場と市営貸長屋の建設は何ちらが急か」『満日』1920年6月16日。後者の記事では森上の資金は利子で十数万円に達したが、工費は「四十万円以上」になったとする。

<sup>404</sup>「有象無象」『満日』1920年9月9日；「行悩みの保健浴場が明春早々愈工事を起す」『満日』1920年11月18日；「保健浴場は建つか」『大連新聞』1921年3月23日；希望生「保健浴場を西公園に」『大連新聞』1921年3月26日。

された<sup>405</sup>。そもそも森上とはどのような人物だったのか。

柳沢遊によれば、森上は事業に失敗しては借金を踏み倒して内地、朝鮮、満洲を転々とし、ようやく大連で成功を収めたものの、1920年恐慌の打撃で大連財界から姿を消した人物であったという<sup>406</sup>。しかし、森上卯平はその後森上高明と名を変え、1920年代半ばまで大連財界で健在だったことが確認できる<sup>407</sup>。森上は1921年7月に旅順法院の予審で有罪を宣告された<sup>408</sup>。翌年7月、検察は森上に罰金300円を求刑するが、無罪の判決が下った<sup>409</sup>。この間、森上は尾見博士に対して、「本年中工事に着手出来なければ保健浴場建設を撤廃して他の適当な公共事業に振向け度い」と通告している<sup>410</sup>。一向に進捗しない保健浴場建設にしびれを切らした恰好である。その1カ月前に大連保健浴場役員会は保健浴場の設計図を承認し、工費13-14万円で西公園に建設することを決定、1922年夏竣工の予定でちょうど着工したところだった<sup>411</sup>。

保健浴場の外郭は1922年11月に完成したものの、中身は空っぽ。この時点で11万円を使い、残余の6万円を内装に当てることになった。大連の水事情を勘案し、水を循環させるためのボイラーを取り付けることになったが、そのためにさらなる工事が必要となり、完成は1923年秋に延びた<sup>412</sup>。

工事遅延のあおりを食ったのが、極東大会を目指していた水泳選手であった。1923

<sup>405</sup>「醜状を露出した大連取引所」『東京朝日新聞』1921年6月29日；「廿六日目に保釈出獄した森上氏」『満日』1921年7月9日。

<sup>406</sup>柳沢遊『日本人の植民地経験：大連日本人商工業者の歴史』青木書店、1999年、58-60頁。竹中憲一編『人名辞典「満州」に渡った一万人』皓星社、2012年、1469-1470頁は「森上卯平」「森上高明」の両方で立項しているが同一人物である。

<sup>407</sup>森上は1926年3月17日に大連株式商品取引所の理事を辞任している（南満洲鉄道株式会社庶務部調査課編『満洲経済統計月報』第3巻第7号、大正十五年四月分上巻、41頁）。1931年の新聞記事では「故人」として言及される（「大連市民の福祉増進策（二）」『大連新聞』1931年4月2日）。

<sup>408</sup>「天下の耳目を聳て醜怪事、関東州阿片事件予審終結決定」『満日』1921年7月11日。

<sup>409</sup>「阿片事件求刑」『東京朝日新聞』1922年7月13日；「阿片判決理由」『東京朝日新聞』1922年8月10日。

<sup>410</sup>「保健浴場は今年中基礎工事を完成すべく決定」『大連新聞』1921年10月27日。

<sup>411</sup>「大連保健浴場役員会」『満日』1921年9月30日。

<sup>412</sup>「好況時代に思いつた保健浴場の竣工遅れ／＼で開場は来年秋に漸く成らう」『大連新聞』1922年10月29日；「外廊だけ出来た保健浴場の将来」『大連新聞』1922年11月11日；「西公園保健浴場工事の欠陥は一部の模様替へで済むと」『満日』1923年2月9日。

年6月に大阪で開催される極東大会の全国予選は、同年5月に予定されていた。満洲では前年8月に全満競技連合が設立後最初の事業として極東大会満洲予選を実施し、8名の選手を派遣することが決まっていた(第14話参照)。全満競技連合は1923年2月から保健浴場で極東大会に向けた練習を開始する計画を立てていたが、工事の遅れのため、保健浴場が使えなくなった。同連合幹事の関屋悌蔵は前年夏に予選を開いた第二発電所貯水池(第15話参照)で寒中水泳をすることに決めた。極寒の満洲で寒中水泳とは無謀も甚だしいが、関屋によれば、水温は華氏62～63度(摂氏17度前後)で、「寒中水泳場としては最も適合した処」だという。関屋は2月20日から練習を開始するつもりだったが延期された。というのも、関屋自身2回ほど泳いでみたが耐えられない寒さで、「水温は何うしても華氏の六十五度以上なくてはならぬ」と見解を改めたからである<sup>413</sup>。3月に入り、ようやく66～67度(摂氏19度前後)まで水温が上がり、練習開始となった<sup>414</sup>。

1923年秋の開場を目前にして、新たな問題が発生した。経理を担当していた大連民政署会計主任鈴木敏弘らが3万円あまりの資金を横領したことが発覚したのである(鈴木は懲役1年6カ月を科された)。工事はまた停止となった<sup>415</sup>。まさに「呪はれた保健浴場」という言葉が相応しい<sup>416</sup>。

幾多の試練を乗り越え、大連保健浴場は1923年年末に竣工した。メインの温水プールは幅20尺、長さ60尺、深さ8尺、水温は78度、室温は80度(いずれも華氏)に設定されていた<sup>417</sup>。1924年1月9日に開かれた保健浴場評議員会で、会費は月2円、入場料は1回20銭を徴収することを決定した<sup>418</sup>。経営は大連市社会事業委員会が引き受

<sup>413</sup>「極東競技大会の予選へ出る満洲健児の寒中水泳」『満日』1923年2月16日。

<sup>414</sup>「極東オリンピック出場水泳選手の天の川游泳池に於ける勇姿」『大連新聞』1923年3月11日；「満洲の運動界」『満日』1924年1月1日。

<sup>415</sup>「保健浴場建設資金三万五千余円を私消す」『大連新聞』1923年8月22日；「三万五千余円の保管金私消では無い、融通したのだと」『大連新聞』1923年8月23日；「株や相場に手を出し消費した金」『大連新聞』1923年8月23日；「保健浴場建築資金事件、検察官の論告急」『大連新聞』1924年5月24日。

<sup>416</sup>「呪はれた保健浴場」『満日』1923年11月4日。

<sup>417</sup>「竣工を告げた保健浴場」『大連新聞』1923年12月28日；“A Precious Aquisition<sic> to Modern Hygienic Installations of Dairen,” *Manchuria Daily News*, January 1, 1924.

<sup>418</sup>「保健浴場の評議会」『満日』1924年1月11日。

けることになったが、全滿競技連合に一任してはどうかという意見もあったようである<sup>419</sup>。こうして、1月26日、ついに保健浴場は開場した<sup>420</sup>。

保健浴場を利用したのは学生、とくに水泳関係者だった。2月中の入場者は1万96人（うち女性は入浴者642人、参観者782人）、収入は1281.65円であった<sup>421</sup>。月水金の午後3-5時は女性専用の時間となっていたが、女性の利用者は少ないときで20人足らず、多いときで70人ほどだった<sup>422</sup>。3月の入場者は8094人（うち女性は637人）で、1日平均270人と利用者数が減少した<sup>423</sup>。

早くも5月15日に入場料が改定され、年会費15円、月会費4元と値上げされ、女性専用の時間帯が撤廃された。この記事が『泰東日報』に掲載されたことから、中国人も保健浴場を利用したと考えられる<sup>424</sup>。そして7月には2カ月間の休場が発表された。夏場は利用者が少ないというのは表向きの理由で、横領事件の影響で資金繰りに苦しんでいるというのが本当の理由であった（水道代が高いことも原因だった）。休業にともない大部分の従業員が解雇され、経常費の残余金が退職金支払いに充てられた<sup>425</sup>。鈴木商店の厚意でボイラー工費は帳消しされたが、年間経費1万5000円のうち入場料収入は5000円程度であり、理事会は残る1万円を関東庁、満鉄、市役所に拠出を求める提案をしたが、関東庁はこれを却下した<sup>426</sup>。12月には「宝の持腐れ同然、徒らに風雨に曝し、鼠の跳梁に任せ」と報じられる始末であった<sup>427</sup>。

「立ち腐らすには勿体ない」と、1926年に入って保健浴場の活用策が大連市当局と満洲体育協会で練られ、財団法人保健浴場が宮後丈平に保健浴場を2年間無料で貸し下

<sup>419</sup>「問題になつた保健浴場の経営方法」『満日』1924年1月17日。

<sup>420</sup>「御成婚の日を記念して保健浴場の開場」『満日』1924年1月27日。

<sup>421</sup>「大連保健浴場の利用」『満日』1924年2月14日；「大連保健浴場二月中の成績」『大連新聞』1924年3月11日。

<sup>422</sup>「非難は寧ろそちら」『大連新聞』1924年3月7日。

<sup>423</sup>「春光に恵まる、此頃の大連保健浴場」『満日』1924年4月6日。

<sup>424</sup>「保健浴場改浴費」『泰東日報』1924年5月15日。

<sup>425</sup>「保健浴場の休業は夏季利用者激減と経営上の破綻から」『大連新聞』1924年7月2日；「経営難に陥つてる保健浴場の復活」『大連新聞』1924年7月27日。

<sup>426</sup>「鈴木商店の厚意で保健浴場復活」『大連新聞』1924年9月20日；「関東庁から見離された大連保健浴場の断末魔を如何にせん」『大連新聞』1924年11月24日。

<sup>427</sup>「満洲体育協会が保健浴場に目を着けた」『満日』1924年12月9日。

げるといふ条件で、食堂、蒸し風呂、相撲場などを設置、プールは満洲体育協会が後援することとなった<sup>428</sup>。相撲場が設けられたのは、宮後が元力士だったからである。

宮後はもともと満鉄で働いていたが、常陸山に連れられて東京大相撲入りし、蘆田川と名乗り、十両筆頭まで進んだ。論客であったことから、1923年の東京大相撲騒擾事件「三河島事件」では参謀長的役割を果たした。野球が得意で、同年夏の東京大相撲満洲場所では、相撲団野球チームの主将として相撲以上の活躍を見せている<sup>429</sup>。『読売新聞』は蘆田川を次のように評した。

蘆田川は本職の角力よりベースボールの方がうまいボールの関係で接する人が学生や知識階級だから根が頭脳が悪くない方だから受け入れることが早い、頭が力士としては出来過ぎるほどいゝのと辯舌が達者なので論客の第一人者だ<sup>430</sup>。

そんな蘆田川がなぜ満洲に来ることになったのか、詳しくはわからない<sup>431</sup>。角界に改革を求めて果たせず(1932年の春秋園事件)、その後満洲に渡って満洲国で「角道」の普及に努めた天龍こと久田三郎を彷彿とさせる。蘆田川こと宮後丈平も1926年6月に大連相撲倶楽部を設立し、相撲の普及に尽力した。同倶楽部の発起人には岡部平太も名を連ねていた<sup>432</sup>。岡部もかつては東都学生相撲界で一、二を争う実力を持っていた。また福岡師範の学生だったとき、福岡に巡業に来た常陸山の前で次々と現役力士を投げ飛ばしたこともある<sup>433</sup>。宮後は柔道の満洲代表選手としても活躍したから、岡部とは馬が合ったはずである。宮後が満洲体育協会の推薦を受けて保健浴場を経営することになったのも、こうした縁によるものだっただろう。

1926年7月10日、保健浴場の開場式が挙行され、満洲場所で来連中だった横綱西

<sup>428</sup>「西公園の保健浴場、立ち腐らすには勿体ない」『満日』1926年2月16日；「市費四千円で出来る保健浴場経営」『満日』1926年4月8日；「保健浴場経営決定す」『大連新聞』1926年6月17日。

<sup>429</sup>「大相撲と新停留場」『遼東新報』1919年7月14日；「大相撲団野球に敗れる」『満日』1923年7月10日。

<sup>430</sup>「新力士列伝(一)」『読売新聞』1923年1月17日。

<sup>431</sup>1925年3月の柔道戦に満洲軍選手として出場しているので、来満はそれ以前ということになる(「若武者振り鮮やかな帝大軍」『大連新聞』1925年3月30日)。

<sup>432</sup>「蘆田川の奔走で相撲倶楽部設置」『大連新聞』1926年6月20日；「青年相撲大会」『満日』1926年6月22日。

<sup>433</sup>拙著『国家とスポーツ』22-23、36-39頁。

ノ海と宮城山の土俵入りが披露された。またプールでは満鉄の安藤又三郎理事が泳ぎ初めを行った。大連中華青年会の傅立魚会長も飛び入りで泳ぎを披露した<sup>434</sup>。

再開後、しばらくは1日平均150人くらいの利用者があった。入場者はほとんど学生だった。会費は月2円、入場料は大人15銭、学生と子供は10銭だった。女性専用の時間もふたたび設けられ、大連の神明、弥生両高女の生徒は岡部平太から水泳の指導を受けた<sup>435</sup>。まずまずのスタートを切ったといえる。その後、蒸し風呂、砂風呂も完成し、10月を過ぎて、毎日150人がプールを利用していた<sup>436</sup>。弥生高女はこの冬、週3回保健浴場で寒中水泳を行う計画を立てていた<sup>437</sup>。翌年も神明高女の生徒は保健浴場で岡部から水泳の指導を受け、冬には満洲体育協会が練習の場として保健浴場を利用した<sup>438</sup>。

1930年は東京で極東大会が開かれる年である。中国では4月に杭州で極東大会予選を兼ねた全国運動会が開かれることになっていた。遼寧省は全国運動会の予選を開くことになったが、3月下旬というのは陸上競技ですらシーズンオフであり、ましてや水泳はとうてい予選を開けるような時期ではなかった。遼寧省教育庁は大連中華青年会を通して、保健浴場を借りたいと申し出た。保健浴場側は、冬季は営業していないとの理由で断ったが、泰東日報記者王蘭が交渉して利用許可を得て「金票百元」でプールが貸し出されることになった。遼寧省予選は3月20日に保健浴場で挙行され、8名の代表が選出された<sup>439</sup>。このエピソードは、当時の日中スポーツ交流の一端のみならず<sup>440</sup>、保健浴場プールが使用可能な状態にあったことを物語る。たとえば、1929年9月

<sup>434</sup>「保健浴場開場式」『満日』1926年7月11日；「中央公園内の保健浴場びらき」『満日』1926年7月12日。

<sup>435</sup>「繁昌する保健浴場」『満日』1926年7月26日；「保健浴場近況」『大連新聞』1926年7月31日。

<sup>436</sup>「保健浴場内容改善」『満日』1926年10月6日。

<sup>437</sup>「女子の体育」『満日』1926年11月13日。

<sup>438</sup>「愈水に親しむ」『大連新聞』1927年6月30日；「水泳の冬季練習」『満日』1927年10月26日；「冬季水泳練習」『大連新聞』1927年10月27日。

<sup>439</sup>「大連選手已到遼予選運動開始」『満洲報』1930年3月16日；「赴遼省予選大獲勝利、中青運動員已返連矣」『満洲報』1930年3月19日；「水泳選手選出後与遼寧選手一同出発」『満洲報』1930年3月21日。

<sup>440</sup>拙稿「満洲における日中スポーツ交流（1906-1932）：すれちがう「親善」」『京都大学文学部研究紀要』57号、2018年。



に満鉄育成学校に入学、水泳部員となった岩元精二は、翌年春に保健浴場室内プールで練習したと記している。「頭の頂辺から足の先までしみわたる寒さに耐えて」とあるので、温水ではなかったらしい。夏には大連運動場プールに通ったというので、春だけ使ったようである<sup>441</sup>。

それから1年後の新聞記事は、「宮後君との委任経営契約は現在の家屋の保険料と修理代を自辨といふ事にして居るが、今の処は飲食店を主体としての経営であるから、保健浴場本来の使命は何等考慮されて居ない」として、財団法人はすでに大連市に寄附して解散するとの決議を出しており、田中千吉大連市長は美術館や簡易図書館に改造することを考えていると報じている<sup>442</sup>。こうした圧力を受けてか、4月25日に保健浴場はプールを開場することになったが<sup>443</sup>、年末には「経費の関係上開場不能の状態におかれ、あたら満洲唯一の屋内プールは蜘蛛の巣のはるにまかせるの状態」に陥っていた<sup>444</sup>。

その後の運命にも触れておこう。1932年8月には財団の理事会で「公益を利するところ無く保健浴場設立の趣旨に反し非衛生にして且公安上面白からざる風聞あり」として、「大連のスフィンクス」と化した保健浴場の経営権を大連市に移管すべく、宮後と交渉することが決まった<sup>445</sup>。1934年9月、財団法人は宮後に10月25日までに立ち退くよう命じる<sup>446</sup>。宮後は応じず、1935年11月、ついに裁判沙汰となった。原告側は、宮後が「経営の本旨を没却して下宿業を兼営して内部乱雑を極めてゐる」として、宮後らに建物の返還と賃貸料損害金5000円の支払いを求めた<sup>447</sup>。「乱雑」の具体的内容については、満日の村田懿麿社長の「薬湯に使つて居たのですが、その薬湯といふのが料理屋みたいなもので薬湯もやつたでせうが薬湯とは何等関係なしに女を引張り込んだといふやうなことも聞きまして、保健どころか寧ろ健康を害するやうな仕組になり

<sup>441</sup> 岩元精二「私の履歴書」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』315-318頁所収。

<sup>442</sup> 「大連市民の福祉増進策(二)」『大連新聞』1931年4月2日。

<sup>443</sup> 「保健浴場のプール開場」『満日』1931年4月25日。

<sup>444</sup> 「今年の運動界を回顧して(中)」『満日』1931年12月25日。

<sup>445</sup> 「公園内の保健浴場 近く市に移管経営」『大連新聞』1932年8月16日；「公園の保健浴場、又大連市で経営」『満日』1932年8月16日。

<sup>446</sup> 「保健浴場を市へ寄附」『大連新聞』1934年11月10日。

<sup>447</sup> 「本旨が違ふ、保健浴場を返せ」『満日』1935年11月6日。

ました」という証言が参考になるだろう<sup>448</sup>。訴えられた宮後側は、返還の条件として賠償を求めているようである<sup>449</sup>。

1937年秋によく保健浴場の返還が決まり、大連市は体育館や児童会館として利用することを検討した<sup>450</sup>。南満保養院の遠藤繁清院長は養護学校にすることを提案したが、体育関係者がこれに強く反対、委員会は用途を決めることができなかった<sup>451</sup>。その後の状況は不明である。

## 第17話 ボート

竹内黙庵は満洲におけるボートの起源について、1908年春に初めて大連に端艇の姿を見たが、当時は物珍しいというだけで、中村是公ら満鉄重役が日々遊ぶ程度だったが、翌年10月10日に至り、満鉄社員祖山鐘三の尽力で第1回競漕会が開かれたと記す<sup>452</sup>。『満日』で確認すると、1908年の海軍記念日（5月27日）に旅順で海軍軍人による短艇競漕が行われたのが最も早いボートの記録である<sup>453</sup>。同年6月の記事によると、従来満鉄北公園倶楽部ではテニス、スケート、ボート、競馬、玉突などの運動をしてきたと記しており、満鉄社員もボートを楽しんでいたことがわかる<sup>454</sup>。なお、満鉄総裁の中村是公は帝国大学在学時代にボートのクルーとして鳴らしたから、ボートの導入には積極的だったろう。

民間人による本格的な競技の嚆矢は、竹内も言うように、1909年10月の競漕会である。その開催に先んじて、満鉄社員らを中心に大連端艇倶楽部が設けられ、端艇3

<sup>448</sup>「虚弱児童問題座談会⑤」『満日』1938年4月5日。

<sup>449</sup>「スポーツ座談会①」『満日』1935年12月7日。

<sup>450</sup>「南華園、保健浴場 愈よ市へ寄附」『満日』1937年10月1日；「保健浴場利用法、市開始研究」『泰東日報』1937年10月19日。

<sup>451</sup>「市近郊に新設せよ」『満日』1938年7月8日；「寧ろ市民体育館に」『満日』1938年7月9日；「反対論益々濃化」『満日』1938年7月10日；「養護学園化反対で保健浴場再検討」『満日』1938年7月12日；「養護学園は新設か」『満日』1938年7月15日。

<sup>452</sup>竹内黙庵『八面観 大連の二十年』木魚庵、1925年、185頁。

<sup>453</sup>「旅順海軍記念日彙報」『満日』1908年5月20日；「海軍記念日短艇競漕結果」『満日』1908年5月28日。

<sup>454</sup>「北公園倶楽部と弓術場」『満日』1908年6月13日。

隻（隅田、加茂、淀）を新造、端艇競漕規則や競漕者心得を作成し、大会の準備を進めた<sup>455</sup>。『満日』には「社内には曾て隅田河上に其腕を揮ひたる法工商科出身のチャンピオン多数控へ居る<sup>456</sup>」とあるから、今回の出場者の多くは中村のように学生時代にボートを経験したものたちだったのだろう。

浜町海岸で開催された第1回満鉄競漕会では合わせて8回のレースが実施され、第5回目の重役対課長は重役組が600mのコースを3分18秒で勝った。重役組は、平岡寅之助（舵手、光明洋行支配人）、中村是公（整調、満鉄総裁）、田中清次郎（満鉄理事）、久保田勝美（満鉄理事）、沼田政二郎（満鉄庶務課長）、須永憲（満鉄工務課）、太田毅（満鉄工務課、大連ヤマトホテル設計者）と錚々たるメンバーであった。第6回目の来賓競漕は三井物産、正金銀行、重要物産組合が参加し、正金が3分3秒で勝ち、第7回目の選手競漕は露西亞町、満鉄本社、満鉄埠頭事務所が参加し、埠頭が3分2秒で勝った<sup>457</sup>。

第2回競漕会は1910年5月に開催された。今回は700mのコースで競われた。第13回目の重役、高級社員、見習の競漕では、強風のため海が荒れ、重役、高級社員が水没しては一大事と審判船が綱を投げて救おうとしたが、端艇に近づくことができず、観客が肝を冷やす場面があった。第12回目までは3～4分でゴールしていたが、第13回目は見習が15分、重役が18分かけてゴール、高級社員を乗せた加茂号は舵器が破損し、無勝負となった。この壮絶なレースを戦った重役たちは、中村是公、犬塚信太郎、国沢新兵衛（満鉄副総裁）、久保田勝美、堀三之助（満鉄工務課長）、小野木孝治（満鉄工務課）、岩下家一（大連ヤマトホテル）である。もし転覆していたら、満鉄のその後の歴史は大きく変わっていたかもしれない。残るレースは翌日に持ち越され、注目の分課優勝決勝競漕は埠頭が制した。前日の重役、高級社員、見習の再レースは見習が3分59秒で再び勝ち、重役は最下位に終わった。最もタイムが良かったのは、正金・三井連合軍で3分28秒だった<sup>458</sup>。

<sup>455</sup>「大連端艇倶楽部」『満日』1909年9月14日；「短艇大競漕会」『満日』1908年10月7日；「満鉄端艇競漕会」『満日』1909年10月8日；「端艇競漕規則」『満日』1909年10月9日。

<sup>456</sup>「本日の競漕会」『満日』1909年10月10日。

<sup>457</sup>「浜町の競漕会」『満日』1909年10月11日。

<sup>458</sup>「端艇競漕会」「競漕会雑感」『満日』1909年5月2日；「二日の競漕会」『満日』1910年5月3日。

1911年から1920年まで、毎年9月の満鉄競漕会は春の陸上運動会と並んで、大連の年中行事の一つとして大いに盛り上がった（1919年はコレラ流行のため中止）。1911年の競漕会では、大会の1週間前から『満日』で予評が連載され、大会そのものは半ページを割いてその模様が詳しく報じられた<sup>459</sup>。観客は1913年に1万人、1920年には2万人を数えた<sup>460</sup>。大会を牛耳ったのは、満鉄の「海の王者」埠頭事務所で、1915年に駅・車輦に勝ちを譲ったほかは、いずれも埠頭が優勝している。埠頭は1911年以降、独自に端艇競漕会を開いていた<sup>461</sup>。

満鉄運動会が所有する端艇は当初3隻だったが、1911年に4隻、1916年に4隻を加え、1921年には端艇5隻、和船3隻、ヨット1隻、リクビ(?)1隻となった。これらは市民に無料で貸し出され、同志社校友会、福昌公司、川崎造船所、大連中学などが利用していた<sup>462</sup>。

当初は花柳界の人々が三井の応援に駆けつけるのが恒例となっていたが、1914年に風紀上の問題となり、それ以後整然たる競技会に姿を変えていった<sup>463</sup>。満鉄競漕会の人気は、1916年に大連実業団の遊撃手福田稔選手が野球の試合より満鉄競漕会を優先したことからもその一端を窺えよう<sup>464</sup>。

いくつかの学校でもボートが行われていた。1910年6月14日に設立された旅順工科学堂霊陽会は、総務、講演、雑誌、球戯、短艇、柔術、弓術、撃剣、会計の各部で構成された<sup>465</sup>。短艇部はさっそく満鉄と同じ型の端艇3隻を川崎造船所に注文、隈崎佐太郎教授の指導で練習を始めた<sup>466</sup>。旅順工科学堂は1911年5月の海軍記念日に旅順港

<sup>459</sup>「競漕会予評」『満日』1911年9月18-20日；「雨中の大競漕会」「競漕会雑観」『満日』1911年9月25日。

<sup>460</sup>「白波為に躍る」『満日』1913年9月15日；「壮烈を極めたる第十回満鉄競漕大会」『満日』1920年9月20日。

<sup>461</sup>「端艇競漕会」『満日』1911年5月29日。

<sup>462</sup>「満鉄の新端艇」『満日』1911年1月1日；「四艇水に泛ぶ」『満日』1916年8月15日；「水に親しめ」『満日』1921年5月19日。

<sup>463</sup>竹内黙庵『八面観 大連の二十年』185-186頁。

<sup>464</sup>「撫順軍出場延期」『満日』1916年9月8日。

<sup>465</sup>興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』旅順工科大学興亜寮、1940年、35-36頁。

<sup>466</sup>「工科学堂の端艇」『満日』1910年6月16日；「漕艇練習」『満日』1910年10月18日。

で行われた端艇競漕会に参加<sup>467</sup>、6月11日には第1回短艇競漕会を開催した<sup>468</sup>。旅順中学でも1914年に海軍から短艇3隻が払い下げられボート部を設置、1915年に第1回のボートレースを開催した<sup>469</sup>。

1921年11月刊行の『靈陽』は旅順工科学堂短艇部の衰微をこう記す。

誇るべき短艇部の設ありながら、昨年は海上運動会さへまともならず然も本年も未だ競漕大会の有無を知るべからず。黄金台下、秋風颯々、港内の波徒らに静にして吾等靈南学生の腕鳴る、將に驍肉の嘆と謂ふべきか<sup>470</sup>。

短艇部はこの年にボート3艇を旅順中学に売却し、カッター3隻を解体したという。前年に旅順工科学堂の学生は、旅順と大連の往復遠漕に挑戦、その模様は『満日』で大きく取り上げられていた<sup>471</sup>。わずか1年でここまで凋落するとは驚かざるをえない。『興亜寮史』は1921年から1931年までを「全くの停滞時代」とし、「艇は娯楽に供せられ、過去のはなやかなりし面影を只艇庫の残骸に止め」るにすぎなかったと振り返る<sup>472</sup>。

ボートの凋落は旅順工科学堂だけの問題ではなかった。1921年の満鉄競漕会は突如中止された。満鉄運動会幹事はその理由を、経費や部員の不足に帰したが、実際には幹事の暗闘、横暴が原因だという<sup>473</sup>。満鉄育成学校の前田利之(12期)は「張合抜け」したものの、毎日浜町の艇庫に通い、練習に明け暮れた。この艇庫には最上、天竜、利根、木曾など固定シート6人漕のボートが6、7隻、ヨットと和舟が3隻ほどあった。満鉄競漕会に代わる腕試しとなったのは遠漕だった。柳樹屯(7マイル)、老虎灘(9マイル)、星ヶ浦(14マイル)とステップアップしていった。遠漕にはたいていすき

<sup>467</sup>「大海戦記念日」『満日』1911年5月26日。

<sup>468</sup>「靈陽会の競漕」『満日』1911年6月12日；「競漕会余聞」『満日』1911年6月13日；興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』49-50頁。

<sup>469</sup>「中学短艇競漕」『満日』1915年7月20日；“Kwantung Middle School. A Regatta,” *Manchuria Daily News*, July 21, 1915；旅順中学校桜桂会誌七十周年記念号編集委員会編『桜桂会誌 70周年記念号』旅順中学校桜桂会、1979年、61頁。

<sup>470</sup>「短艇部部報」『靈南』13号、1921年11月。

<sup>471</sup>「旅大沿岸遠漕壮挙」『満日』1920年6月6日；「快漕！！三十六漕、工科学堂の海の猛者」『満日』1920年6月7日。

<sup>472</sup>興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』822頁。

<sup>473</sup>「埠頭の水上市運動会」『満日』1921年9月8日。

やきの道具を積んでいった。16期（1922年-1926年）の稲益仁によると、育成のボート部は1926年で廃止された。予算会議で決められたというが、稲益は副因として、他校にボート部がなく、目標がなかったことを挙げている<sup>474</sup>。

1923年に満鉄競漕会の復活が画策された。満鉄運動会の勸修寺允雄は、端艇は経費の関係と一般に普及されていないことからこれまで閑却されてきたが、海上競技を盛んにすべく研究中であると述べているが、満鉄競漕会は復活に至らなかった<sup>475</sup>。

1920年代後半の『満蒙年鑑』の論調はボートに悲観的で、大正15年版には「僅かに満鉄ボート部及び旅順の海軍側のみに止まり或は満鉄ボート部も消滅せんかの有様にあり将来を期し難いものがある<sup>476</sup>」、大正16年版には「独り漕艇界のみは地理的關係上其不振なのは不可抗力として諦めるより外はない<sup>477</sup>」と記す。埠頭事務所主催の短艇競漕会はなお継続されたが、『満蒙年鑑』はこれについても、「極めて内輪の拙技で記録すべきものもなく之れとても将来其の余喘を保ち得るや否や問題である<sup>478</sup>」と酷評している。そしてその言葉通り、埠頭事務所主催の短艇競漕会は1927年の第13回大会を最後に途絶えてしまった<sup>479</sup>。

もっとも、ボートの低迷は満洲特有の現象というわけでもない。高い維持費や他のスポーツの勃興により、1920年代には内地でもボートにかつての人気を見ることは難しくなっていた。

満洲では、ひとり旅順中学のみ端艇競漕会を開催し続けたが、3隻のボートは年1回の校内大会以外はうち捨てられ、雨ざらし、波ざらしの状態だった。そのため1931年4月に教員の間でボート部廃止の議論が持ち上がったことがある。そのとき、平田芳亮校長の次のような一言で新しいボートの建造費積み立ての継続が決定された。

他の学校はいざしらず、日本戦史をいどころこの旅順港の水に育てられてゆく本校創立の精神にてらしても、ボート部だけは廃したくない。そこには、多大の犠

<sup>474</sup> 前田利之「ばくのまり」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』192-201頁所収；稲益仁「ボート部の思い出」（同、158頁所収）。

<sup>475</sup> 「夏から秋にかけて忙しい満鉄の各種運動競技」『大連新聞』1923年6月14日。

<sup>476</sup> 『満蒙年鑑』大正十五年版、631頁。

<sup>477</sup> 『満蒙年鑑』大正十六年版、588頁。

<sup>478</sup> 『満蒙年鑑』大正十六年版、601頁。

<sup>479</sup> 原因は1927年11月の埠頭倶楽部の解散にある。

性を払はねばならぬだらうが、やむを得まい。むしろもつと／＼海事思想を養成してやりたい<sup>480</sup>。

たしかに、旅順にとって海は特別な存在であった。日露戦争における海軍の活躍なくして、日本が統治する旅順、いな満洲はありえなかった。さらに平田校長は関東庁体育研究所主催の水泳講習会講師を務めるなど、水のスポーツに強い思い入れがあった<sup>481</sup>。だが、平田校長の切なる願いも空振りに終わったようである。というのも翌年の校友会予算からボート部の項目が消えるからである<sup>482</sup>。

衰微する満洲ボート界に転機が訪れる。満洲事変の勃発は、端艇の重要性を再認識させ、1932年10月に満鉄競漕会は満鉄短艇大会を復活させる<sup>483</sup>。旅順工科大学でも4人の学生で端艇部が再スタートを切った<sup>484</sup>。満洲のボートは新たな局面を迎えることになる。

## 第18話 ゴルフ

1909年秋に大連を訪れた夏目漱石は満鉄調査課長川村柳次郎に「大連で見物すべき満鉄の事業その他」を表にしてもらった。その表には娯楽機関という題目のもとに、ゴルフ会やヨット倶楽部が並んでいたという<sup>485</sup>。日本で最初につくられたゴルフ場は、1904年に六甲山に外国人がつくった18ホールのゴルフ場である。関東では1906年に、やはり外国人によって横浜の根岸競馬場にゴルフ場が作られた。東京にゴルフ場ができるのは、1914年になってからである<sup>486</sup>。

ところで、夏目のいう「ゴルフ会」というのは大連ゴルフ倶楽部のことである。こ

<sup>480</sup> 木村岳「思ひ出はすべて美し」『桜桂会誌同朋会報』二十五周年記念号、1934年7月。

<sup>481</sup> 「関東庁体研で水泳法を講習」『大連新聞』1929年7月2日；「明日から四日間水泳講習会」『大連新聞』1930年7月20日；「旅順プールで市民水泳講習会」『大連新聞』1931年7月16日。

<sup>482</sup> 「昭和八年度桜桂会決算書」『桜桂会誌同朋会報』二十五周年記念号、1934年7月。

<sup>483</sup> 「満鉄ボートレース」『大連新聞』1932年9月11日；「満鉄ボートレース」『満日』1932年9月13日。

<sup>484</sup> 興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』822頁。

<sup>485</sup> 夏目漱石「満韓ところどころ（十五）」『東京朝日新聞』1909年11月15日。

<sup>486</sup> 久保田誠一『日本のゴルフ100年』日本経済新聞社、2004年、11-41頁。

の年の春、大連市の西の外れにあった伏見台にゴルフ場が作られている<sup>487</sup>。まもなくテニスコートも附設され、満鉄副総裁国沢新兵衛や英米の領事らがプレイしたことが新聞で報道されている<sup>488</sup>。大連ゴルフ倶楽部は、大連ゴルフ・テニス倶楽部と名称を変更したものの、伏見台のゴルフ場はほどなくして閉鎖され、1913年春の総会では、大連テニス倶楽部に名称を変更してはどうかという提案すらなされた。会長の国沢新兵衛は、満鉄が星ヶ浦に土地を取得したらゴルフ場を建設するつもりだと答えている<sup>489</sup>。

それからまもなくして、海と山に挟まれた風光明媚の地、星ヶ浦にゴルフ場の建設が始まった。上海からイギリス人技師が招聘され、2年がかりで建設が進められた<sup>490</sup>。一般に公開されたのは1915年9月19日である。東京では入会金だけで100～150円が必要だったゴルフだが、ここ星ヶ浦では1日50銭、あるいは1月8円、1年15円でゴルフを楽しむことができた<sup>491</sup>。しかし、いくら「平民的」であることを謳っても、当時の大連ではまだゴルフの需要は大きくなかった。東京に比べて安いといっても、「此奴は道具及び玉拾ひのボーイを雇ふ為め金が費るからや、贅沢な運動」に違いなかった<sup>492</sup>。結局、1年経っても同好者十数名が利用するのみで、手入れも行き届かなくなった<sup>493</sup>。

そこで、ゴルフ愛好者らはゴルフ倶楽部を組織し、会費を徴収してゴルフ場の整備を図ることになった。星ヶ浦ゴルフ倶楽部は1916年6月に創設され、国沢新兵衛が会長に就任した。当時の常連は日清油房の古沢文作、満鉄の城崎祥蔵、山西恒郎、三井物産の伊達正男らで、古沢、相沢由太郎（大連商業会議所会頭）、江原忠（大連海関長）は夫人同伴でゴルフを楽しんだ<sup>494</sup>。神戸ゴルフ倶楽部で日本人女性ゴルファーの第一号は小倉末子（当時15歳）で1907年のこと、第二号は住友孝子で1918年であるから、

<sup>487</sup>「伏見台のゴルフ競技」『満日』1909年4月13日。

<sup>488</sup>「ゴルフとテニス」『満日』1909年6月20日。

<sup>489</sup>“Dairen Golf & Tennis Club,” *Manchuria Daily News*, April 24, 1913.

<sup>490</sup>「夏の星ヶ浦」『満日』1913年7月28日。

<sup>491</sup>「星ヶ浦のゴルフ」『満日』1915年9月18日。なお日本ゴルフドム社編『全国ゴルフ場案内』昭和十三年版、日本ゴルフドム社、1938年、96頁には1916年5月19日開場とする。

<sup>492</sup>「運動季節来る」『満日』1916年3月20日。

<sup>493</sup>「星ヶ浦ゴルフ倶楽部」『満日』1916年5月25日。

<sup>494</sup>「星ヶ浦ゴルフ倶楽部」『満日』1916年5月25日；「星ヶ浦ゴルフクラブ」『満日』1916年6月28日；「ゴルフクラブ」『満日』1916年6月30日。



星ヶ浦の女性ゴルファーは日本全体で見ても早いと評価できよう<sup>495</sup>。

1917年7月、朝鮮総督府鉄道局は鉄道経営を満鉄に委託することになり、満鉄京城管理局へと改組された(1925年まで)。京城管理局営業課長の安藤又三郎は、大連の満鉄本社に出張するたびに星ヶ浦ゴルフ場に案内され、京城にもゴルフ場が必要だと感じるようになった。安藤の働きかけで、龍山孝昌園に朝鮮ホテルの附属施設としてゴルフ場がつくられることになり、神戸在住のイギリス人に設計を依頼、1919年5月に設計案が示され、1921年6月に開場した。9ホール、2322ヤードだったが、うち2ホールは使えず、手狭だったうえ、同地に公園が設置されることになったため、わずか2年で移転を強いられた。1924年4月に清涼里ゴルフ場(18ホール、3906ヤード)が完成するが、これも長続きせず、1929年6月に郡司里ゴルフ場(18ホール、6045ヤード)に移転した。設計は赤星六郎であった<sup>496</sup>。赤星はのちに星ヶ浦ゴルフ場の移転先として計画されていた営城子ゴルフ場の設計を担当するが、同ゴルフ場は1939年春に着工したものの、開場を見ることなく、1941年に滑空練習場に「更生」されることになった<sup>497</sup>。赤星は新京ゴルフ場(1933年8月開場)、奉天の東陵ゴルフコースの設計も手がけている<sup>498</sup>。赤星六郎の兄四郎もゴルファーとして、またゴルフ場設計者として有名で、中国青島のゴルフ場を設計している。赤星四郎は麻布中学後の1913年にアメリカに渡り、ローレンスビル・スクールからペンシルベニア大学に入学、在学中はアメリカンフットボール、野球、バスケットボール、ボクシング、ゴルフなどさまざまなスポーツに取り組んでいた。ボクシングのインストラクターだったジョージ・デッカーは、同じくペンシルバニア大学に籍を置いていた岡部平太のボクシングのインストラクターでもあった<sup>499</sup>。2人のあいだになんらかの交流があった可能性は高いだろう。赤星は1944年に満洲電気化学工業に入社、吉林工場長となり、そのまま満洲で終戦を迎える。戦後に数多くのゴルフ場設計を手がけるが、そのうちの1つが芥屋ゴルフ倶楽部であ

<sup>495</sup> 西村貫一『日本のゴルフ史』文友堂、1930年、222、243頁。

<sup>496</sup> 손환『한국근대스포츠의발자취』327-335頁。新京ゴルフ倶楽部の設計者は、『全国ゴルフ場案内』昭和十二年版は赤星六郎だが、『同』昭和十三年版は赤星四郎となっている。

<sup>497</sup> 「ゴルフ場変じ滑空練習場」『満日』1941年3月27日。

<sup>498</sup> 『全国ゴルフ場案内』昭和十三年版、97頁。

<sup>499</sup> “Boxing Is Great Help in Keeping U. S. Soldiers Fit,” *Anaconda Standard*, December 22, 1918.

る<sup>500</sup>。岡部の生まれ育った新町から2キロも離れていないところにある。開場は1964年11月15日、岡部の亡くなる2年前であった。奇しき縁である。ちなみに台湾では台湾総督府秘書課長石井光次郎（戦後に日本ゴルフ協会会長）の尽力で、1918年に淡水に最初のゴルフコースが設けられている<sup>501</sup>。

話をもとに戻そう。星ヶ浦ゴルフ倶楽部はその後も発展を続け、1919年春には男性会員63名、女性会員7名を数えるに至る<sup>502</sup>。倶楽部は入会金はなし、会費は1月2円、「こんなに会費が安くてゴルフの出来る処は外にないつて主人は申しております」とは古沢夫人の言である<sup>503</sup>。「最初運動具を購入する四五十円と球とのみで他には何等費用を要しない至つて平民的<sup>504</sup>」といっても、娯楽に40～50円もかけることができる人はそう多くはない（とはいえ、大連では関税がかからないので運動具は内地より割安だった）。そのため、会員の多くは会社の重役連や欧米人だった。数少ない日本人女性会員のうち、テニスや登山でも活躍し、大連女流運動界の明星と言われたのが江原夫人こと江原春子である。江原は幼稚園の建設や婦人倶楽部の創設を計画するなど、大連社交界の花形であった<sup>505</sup>。1921年10月に夫の転勤で大連を離れるさいには、大連社交界が寂しくなると報じられた<sup>506</sup>。江原は1927年5月に再び大連海関長となるが、もはや春子がもてはやされることはなかった。このとき春子はもうスポーツをやらなくなっていたのかもしれないが、女性のスポーツは飛躍的に発展しており、春子だけが注目されるという状況ではなくなっていた。

1921年にはゴルフ場を18ホールに拡張し、クラブハウスを建設する計画が持ち上がる。会費も入会金25円、1月5円と値上がりした。会員は120～130名（うち日本人女性は2名）だった<sup>507</sup>。1926年には会員は183名にまで増えたが、入会には2人の紹介者が必要で、さらに100円の債券を購入し、入会金25円を払わねばならなかった。

<sup>500</sup> 早瀬利之『ゴルフ翔ぶが如く：赤星四郎・六郎兄弟の生涯』廣濟堂出版、1990年。

<sup>501</sup> 久保田誠一『日本のゴルフ100年』49-51頁。

<sup>502</sup> 「旺んなゴルフ」『満日』1919年5月2日。

<sup>503</sup> 「夫君の感化で運動に御熱心」『満日』1920年4月17日。

<sup>504</sup> 「最近流行のゴルフ競技」『満日』1918年11月2日。

<sup>505</sup> 「南山御殿の女王、大連女流運動界の明星、海関長夫人江原春子様」『満日』1921年1月30日。

<sup>506</sup> 「江原氏の後を襲ふべく立花さんが明五日」『満日』1921年10月4日。

<sup>507</sup> 「早川満鉄社長を会長に推戴して」『満日』1921年9月10日。

会費も毎月7円に上がった<sup>508</sup>。日曜日になると各種のコンペが開かれ、「押すな押すなの盛況」だった。1927年にはついに18ホールに拡張された<sup>509</sup>。1928年、星ヶ浦ゴルフ倶楽部は前田建造を教師として招き、翌年から前田は同倶楽部専属プロになった。前田は戦後、地元の滋賀県朽木ゴルフ倶楽部をはじめ、ゴルフ場の設計に携わることになる<sup>510</sup>。

1929年6月、『満日』に「ゴルフを何故奨励せぬか」という投稿記事が掲載される。投稿者いわく、大連ではわずかな費用で容易にエンジョイできるのにゴルフ熱が盛んにならないのはなぜか。大阪朝日新聞社などは優勝カップを寄贈したりしているのだから、貴社も競技の記事を掲載するくらいしてはどうかと<sup>511</sup>。満日編輯長の回答は次のようなものであった。ゴルフは有閑階級の保健上には結構なものだが、これを奨励するのは考え物である。当地のゴルフは内地よりも安く済むが、それでも有閑有産階級でなければできないもので、新聞としては大衆向きではないものを奨励する必要は認めない。私見では、ゴルフのようなものは麻雀とともに葬り去る努力をすべきであると<sup>512</sup>。実際、ゴルフのために広大な土地を占有するとはけしからんという非難はたえずあり<sup>513</sup>、星ヶ浦ゴルフ場の移転は長年の懸案となっていた。

大連以外にもゴルフ場はあった。『全国ゴルフ場案内』昭和十二年版によれば、奉天国際ゴルフ場は「明. 四二」(1909年)に完成している。同ゴルフ場は奉天北郊の北陵につくられ、欧米人が経営し、張学良もここでしばしばゴルフを楽しんだ。『全国ゴルフ場案内』はこのほかハルビンのゴルフ場が「大. 九」(1920年)に、撫順のゴルフ場が「大. 二」(1913年)に開設されたと記している。撫順については、設計者として大谷光明の名が挙げられている。

<sup>508</sup>「星ヶ浦のゴルフ競技場」『満日』1926年11月17日。

<sup>509</sup>古沢文作「ゴルフの話」『満日』1927年1月1日；「ゴルフリンクを拡張のお祝いと競技会の盛況」『満日』1927年6月13日。

<sup>510</sup>「ゴルフの指導」『満日』1928年8月8日；<https://www.100yardage.com/%E8%A8%AD%E8%A8%88%E8%80%85%E3%81%A7%E5%B7%A1%E3%82%8B%E3%82%B4%E3%83%AB%E3%83%95%E5%A0%B4/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E4%BA%BA%E3%82%B4%E3%83%AB%E3%83%95%E5%A0%B4%E8%A8%AD%E8%A8%88%E5%AE%B6/maeda-kenzo-course-list/>

<sup>511</sup>無名氏投「ゴルフを何故奨励せぬか」『満日』1929年6月6日。

<sup>512</sup>満日編輯局長「右御回答申上候」『満日』1929年6月6日。

<sup>513</sup>「星ヶ浦ゴルフリンク近く移転に着手」『大連新聞』1930年6月3日。

大谷は西本願寺 21 代門主光尊の三男、中央アジア探検で有名な大谷光瑞は兄にあたる。イギリス留学中にゴルフに魅了された大谷光明は西本願寺疑獄事件で門主の継承を辞退した後、上京して東京ゴルフ倶楽部に入る。1922 年には日本アマチュアゴルフ選手権に優勝、同年にプリンス・オブ・ウェールズが来日したさいには摂政宮（のちの昭和天皇）と組んでゴルフの親善試合をした。1924 年にはジャパン・ゴルフ・アソシエーションを設立、ゴルフコースの設計やルールブックの翻訳も手掛けた。

ゴルフ雑誌『チョイス』には、撫順ゴルフ場が大正 12 年に撫順炭鉱長山西恒郎の提唱のもと、大倉土木によって作られたという話が紹介されている。当時、大倉土木社員だった保田与天はこの工事をきっかけにゴルフに興味を持ち、1933-34 年に星ヶ浦ゴルフ倶楽部選手権で 2 連覇するほどの実力をつけた。保田は戦後、日本各地でゴルフ場の設計に携わった。なお、星ヶ浦で保田のキャディーをつとめた孫士鈞は、1937 年に有富光門に誘われて来日、戦後日本に帰化し、プロゴルファー小野光一として活躍した<sup>514</sup>。

1923 年であれば撫順にゴルフ場があってもおかしくはないが、当時の炭鉱長は梅野実であって山西ではない。このとき山西は大連に居り、撫順炭鉱次長として撫順にやってくるのは、奉天勤務を経た 1925 年のことである。かりに、『全国ゴルフ場案内』の「大. 二」が「大. 一二」の間違いだったとすれば、1923 年に大谷光明や大倉土木が関わる形でゴルフ場が造られたということになり、2つの資料を整合的に解釈することができる。もし山西がゴルフ場の造成に関与したのであれば、造成時期は 1925 年以降となる。いずれにせよ、1926 年 8 月に撫順ゴルフ大会が開かれたという記録があるので<sup>515</sup>、それ以前であることは確かである。

1924 年 3 月の記事によれば、鞍山では「野球庭球ゴルフ等夙くから行はれて居る<sup>516</sup>」という。1933 年にゴルフ場が移転することになったが、それを報じた記事は「ゴルフ倶楽部創立以来十五年間」と記しており、ゴルフ場の建設は 1918 年まで遡る可能性がある<sup>517</sup>。長春では 1924 年に西公園にゴルフ場が作られたが、最初は道具が届かず、次

<sup>514</sup> 大塚和徳監修、古屋雅章著「佐藤儀一と保田与天の仕事」『チョイス』224号、2017年。

<sup>515</sup> 「ゴルフ大会」『満日』1926年8月28日。

<sup>516</sup> 「新に出来た満鉄道場」『満日』1924年3月29日。

<sup>517</sup> 「ゴルフ場跡へ新公園を建設」『満日』1933年8月19日。

いで中国側から土地の使用に了解を得られず、1926年春にようやく開放されて、同年8月に第1回ゴルフ会が開かれた<sup>518</sup>。安東では1927年12月にゴルフ場が開場した。ゴルフ場建設の計画は数年前からあり、5000～6000円を投じて9ホールのコースを作る予定だったが経費が工面できなかった。結局、ゴルフ会員約20名が1000円を負担し、6ホールの小規模なゴルフ場を作った<sup>519</sup>。このゴルフ場に対しては、「安東のドエライ人々のゴルフ倶楽部員がゴルフ場整備や周囲に鉄条網を張り散らして貧乏人近寄るべからずといふ立札を樹つるそうなそんな人に限つて公共の寄附金などには出し渋る」と皮肉を述べた記事が見られる<sup>520</sup>。旅順では1928年10月に関東庁がゴルフ場を設置したが、これも6ホールであった。関東庁経営ということで、無料でゴルフを楽しめた(キャディーを雇う場合は料金が必要だった)<sup>521</sup>。このように1920年代半ば以降、各地でゴルフ場が整備されていった。

1931年に満洲を席捲したのはダンスとベビーゴルフだった。ベビーゴルフは別名ミニチュアゴルフ、豆ゴルフ、今で言うパターゴルフのことである。アメリカで流行していたベビーゴルフが日本に登場したのは1930年秋、満洲では翌年2月に長春でベビーゴルフ倶楽部が設立されたのが最も早い<sup>522</sup>。同年4月から8月にかけて、大連、旅順、安東、四平街、奉天、鞍山と次々にベビーゴルフ場が開設された。ゴルフには冷淡だった大連の『満日』編集部も「モダン・アミューズメントとして内地の都会人を魅きつけてゐる」ベビーゴルフは積極的に報道した。大連だけでも大広場、連鎖街、常盤橋などにベビーゴルフ場が次々と開設された<sup>523</sup>。

<sup>518</sup>「西公園の地を選んでゴルフ場を設けた」『満日』1924年9月24日；「第一回ゴルフ会」『満日』1926年8月15日。

<sup>519</sup>「知事とゴルフ」『満日』1925年3月1日；「ゴルフ場を愈よ新設」『満日』1927年11月8日；「ゴルフ開場式」『満日』1927年11月24日。

<sup>520</sup>「特急車」『大連新聞』1929年8月15日。

<sup>521</sup>「ゴルフリンク開き」『満日』1928年10月20日；「ゴルフリンク開き」『満日』1928年10月22日；『全国ゴルフ場案内』昭和十二年版、85頁。

<sup>522</sup>「とてもモダンなベビーゴルフ」『大連新聞』1931年2月10日；「ベビーゴルフ優勝盃争奪戦」『満日』1931年2月18日。

<sup>523</sup>大連：「商工会議所空地に豆ゴルフ場」『大連新聞』1931年4月8日；「会議所横にベビーゴルフ場」『満日』1931年4月11日；「ベビーゴルフ大会」『満日』1931年6月21日；「ベビーゴルフ場を新設」『満日』1931年6月24日。旅順：「流行は旅順からのベビー・ゴルフ」『大連新聞』1931年4月15日。安東：「ベビーゴルフ」『満日』1931年6月4日。四平街：「ベビーゴ

中国側では1931年1月に天津で流行が始まり、夏には瀋陽（奉天）にも「遼寧野球場」が作られた。中国語では英語の wee golf から「微高爾夫」と音訳され、また「小穴球」、「小野球」とも呼ばれた<sup>524</sup>。張学良が創設した同沢倶楽部にも小野球場が作られ、瀋陽の東塔から、長城を越えて天津に入り、北平の天壇、中山公園、北海、明十三陵、頤和園へ至るといのように、名所めぐりの要素を加えていた<sup>525</sup>。瀋陽（奉天）の場合、日本側のほうが先にベビーゴルフ場を建設しているが、「野球場」という呼称からして、日本からの流行ではなく、天津からの流行が到達したと考えた方がよいだろう。奉天で日本人と中国人は隣り合って暮らしていたが、それぞれ異なる世界に属していたのである。

1932年4月、リットン調査団が来満する。満洲では、日満両民族の融和を演出するため、関東軍の発案により各地で建国記念運動会を開いた<sup>526</sup>。しかし、リットン調査団はそれを目にすることはなかった。リットン自身は人がスポーツをするのを見るよりも、自分ですることに興味があったようである。大連でも日満学童による連合運動会は見に行かず、テニスやゴルフを楽しんだ<sup>527</sup>。ナショナルなスポーツとは対照的に、ゴルフは満洲に紹介された当初からインターナショナルな雰囲気を持ち続けていた。そんなゴルフがリットンに避難場所を提供したということになるのか。

## 第19話 陸上競技 I

### (1) 陸上競技の導入

1927年3月の『満日』に掲載された「スポーツ雑感 満洲競技界の今昔」には草創

---

ルフ競技大会開催『満日』1931年6月6日。奉天:「ベビーゴルフ」『満日』1931年6月21日。鞍山:「ベビーゴルフ」『満日』1931年8月8日。

<sup>524</sup> 蜀雲「微高爾夫球房一瞥」『北洋画報』583期、1931年1月31日；誅心「小型穴球之狂熱」『北洋画報』589期、1931年2月12日；大帝「小穴球狂潮記」『北洋画報』632期、1931年6月2日；曲線怪「穴球之奇称」『北洋画報』648期、1931年7月9日。

<sup>525</sup> 妙観「瀋陽小野球場熱」『北洋画報』658期、1931年8月1日。

<sup>526</sup> 金誠「リットン調査団と満洲国建国記念連合大運動会：関東軍による宣伝・宣撫工作としてのスポーツ」『札幌大学総合論叢』44号、2017年10月。

<sup>527</sup> 「国産品愛用のリットン卿」『満日』1932年5月27日；「テニスやゴルフに半日を寛ぐ」『満日』1932年5月29日；「スポーツ、船遊び それから鮎釣」『満日』1932年5月30日。

期の満洲陸上競技界が描かれている。すこし長いが引用しておきたい。

今でこそ満洲の陸上競技界は日本に於ける一大勢力を形成して大きな顔をしてゐるがどうしてこれが七、八年前の斯界は哀れな程貧弱なもので満洲に在住する人ですら其の存在を知らなかつた程であつたそののみか陸上競技等と云ふ様な組織立つたものは存在しては居なかつたのである其の当時運動と云へば野球が僅に知られてゐたので強て陸上競技会らしいものを求めれば毎年五月新緑滴る西公園で恒例として行はれてゐた満鉄の大運動会位のもので・・・・・・此の大運動会も満鉄会社の家族会でお祭騒ぎのものに過ぎなかつた、現在の如く秩序立つた競技会に比ぶれば雲泥の差がある、長いパンツに白足袋と云ふ姿が当時の選手の華やかな姿であつた、スパイクの附いた靴等は当時の選手等には想ひも寄らぬものであつた。練習等も大会が有ると云ふ一月程前から足自慢の者腕自慢の人々が集まつて何等のプランもなく非科学的な気儘勝手な練習をしたものだ・・・・・・此の如き幼稚な陸上競技界も大正十年の秋当時水戸高等学校の体育教師であつた岡部平太氏来満で根本的に改革されて行つた、初めて蹲踞式のスタートが輸入された、正しい走法も教へられた、円盤も鉄弾も槍も投げられる様になつた、陸上競技界は一時に賑はつて来た、大正十一年の春の満鉄運動会は新しい此種の競技を新に加へられた、十月十七日は今の工專当時の工業学校のグラウンドで満洲に於ける最初の組織立つた陸上競技会が開催された、今迄の長いパンツは短い見てもかからも気持ちのよい整つたパンツと変り白足袋はスパイクシューズと變つた<sup>528</sup>。

この記事が指摘するように、満洲の陸上競技界は1921年秋の岡部平太の満鉄入社を以て本格的に始動する。当時、満鉄社員で陸上競技をしていたのは、大連で20人、満洲全体でも61人にすぎなかつた<sup>529</sup>。さきほどの記事で、以前の「陸上競技会らしいもの」として挙げられた満鉄運動会では、たしかに陸上競技の種目が実施されていた。たとえば1910年の第1回大会には、「百米突競走」「四百米突競走」「巾跳」「棒飛」「高飛」「ハンマー」「一哩競走」などの種目があり、800mが2分20秒、走高跳が1m30mな

<sup>528</sup>「スポーツ雑感 満洲競技界の今昔」『満日』1927年3月19日。

<sup>529</sup>岡部生「社員の運動趣味」『読書会雑誌』9巻1号、1922年1月。

どの記録が残されている<sup>530</sup>。より詳しい記録がわかる第2回大会では「百米突」「三百米突」「六百米突」「三千米突」などの種目が見える<sup>531</sup>（トラック1周が300mだった）。最初の2回の満鉄運動会の最高記録は、100mが13秒（鶴見鎮）、走幅跳が5m30（ホワイト）、走高跳が1m45（森啓蔵）、棒高跳が2m60（岩下家一）、ハンマー投が20m45であった<sup>532</sup>。

1920年5月の第10回満鉄運動会は、選手対抗競技の一つとして実施されていた障害物競走を「近代運動の見地から旧時代の遺物として除き」、槍投げを加えた（槍投げ自体は前年に採用されていた）<sup>533</sup>。運動会後の記事では、それぞれの記録を前月末に東京で開かれたオリンピック全日本予選の記録と対照させており、陸上競技としての意識が高まっていたことが看取される<sup>534</sup>。ただ、記録更新者たちの感想を見ると、猛練習したという人もいれば、「一度もグラウンドに足を触れて」いないという人もいて、練習方法も科学的といえるようなものは見られない<sup>535</sup>。写真を見る限り、もはや「長いパンツ」は穿いていないようである。

実際、神戸高商でハードル選手として活躍し、1921年春に満鉄に入社した山田直之介の目には、満洲の陸上競技界はきわめて幼稚に映った。

満洲に於ける陸上競技界を見るに、現在に於てはまことに振はない。まだオリンピック競技の実際が一般の人々に理解せられてゐないやうである従つて熱心なる選手なく又やりたくてもその機会を得られない私は今春満鉄の陸上競技会なるものを見て、其あまりにお祭騒気分なるに失望し又出場選手に対してさへスパイクの使用を禁止してゐるのに驚いた。これではまことに心細い次第である。今後は是非共満洲体育協会の如きものを設けてオリンピック競技を広く全満洲に普及せしめ、時には満洲オリンピック大会を開いて大に満洲競技界の向上進歩を謀らば日ならずしてわが陸上競技界は野球庭球に劣らぬ盛況を呈するに至るであらうと

<sup>530</sup>「満鉄の運動会」『満日』1910年10月10日。

<sup>531</sup>「歓声満渡る伏見台」『満日』1911年5月1日。

<sup>532</sup>「満鉄運動会」『満日』1912年4月28日。

<sup>533</sup>「満鉄陸上運動会近づく、対抗競技は九種」『満日』1920年4月10日。

<sup>534</sup>「満鉄運動記録対照」『満日』1920年5月5日。

<sup>535</sup>「レコードを作りし人々」『読書会雑誌』7巻6号、1920年6月。



信ずる<sup>536</sup>。

続けて山田は、10月2日に開かれた奉天満鉄運動会で選手のスパイク使用が許され、すべてが「オリンピック式」に実施されたことを高く評価した。なぜ奉天でいち早くスパイクが解禁となったのか。ひょっとしたら、岡部が関わっているかもしれない。水戸高校講師だった岡部は、8月28日に行われた水戸高校と第二高等学校の陸上対抗競技の直後、学校に辞表を提出し、奉天にやって来た。奉天には東京高師時代の親友四角誠一が教師をしていた。9月29日の新聞記事で岡部は「体育研究の為め来満目下大連第四小学校にて講演中」と紹介されている。女子体育について語った岡部は、奉天の高女で十日あまりを過ごし、運動場の様子を観察した、と述べている<sup>537</sup>。奉天滞在中に近々満鉄運動会が開かれることになっていて、スパイクが禁止されていることを耳にしたはずである。岡部の性格から考えて、黙っているとは思えない。また、岡部は体育の専門家として遇され、翌年には大連の満鉄運動会を改革しており（後述）、奉天の満鉄運動会にアドバイスをした可能性が高い。その後、岡部は満鉄への就職活動のため大連にやって来た。満鉄就職が決まると、いったん奉天に戻った。奉天には水戸高校の生徒3人が来ており、岡部に戻ってきて欲しいと懇願したが、岡部の意志は固かった。生徒たちを安東へ送り届けたあと、大連に行って満鉄社員として働き始める<sup>538</sup>。

たしかに、岡部の来満は満洲のスポーツにとって大きな契機だったが、岡部ひとりの功績に帰すべきではない。山田直之介もそのひとりだが、ほかにも重要な人物がいる。その一人が山本芳松である。山本は1919年春に東京高師を卒業、1920年春に高知師範に赴任した。従来 of 兵式体操中心の体育を「時代遅れも甚だしい」と感じた山本は着任早々、スパイク靴にランニングシャツ、パンツの姿で生徒の前に現れ、体操要目に加えて陸上競技、サッカー、バスケットボール、水泳などをカリキュラムに加えた。生徒には鶴岡英吉、宮畑虎彦、竹内一らのちに日本の体育スポーツ界で活躍する選手が揃っていた。山本は東京高師の同級生だった斎藤兼吉を招いて、技術指導をしても

<sup>536</sup>「満洲に推薦したいハイハードル競技」『大連新聞』1921年10月31日。

<sup>537</sup>「女子体育の側面観」『満日』1921年9月29-30日。

<sup>538</sup>拙著『国家とスポーツ』100頁。

らったりもした<sup>539</sup>。1921年秋に大連中学に赴任した山本は、同校には体育の伝統もなければ慣例もなく、満洲全体を見渡しても社会体育として行われているのは野球、庭球、スケートくらいだったとして、「当時全満洲で陸上競技法なるものを知つてゐる者は僭越ながら私唯一位の者である」と赴任直後の状況を回想している<sup>540</sup>。これはやや自負が過ぎるようだが、中等学校のスポーツ界に対する山本の貢献は忘れてはならないだろう。

1921年春に来満し、水泳の指導者として活躍した関屋悌蔵（第14話参照）は、若葉会の学生に正式の陸上競技を伝授した。陸上部の山中実は、「スパイクのついた靴で走る事や、砲丸投、走り巾跳、色々珍しい競技を見せられて全く感心した<sup>541</sup>」という。

1922年5月の第11回満鉄運動会は面目を一新した。岡部の尽力により、競技種目は正規の陸上競技に準じたものになり、600mのような非正規の種目が廃された<sup>542</sup>。岡部は婦人社員も競技に参加させようとしたが、これは強い反対に遭って実現しなかった<sup>543</sup>。運動会そのものは大成功で、前月に京城で開催された朝鮮陸上競技大会の記録を「全部打破り内地の記録に迫」った<sup>544</sup>。

岡部らが奔走して設立された全満競技連合は運動会から競技会への転換を推し進めた。その発起人会は1922年5月の満鉄運動会の直後に開かれ、8月末に正式に発足した<sup>545</sup>。最初の事業は全満水泳選手権大会の開催で（第14話参照）、陸上競技の全満選手権大会はその2番目の事業であった。水陸の両大会はともに翌春大阪で開催される極東大会の満洲予選を兼ねていた。陸上選手権大会前には岡部、山本、牧信立（関東庁視学）を講師にして運動競技講習会が開かれ、出場予定者をコーチした<sup>546</sup>。出場者は満

<sup>539</sup> 山本芳松「体育に命を賭けて五十年」；山本邦夫『近代陸上競技史』下巻、道と書院、1974年、1655頁。

<sup>540</sup> 山本芳松「満洲体育競技創設の跡」。

<sup>541</sup> 山中実「陸上部略史」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』124-126頁所収。

<sup>542</sup> 「西公園の若葉に鯨波が揚る」『満日』1922年4月23日；「公平厳格に改められた満鉄運動会の競技規定」『満日』1922年4月25日。

<sup>543</sup> 「近づきたる満鉄運動会」『大連新聞』1922年4月25日。

<sup>544</sup> 「運動競技漫評」『大連新聞』1922年5月8日。

<sup>545</sup> 「全満競技会成立」『満日』1922年5月13日；「全満競技連合成る」『満日』1922年9月1日。

<sup>546</sup> 「全満洲陸上選手権」『大連新聞』1922年9月9日；「満洲競技連合主催の全満陸上競技」『大連新聞』1922年10月12日。

鉄本社から 50 名、大連中学から 36 名、南満工業学校から 10 名、旅順工科大学から 7 名、旅順中学から 2 名のほか、奉天から 6 名、長春と撫順から各 4 名、ハルビンから 3 名と、全満から優秀な選手が集まった。種目は極東大会に準じ、円盤投、三段跳、五種競技、10000m は満洲で初めての実施だった。遺憾だったのはトラックである。西公園の満俱、実業グラウンドは基本的に野球専用だったので、全満競技連合は陸上競技とサッカー用グラウンドの設置を推進していた。今回大会の会場となった伏見台の南満工業学校グラウンドは、トラック一周 250m で傾斜しているため、タイムに「至大の影響」があった<sup>547</sup>。

1923 年 4 月に大阪で開催される極東大会二次予選に全満競技連合は高橋俊夫、山内敬二、増田定治、相馬勇三、松岡昌一、田島貞夫、相生四郎、岡田誠矣を派遣した<sup>548</sup>。二次予選の結果、100 ヤードと 200 ヤードで田島が、砲丸投で山内が、それぞれ日本代表に選ばれた。満洲の短距離王者増田は残念ながら予選落ちした。満俱選手でもある増田は、「猛牛の突進するような力強い」走り方をする人だったが、予選当日はグラウンドが雨で柔らかくなり、スパイクが土に食い込んで、足腰のバネがきかず、タイムが伸びなかった。増田に一度も勝ったことがない田島が代表に選ばれたことを、増田は「自分のタイムが決していい加減な田舎タイムではなかったことを田島君が証明してくれたわけだ」と言って、自分を慰めていた。大連での選手慰安会で増田はこう挨拶したという。「たった十一秒間だけ走るために、一年三百六十五日、精進を重ねて猛練習する、それで勝てばいいが、負けでもしたらそれっきりだ、それが勝負の世界に生きるものの宿命だろうか」<sup>549</sup>。これは実満戦にも当てはまることだった（第 3 話参照）。

極東大会で田島は 100 ヤード走予選 C 組に登場、カタロンに次ぐ 2 位で決勝に進出した。優勝はカタロンで、3 連覇を果たした。4 位に入った神戸鉄道局の谷三三五は翌月に満鉄に入社する<sup>550</sup>。女子水泳選手を引率して極東大会に参加していた岡部の幹旋と

<sup>547</sup>「満洲競技連合主催の全満陸上競技」『大連新聞』1922 年 10 月 12 日。

<sup>548</sup>「意気昂く遠征の途にけふ満洲選手の二番隊」『満日』1923 年 4 月 21 日。

<sup>549</sup>佐藤真美「水泳部の思い出」。勸修寺生「極東オクムピック遠征記」『読書雑誌』10 卷 8 号、1923 年 7 月、64-66 頁は、増田の敗因は練習中に足を挫いたことにあるとする。

<sup>550</sup>「満鉄に集る運動界の覇者」『大連新聞』1923 年 6 月 25 日。

思われる。山内が出場した砲丸投では、4位の猿丸吉雄（同志社大学）が1927年に、このときは入賞を逃した溝川末吉（山口高商）が1925年に、満鉄に入社する<sup>551</sup>。

(2) 「日本のフィンランド」

極東大会から2カ月経った7月末、岡部の幹旋で東京帝大陸上競技部が来満した。東京帝大軍の主将は大村紀二で、メンバーの島村鉄也、石井鈞三はそれぞれ一高、水戸高校で岡部のコーチを受けていた<sup>552</sup>。満洲軍は岡部コーチ、勸修寺允雄マネージャーのもと猛練習を積み、ベストメンバーで挑んだ<sup>553</sup>。結果は43.5対28.5で、満洲軍が陸上競技で最初の対外試合を制した。谷三三五は短距離3種目と低障害で1位となり、満洲軍の勝利に貢献した。東京帝大は主将の大村の怪我が響いた。大村は極東大会100ヤード決勝で谷、田島を抑えて3位でゴールしていた。今回も谷、田島との勝負が期待されたが、最初の種目100mで怪我をし、後の競技に出ることができなかった。東京帝大で一人気を吐いたのが石井で、走高跳と棒高跳に優勝した（石井は1927年に満鉄入りする）<sup>554</sup>。東京帝大との対抗戦は「陸上運動と言へば野球のみに限られて居た」満洲スポーツ界に大きな刺激を与え、同年秋には全満中等学校陸上競技大会が開かれた<sup>555</sup>。10月28日に開かれた第2回全満陸上競技選手権大会では200mで谷が22秒フラットと極東記録を更新したほか、6つの満洲新記録が樹立された<sup>556</sup>。

1924年7月、今度は早大競走部が満洲軍に挑戦した。早大軍には円盤投の沖田芳夫、槍投の笠原寛、棒高跳の森岡佐喜生、1500mおよび5000mの縄田尚門ら斯界の第一人者が揃っていた。一方、満洲軍は、谷がオリンピック出場のため欠場し、戦前の予想では早大がやや有利といわれていた。しかし、蓋を開けてみれば満洲軍がフィールドで好記録を連発し、トラックでも短距離とリレーを制し、45対32.5で早大軍に勝利し

<sup>551</sup>「学生相撲の横綱猿丸君が結婚して満鉄入り」『満日』1927年1月30日；「砲丸投げの名手溝川氏満鉄入り」『大連新聞』1925年1月29日。

<sup>552</sup>拙著『国家とスポーツ』85-100頁。

<sup>553</sup>「近く帝大陸技の猛者連が長駆大連を衝く」『満日』1923年6月21日。

<sup>554</sup>「凱歌満洲軍に揚がる」『満日』1923年8月2日；花充地「東京帝国大学対満洲陸上競技対抗試合」『読書会雑誌』10巻10号、1923年9月、30-31頁。

<sup>555</sup>「全満中等学校陸上競技大会」『大連新聞』1923年8月3日。

<sup>556</sup>「全満洲競技連合主催の全満陸上選手権大会」『大連新聞』1923年10月29日。

た。とくに目立ったのは佐川親雄（旅順工大）で、槍投と走幅跳に満洲新記録で優勝した。また、仲田周一の低障碍 26 秒 0 は日本新記録であった<sup>557</sup>。翌 8 月には朝鮮軍を大連に迎えて満鮮対抗陸上競技会が開かれた。満洲軍は 120.6 対 71.3 と大差でこれを破った<sup>558</sup>。東京帝大、早大、朝鮮に勝利した満洲陸上界は「今日ではもう押も押れもせぬ日本の重要な地位を占むる様になつた<sup>559</sup>」。

1924 年秋、第 1 回明治神宮競技大会が開かれることになり、満洲体育協会は短距離の谷三三五、浦野勇、田島貞夫、吉田俊秀、先崎久雄、中距離の沖光義、ハードルの仲田周一、フィールドの佐川親雄を派遣した。仲田が 200m 低障碍で優勝、田島が 100 と 200m で 2 位、吉田が 400m で 2 位（谷と浦野は不出場）と、満洲選手は優秀な成績を残した（パリオリンピックの選手選考をめぐるいわゆる「十三校問題」の影響で学生選手が少なかったことも一因であろう）<sup>560</sup>。

これまで見てきたような満洲軍の活躍は内地の陸上競技界に強い印象を与えていた。1925 年 3 月に発足した全日本陸上競技連盟で満洲は議決権 9 を割り振られたが、これは関東（7 府県）の 25、近畿（5 府県）の 16 に次ぐ数で、東海（6 県）と同数である。また、外地では朝鮮が 5、台湾が 3 であった<sup>561</sup>。日本人人口が 20 万程度しかいない満洲にかくも多くの議決権が割り振られたことは、日本の陸上競技界における満洲の評価の高さを示しているだろう。

1925 年の陸上競技シーズンは極東大会満洲予選から始まった。この大会はハンディキャップ方式で開かれ、一流選手にはペナルティーが課された。谷、仲田、吉田の 3 人と、岡部の引きで満鉄に入社したばかりの溝川末吉の計 4 人が満洲代表に選ばれ、東京での二次予選に派遣された<sup>562</sup>。二次予選では、低障碍で仲田が一次予選、吉田が二

<sup>557</sup>「早大軍惜敗」『満日』1924 年 7 月 31 日；寺島富一郎「早大対満洲陸上競技の成績評」『満日』1924 年 8 月 2-3 日。

<sup>558</sup>「満鮮陸上競技会」『満日』1924 年 8 月 18 日。

<sup>559</sup>「多士済々の満洲陸上選手」『満日』1924 年 10 月 3 日。

<sup>560</sup>「神宮競技出場満洲の選手決定」『満日』1924 年 10 月 13 日；「神宮競技に於る満洲選手の成績」『満日』1924 年 11 月 6 日；「神宮競技で満洲の意気を見せた仲田選手帰る」『満日』1924 年 11 月 11 日。

<sup>561</sup>大日本体育協会編『大日本体育協会史』下巻、大日本体育協会、1937 年、846 頁。

<sup>562</sup>「満洲の予選大会」『満日』1925 年 3 月 6 日；「極東大会の満洲予選競技」『満日』1925 年 4 月 6 日。

次予選で転倒し、失格に終わるが、吉田が推薦という形で日本代表に選ばれた。谷と溝川も順当に選出された<sup>563</sup>。岡部は監督として陸上競技日本代表チームを率いることになった。マニラでは不公平な審判に悩まされ、ついに岡部は選手とともに競技場を引きあげた。いわゆる極東大会退場事件である。大日本体育協会は、岡部平太、加賀一郎、井街謙、斎辰雄、小川良三、谷三三五、田尻祐之、吉田俊秀、楢崎正雄、小林武夫、浅坂正一、斎藤七郎、溝川末吉を代表チームから除名した。こうして大日本体育協会首脳部は選手の分断を図ったが、縄田尚門以外の陸上競技選手 53 名は岡部と行動をとともにした<sup>564</sup>。

1925年8月下旬、京都帝大陸上競技部が来征した。京都帝大は井街謙の活躍で低障碍、高障碍で満洲を上回り、満洲は溝川末吉が日本新記録（12m39）をマークした砲丸投と1500mで京都帝大を上回った。満洲軍、京都帝大軍とも33点の同点で迎えた800mリレー、走者は満洲側が仲田周一、谷三三五、吉田俊秀、小数賀源一郎、京都帝大側が内藤資忠、望月信次、谷岡龍一、原伝。結果は満洲軍が敗れ、対外試合初黒星を喫した<sup>565</sup>。谷はこれが満洲で最後の試合となった。

1926年8月7日、金栗四三監督率いる東京高師陸上競技部が来征した。ハードルの福井行雄、槍投の尾崎剛毅と2人の日本記録保持者を擁し、11月に開かれる関東学生陸上競技選手権大会で早大、慶大に次ぐ3位の成績を取めることになるチームである<sup>566</sup>。一方、満洲軍は、400mや五種競技で活躍していた吉田俊秀が前月にアキレス腱を断絶し、戦力が大きく損なわれていた（吉田はこれで選手生命を絶たれる）<sup>567</sup>。28対29で満洲軍の惜敗というのが大会前の予想だった。大会序盤、永谷寿一が1500mで4分20秒2の満洲新記録を樹立した。永谷はこの年春に明大を卒業し消費組合に入社した新陣で、ほどなくしてフィンランドの英雄ヌルミ選手にちなんで、「小ヌルミ」と呼ばれるようになる<sup>568</sup>。22.5対19.5と満洲軍リードで、棒高跳、槍投、800mリレーを残

<sup>563</sup>「極東競技に出場の選手」『大連新聞』1925年4月21日。

<sup>564</sup>拙著『国家とスポーツ』142-158頁。

<sup>565</sup>「小雨にもめげず火花散る接戦」『満日』1925年8月30日。

<sup>566</sup>朝日新聞社編『運動年鑑』昭和二年度、197-198頁。ただし、早大の強さはダントツで、その得点は2位の慶大と3位の東京高師の合計を上回っていた。

<sup>567</sup>「四百米突の記録保持者吉田選手負傷す」『満日』1926年7月8日。

<sup>568</sup>「日本記録保持者永谷氏来連」『満日』1926年3月28日；「小ヌルミの出現」『満日』1926年8

すのみとなったが、突然の豪雨で中止となった<sup>569</sup>。東京高師のメンバーのうち、槍投の重田為司が1927年、ハードルの福井行雄が1931年に、それぞれ弥生高女、奉天中学の教師として来満する<sup>570</sup>。

1926年8月22日、第2回満鮮対抗陸上競技会が京城で開催された。全満陸上競技チームとして初めての遠征である。一行は19名、大連組は貝瀬謹吾、奉天組は久保田晴光、撫順組は山岡信夫が率い、岡部がコーチをつとめた。結果は77対25で満洲軍が圧勝した。10マイルマラソンではコースが原因でかなり揉めた。「朝鮮側では正規の<sup>マ</sup>規定法をも知らず途中一哩半程は朝鮮人部落で車馬の往来激げしくとても走る事の出来ない様な処がある等全くお話にならない程で選手の最も重大視して居るレコードの問題等は顧り見ず全く閉口」したが、紳士的にレースを戦ったと仲田周一主将は語る<sup>571</sup>。

1926年の第3回明治神宮体育大会の陸上競技に満洲体育協会は山田直之介監督、岡部平太コーチ、仲田周一、小敷賀源一郎、中村繁、岡健次、浜田常盛、永谷寿一、浅坂正一、柴田義敏、今井利武からなる選手団を派遣した。満洲軍は一般男子19種目中4種目(200m(岡)、5000m(永谷)、800mリレー、棒高跳(浅坂))で優勝した。これは11種目で優勝した関東に次ぐ成績である。しかもこれは、学生を主体とし、多数の選手がエントリーした地元関東とは対照的に、社会人主体のわずか9名の選手が成し遂げた成績である。その活躍が「内地の人々の驚異となつた」のは当然であろう。山田監督は今後陸上競技をもっと普及し優良な選手を多数内地に送れば、「内地競技界を征服するのさして難事にあらざる」と自信を持った<sup>572</sup>。

さて、明治神宮大会で活躍した満洲選手とはどのような人たちだったのか。以下、彼らの経歴を簡単に紹介しておこう。

---

月28日。

<sup>569</sup> 岡部平太「東京高師対満洲陸上競技概評」『読書会雑誌』13巻9号、1926年9月、135-137頁。

<sup>570</sup> 「満洲の運動家重田為司君」『満日』1927年12月24日；「小山選手近く来連」『満日』1931年4月23日。

<sup>571</sup> 「満鮮対抗陸上競技大会」『満日』1926年8月12日；「朝鮮軍は遂ひに満洲軍の敵にあらず」『満日』1926年8月23日；「優勝した満洲軍かへる」『満日』1926年8月25日；高橋俊夫「満鮮対抗陸上競技大会」『読書会雑誌』13巻10号、1926年10月、134-138頁。

<sup>572</sup> 「五千の覇者永谷選手けふ帰連す」『満日』1926年11月11日；山田直之介「神宮競技を見る」『読書会雑誌』14巻1号、1927年1月、164頁。

仲田周一は1899年生まれ、米子中学時代に山陰オリンピック大会で優勝した記録があるが、全国的には無名であった。1918年秋に満鉄に入社するが、陸上界での活躍は1924年以降である。短距離とハードルに秀でたが、のち短距離一本に絞ることになる<sup>573</sup>。1928年日仏競技にも参加、1931年の引退後の経歴は不明。

小数賀源一郎は満鉄社員で、1924年から1931年まで短距離のスペシャリストとして満洲を代表した。その走法は猛烈な手の振りから「ゲンコツ」と評された。引退後は満洲陸上競技連盟常務幹事、関東州体育協会主事、満洲代表チームの監督などを務めた<sup>574</sup>。

中村繁は熊本の鹿本中学出身で、小学校教諭であった。1925年の第2回明治神宮競技大会に熊本代表として出場し、青年団100mで3位に入賞（1位は南部忠平）、金栗四三から将来恐るべきスプリンターとの折り紙をつけられた。満鉄社員。満洲には優秀な短距離選手が多かったので埋もれてしまった観があるが、1934年の全満陸上選手権200mでもなお3位に入賞する力を持っていた<sup>575</sup>。

短距離と走幅跳を得意とする岡健次は1905年生まれ、大分中学生徒だった1920年に全国中等学校競技大会100mで優勝した。大分高商時代には日本代表として第6回極東大会に出場した。1926年春に満洲医大書記として来満。1927年の第7回極東大会、1928年の日仏大会、1930年の第9回極東大会で日本代表を務めた。満鉄社員として各地を転々とし、新京時代には新京体育連盟理事も務めた。1937年に協和会に移り、満洲国の地方行政に携わった<sup>576</sup>。

浜田常盛は1903年に鹿児島県に生まれる。第2回明治神宮競技大会では、青年団1500mで2位に入賞している。浜田がその天分を伸ばすのは来連して満鉄に入ってからで、中距離のエースとして活躍、日仏競技日本代表に選ばれた。1500mでは第6、7回明治神宮大会の2連覇、1931年からの全日本選手権4連覇が光る。ロサンゼルスオ

<sup>573</sup>山本邦夫『近代陸上競技史』上巻、752頁；「若人の春（一）」『満日』1928年3月27日；「いづれ劣らぬ粒扱りの栄ある我代表選手」『満日』1928年9月22日；「降雨に寒気加はり見るべき記録なし」『満日』1934年10月1日。

<sup>574</sup>「若人の春（四）」『満日』1928年3月30日。

<sup>575</sup>「目前にせまつた祝賀運動会に活躍する花形（四）」『満日』1926年9月17日；「遠征早大軍」『新京日日新聞』1933年7月18日。

<sup>576</sup>「満洲の運動家」『満日』1927年12月29日。



リンピックにはマラソンでのエントリーを目指し、1932年4月の蔡大嶺マラソンで2時間34分57秒の「日本新記録」をマークするが、オリンピック予選は8位に終わり、選に漏れた。1934年もなお1500mと5000mで満洲の年間最高記録を出していた。ベルリンオリンピックのマラソン予選に出場するが9位に終わった。800m(1分59秒8)、1500m(4分6秒8)、マラソンの記録は長らく満洲記録として残った<sup>577</sup>。

永谷寿一は1903年生まれ、明大在学中に5000mと10000mの日本記録を樹立し、パリオリンピックにも出場した。1926年春に明大を卒業後に来連し、満鉄社員消費組合に入社した。「満洲は各種の運動が非常に盛であると云ふので是非満洲に行きたいと思つてゐた矢先満鉄消費組合の招聘を受け」と永谷は満洲に来た経緯について語っている<sup>578</sup>。満洲に来てからはマラソンにチャレンジし、冬の間も毎日のように旅大道路(旅順・大連を結ぶ道路)を走り、アムステルダムオリンピック出場を目指した。「小ヌルミ」と呼ばれたように、その走りは機関車に喩えられた<sup>579</sup>。永谷はアムステルダムオリンピック(10000mとマラソン)、1930年の第9回極東大会(10000m)に出場したが、入賞することはできなかった。引退後は、指導者として満洲陸上界の発展に貢献した。

棒高跳の浅坂正一は堺中学から関西学院に進んだ。関学在学中に出場した1925年の第7回極東大会では、大日本体育協会の岸清一会長に代り、除名を申し渡された13人のひとりとなった。翌1926年より、関学を退学して撫順炭鉱で働くことになったが、おそらく岡部が彼の反骨精神を買って呼び寄せたのだろう<sup>580</sup>。

三段跳の柴田義敏は鹿児島工業出身で、内地では無名の選手だったが、満洲でその才能が開いた。彼の最初の活躍は1926年の明治神宮体育大会で、織田幹雄に次ぐ2位になっている。成績は13m75だった。1930年の極東大会では、織田、立中善助に次

<sup>577</sup>「満洲の運動家」『満日』1927年12月18日；「若人の春(四)」『満日』1928年3月30日；「期待さるゝ日仏競技会へ」『大連新聞』1928年9月21日；「マラソンに精進する」『満日』1931年5月4日；「期待された浜田選手日本記録を破る」『満日』1932年4月25日；「本年度の満洲五傑(三)」『満日』1934年2月28日；『満蒙年鑑』昭和十五年版、459頁；満蒙資料協会編『満洲紳士録』第三版、満蒙資料協会、1937年、565頁。

<sup>578</sup>「日本記録保持者永谷氏来連」『満日』1926年3月28日。

<sup>579</sup>「春野シーズンに活躍する人々」『満日』1927年2月24日；「満洲の運動家」『満日』1927年12月10日。

<sup>580</sup>「若人の春(七)」『満日』1928年4月4日。

いで3位に入った。2位の立中は前年まで満洲で活躍していた選手で、このときは大阪市岡青年団に所属していた<sup>581</sup>。この年、岡部は柴田をこう評している。「天性の素材から云つて日本の水準線を遥かに抜くものに撫順の柴田君がある、特に三段跳の跳躍力は織田君去つた後、南部君に次ぐ者は当然君でなければならぬ」、しかし今年はほとんど伸びなかった、練習不足だ<sup>582</sup>。1931年、柴田は14m93を跳び、日本選手権を獲得した。1933年まで満洲の三段跳チャンピオンであった<sup>583</sup>。

最年少の今井利武は大連中学を経て満洲医大に在学、満洲生まれの満洲育ちである。今井に誘われて満洲医大陸上競技部に入ったという成毛侃爾によれば、今井は練習熱心で、零下十数度のなかでも奉天の街を駆け回り、雨の日は体育館で体操やバレーボール、練習が終わると部員を連れて食べにいったというから面倒見のいい先輩だったようだ。1931年に満洲医大を卒業するのと同時に競技界から引退し、大連医院で内科医をしていたが、1938年に腸チフスで亡くなった<sup>584</sup>。

以上、満洲代表の9名の履歴を概観した。満洲育ちは今井だけで、あとの8名は内地から来満した選手である。来満以前に日本代表として活躍した永谷、岡、浅坂のような選手がいる一方、内地ではほとんど無名だった仲田、小数賀、柴田のような選手もいる。柴田の来満時期は不明だが、仲田を除く6名が来満1年未満であった。満洲陸上競技界の黄金時代はこの1926年来満組によってその基礎が築かれることになる。

1927年には400mの浦野勇が兵役から戻ったほか、石井釦三、猿丸吉雄、立中善助、田尻常蔵らの新戦力が加わった。東京帝大の石井については先述した。同志社大学出身の猿丸は学生相撲のチャンピオンとして有名であったのみならず、砲丸投の選手として第6回極東大会に出場している。立中は九州出身の三段跳の選手である<sup>585</sup>。

<sup>581</sup>「若人の春（八）」『満日』1928年4月5日；大日本体育協会編『第九回極東選手権競技大会報告書』大日本体育協会、1930年、43頁。

<sup>582</sup>岡部平太「一九三〇年度之満洲陸上競技界」『満日』1930年10月8日。

<sup>583</sup>「銓衡発表された陸上競技の五傑（3）」『満日』1933年12月13日。

<sup>584</sup>山田直之介「神宮競技遠征記（一）」『満日』1926年11月7日；成毛侃爾「陸上競技部の思い出」輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ』589-591頁所収；「今井利武氏」『満日』1938年1月30日。

<sup>585</sup>「陸上競技連盟冬期練習開始」『満日』1927年1月11日；「学生相撲の横綱猿丸君が結婚して満鉄入り」『満日』1927年1月30日；「若人の春（八）」『満日』1928年4月5日。

岡部平太氏の御世話で多年憧れてみた満洲へ来ることが出来る様になつて喜んでやつて来ました兎に角満洲の陸上競技否運動界は内地のスポーツマンの羨望の的で私が神戸を出帆する時に岸壁まで見送つて呉れた諸君は「我々も何とかして満洲に行きたい」と云つて居た兎に角満洲に名コーチャー岡部さんの居られることは満洲軍に数段の強味を与へるものと思つてゐる私も今春のシーズンから同氏のコーチを受けて大いに勉強して見たいと思つてゐる<sup>586</sup>。

とは、来連時の田尻の言葉である。これを以て、内地陸上選手の満洲観の一端をうかがうことができよう。

1927年9月、明大競走部が来連した。明大一行には極東大会に出場した竹内兵蔵、北角昌利、田中義雄がいたほか、権泰夏と田中真茂が含まれていた。権は明大卒業後の1932年にマラソンの日本代表としてロサンゼルスオリンピックに参加、のち満鉄に入社する<sup>587</sup>。田中は1935年に満洲国体育連盟主事に就任する<sup>588</sup>。満洲軍は岡健次と浅坂正一を兵役のため欠いていたものの、62対19で明大に大勝した<sup>589</sup>。

1927年の年末より満鉄は日仏対抗陸上競技を大連で開催する計画を進めていた。その創案者にして推進者の岡部は、翌年春の座談会で満洲の陸上競技界について聞かれ、「満洲の競技界が国際的地位に置かれてゐるといつても過言でないと思ふネ……………僕は満洲運動界のために日本の連中を大いに刺戟して満洲を中心として北欧の天地に飛躍出来るやうに努力するんだネ」と答えている<sup>590</sup>。日仏競技はまさにこうした考えを実行に移したものであったのであり、実際、この計画は、蚊帳の外に置かれた大日本体育協会を大いに「刺戟」し、一時は開催が危ぶまれることになる<sup>591</sup>。

1928年9月22日から5日間、大連で開かれた一連の御大典奉祝運動会は、満洲で開催されたスポーツの競技会としては空前の規模のものだった。最初の2日間は日仏対抗競技で、フランス選手20名、日本選手30名（うち、満洲選手は岡健次、浜田常盛、

<sup>586</sup>「陸上競技界の花形田尻君来る」『満日』1927年2月27日。

<sup>587</sup>「権泰夏選手就職を求めに」『満日』1933年8月19日。

<sup>588</sup>「新興満洲国に骨を埋める覚悟」『新京日日新聞』1935年11月12日。

<sup>589</sup>「精鋭を選つて両豪の対戦」『満日』1927年9月6日；「六十二対十九で満洲軍勝つ」『満日』1927年9月12日。

<sup>590</sup>「満日スポーツ座談会（八）」『満日』1928年3月11日。

<sup>591</sup>拙著『国家とスポーツ』188-194頁。

田尻常蔵、立中善助、永谷寿一、堀鉦一郎、仲田周一の7名)が参加した。初日は満洲勢が健闘し、100mで岡、800mで浜田が優勝、棒高跳で田尻が2位に入った。36対29で迎えた2日目、満洲勢は負傷した織田幹雄に代わって三段跳に出場した立中が2位、5000mで永谷が3位に食い込んだ。ここまでで74対71と日本が3点をリード。残る種目は800mリレー。フランスは勝てば引き分けに持ち込めたが、日本が競り勝ち、総得点78対72で日本の勝利が確定した<sup>592</sup>。

大会3日目には国際オープン競技と全満選手権が開かれた。国際オープンにはフランス選手のほか、天津のエリック・リデル(パリオリンピック400m金メダリスト。中国で宣教師をしていた。映画「炎のランナー」で有名)、ハルビンの投擲選手ヴィクトル・アンフィノゲノフ、フィリピンの短距離選手アントニオ・ニカノルらが招待された<sup>593</sup>。リデルは200mと400mに優勝したが、とくに200mのタイム22秒4は、日仏競技の優勝タイム22秒8(吉岡隆徳)を上回っていた。大会4日目は全満の中等以上の学生による州内外学生対抗で、中等学校は州内、大学専門学校は州外が勝った。大会5日目は州内外生徒児童対抗競技で、小学校41校、公学堂16校、女学校12校が参加、いずれも州外が勝った。この5日間の参観者は15万人に達したという<sup>594</sup>。

日仏競技に出場した日本人選手のうち吉岡隆徳、津田晴一郎ら8名(在満の岡健次、堀鉦一郎を含む)と全満選手権に出場した在満日本人選手は、奉祝運動会が終わると奉天に移動し、張学良が主催する国際招待競技大会(国際選手歓迎運動会)に参加した。この大会は、満洲の日本人と東三省の中国人によるスポーツ交流の嚆矢と位置づけられるもので、「スポーツに依つて新支那の青年と新日本の青年が精神的に結ばれ、新満洲の建設に貢献する事を希望する遠大なる理想」から生まれたものであった<sup>595</sup>。中国側

<sup>592</sup> 拙著『国家とスポーツ』197-199頁。

<sup>593</sup> 「近づいた国際競技目指して馳せ参ずる強豪」『満日』1928年8月25日。

<sup>594</sup> 「小学校、公学校共に州外の勝利に帰す」『満日』1928年9月27日。

<sup>595</sup> 「スポーツ精神で日支青年を結ぶ」『満日』1928年9月26日;「国際招待競技のプロと役員決る」『満日』1928年9月27日;「五千米に千円の懸賞」『満日』1928年9月30日。拙稿「戦争・国家・スポーツ」(『史林』93巻1号、2010年1月)と「満洲における日中スポーツ交流」では、この国際招待競技大会のあと岡部が張学良の私邸に招かれたとしたが誤りである。岡部が私邸に招かれたのは1929年5月29日から6月1日にかけて開かれた第14回華北運動会の折である。ここに訂正する。

張学銘、日本側岡部の尽力で、東北大学のバスケットボールチームが来連するのはこの年11月のことである<sup>596</sup>。

1928年には明大の松重秀雄(400mのスペシャリストで極東大会にも参加)と京都帝大の星名泰(極東大会五種競技で優勝)を迎え、さらに1929年には早大の南部忠平(短距離と跳躍の第一人者。アムステルダムオリンピック三段跳で4位入賞)と東京帝大の鶴岡鶴吉(水戸高校出身のハードラーで、日仏競技3位)が来満した。1929年の満洲軍は間違いなく史上最強の布陣であった。

### (3) 絶頂期を過ぎる

1929年8月、京都帝大陸上競技部が4年ぶりに来満した(京都帝大は同年5月の全日本学生大会で5位)。鈴木武主将は「岡部さんがコーチですから全くの強敵ですよ。然し先年勝つて居るので先輩に対しても是非勝ち度いものです」と勝利への意欲を見せた<sup>597</sup>。その岡部は「満洲の短距離の堅陣を京大が完全に破り得たらそれは京大の喜びであるばかりでなく、日本短距離界の喜びである」と豪語していた<sup>598</sup>。京都帝大は100mと200mの日本記録保持者相沢巖夫を擁していたが、対する満洲軍は南部、岡、仲田、今井と多士済々であった。注目の100m、序盤は相沢が先頭に立つも、中盤に南部がこれを抜き、ゴール直前で岡が相沢をかわし、満洲勢が完勝した。結局、100対60で満洲軍が雪辱を果たした。京都帝大が勝ち越したのは円盤投のみであった<sup>599</sup>。鈴木武はのち対満事務局に入り、大満洲帝国体育連盟の日本駐在委員を務める<sup>600</sup>。走高跳で南部と優勝を分け合い、走幅跳で南部に次いで2位となった長島満はのち満洲保健体育協会主事として来満することになる。

<sup>596</sup>「東北大学生が大連に来征」『満日』1928年11月16日；「奉天から籠球選手」『満日』1928年11月17日；「遠征第一戦に東北大学軍勝つ」『満日』1928年11月28日。

<sup>597</sup>「京大陸上部けふ来連」『大連新聞』1929年8月15日。

<sup>598</sup>岡部平太「京大対全満州百米決勝の予想」『大連新聞』1929年8月16日；岡部平太「南満洲より」『運動界』10巻8号、1929年8月。

<sup>599</sup>「京大満洲陸上競技第一日」『満日』1929年8月18日；「満洲軍奮戦し京大遂に敗る」『満日』1929年8月19日。

<sup>600</sup>高嶋航・金誠編『帝国日本と越境するアスリート』塙書房、2020年、261-264頁(執筆は藤田大誠)。

1929年10月5、6日、東京で日独対抗陸上競技が開催された。日本側31名の代表のうち、満洲からは南部忠平、岡健次、浜田常盛が選ばれた（岡は兵役の関係で参加不能となった<sup>601</sup>）。東京での試合が終わると、ドイツ選手一行は京城に移動し、10月17日に朝鮮選手も交えて日本代表との第二戦を行った。満洲選手も10名が参加を予定していたが、満洲体育協会と朝鮮体育協会の間に行き違いが生じて、満洲体育協会は参加を拒絶した<sup>602</sup>。10月19、20日には奉天で、張学良の主催による日支独国際陸上競技大会（中徳日国際競技大会）が開かれ、在満日本人選手も多数出場した。張学良が力を入れた大会だけあって、劉長春、孫桂雲ら中国人選手の活躍が見られた。のち中国最初のオリンピックとなる劉長春は、初日の200mでウィッヒマンに次ぐ2位。いささかフライング気味だったが、100m付近までトップに立ち、ウィッヒマンに抜かれたものの、日本の中島玄太郎を抑えた。翌日の100mでもエルドラッヘルに次ぐ2位。日本の阿武巖夫は劉とほぼ同着だったが3位と判定された。記録的には南部忠平の走幅跳7.55mも特筆すべきだが、残念ながらグラウンドが未公認のため、この記録は公認されなかった。女子では人見絹枝が圧倒的に強かった。新聞でこの競技会のことを知ったという人見は、「高見静子さんにお会ひしてその走り振りを見たい」と考えて奉天にやって来た。人見は60mを7秒5（世界新記録）、100mを12秒で優勝した。いずれも2位は高見静、3位は孫桂雲だった。表彰式では、人見に与えられるはずの優勝カップが、岡部の独断で、高見に与えられたことが問題となった。人見は正式にエントリーをしておらず、女子競技は内地の選手を入れないことになっていたのだから、人見の名譽を尊重して「人見さんの御辞退により」と言い添えたのが誤解された、と岡部は弁解する。内地の選手は憤慨し、岡部が「神聖なるべき運動競技に私心をさしはさ」んだとして、「競技スピリットの冒瀆」だと非難した<sup>603</sup>。

10月末、明治神宮体育大会に男女12名の選手が派遣された。南部が走幅跳で、鶴岡が110mハードルで優勝したほか、柏木宝丸（400mハードル）、柴田義敏（三段跳）、高見静（100m）、満洲チーム（1600mリレー）が2位に入るなど、陸上満洲の強さは

<sup>601</sup>「対独陸上競技日本は苦戦」『満日』1929年9月13日。

<sup>602</sup>「日独対抗競技朝鮮大会」『満日』1929年8月21日；「朝鮮の日独競技へ満洲選手出場拒絶」『満日』1929年10月9日；「参加招電を拒絶する」『満日』1929年10月10日。

<sup>603</sup>「岡部平太氏が独断で進言」『大連新聞』1929年10月22日。

十分に発揮されたが、それでも林田学監督によれば「結果に於て期待に叛いた成績」であった<sup>604</sup>。南部はそのまま日本にとどまり、満洲には帰ってこなかった。南部が満洲を離れた原因はいくつかある。本人の言によれば、中国語の勉強がいやだったこと、「内地から隔絶されているという距離感が、オリンピックを狙う立場にはなにか置き去りにされたような寂寥感を抱かせたこと」、満鉄社内の学閥争いの醜さに愛想をつかせたことなどである。岡部は南部の引き留めに奔走し、高見静との縁談まで持ち出したが(高見は美人で有名だった)、南部の決意は固かった。南部の離満は満洲陸上競技界にとって大きな打撃となった<sup>605</sup>。それから一年経って、岡部は次のように満洲陸上競技界の現状を語っている。

谷来り谷去る。溝川来り溝川去る、南部来り南部去る、彼等の逸材を最後まで抱擁し得ない満洲を淋しく思ふ、やつぱり満洲は狭い、満鉄は小さいんだと思ふより外仕方がない、満洲は心掛けのよいスポーツマンにとつては自然から云つても社会的環境から云つてもそんなに不利な立場にはないせめて彼等の逸材を日本のコセ\／した処に置くよりも満洲に置いて伸びる処まで伸びさせてやつたならと思はぬでもなかつた。・<sup>マ</sup>・満洲は世界から隔離されて居る日本のスポーツ界から更に隔離されて居る、隔離されて居ることの幸福と不幸は十分に考へて見なければなるまい<sup>606</sup>。

1930年8月、慶大競走部が来征した。この年5月の全日本学生大会を前に、慶大は在学証明書の不提出問題により大会出場を禁止されてしまった。この大会はダルムシュタットで開かれる国際学生陸上競技選手権大会の予選を兼ねていたため、学生の主力選手がヨーロッパに出かけるのを尻目に、満鉄の招聘に応じて満鮮遠征に出かけることになったという次第である<sup>607</sup>。慶大の有力選手として、100m、200mの阿武巖夫、1500mの津田晴一郎と北本正路、走高跳の小野操がおり、なかでも円盤投は斎藤真衛、黒田保次、板橋政治郎と日本のベストファイブに入る選手のうち3人を揃えていた。

<sup>604</sup>「地方青年団の著しい進境」『満日』1929年11月11日。

<sup>605</sup>南部忠平述、山内リエ編著『あおく感激の日章旗：私の陸上競技生活』ベースボール・マガジン社、1956年、129-144頁。

<sup>606</sup>岡部平太「一九三〇年度の満洲陸上競技界(上)」『満日』1930年10月8日。

<sup>607</sup>「慶応陸上満洲へ」『読売新聞』1930年7月3日。

しかし、津田が家事の都合で遠征に参加できず、北本が食あたりで1日目を欠場するなど、慶大はベストな状態で臨むことができなかった。それでも、69.5対86.5と17点差で負けたのは予想外だっただろう。岡部監督も慶大の故障に同情している<sup>608</sup>。その後、慶大は撫順で州外チームと対戦して59対45でこれを破り、京城では全朝鮮を75.5対53.5で下して面目を施した。

1931年6月13、14日、奉天国際運動場の開場を記念して国際競技会が開催された。満洲や朝鮮の日本人、中国人、ハルビンのロシア人、奉天の英独人らが参加し、陸上競技のみならず、サッカー、バレーボール、野球などの競技が実施された。陸上競技では朝鮮勢の活躍がめざましく、100mで矢野栄、槍投で霜島健一、走高跳で三浦安治、1000mメドレーリレーで朝鮮チームが優勝した。1500mでは馮庸大学の于希渭と東北大学の劉古学が永谷寿一を抑えて1位と2位を占めるなど、中国勢の健闘も見られた。

朝鮮勢の躍進は、満鮮対抗競技復活への布石として8月23日に奉天国際運動場で開かれた満鉄対全京城戦でも示された<sup>609</sup>。この試合で全京城は77.5対67.5で満鉄を破った。満鉄の敗因は、ベストメンバーを揃えられなかったこともあるが、中堅層の弱さにあろう。リレーを除く14種目のうち満鉄選手は8種目で優勝（走高跳は朝鮮選手と優勝を分け合った）したにもかかわらず、二番手以下の選手が続かなかった。記録面で唯一の収穫は中障碍の福井行雄による日本記録更新（56秒8）である。福井は1920年代半ばに東京高師で活躍し、第7回極東大会にも参加したことがある選手で、1931年春に奉天中学校に赴任して競技界に再び咲いた<sup>610</sup>。同年夏には、短距離の第一人者村上国平（東京帝大出身）も満鉄に入社したが、負傷のため全京城戦には参加できなかった<sup>611</sup>。

<sup>608</sup>「総得点十七点の差で陸の覇者慶大敗る」『満日』1930年8月11日。

<sup>609</sup>満鮮対抗陸上競技は1924年8月15-16日に大連で第1回大会、1926年8月22日に京城で第2回大会が開かれた。第3回大会は、「ある事情」のため中止となっていた（「鮮鉄大連対抗の競技メンバー決る」『満日』1930年8月27日；「鮮鉄局友会の陸上チーム来連」『満日』1930年9月7日）。

<sup>610</sup>「ハードルの福井選手近く満鉄に入社」『満日』1931年3月27日。

<sup>611</sup>「村上選手満鉄へ」『満日』1931年7月9日；「全京城対全満鉄対抗競技の予想」『満日』1930年8月22日。



満鉄陸上競技部は慶大の招聘を受け、10月に内地に遠征する予定だった<sup>612</sup>。全京城との試合はその前哨戦としての意味もあったが、満洲事変の勃発により実現しなかった。満洲事変にもかかわらず、明治神宮体育大会への選手派遣は実施され、浜田常盛、柴田義敏、浅坂正一、福井行雄、伊藤清八郎、坂田政代の6名が参加した。1500mでは津田、北本の欠場にも助けられて浜田が優勝、三段跳では柴田がファウルを連発した織田幹雄を抑えて優勝した。中障碍で福井、砲丸投で坂田がそれぞれ2位に入り、満洲勢はそれなりの存在感を示した<sup>613</sup>。とはいえ、新人の不在は覆うべくもない事実であった。

今年は例年に比べて満洲陸上界は甚だ寂寥の感があつた、対内地大学チームとの対抗ゲームのなかつたことも一因であるが、現在まで満洲陸上界の中堅とも云つた仲田、小數賀等引退し松重、浜田、八重樫、渡辺等もすでに引退期に入らんとする折から新進の出でざることが最大の原因であることが見逃せない事実である、明治神宮大会初期に於ける満鉄のマークをつけた満洲代表選手の如何に多く入賞し、日本陸上競技界を内地と満洲とに二分野せし感ありし時代を思へば甚だ寂寥の感を深からしめる<sup>614</sup>。

この記事のタイトルはまさしく「新人を待望する」であった。

#### (4) データで見る満洲陸上競技界

以上見てきた満洲陸上競技界の盛衰と帝国日本における位置をデータに基づいて検証してみよう。表 19-1 は 1923、1926、1929、1932 年時点の満洲記録を示したものである。右端には 1932 年時点での満洲記録がいつ樹立されたかを附記した。1932 年時点のほとんどの記録が 1928 年以降に樹立され、なかでも 1929、1930 年のものが多い。一方で 1931 年に樹立された記録は福井行雄による 400m ハードルの記録ひとつだけである。満洲事変の影響で秋の全満選手権大会が開かれなかったことも一因だが(ただし、多くの記録は春から夏に生まれている)、この年の不振は際立つ。おまけに 1932 年は

<sup>612</sup>「全満陸上競技部内地へ遠征」『大連新聞』1931年7月11日。

<sup>613</sup>川本信正「全日本選手権大会の印象」明治神宮体育会編『第六回明治神宮体育大会報告書』明治神宮体育会、1932年、131-138頁所収。

<sup>614</sup>「新人を待望する、今年の運動界を回顧して(上)」『満日』1931年12月24日。

新記録ゼロである。表 19-1 で 3 回以上名前が出ているのは谷三三五、仲田周一、永谷寿一、溝川末吉、鶴岡鶴吉、南部忠平、浜田常盛で、うち中長距離の永谷と短距離および跳躍の南部の成績が際立つ。

表 19-1 満洲男子陸上競技記録

種目	1923 年		1926 年		1929 年		1932 年		記録更新日
100m	田島貞夫	11.0	仲田周一	10.9	南部忠平	10.8	南部忠平	10.8	1929.9.1
200m	谷三三五	23.8	谷三三五	22.0	谷三三五	22.0	谷三三五	22.0	1923.10.28
400m	谷三三五	54.0	吉田俊秀	53.6	松重秀雄	51.6	松重秀雄	51.6	1928.5.20
800m	相馬勇三	2:11.4	浜田常盛	2:04.8	浜田常盛	1:59.8	浜田常盛	1:59.8	1929.9.1
1500m	相生四郎	4:46.0	永谷寿一	4:22.2	永谷寿一	4:14.6	永谷寿一	4:14.6	1929.8.17
5000m			永谷寿一	16:43.8	永谷寿一	15:46.6	永谷寿一	15:46.6	1928.5.20
10000m					永谷寿一	32:30.8	永谷寿一	32:30.8	1927.6.24
110mH			仲田周一	17.0	柏木宝丸	16.4	鶴岡鶴吉	15.3	1930.9.7
200mH			仲田周一	26.0	仲田周一	26.0	仲田周一	26.0	1924.7.30
400mH					鶴岡鶴吉	57.6	福井行雄	56.8	1931.8.24
400mR			満洲	45.0	満洲	45.0	満洲	45.0	1924.7.30
800mR		1:39.2	全満 A	1:32.7	満洲	1:32.7	満洲	1:32.7	1926.10.10
1600mR	南満工業学校	3:50.2			満洲	3:32.0	満洲	3:29.0	1930.8.10
槍投	岡田誠突	45m18	伊藤清	49m16	川野達也	53m16	小林武生	54m84	1930.7.6
砲丸投 12	山内敬二	13m00			川野達也	13m63	西村政平	14m34	1930.5.4
砲丸投 16			溝川末吉	12m39	溝川末吉	12m39	溝川末吉	12m39	1925.8.29
円盤投	田中義広	30m48	樋口靖次	32m51	丸茂保之	38m10	丸茂保之	38m10	1928.4.29
走高跳	田村道堅	1m70	田村道堅	1m70	石井執三	1m77	鶴岡鶴吉	1m80	1930.9.7
走幅跳	佐川親雄	6m15	岡健次	6m82	南部忠平	7m41	南部忠平	7m41	1929.5.19
棒高跳	石垣松吉	3m10	浅坂正一	3m50	田尻常蔵	3m79	田尻常蔵	3m79	1928.4.29
三段跳	大竹正則	11m95	柴田義敏	13m48	南部忠平	15m24	南部忠平	15m24	1929.8.17

表 19-2 は表 19-1 の満洲記録を同時期の日本記録と比較したもので、日本記録を 1 とし、それに対する比率を示している。濃い網掛けは比率が 0.97 以上のもの、薄い網掛けは比率が 0.9 未満のものを示す。比率が高いほど日本記録に近いことを意味する。各種目で比率の意味合いに違いがあるものの、おおまかな趨勢を見るには十分であろう。まず最下端の平均を見てみよう。日本記録に対する満洲記録の比率が最も高いのは 1929 年である。換言すれば、この年の満洲記録は日本記録に最も近接していたことになる。1932 年に比率が下がるのは、満洲記録に変化があったからではなく、日本記録が大いに伸びたからである。

さらに、表 19-2 からは、トラック系の成績がよく、フィールド系が芳しくないこと

も見て取れる。とくに槍投と円盤投の成績が悪い。走幅跳と三段跳は1929年に突如日本記録に肉薄するが、これらはいずれも南部の記録である。彼を1年で失った満洲陸上競技界の打撃をここからも推し量ることができる。

日本陸上競技界の主力は学生である。学生の記録に対して、満洲記録が見劣りすることは否めない。しかし、満洲陸上競技界の主力である社会人という観点から見ればどうなるだろうか。表19-3は1929、1930年の日本陸上競技ベストテンのうち、社会人と満洲選手の数を示したものである。種目の横の数字は母数である。たとえば短距離は100m、200m、400mの上位10人、合計30人のうち社会人が8人、満洲選手が

表 19-2 日満男子陸上競技記録の比較

種目	1923年	1926年	1929年	1932年
100m	1.00	0.99	0.99	0.97
200m	1.00	1.00	0.98	0.97
400m	0.94	0.94	0.97	0.95
800m	0.96	0.96	0.99	0.98
1500m	0.93	0.95	0.97	0.95
5000m		0.93	0.98	0.96
10000m			0.99	0.97
110mH		0.92	0.92	0.98
200mH		0.93	0.93	0.93
400mH			0.99	0.97
400mR				0.92
800mR	0.96	0.97	0.96	0.95
1600mR	0.96		0.97	0.94
槍投	0.95	0.86	0.85	0.83
砲丸投 12			0.88	0.91
砲丸投 16		0.95	0.92	0.91
円盤投	0.85	0.79	0.91	0.86
走高跳	0.94	0.90	0.91	0.92
走幅跳	0.87	0.94	0.99	0.93
棒高跳	0.91	0.92	0.92	0.89
三段跳	0.84	0.91	0.99	0.97
平均	0.93	0.93	0.95	0.94

4人、朝鮮選手が0人いることを示す。満洲選手のうち学生は1人(1929年の400mハードルで柏木宝丸が全国2位の記録をマークしている)しかいないので、社会人と満洲の数値を比較すると、社会人トップ選手に占める満洲選手の比率が明らかになる。1929年を例にとると、ベストテンに占める社会人の割合は約3割である。その社会人のうち、ちょうど4分の1が満洲選手である。トラック種目に限定するなら、ベストテンに入った社会人の3分の1以上が満洲の選手である。つまり、学校卒業後も第一線で活躍する選手の4人に1人(トラック系では3人に1人)が満洲に拠点を置いていたことになる。これは、学生選手の卒業後の進路として満洲がきわめて重要であったことを示す。ところが、1930年に満洲の成績が低下する。これに代わって台頭したのが朝鮮である(朝鮮選手には学生が多く含まれる)。表19-3はこの変化を明瞭に示している。実際、1930年9月に大連で開かれた大連アスレチック倶楽部と朝鮮鉄道局

局友会の対抗陸上競技では、34.5 対 23.5 となお大連軍が優位だったが、翌年 8 月の満鉄と全京城の対抗陸上競技では 67.5 対 77.5 対 67.5 で満鉄が敗れている。

表 19-3 日本男子陸上競技十傑の内訳

種目	1929			1930		
	社会人	満洲	朝鮮	社会人	満洲	朝鮮
短距離 (30)	8	4	0	8	2	3
中距離 (30)	15	5	4	11	2	4
長距離 (10)	6	1	0	9	1	1
障碍 (20)	4	2	0	5	1	1
跳躍 (40)	12	4	1	6	0	0
投擲 (50)	7	0	0	13	2	5
複合 (20)	12	0	1	9	1	1
合計	64	16	6	61	9	15

満洲陸上競技界の低迷の原因はなにか。1933 年 1 月、村上国平は満洲陸上競技界の低迷の原因について、次の 6 つを挙げている。1. 自然環境、2. 人的刺激の乏しさ（就職難で内地選手の渡満が困難になった、満洲固有選手の養成が困難である）、3. 経済的問題、4. 満洲事変、5. 組織上の問題（満洲体育協会の統制力不足）、6. 精神上的の問題。最後の点に関して村上は「岡部氏を失つて以来精神的に競技界をリードすべき者を缺くに至つたことは競技界が不振を以て目さるゝ最大の原因であると思ふ」と述べる。スポーツ界でなしうる対策としては、1. 体育館の建設、2. 内地選手の「輸出」、中等学校スポーツの振興、満洲学生陸上競技連盟の強化、3. 満洲内での競技会振興、満洲国との交渉、5. 有機的、活動的な統制団体の結成、6. 個人的統制から集团的統制へ、などを挙げている<sup>615</sup>。

陸上競技をはじめ満洲のスポーツ界が岡部に依存しすぎていたことはまったくその通りで、1930 年 6 月に岡部は満鉄参事、学務課体育視学に就任するが、その前後から「運動場をなまけ」ざるをえなくなっていた<sup>616</sup>。さらに満洲事変による岡部の失脚は満洲スポーツ界にとって大きな打撃となった。岡部失脚後 1 年間の満洲陸上競技界は次のように回顧されている。

<sup>615</sup> 村上国平「満洲陸上競技界断想」『満日』1933 年 1 月 15 日。

<sup>616</sup> 岡部平太「一九三〇年度の満洲陸上競技界（下）」『満日』1930 年 10 月 9 日。

満洲に於ける陸上競技界は元老岡部平太氏の引退により指導者を失ひ近年將に沈退の域にある如く見受けられる。昭和7年度に於ては期待された記録も生れずフルマラソンに於て浜田が日本新記録を作つたのみである。数年前の日仏、日独国際競技時代の満洲を想起すれば転た秋風落魄の感がある。大選手出でず大記録も生れない<sup>617</sup>。

## 第20話 陸上競技 II

### (1) ハンディキャップレース

1925年10月の全満陸上競技選手権大会を前に、苦言生なる人物が「満洲体協への苦言」という文章を発表した。苦言生は、満洲体育協会が「大選手養成のみに意を用ひ」て、選手の発掘を怠っていると批判し、ジュニアとシニア、あるいは年齢別に競技をしたり、中学生の大会を開いたりすべきではないかと提言した<sup>618</sup>。満洲体育協会に「大選手」重視の傾向があったことは間違いないが、数百人の会員と数千円の予算で、陸上競技のみならず、スポーツ全般を対象に活動していたこと、学校や州外スポーツ組織が必ずしも協力的でなかったことを考慮すれば、致し方ない面もある(第24話参照)。以下、満洲体育協会による新人選手発掘の努力を見ていきたい。

苦言生に言われるまでもなく、満洲体育協会は陸上競技の底上げの手立てを講じていた。1925年4月の極東大会満洲予選で、満洲体育協会はこれまでの全満選手権が一流選手のための競技となり、「一般運動家の参加が困難」であったことに鑑み、ハンディキャップ制を導入した。たとえば100mの場合、「百米突の権威谷君が普通のスタートから走り他の選手は夫れぞれハンディキャップ委員に拠つて附せられたるハンディキャップだけ其先方から同時に出発する」ので「中学選手でも小学選手でも日本一の谷君を破る場合が出来る」との触れ込みであった。このような試みは「日本内地に於ても未だ嘗て試みられた事のない」もので「満洲陸上競技界に一新紀元を画するもの」とされた。前年秋の全満選手権への参加者は284名だったが、今回の予選には400名

<sup>617</sup>『満蒙年鑑』昭和八年版、600頁。

<sup>618</sup>苦言生「満洲体協へ苦言」『満日』1925年10月9日。

あまりがエントリーした。ただ、ハンディキャップの付け方がまずかったのか、多くの種目で一流選手が優勝した。たとえば100mでは、5mのハンディをつけられた谷三三五が優勝している<sup>619</sup>。翌月の満鉄運動会でもハンディキャップが導入された。「優良選手は常に一頭地を抜きあまりに間隔を生ずるので観客に興味が起らないとて本年はこの点を考慮し優良選手にハンディキャップをつけた」と、こちらは観客本位の観点からの導入であった<sup>620</sup>。しかし、翌年の満鉄運動会では記録が「正確を期し得ない」との理由から、ハンディキャップ採用は見送られた<sup>621</sup>。

第1回全満体育デーの開催を間近に控えた1925年9月末（苦言生が苦言を呈する2週間前）、満洲体育協会は市民大運動会開催の計画を大連市役所に持ちかけていた。大連市側は3000円と見積もられた経費の負担に二の足を踏んだが、経費は一般の寄附を仰ぎ、遼東新報社が主催するという形で、10月18日に第1回大連市民運動会が開かれた。出場者は3000名であった。種目には二人三脚のような遊戯的なものも含まれ、広く一般市民（学生と満鉄運動会選手は参加できなかった）の健康向上を目指した<sup>622</sup>。市民運動会は大連市が積極的にスポーツ事業に乗り出す契機となり、1927年に遼東新報社が満日社と合併すると、大連市が市民運動会の主催者となった。同年8月には市民水泳大会、1930年10月には市民体育ボール大会の第1回大会が開かれた<sup>623</sup>。

1928年秋以来、スポーツ大衆化の方策を練っていた満洲体育協会は段位制を実施することになった。12月6日に満鉄運動会陸上競技部と合同でハンディーキャップ審査会を開き、1928年に満洲で開催された競技会の記録を可能な限り集め、段位を制定することになった<sup>624</sup>。段位というアイデアは、武道家でもある岡部が出したものだろう。

<sup>619</sup>「満洲の予選大会」『満日』1925年3月6日；「極東大会への満洲選手の予選」『満日』1925年3月18日；「極東大会の満洲予選競技」『満日』1925年4月6日。なお、ハンディキャップレースは明治期に内地で行われていた。

<sup>620</sup>「競技種目も多く出場人員は倍」『満日』1925年5月1日。

<sup>621</sup>「跳躍の線と力に男性美の礼讃へ」『満日』1926年5月2日。

<sup>622</sup>「全国体育デーに鑑み市民大運動会計画」『大連新聞』1925年9月26日；「大連市民運動会」『満日』1925年10月4日；「遼東社が主催した市民大運動会」『満日』1925年10月19日。

<sup>623</sup>スケートでは、1923年に大連市長を会長とする大連スケート会が組織され、大連スケート大会（関東州スケート大会）を開催してきた。市民スケート大会と名乗るのは1932年以降のようである。

<sup>624</sup>「二三流選手を活躍させる」『満日』1928年12月4日；「陸上競技のハンデキキャップ審査会開

12月16、17日の『満日』には、同年の満洲のベストファイブ記録が掲載されたが、満洲体育協会と「沿線地方の運動界と連絡」が悪いため、ベストファイブどころかベストワンの記録しか得られない種目もあった<sup>625</sup>。ともかく、これらの記録をもとに各種目の段位が設定され、翌年2月に発表された。100mの場合、11秒8から12秒が初段、11秒4から11秒6が二段、11秒2が三段、11秒が四段、11秒を切れば五段と決められた。この基準に基づき、五段に仲田周一、三段に田中稲夫、岡健次、今井利武、小敷賀源一郎、二段に地崎実ら11名、初段に山田直之介ら8名が認定された<sup>626</sup>。武道の段位制とは異なり、その前年の成績によって段位は毎年更新されることになっていた。

1929年5月19日、満洲体育協会主催の全満ハンディキャップレースが開催された。参加者は320名。「日本に於ける最初の試み」と報じられたが、4年前にすでに実施されていたことは先述の通りである。今回は段位制に基づいてハンディが決められた。南部忠平は7m41の日本新記録を出したが、1m21分引かれ、レースの記録としては6m20で4位に終わった。トラックでは無段者を基準とし、100mであれば二段の選手は2mを加えて102mという形をとった<sup>627</sup>。

今回の試みについて、大連新聞社運動部の今村勝比古は、いくつかの課題はあるとしながらも、「競技の一般化普遍化」に貢献したと評価した<sup>628</sup>。しかし、その翌日の新聞で「K生」なる人物が「運動の普遍化」と題する文章を寄せ、段位制とハンディキャップレースを批判し、レースを弁護する満洲体育協会主事林田学との間に5回のやりとりがなされた<sup>629</sup>。勝敗重視の姿勢に対して疑問をもつ人が少なからずいたことをうかがわせる。確認できる最後のハンディキャップレースは1933年4月23日の全満洲段位

催]『満日』1928年12月7日；「陸上競技選手に段位を制定する」『満日』1929年2月9日。

<sup>625</sup>「昭和三年度陸上競技ベスト・ハイブ」『満日』1928年12月16-17日。

<sup>626</sup>「陸上競技選手に段位を制定する」「満洲陸上競技選手段位表」『満日』1929年2月9日。

<sup>627</sup>「第一回ハンデキャップレース」『大連新聞』1929年5月16日；「日本最初の段位制競技愈よけふ」『大連新聞』1929年5月19日；「コンディション好く日本最初の競技」『大連新聞』1929年5月20日；「南部選手遂に日本記録を破る」『大連新聞』1929年5月20日。

<sup>628</sup>今村勝比古「ハンディキャップレースに対する私見」『大連新聞』1929年5月20日。

<sup>629</sup>K生「運動の普遍化」『大連新聞』1929年5月21日；林田学「弊害があると否定は早計だ」『大連新聞』1929年5月22日；K生「勝敗本位には賛同出来ない」『大連新聞』1929年5月24日；林田学「もう少し眼を大きくひらけ」『大連新聞』1929年5月25日；K生「勝敗偏重と記録公表に就て」『大連新聞』1929年5月26日。

制陸上競技大会である<sup>630</sup>。

段位制がいつまで続いたかは不明だが、『満蒙年鑑』から1929年から1931年までの段位の状況が確認できる。1930年に刊行された奉天中学の校友会誌には「陸上競技段級標準表」が掲載され、競技部員がどの段級に属するかを明記している<sup>631</sup>。級の標準は新聞や『満蒙年鑑』には見えないことから、別の媒体で陸上競技関係者に伝達されたのだろう。段位制が中学生のモチベーションを高める契機となったということはいえそうである。では、実際の効果はどうだったのか。「今まで沈滞して居た二三流所の選手の活躍も自由になり満洲陸上競技界の一層の発達をうながされるであらう」という所期の目標はどの程度達成できたのか<sup>632</sup>。以下、初歩的な分析を試みたい。

1929～1931年の段位認定者数は表20-1の通りである。表20-2は各年における各段位の保有者数を示している。3年分のデータで傾向を読み取るのは難しいが、段位者の総数を見ても、段位制が満洲陸上競技界の発展に貢献したとは必ずしもいえないことがわかる。第19話では、1929年がピークだったことを確認した。これは各種目の最高記録に着目した分析だったが、段位制からはより構造的な変化を見て取ることが

表 20-1 陸上競技段位認定者数

1929年							1930年							1931年						
種目	五段	四段	三段	二段	初段	合計	種目	五段	四段	三段	二段	初段	合計	種目	五段	四段	三段	二段	初段	合計
100	1		4	12	8	25	100		1	1	7	14	23	100	1	2	3	2	4	12
200		1	3	4	9	17	200		1	1	5	4	11	200		1		3	6	10
400		2	1		4	7	400		2	1	1	3	7	400			4	2	1	7
800	1			2	1	4	800	1			2	1	4	800		2			1	3
1500			3		4	7	1500		1		3	4	8	1500			2	1	4	7
5000	1			1	2	4	5000		1	1		3	5	5000		1	1	1		3
10000	1				1	2	10000		1	2			3	10000		1		2		3
高障害			2	4	2	8	高障害	1			3	3	7	高障害	1				3	4
走幅跳	1	1	3	2	3	10	走幅跳		1	1	6	16	24	走幅跳		3	5	3	3	14
三段跳		1	1	1	4	7	三段跳	1		1		2	4	三段跳		1		3	1	5
走高跳			1	3	11	15	走高跳				2	11	13	走高跳			2	3	5	10
棒高跳		1	2	2	4	9	棒高跳		1	2	1	2	6	棒高跳		1	1	4	1	7
円盤投		1		2	4	7	円盤投			1	2	9	12	円盤投			1	3	3	7
砲丸投16		1	3		3	7	砲丸投16				7	1	8	砲丸投16			2	10	7	19
砲丸投12			1	4	1	6	砲丸投12				4	2	6	砲丸投12						
槍投			4	5	3	12	槍投			4	4	3	11	槍投			4	5	2	11
合計	5	8	28	42	64	147	合計	3	9	15	47	78	152	合計	2	12	25	42	41	122

\* 砲丸投は16ポンドと12ポンドの記録がある

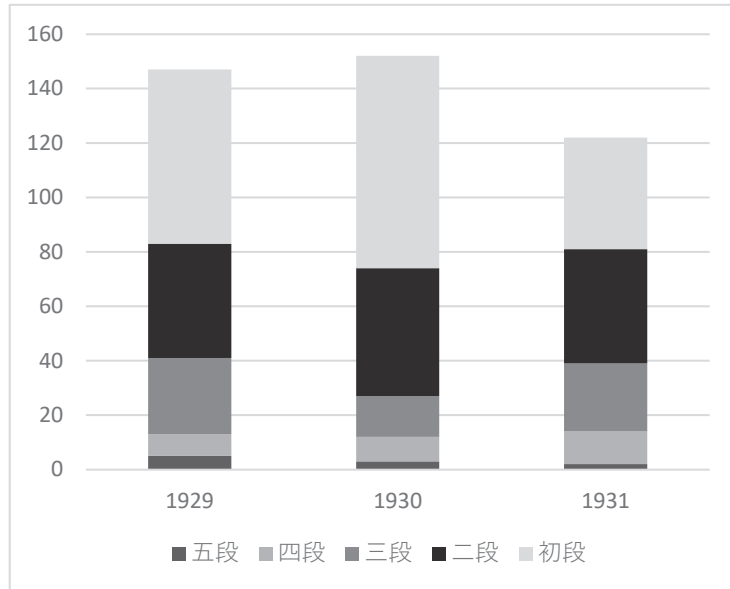
<sup>630</sup>「走高跳」に竹内君満洲新記録」『大連新聞』1933年4月24日。

<sup>631</sup>「競技部報告」『校友会誌 楡之蔭』8号、1930年。

<sup>632</sup>「二三流選手を活躍させる」『満日』1928年12月4日。



表 20-2 段位認定者年次比較



できる。

個別の状況について、まず 100m を見てみよう。1929 年には有段者が 25 名いた。初段の 8 名は翌年全員がリストから消えた。二段の 12 名のうち 11 名は翌年初段に落ち、翌々年にはその全員がリストから消えた。これは二流三流の選手が伸びてこない状況を示している。一流選手はどうか。1929 年に三段以上だった 5 名の各年度の段位は以下の通りである。仲田周一（五段、四段、三段）、田中稲夫（三段、二段、初段）、岡健次（三段、二段、五段）、今井利武（三段、三段、二段）、小数賀源一郎（三段、二段、四段）。3 名が段位を落とし、2 名が段位を上げた。

中長距離では 1500m を例にとってみよう。1929 年の三段 3 名のうち、永谷寿一（三段、四段、三段）は段位をキープしたが、浜田常盛（三段、二段、初段）と保井壮二（三段、二段、初段）は毎年段位を下げている。段位を上げたのは八重樫栄太郎で、1929 年に初段だったのが、1931 年に二段となっている。1931 年に三段で初登場した大籾貫一を除くと、あとは全員初段に一度名前が出ただけで消えている。こちらでも新陳代謝がうまくいっているとは言えない。

フィールドでは段位をキープしたり、段位を上げたりする例が少なからず見える。なかでも跳躍では旅順中学の最上義満（走幅跳と走高跳で初段から三段へ）、大連一中

の湊川捨三（走幅跳で二段から三段へ、走高跳で初段から二段へ）ら中学生の活躍が目立つ。ただし、1931年春に最上は慶大、湊川は早大に進学し満洲を去ってしまった<sup>633</sup>。高等教育機関が少なく、優秀な中等学校選手が内地に進学してしまうことは、陸上競技に限らず満洲スポーツ界共通の悩みであった。

この3年間で五段に認定されたのは仲田周一、浜田常盛、永谷寿一、南部忠平、鶴岡鶴吉、柴田義敏、岡健次の7名しかいない。仲田を除き、みな内地で活躍したのち、来満した選手である。四段の選手になると、100mの多田増太郎（満鉄育成学校出身）、5000mの八重樫栄太郎、走幅跳の田中禾（大連一中、南満工専出身）のように満洲で育った選手が見られるが少数派に属する。満洲の優秀な若手選手は内地に流出してしまい、満洲にとどまって活躍する選手は少なかった。満洲の主力を担ったのは、内地から輸入した社会人選手だった。満洲に来てから伸びたものもいたが、すでにピークを過ぎている場合も多かった。要するに、満洲の陸上競技界は内地からの即戦力頼みであった。戦争や不況で選手の供給が途切れると、競技力も低下した。そもそも、満洲の日本人人口はわずか23万人（1930年）である<sup>634</sup>。たとえ新人選手の育成が成功したとしても、その母数はあまりに少ない。朝鮮には50万人の日本人がおり、さらに約2000万人の朝鮮人（彼らも「日本人」であった）がいた。人口から見れば、満洲は、内地はいうまでもなく、朝鮮にすら太刀打ちできるはずがなかったのである。したがって、満鉄の経済力を背景に、満洲を「日本のフィンランド」に変えた岡部の手腕は高く評価されるべきだが、満洲の競技力のごく少数の一流選手によって維持される砂上の楼閣のようなものであったことも認めねばならない。

## (2) 都市対抗

地域という視点で満洲陸上競技界を見ると、やはり大連の実力が突出しており、奉天、撫順がそれに次ぐ。さらにその下に鞍山、長春などの諸都市がくるだろう。それぞれの都市の陸上競技はどのようなものだったのか。1929年3月、奉天体育協会は1929

<sup>633</sup>「輝かしい奮闘の歴史を懐しき母校に残して」『満日』1931年3月4日。

<sup>634</sup> 関東州には多数の中国人がいたが、満洲国成立以前、中国人の優秀選手は中国の代表となり、「満洲」の代表にはならなかった。この点が、朝鮮や台湾と異なる。

年度の陸上競技関係の行事として次のものを挙げている<sup>635</sup>。

- ① 3月31日 第6回奉天市民マラソン競走 (予定通り実施)
- ② 4月14日 第6回全奉天陸上競技選手権大会 (4月28日開催)
- ③ 5月5日 第8回奉撫対抗陸上競技大会 (撫順) (6月23日開催)
- ④ 6月2日 第3回州内外対抗陸上競技大会<sup>636</sup> (7月28日開催予定だったが中止)
- ⑤ 9月8日 第5回州外都市対抗陸上競技大会<sup>637</sup> (開催を確認できず)
- ⑥ 9月22日 第2回奉天市民大運動会 (開催を確認できず)
- ⑦ 10月6日 第8回全満陸上競技選手権大会 (大連) (予定通り実施)
- ⑧ 10月13日 第7回奉天市民マラソン競走 (11月24日開催)

都市単位 (①、②、⑥、⑧)、都市対抗 (③、④、⑤)、全満 (⑦) の競技会に分けることができよう。同年度の鞍山についても挙げておく<sup>638</sup>。

- ① 5月5日 鞍山陸上競技大会 (確認できず)
- ② 5月19日 第4回全満洲陸上ハンデイキヤツプレース (大連) (予定通り開催)
- ③ 6月2日 第3回州内外対抗競技 (奉天) (7月28日開催予定だったが中止)
- ④ 6月23日 第3回鞍山若葉対抗陸上競技大会 (1930年7月13日開催)
- ⑤ 7月14日 第5回遼鞍対抗陸上競技大会 (確認できず)
- ⑥ 8月18日 競技部員紅白対抗 (確認できず)
- ⑦ 9月2日 第10回満鉄鞍山支部運動会 (9月29日開催)
- ⑧ 10月16日 第8回全満陸上競技選手権大会 (大連) (予定通り実施)
- ⑨ 10月17日 第2回クロスカントリーレース (予定通り実施)

鞍山の場合も、都市単位 (①、⑦、⑨)、都市対抗 (③、⑤、⑥)、全満 (②、⑧) に分けられる。陸上競技部内の行事 (⑥)、学校との対抗戦 (④) が挙げられている点が奉天との違いである。

<sup>635</sup>「奉天体育協会の本年度行事」『満日』1929年3月9日。大会回数に誤りがあり、訂正したものを示している。

<sup>636</sup>大連対奉天・撫順対抗陸上競技のこと (後述)

<sup>637</sup>第1回大会は1925年10月11日に奉天で開かれた(「州外陸上競技会に撫順優勝す」『大連新聞』1925年10月13日)。

<sup>638</sup>「鞍山陸上競技部本年のプログラム」『満日』1929年3月31日。

ここでは都市対抗に焦点を当てる。都市対抗こそ、各都市の陸上競技の発展に最も大きな影響を及ぼしたと考えるからである。都市対抗では、トラックだけで短距離、中距離、長距離、ハードルの各種目があり、リレーをするなら短距離か中距離の選手だけで4人が必要となる。さらにフィールドでは投擲と跳躍の選手が求められる。通常各種目3位まで得点が与えられるので、できれば各種目に2人は出場させたい。傑出した選手が数種目を兼ねるにしても、全部の種目をカバーするには、それなりの選手が必要となる。代表選手を選抜し、派遣するには、組織と資金も必要である。大会の主催者となれば、さらに審判、役員、競技場なども準備しなければならない（審判は大連から招聘することも多かった）。なにより都市の名誉がかかっており、各都市とも競技力向上に務めることになる。

各都市でスポーツ統括組織が結成される時期と、各種競技の都市対抗が広がる時期が一致するのは偶然ではない。満洲最初の都市対抗陸上競技は、1924年6月6日に撫順で開かれた奉撫対抗陸上競技である。奉天ではその後まもなく（1924年9月）奉天体育協会が設立された<sup>639</sup>。撫順体育協会の設立は1927年7月と遅いが、これは撫順では満鉄運動会の勢力が大きかったためである（第24話参照）。1925年には遼陽と鞍山、鉄嶺と開原がそれぞれ対抗競技を始めた。遼陽では1925年9月に遼陽体育協会が設立<sup>640</sup>、鞍山でも翌年春に鞍山体育協会の設立が予定されていた<sup>641</sup>。鉄嶺では1925年6月に鉄嶺運動協会が設立され、開原では1924年8月に開原体育倶楽部が設立されていた<sup>642</sup>。

以下では、奉撫対抗競技と鉄開対抗競技を取り上げる。

先述の通り、第1回奉撫対抗競技は1924年に開かれた。州外で陸上競技が最も盛んで、かつ地理的にも近接していた両都市が最初に都市対抗を実施したのは自然な成り

<sup>639</sup>「神嘗祭の佳き日に陸上競技大会開催」『満日』1924年10月17日。南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附屬地経営沿革全史』下巻、757頁には、「其の成立は、月日は記録にないが、確か大正十二年の夏の頃であったと思ふ」と記されるが、誤りである。

<sup>640</sup>「体育協会発会式」『満日』1925年9月8日。

<sup>641</sup>「体育協会設立」『満日』1925年12月16日。ただし、実際に設立されたのは1930年7月である（「鞍山体育協会会則草案成る」『大連新聞』1930年7月1日）。

<sup>642</sup>「体育クラブの試練会」『満日』1925年4月26日；「鉄嶺の運動界改革」『満日』1925年5月17日；「多大の期待で生れた運動協会の活動」『満日』1925年6月19日。

行きだった。第1回大会のさい、新聞ではときに「医大対撫順」と報じられたが<sup>643</sup>、それは当時の奉天代表選手の大半が満洲医大の学生だったからである<sup>644</sup>。奉天には1924年に満洲教育専門学校が設立される。水陸両競技でアントワープオリンピックに出場した斎藤兼吉助教が陸上競技を指導していた。全学年が揃う頃には満洲医大と並んで奉天スポーツ界の中心の一つとなる。

満洲では珍しく大学、専門学校の選手が主力だった奉天に対して、撫順は炭鉱関係者が主力だった。1923年に始まった大連満鉄運動会の支部対抗1600mリレーで撫順は1923、1924年と2連覇を果たし<sup>645</sup>、州外都市対抗陸上競技大会でも1925、1927年に優勝するなど、州外陸上競技界をリードする存在だった<sup>646</sup>。1929年5月には京城に遠征、1929年9月には京城軍を撫順に迎え、対外的にも活発な活動を展開していた<sup>647</sup>。1930年6月には、撫順体育協会が全満リレーカーニバルを開催している<sup>648</sup>。

奉撫対抗でも撫順が連勝した。奉天が最初の勝利を挙げるのは、1926年6月の第5回大会である（当初は毎年春秋に各1回開かれた）。この勝利はチーム全体の方で勝ち取ったというよりは、岡健次という突出した一選手の活躍によるところが大きかった。岡は18種目中13種目に出場し、その全てで1位か2位を取った<sup>649</sup>。1927年6月の第6回大会の頃には教専軍が充実したが、雨天順延の影響で教専軍抜きでの戦いを強いられ、撫順に大敗した<sup>650</sup>。同年10月の州外対抗は奉天が撫順を抑えて優勝し、その後の奉撫対抗も奉天軍が優勢となった。奉撫双方の幹部らは早くからこの大会を奉撫の間にとどめず、「南満洲中部競技連盟」の名のもとに各地の選手を集めて「満洲に於て最

<sup>643</sup> 山岡信夫「医大対撫順競技大会に就て」『満日』1924年6月13日。

<sup>644</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、760頁。

<sup>645</sup> 「川村社長自ら陣頭に立ちげに白熱的韋駄天日和」『満日』1923年5月7日；「会長から花輪を大出来の観光団」『満日』1924年5月5日。

<sup>646</sup> 「州外陸上競技会に撫順優勝す」『大連新聞』1925年10月13日；「第三回州外都市対抗陸上競技」『大連新聞』1927年10月11日。

<sup>647</sup> 「撫順陸上競技部京城に遠征」『満日』1929年5月2日；「九点の差で京城軍勝つ」『満日』1929年9月10日。

<sup>648</sup> 「全体優勝の栄冠二つとも大連獲得」『満日』1930年6月23日。

<sup>649</sup> 「奉撫対抗陸上競技」『満日』1926年6月8日。

<sup>650</sup> 「奉天対撫順陸上競技」『大連新聞』1927年6月9日；「奉撫陸上競技」『大連新聞』1927年6月14日。教専は工専との対抗戦が入っていた（「教専と工専陸上競技大会」『大連新聞』1927年6月13日）。

も権威ある競技会」にしようとは画策していたが実現しなかった<sup>651</sup>。

1926年7月には奉天撫順連合軍と大連軍（大連と旅順工大の連合軍）との対抗戦も始まった。州内外対抗陸上競技とも呼ばれ、奉天撫順軍が実質的に州外軍と目されていたことがわかる。満洲第二、第三の都市が連合しても、大連を破ることはできなかった<sup>652</sup>。もって、満洲における大連のレベルの高さを窺えよう。

鉄嶺と開原の対抗陸上競技は奉撫対抗競技が創設された翌年、すなわち1925年に鉄嶺でその第1回大会が開かれた。第2回大会を前にして、開原側は駐箚連隊の選手を除外するよう鉄嶺側に要求した<sup>653</sup>。これは鉄嶺にとって傷手だった。なにしろ鉄嶺の内地人は「三千市民と千余の軍人」で構成されており、4人に1人は軍人だったし、駐箚連隊は「恐ろしくスポーツマン揃ひ」だったからである<sup>654</sup>。結局、鉄嶺側は軍隊選手を外し、東海林太郎主将ら15余名の選手を代表に選んだ<sup>655</sup>。東海林は1923年に早大商学部を卒業し満鉄調査課に勤務、1925年2月に「満洲に於ける産業組合」を書き上げるが、これが左翼的とみなされ、1926年に満鉄鉄嶺図書館長に左遷されていた。東海林は1925年5月の満鉄運動会で200m低障碍に優勝するなど陸上競技に秀で、満鉄運動会鉄嶺支部陸上競技部幹事を務めるなど、スポーツマンとしても活躍していた。1930年に満鉄を退社して歌手に転向、「赤城の子守歌」で一躍人気を博するのは1934年のことである<sup>656</sup>。

1926年の鉄開対抗競技は、四平街と公主嶺が新たに参加したことで、鉄開四公対抗陸上競技会として開かれた。序盤は鉄嶺がリードするが、開催地の開原が徐々にそれに迫り、最後の800mリレーを前にその差はわずか0.17点となっていた。リレーの結果、開原が1位をとり逆転優勝した。東海林は鉄嶺軍のアンカーだったが、力およばなかつ

<sup>651</sup>「優勝旗争奪の奉撫陸上競技大会」『満日』1925年6月9日。

<sup>652</sup>「旅大対奉撫陸上競技大会」『満日』1926年7月13日；「大連対奉撫連合陸上競技会」『満日』1928年8月7日。

<sup>653</sup>「鉄嶺対開原陸上競技」『満日』1926年7月4日。

<sup>654</sup>「運動会の前景気」『満日』1925年5月14日；「駐箚連隊に集る運動選手」『満日』1926年4月7日。

<sup>655</sup>「鉄開四公対抗陸上競技大会」『満日』1926年8月6日。

<sup>656</sup>「埠頭再び優勝」『大連新聞』1925年5月4日；「運動会支部幹事改選」『満日』1927年4月8日。鉄嶺時代の東海林については、菊池清磨『国境の町：東海林太郎とその時代』北方新社、2006年、66-69頁を参照。

た<sup>657</sup>。

1927年8月7日、第2回鉄開四公対抗競技の打ち合わせが主催地の四平街で開かれた。四平街が提出した新規則のうち、棒高跳、ハイハードル、1600mリレーを追加すること、選手は軍人、軍属および学生を除くことの二点をめぐって意見が対立した。棒高跳とハイハードルは除外し、軍属の参加は認めるという点は合意が得られたが、1600mリレーと学生の参加資格について鉄嶺、開原側と四平街、公主嶺側の折り合いがつかず、8月末になって大会の延期が決定された<sup>658</sup>。

1928年になって、棒高跳の追加を認め、学生の参加資格を問わないという形で妥協が成立した。ただし、軍隊選手の参加は認められず、選手も日本人に限定されることになった<sup>659</sup>。鉄嶺軍は、教専陸上競技部員の柏木宝丸を鉄嶺運動協会指導員の資格で監督とし、合宿を実施して大会に備えた。前回優勝の開原は惨敗し、開催地の四平街が保井壯二の活躍で優勝、鉄嶺は2位に終わった<sup>660</sup>。

1928年10月、満鉄運動会奉天支部陸上競技部が御大典記念として鉄開四公との対抗試合を提案してきた。奉天満鉄には岡健次や星名秦ら一流選手がいたものの、1人3種目までという制限が課されたことで、勝負の行方は見通せなかった。それでも蓋を開けてみれば、65対49で奉天満鉄が勝った。鉄開四公が東になっても、奉天満鉄にかなわなかったのである<sup>661</sup>。

第4回大会(1929年)、第5回大会(1930年)は開原が圧勝した。第6回大会の打合会で、公主嶺は駐屯軍の参加を提案した。選手不足に悩む鉄嶺がこれに賛成、四平

<sup>657</sup>「四地方連合の陸上競技会盛会」『大連新聞』1926年8月11日。

<sup>658</sup>「学生の参加問題は決定を後日に譲る」『満日』1927年8月11日；「四ヶ所陸上競技と四公側希望条件」『満日』1927年8月14日；「連合競技会は来年まで延期となる」『満日』1927年8月28日。その代わり、四平街と公主嶺は11月に陸上対抗競技を開いた(「四公対抗陸上競技」『満日』1927年10月11日)。

<sup>659</sup>「鉄、公、開、四対抗の陸上競技大会」『満日』1928年5月18日。第2回大会の鉄嶺代表には馬広吉、金弘植なる選手が参加している。金は朝鮮人かもしれない。入賞者のリストには、馬選手や開原の趙選手が名を連ねていた(「鉄開四公対抗陸上競技大会」『満日』1926年8月6日；「四地方連合の陸上競技会盛会」『大連新聞』1926年8月11日)。

<sup>660</sup>「四地方対抗陸上競技」『満日』1928年8月15日；柏木宝丸「鉄開四公競技会戦跡を顧みて」『満日』1928年8月22日。

<sup>661</sup>「本年掉尾の陸上大競技」『満日』1928年10月20日；「六十五対四十九で奉天軍勝つ」『満日』1928年10月23日。

街は反対したが、開原が「事情止むを得ざる」として賛成し承認された。一方、出場種目制限については、鉄嶺、四平街、公主嶺が1人4種目程度と主張したのに対して、開原は競技精神に照らして無制限と主張した。この問題は、事実上、開原の米津午郎選手（五種競技の満洲記録保持者）を念頭に論じられたもので、一時は中止もささやかれたが、従来通り3種目までという形で意見の一致を見た<sup>662</sup>。第6回大会で優勝したのは四平街で、軍人の手助けを得られなかった公主嶺と鉄嶺はそれぞれ3位と4位に終わった<sup>663</sup>。この1週間前に開かれた鉄嶺対奉天中学の陸上競技では守備隊と工兵隊の選手が参加したが、遠征ともなると軍人の参加は難しかったであろう（さらに、満洲事変の直前という時機の問題もあったと思われる）<sup>664</sup>。

鉄開四公の四都市は内地人人口が2000～3000人で、初等教育機関しかなく、13種目にエントリーする選手を揃えるだけでも困難を伴うことが多かった。約1万人の関東軍は人口的にもそれなりの比率を占めた（満洲内地人人口の約20分の1）だけでなく、いずれも成人男性だったので、各都市にとっては貴重な戦力源であった。しかしながら、関東軍は均等に配置されていなかったため、軍人の参加を認めることで、有利になる都市と不利になる都市がわかれた。その結果、資格をめぐるもめ事が絶えなかった<sup>665</sup>。

奉撫対抗と鉄開四公対抗のほかにも、満洲ではさまざまな都市対抗陸上競技が実施されていた。主なものを挙げると、遼陽対鞍山（1925年）、撫順対長春（1930年）、長春対ハルビン（1930年）、安奉線対抗（橋頭、本溪湖、鶏冠山）（1930年）、昌図対開原（1931年）、瓦房店対大石橋（1931年）などがある。

### (3) 競技場

大連では野球場が早くから整備されていたが、陸上競技用のグラウンドはなく、学校の運動場や野球場で陸上競技会が開かれていた。

<sup>662</sup>「出場種目制限で各代表意見衝突」『満日』1931年5月13日；「四地方対抗競技本年は中止か」『満日』1931年5月31日；「四地対抗の競技は開く」『満日』1931年7月5日。

<sup>663</sup>「圧倒的勢ひで四平街軍優勝」『満日』1931年8月12日。

<sup>664</sup>「鉄嶺軍の陣容」『満日』1931年8月2日。

<sup>665</sup>満洲の軍隊とスポーツについては、拙稿「満洲における軍隊とスポーツ」『軍事史学』57巻3号、2021年12月を参照。



1922年5月の満鉄運動会を前に、「某運動大家」は「現在西公園の両グラウンドは野球のみの専用場と見做されて居る観があるので陸上競技に使用する適当なグラウンドの一箇所位は完全に設備したいものである、官庁は勿論市民協力して此の際は是非共譚家屯附近に一大陸上競技専用グラウンドを新設して切に斯界の發達に貢献して貰ひたいものである」と述べていた<sup>666</sup>。発言の主は岡部平太であろう。その岡部が中心となってこの年に創設した全滿競技連合は「陸上競技蹴球グラウンドの問題、冬期水泳場の問題」を「現在満洲競技發達の上に於て最大の缺陷」と見て、その早期解決を目指すことになった<sup>667</sup>。おりしも、大阪では極東大会開催に向けて市立運動場が、東京では明治神宮外苑競技場が、それぞれ建設されることになっており、大連でもこれらの「文明的運動の設備」が求められた<sup>668</sup>。

1929年に全日本陸上競技連盟が全国競技場の公認制度を制定、甲乙の二種に分け、甲種は一周390m以上、走路最短部の幅9m以上などと規定され、今後は公認競技場で作られた記録のみ公認記録とされることになった。満洲では大連譚家屯、旅順、鞍山、遼陽、奉天医大、長春、撫順の競技場が候補となった<sup>669</sup>。

翌年秋、大連陸上競技連盟は全日本陸上競技連盟に対して満洲各地の競技場の公認申請を行うが、そのとき申請の対象となったのは旅順、大連、満洲医大、撫順、長春、鞍山の各競技場であった。野球場と兼用だった遼陽の競技場は外れている<sup>670</sup>。

6つの競技場のなかで、最も早くにつくられたのは奉天の満洲医大のグラウンドであった。満洲医大の前身である南滿医学堂（1911年開校）にいつグラウンドがつくられたかは定かではない。テニスコートは1913年秋にテニスコートが造成された。1914年5月に「南滿医学堂コート」で野球戦が行われている。同年10月には第1回秋季運動会が「構内運動場」で、南滿医学堂と満鉄従事員養成所出身同窓会の野球戦が「医

<sup>666</sup>「運動としての陸上競技を向上發展させたい」『大連新聞』1922年5月5日。

<sup>667</sup>「全滿競技連合事業計画成る」『満日』1923年1月20日。

<sup>668</sup>「練習場がない」と運動家が嘆く」『満日』1923年2月22日。

<sup>669</sup>「陸上競技の公認競技場」『大連新聞』1929年7月27日；「公認競技場申込多数」『東京朝日新聞』1929年7月10日；「跳躍投擲決勝は規定順位人員で」『読売新聞』1929年12月12日；朝日新聞社運動部編『運動年鑑附録規則全集』昭和五年、朝日新聞社、1930年、39頁。公認規定は全日本陸上競技連盟編『日本陸上競技規則解説』昭和六年修正、三省堂、1931年、131頁による。

<sup>670</sup>「陸上競技場を公認の申請」『大連新聞』1930年10月30日。

学堂グラウンド」で開かれている<sup>671</sup>。以上から、1914年までには野球や運動会が実施可能なグラウンドが存在したことがわかる。満洲医大1期生の北河清によると、陸上競技部ができたばかりの1923-1924年頃に「学校のグラウンドも新しいのが出来て」「昭和になるに及んでグラウンドも新設され」と記している<sup>672</sup>。この新しいグラウンドが陸連に申請されたと思われる。

観客席などを備えた本格的な陸上競技場の嚆矢は旅順運動場であろう。1925年6月20日、旅順実業グラウンドで開かれた全旅順野球大会の始球式に参加した関東庁長官児玉秀雄は「俺の在任中には一つ素晴らしいグラウンドを設備して渡満する大チームを悉く招聘して立派な試合を見せてやる」と豪語した<sup>673</sup>。児玉の脳裏にあったのは野球場だったと思われるが、同年秋には関東庁始政二十年記念事業として児玉長官の発案で「東洋一の競技場」を関東庁前の海岸に設置することが決まった<sup>674</sup>。1万5000坪の海岸埋立地に野球場、陸上競技場、プールを建設、スタンドは2500人収容で、工費は10万円だった<sup>675</sup>。「旅順運動場」は1926年秋に完成し、運動場開きとして閑院宮を招いて関東庁始政二十年記念運動会が挙行された。翌年4月に関東庁体育研究所が設立されると、旅順運動場はその附属施設となった<sup>676</sup>。

旅順運動場の建設が決まってまもなく、大連でも官民有志が記念グラウンドの建設に向けて運動を開始した<sup>677</sup>。翌1926年春には大連市外西の譚家屯に陸上競技兼蹴球用のグラウンドを建設することが決まった。関東庁が土地6万3000坪を、満鉄が第1期工事の経費15万円をそれぞれ提供し、5月下旬に着工した。その設計は、朝鮮神宮競

<sup>671</sup>「奉天雑俎」『満日』1913年10月14日；「奉天掃寄せ」『満日』1914年5月17日；「奉天掃寄せ」『満日』1914年10月11日。

<sup>672</sup>北河清「陸上競技部の初期のころ」輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ』585-587頁所収。

<sup>673</sup>「旅順夜譚」『大連新聞』1925年6月25日。

<sup>674</sup>「施政二十年に一大運動場」『満日』1925年9月10日；「記念事業として大運動場建設」『満日』1925年9月26日。

<sup>675</sup>「旅順の運動場は最初の計画を縮小し来年度迄には竣工」『満日』1925年12月4日；「完成を急ぎつ、ある旅順グラウンド」『満日』1926年7月31日。

<sup>676</sup>『満蒙年鑑』昭和三年版、622頁。

<sup>677</sup>「東洋一の運動場を大連にも造りたい」『満日』1925年11月17日；「記念グラウンドを大連にも建設」『満日』1925年12月12日。

技場（『満日』）、あるいは明治神宮競技場（『大連新聞』）になったという。コンクリート製のメインスタンドを設け、収容人員は5万人であった<sup>678</sup>。設計には岡部の知見が生かされていた。

トラックの内圏は去年の神宮競技のあの乱雑に省みて地下道を造ることにした。メインスタンドは第一期工事では出来ないが早晩完成する。その構造は直線走路に並行して造らずに、中央に於てトラックから二十米位を下げて翼形にする。之は古代オリンピック競技場からヒントを得た私の考案で、二百米のスタートからフィニシュまで、観衆は苦勞なく見られる様になるのである。メインスタンドが出来れば私は何より先にフィンランド式の石風呂を造る<sup>679</sup>。

第1期工事は10月に完了の予定だったが、工事が遅れ、年末にようやくトラックが完成した<sup>680</sup>。岡部は毎日のように工事現場に出かけて、工事の様子をチェックしていた<sup>681</sup>。第1期工事は1927年5月にほぼ完成し、6月から使用が開始された<sup>682</sup>。7月にはプールも完成した（第15話参照）。第2期工事は満鉄が17万円を提供し、1928年春に着工、32段のメインスタンド、冬期練習用の廊下、花壇、宿直室、簡易フィールド、中国人用脱衣室などの施設がつくられた<sup>683</sup>。1928年9月の日仏競技は新設大連運動場のお披露目も兼ねて開かれた。1941年に小敷賀源一郎は「岡部さんが作られた大連運動場」について、「よく東洋で陸上の記録を作る競技場だといはれる」と高く評価するように、大連運動場は日本でも有数の競技場として知られることになる<sup>684</sup>。

鞍山では1926年春に体育協会が設立され、陸上競技場を建設することになった。予

<sup>678</sup>「始政廿年記念に大連にも大連運動場」『満日』1926年4月29日；「経費十五万円で譚家屯に大連競技場」『満日』1926年5月7日；「神宮競技場スタイルの大連市民運動場を」『大連新聞』1926年5月7日；南満洲鉄道株式会社地方部編『地方経営梗概』昭和六年度、117頁。

<sup>679</sup>岡部平太「大連体育練習所の開所」『体育と競技』6巻5号、1927年5月。

<sup>680</sup>「新設運動場工事捗る」『満日』1926年12月3日。

<sup>681</sup>岡部平太「南満の秋」『運動界』8巻10号、1927年2月。

<sup>682</sup>「近く完成の大連運動場」『大連新聞』1927年5月17日。6月12日に開かれた工専対教専対抗陸上競技が最初のイベントと思われる。

<sup>683</sup>「日仏競技場として完成を急ぐ大連運動場」『満日』1928年1月15日；「三万人以上を収容する計画」『大連新聞』1928年4月1日；「大連運動場に花壇を設る」『満日』1929年3月10日；『満蒙年鑑』昭和五年版、498頁。

<sup>684</sup>「神宮大会総評座談会①」『読売新聞』1941年11月5日。

算はわずか1000円で、6月には早くも竣工しているので、旅順や大連のような立派なものではなかったはずだ<sup>685</sup>。

長春では1923年9月に西公園の約8000坪の土地に新グラウンドが建設されている<sup>686</sup>。これは野球専用で、その西側に陸上競技専用の競技場が建設された。1927年9月15日に竣工、総面積は2万4750坪だった<sup>687</sup>。

撫順では1924年5月、高台の窪地に競技場が設けられた。斜面をコンクリートで整備した観覧席は、約8000人を収容できた<sup>688</sup>。ただ、グラウンドの状況は良好とはいえ、第1回奉撫対抗陸上競技の綱引きで両軍陣地の足場の状況があまりに異なったことから紛擾が起きている<sup>689</sup>。1927年になって、撫順神社の麓の約3万平方メートルの敷地に、工費3万3000円をかけて、野球場、陸上競技場がつくられることになった<sup>690</sup>。この競技場は1930年8月に竣工した<sup>691</sup>。

以上見てきたように、1930年に公認申請をした6つの競技場のうち、5つが1926年から1927年にかけて建設が始まったものだった。これらは、大阪市立運動場(1923年)、明治神宮外苑競技場(1924年)、京城運動場(1925年)など、帝国日本の大都市における競技場建設の流れに沿ったものであった。競技場の整備は、1920年代後半の満洲陸上競技界発展に大きく貢献したであろう。1930年にはさらに奉天、安東、鉄嶺などでも競技場が設置された<sup>692</sup>。

以下では、奉天国際運動場建設の経緯について紹介する。

国際運動場設置以前の奉天のグラウンド状況は下記のものであった。

大正の初年には野球場兼陸上競技場が今の琴平町方面の草叢の中にポツンと作ら

<sup>685</sup>「運動場新設」『大連新聞』1926年3月16日；「愈々竣工した鞍山運動競技場」『大連新聞』1926年5月30日；「新設運動場近く竣工の予定」『満日』1926年6月1日。

<sup>686</sup>「雨中に元気よく新グラウンド開き」『満日』1923年10月26日。

<sup>687</sup>南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』下巻、434頁。

<sup>688</sup>「グラウンド開きを兼ねて春季陸上大運動会」『満日』1924年5月20日。

<sup>689</sup>山岡信夫「医大対撫順競技大会に就て」『満日』1924年6月13日。

<sup>690</sup>「極めて大規模の運動場を計画」『満日』1927年5月11日。

<sup>691</sup>「世界的に認められる撫順陸上競技場、日本陸上競技連盟に公認さる」『大連新聞』1935年5月7日。

<sup>692</sup>「奉天の大競技場を初め運動諸施設を完備」『大連新聞』1930年4月10日；南満洲鉄道株式会社地方部編『地方経営梗概』昭和六年度、117頁。

れてあつた。無論施設としては誠に貧弱なもので、木製のベンチがポツン／＼とあつた位に記憶する。……満鉄の運動会や市民の運動会は主として春日公園の中の不正規なグラウンドで行はれて居た。……その後大正八年に消防隊の裏、即ち奉天中学の北西側に陸上競技場兼蹴球場が設けられた。これは当時としてはかなり堂々たるものでお粗末ながら正面スタンドもあり、左右両側のスタンドもコンクリートで固められ観衆五百人位は収容出来るものであつた。此処は冬期撒水してスケート場にも利用された。但し正規の四百米が取れず、せいぜい三百米内外のものであつたため、正式競技は陸上、氷上共に医科大学のグラウンドを使用させて貰つたものである<sup>693</sup>。

奉天には市民が利用できる正規の陸上競技場がなかったため、1923年に久保田晴光、木谷辰巳らが競技場建設運動に立ち上がった。萩町に整備される公園にまずプールが建設されたが(第15話参照)、陸上競技場の建設は難航した<sup>694</sup>。というのも、陸上競技場の敷地は附属地ではなく、隣接する「商埠地」内にあつたため、中国側当局の了解が必要だったからで、「或は張学良を訪れ、或は親日派を以つて目せられた後の満洲国交通部大臣丁鑑修を訪れて腹藏なき意見の交換をなす」などして、1929年に設置が決定した。工費は18万円、3万2000坪の敷地に3万5000人を収容できる陸上競技場のほか、野球場、テニスコートなどが設置されることになった<sup>695</sup>。1929年によく事態が動いた背景には、スポーツを奨励していた張学良との対抗意識、日中間のスポーツ交流があつた<sup>696</sup>。

結局、大連運動場と奉天国際運動場が全日本陸上競技連盟から甲種競技場と認定された。1934年11月末時点で日本には18の甲種競技場があつた。その分布は北海道1、

<sup>693</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、759頁。

<sup>694</sup> 「競技場も設備した新しい公園が出来る」『満日』1924年5月3日；「新公園の完成期」『満日』1925年2月19日；「運動場問題」『満日』1926年5月30日。

<sup>695</sup> 南満洲鉄道株式会社総裁室地方部残務整理委員会編『満鉄附属地経営沿革全史』中巻、760頁；「国際運動場設置で陳情」『満日』1929年6月7日；「国際運動場設置に決定」『満日』1929年6月11日；「国際大運動場愈よ奉天に作る」『満日』1929年10月20日；「奉天の国際的大運動場建設」『満日』1929年11月19日；『満蒙年鑑』昭和六年版、542頁。

<sup>696</sup> 拙稿「満洲における日中スポーツ交流(1906-1932)」。

東北1、関東3、東海2、関西4、四国1、九州2、朝鮮1、台湾1であった<sup>697</sup>。ちなみに、1930年時点で人口が最も少ない都道府県は鳥取県で49万人、満洲の日本人人口はその2分の1だったから、いかに満洲が運動施設に恵まれていたかがわかるだろう。

## 第21話 陸上競技 III

### (1) 満鉄運動会

日本で最初の「マラソン」は、1909年3月21日に大阪毎日新聞社の主催で開かれた。トップの選手は神戸大阪間20マイルを2時間少しで駆け抜けた。満洲に「マラソン」という言葉が紹介されるのは、その少し前、『満日』の記事「マラソン競走」によってである。この記事は、マラソンがギリシアの故事に由来し、いま欧米で盛んに行われていることを記したうえで、大阪毎日新聞社のマラソンを紹介している<sup>698</sup>。この言葉が紹介されてから約2カ月後、旅順ではさっそく海軍記念日の催しとして「マラソン競走」が実施されている<sup>699</sup>。

マラソンという言葉が紹介される前後から、満洲では運動会の種目のひとつとして長距離走が広く行われていた。なかでも、満鉄運動会の長距離走は最も注目されるレースだった。1910年の第1回満鉄運動会では、プログラムの最後を飾る種目として1マイル競争が実施された。優勝者は大連郵便局電信課員の斎藤留吉、タイムは「五分二十五秒半」だった。斎藤は200m、800m、走高跳でも優勝した。2位は甲斐貫一、劉玉秦なる中国人が4位に入ったのが注目される<sup>700</sup>。第2回満鉄運動会（1911年）では3000m走に変更され、「飛入り勝手」で40人あまりが参加、甲斐貫一が優勝した<sup>701</sup>。

第3回満鉄運動会（1912年）の3000m走は参加希望者が多かったため、予選が実施された。予選には93人が参加、1着は川崎造船所の車夫孫克宏で、タイムは9分40秒だった。2着の清水善蔵も車夫であった。予選を通過した30人のうち、中国人は2

<sup>697</sup> 全日本陸上競技連盟編『陸上競技規則』昭和十年版、三省堂、1935年、133-134頁。

<sup>698</sup> 「マラソン競走」『満日』1909年3月3日。

<sup>699</sup> 「旅順の海軍記念」『満日』1909年5月26日。

<sup>700</sup> 「満鉄の運動会」『満日』1910年10月10日；「一哩競走の優勝者」『満日』1910年10月11日。

<sup>701</sup> 「歓声満渡る伏見台」『満日』1911年5月1日。

人いた<sup>702</sup>。孫は本戦でも圧倒的な走りで優勝し、川崎造船所大連出張所長の須田鋼鑑は喜びあまって孫を抱き上げ、健闘を称えた<sup>703</sup>。

第4回満鉄運動会(1913年)の予選には140人が参加、うち中国人は17人いた。優勝したのは車夫の袁富貴だった。昨年優勝の孫は14着に終わった。上位15人はすべて中国人で、16番目によく日本人の高見作治がゴールした<sup>704</sup>。満鉄運動会の呼び物であるマラソンの上位を中国人が独占したことに対して、「愛国者」なる人物は「本競走にも支那人が月桂冠を頂くだらう。日本人として残念ではないか」と訴え、「十七号」なる人物は「支那人を加へるのは可いが車夫が多数交つてるのは方法を誤つてる」として、選手の権利を保護すべきだという見解を述べた<sup>705</sup>。アマチュアの問題が、職業選手を排除するためではなく、中国人を排除するために利用されようとしていたのは興味深い。結局、本戦では中国人が上位を独占、日本人トップは21位だった<sup>706</sup>。

満鉄運動会の目玉競技を中国人が独占するのは、日本人にとって面白くなかっただろう。翌年の第5回満鉄運動会では、日本人と外国人を分けて競走することになったが、「皇太后御不例」のため、満鉄運動会は中止となった<sup>707</sup>。

第5回満鉄運動会(1915年)では、4月23日に外国人の予選が開かれ、30人が参加、邱庭猷が10分2秒余で優勝した<sup>708</sup>。日本人の予選はその翌日に開かれ、200人が参加、川西信蔵が10分12秒で優勝した<sup>709</sup>。本大会でも邱と川西が優勝するが、邱が9分31秒、川西が10分20秒と優勝タイムには大きな開きがあった。日本人上位3名はいずれも長春からの参加だった<sup>710</sup>。約20年後、新京駅助役をしていた川西は往事を振り返って、「当時はこれで相当脚に自信を持つて今のスポーツを大いにやつたものです。四十四年頃には徹夜明けなど足袋跣足で新京から孟家屯まで往復一時間十八分の記録でよ

<sup>702</sup>「盛なりし予選競走」『満日』1912年4月26日。

<sup>703</sup>「満鉄運動雑観」『満日』1912年4月30日。

<sup>704</sup>「大競走の予選」『満日』1913年4月27日。

<sup>705</sup>「ハガキ集」『満日』1913年4月28日；「ハガキ集」『満日』1913年4月30日。

<sup>706</sup>「伏見台の大運動会」『満日』1913年5月5日。

<sup>707</sup>「西公園の新設運動場開き」『満日』1914年4月9日；「満鉄運動会中止」『満日』1914年4月11日。

<sup>708</sup>「三千米突競走」『満日』1915年4月24日。

<sup>709</sup>「健脚を競ふ健児二百」『満日』1915年4月25日。

<sup>710</sup>「歓声山を動かす西公園」『満日』1915年5月3日。

く走つたものです。大正四、五年頃には大連の運動会に長春代表で出たものでこれでも長距離では当時全満で一、二と言つたところで毎年旧グラウンドで満鉄運動会の優勝旗を目指して華々しい奮闘をしたものです」と述べている<sup>711</sup>。

第6回満鉄運動会（1916年）では若干方針が変更された。「長距離競走に於て日本人は残念ながら人種的に到底彼等に一躰せざるを得ざる事を知り昨年来両者を区別する為め千五百米突には支那人を雑ぜざる事となしたるが本年も同様千五百米突は日本人のみ」とするが、3000mは日本人と外国人を区別しないことになった。ところが意外にも中国人の参加が振るわず、35名の出場者のうち7名にすぎなかった。昨年の優勝者邱献庭も参加しなかった。その理由は定かではないが、昨年より競技への参加にお金を徴収するようになった（1種目5銭）ことが影響しているかもしれないし、雇用主である日本人からなんらかの圧力がかかったのかもしれない。3000m予選は4月23日に挙行された。本社前に陣取った委員のもとに、「先頭は皆支那人ばかりだ」との注進が入る。委員らが「支那人の勝利を予期して失望やら憤慨やらで齒嚙して口惜が」っていたところ、続いて日本人優勢との報告が入り、「万歳日本人だ日本人だ」という歓呼の声のなか、小学校教師藤田御都がゴールインした。2着は長春の斎藤定、3着は満鉄病院の李昌元であった。藤田の勝利は中国人に対する日本人の勝利というだけでなく、長春に対する大連の勝利という二重の意味で大連の日本人を喜ばせた<sup>712</sup>。大連実業団で藤田のチームメイトだった前田俊介によれば、藤田が優勝したとき「あれは本当の日本人だらうか」と疑われたという<sup>713</sup>。それほど大連の人々に中国人の強さが印象づけられていたのである。本戦には、日本人10名、中国人6名が参加、川西信蔵が連覇を果たし、李昌元が2位、予選トップの藤田は3位に終わった。新聞記事には「川西君支那人を征服す」との副題がつけられた<sup>714</sup>。

第7回満鉄運動会（1917年）では3000mが実施されず、日本人だけで1500mが行

<sup>711</sup> 川西信蔵「三十年を顧みて」『協和』191号、1937年4月15日、18頁所収。新京から孟家屯までは約10キロの距離である。

<sup>712</sup> 「運動会彙報」『満日』1916年4月15日；「練習猛烈を極む」『満日』1916年4月19日；「愈々予選競争」『満日』1916年4月21日；「雨を突破す三千米突」『満日』1916年4月23日。

<sup>713</sup> 「BM戦の昔を語る④」『満日』1936年6月2日。

<sup>714</sup> 「烈風吹荒む西公園」『満日』1916年5月8日。予選で藤田が優勝した時には「日本人遂に支那人を圧す」という副題がついた。



われた。新聞では「例の如く一千五百米突予選競走を行ふ」とあるだけで、変更の理由は不明である<sup>715</sup>。第9回(1919年)に1500mに代わって8000m短縮マラソンが導入されたが、出場者はやはり日本人に限られていた。「満洲に於ける最初の長距離競走」とされたこの8000mの参加者は59名、一着は岡本で30分20秒、2着はわずか1秒あまりの差で中村となった。中村は牛乳販売所勤務だったから、牛乳配達夫だろう<sup>716</sup>。第10回(1920年)には1500mに戻されるが、第12回(1922年)にふたたび8000mへと変わった。「競走規定」には日本人に限定するとの文言は見えないが、それはすでに自明だったのだろう。参加者は90名にのぼったが、ゴールにたどり着いたのは約25名で、『大連新聞』は「男性的でない」と評した。優勝したのは遼東新報社の野田正一郎である<sup>717</sup>。第13回(1923年)以降は10000mが定着する。岡部が正式な陸上競技の種目に切り替えたと思われる<sup>718</sup>。大連新聞社の川村繁次が2連覇し、1925年には遼東新報社の宇佐美義男(義雄)が優勝した<sup>719</sup>。

## (2) 駅伝とマラソン

野田、宇佐美の活躍が示すように、遼東新報社は長距離走に力を入れていた。早くも1920年10月に大連奉天間の255マイルを踏破する長距離マラソンを実施した。大連からは5人の選手が出場、8日間をかけて3人が完走した。1位は加藤福市で48時間19分50秒だった<sup>720</sup>。ベルリンオリンピックで孫基禎がマラソンに優勝する少し前、大連ヤマトホテルのマネージャー田中芬は自らの「マラソナー・ライフ」を次のように振り返った。

<sup>715</sup>「一千五百米突予選競走」『満日』1917年4月16日。

<sup>716</sup>「満鉄の春季運動会」『満日』1919年3月17日；「八千米突競走」『満日』1919年4月16日；「満鉄春季運動会」『満日』1919年5月5日。

<sup>717</sup>「千五百米徒歩競走」『満日』1920年4月10日；「満鉄春季運動会」『大連新聞』1922年3月16日；「満鉄運動会八千米突マラソン競走」『大連新聞』1922年4月19日；「初夏の運動日和に満鉄第十二回陸上運動会」『大連新聞』1922年5月8日。

<sup>718</sup>岡部平太「春季運動会の考察」『読書会雑誌』10巻1号、1923年1月。

<sup>719</sup>「盛会を極めた満鉄運動会」『大連新聞』1923年5月7日；「青葉照る西公園の森蔭にどよめき渡つた満鉄運動会」『大連新聞』1924年5月5日；「予想外の好天気選手の意気頓に昂る」『満日』1925年5月4日。

<sup>720</sup>「奉天大連間マラソン」『大連新聞』1920年10月25日。

苦しいレースと言へば大正九年僕が満鉄入社年の秋、当時の遼東新報社主催の大連—金州間往復四十哩のレースで、距離から言へば正に超マラソン・レースに参加した時だった。道も今と違って全くの馬車道路、加之風埃を喰つて全走したが、イヤハヤ乱暴なレースだった。僅か七十名近くの参加者中、生還者(?)八名だったやうに記憶してゐる。その時の走友で間もなく天下に名を成したのが今は早大出の縄田尚門君で、当時周水子の小野田セメントの青年社員だった<sup>721</sup>。

田中は第1回箱根駅伝に慶大の選手として出場し、3区で4チーム中2位の成績をおさめていた。第1回箱根駅伝に優勝した東京高師チームで4区を走った大浦留市と10区を走った茂木善作は、この夏にアントワープオリンピックに参加、その後教師として満洲に赴任する。田中の走友だった縄田はその後早大に進学、中長距離で日本を代表する選手となる。縄田は箱根駅伝にも5回出場し、9区と10区で区間賞をとっている。

遼東新報社はさらに1924年6月に旅大五万米突競走<sup>722</sup>、翌年3月に旅大突破駅伝を開催した。旅大突破駅伝の優勝チームは大連連合チーム、茂木善作の指導を受けて出場した旅順工科大学チームは3位だった<sup>723</sup>。1926年3月の第2回旅大駅伝には15チームが参加し、45キロ余りのコースを駆け抜けた。最初にゴールしたのは、番外として参加した遼友倶楽部(遼東新報社員)の宇佐美で、記録は2時間47分27秒6だった。次に、やはり番外の大連アスレチック倶楽部がゴールし、3番目にゴールした教育専門学校Bが優勝した(2時間49分37秒6)。2位は満鉄育成、3位は歩兵六三連隊だった<sup>724</sup>。

遼東新報社のライバル満洲日日新聞社も1924年11月2日に第1回体育デー関連イベントとして、開通したばかりの旅大道路を使って、第1回星ヶ浦大連間マラソン競走を開催した。距離は6.7マイル、参加者は120名だった。優勝は遼東新報の宇佐美(36分45秒8)、2位は満洲牧場の三枝常吉、3位は遼東新報の野中与作だった。宇佐美は、中学校時代からマラソンをやっていたといい、今回は35分くらいで走るつもりが向かい風でスピードが出なかったという。三枝は、これまで満洲のすべてのランニングに

<sup>721</sup>「昔はこれでも(21)」『満日』1936年8月5日。縄田は完走できなかったようである。

<sup>722</sup>「旅大間五万米突マラソン終る」『満日』1924年6月30日。

<sup>723</sup>興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』196頁。

<sup>724</sup>「栄冠燦として教育専門の頭上に輝く」『満日』1926年3月22日。

出場し、明治神宮の予選で 5000m に優勝し、極東オリンピック予選で 10000m の満洲記録を破ったことがあると自慢している。三枝の 10000m の記録は 35 分 17 秒 2 だった<sup>725</sup>。この大会は 2 回目が開かれることなく終わる。

1925 年より満洲では気候の関係で体育デーを 10 月 3 日に前倒して実施する。この日、満洲体育協会の主催で旅順戦跡リレーレースが挙行された。参加は 14 チーム、うち旅順師範学堂は全員中国人で、旅順二中と旅順興文会は日中混成チームであった。関東庁前を出発し、白玉山、二〇三高地など日露戦争の戦跡をめぐる関東庁の戻る全長約 32 キロのコースで、これを 5 人でリレーした。優勝したのは大連アスレチック倶楽部でタイムは 2 時間 1 分 50 秒、2 位の旅順一中 A (2 時間 10 分 10 秒) に大差をつけての勝利だった<sup>726</sup>。大連アスレチック倶楽部は、寺島富一郎、高橋松二ら満鉄用度倶楽部マラソン関係者が中心となって大会の前月に組織された。三枝常吉、高橋松二、広瀬進、溝上信吉、相馬勇三が優勝チームのメンバーだった。歴年の参加チームと優勝記録を表 21-1 に挙げておく。

<sup>725</sup>「大連星ヶ浦間のマラソン競走は本日」『満日』1924 年 11 月 2 日；「三十六分四十五秒八で星ヶ浦大連間を突破」『満日』1924 年 11 月 3 日。

<sup>726</sup>「大連 A 倶楽部」『満日』1925 年 9 月 18 日；「秋晴れの空高く体育デーの当日に行ふ旅順戦跡リレーの準備」『満日』1925 年 10 月 2 日；「由緒ある旅順の戦跡にリレーレースを試むるは男児無上の豪快だと」『満日』1925 年 10 月 4 日。

表 21-1 旅順戦跡リレー記録

年	優勝チーム	記録	参加チーム
1925	大連アスレチック倶楽部	2:01.50	関東庁、駆逐隊 A、駆逐隊 B、警察練習所、大連アスレチック倶楽部、大連民政署、通信局、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順警察署、旅順工大、旅順興文会、旅順師範学堂、旅順二中
1926	大連アスレチック倶楽部 B	2:00.00	関東庁、大連アスレチック倶楽部 A、大連アスレチック倶楽部 B、通信局、南満工専、南満工専職業教育部、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順一中 C、旅順一中 D、旅順警察署、旅順工大（途中棄権）、旅順師範学堂
1927	旅順一中 C	2:08.42	関東庁 A、関東庁 B、修養団、逡友倶楽部、大連民政署、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順一中 C、旅順一中 D、旅順一中 E、旅順工大（途中棄権）、旅順師範学堂 A、旅順師範学堂 B、旅順二中 A、旅順二中 B
1928	大連アスレチック倶楽部 A	2:00.30	関東庁 A、関東庁 B、通信倶楽部、大連アスレチック倶楽部 A、大連アスレチック倶楽部 B、大連電気区日本橋倶楽部、旅順工大、旅順青年訓練所、旅順警察署
	旅順二中 A	2:06.30	旅順一中 A、旅順一中 B、旅順一中 C、旅順師範学堂 A、旅順師範学堂 B、旅順二中 A、旅順二中 B
1929	通信倶楽部	1:58.22	関東庁松組、関東庁桜組、関東庁梅組、大連ミドリ倶楽部、通信倶楽部、旅順実業クラブ
	旅順二中 A	2:03.06	大連商業、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順一中 C、旅順一中 D、旅順一中 E、旅順師範学堂 A、旅順師範学堂 B、旅順師範学堂 C、旅順二中 A、旅順二中 B
1930	大連アスレチック倶楽部	1:56.34	関東庁、大連アスレチック倶楽部、大連土木課 A、大連土木課 B、大連ミドリ倶楽部、満電、旅順工大、旅順実業団
	旅順二中 A	2:01.07	大連商業、大連二中、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順一中 C、旅順師範学堂 A、旅順師範学堂 B、旅順師範学堂 C、旅順師範学堂附属公学堂、旅順二中 A、旅順二中 B、旅順師範学堂附属（小学校？番外）
1931	大連	1:53.46	大連、撫順、旅順
	関東庁 A	1:56.57	関東庁 A、関東庁 B、大連アスレチック倶楽部、大連土木課出張所、満鉄鉄道部緑友クラブ、旅順刑務所
	旅順一中 A	1:58.45	大連一中、大連商業、大連二中、旅順一中 A、旅順一中 B、旅順師範学堂 A、旅順師範学堂 B、旅順二中 A、旅順二中 B

第 3 回大会（1927 年）は 10 月 1 日の開催で、主催者は関東庁体育研究所に代わった。第 4 回大会（1928 年）より神嘗祭（10 月 17 日）に開かれることになった。これは体育デー前後に実施されるさまざまなイベントとの重複を避けての措置であろう。またこの年より一般と中学の部に分けて順位がつけられることになった。中学の部で優勝した旅順二中 A は中国人学生のチームである<sup>727</sup>。第 7 回大会（1931 年）は満洲事変勃

<sup>727</sup>「驟雨を衝いて戦跡リレー」『満日』1927 年 10 月 2 日；「きのふ旅順の戦跡リレー振ふ」『満日』1928 年 10 月 18 日。

発直後に開催された。全満陸上競技選手権など多くの競技会が中止となるなか、戦跡リレーは戦時のイベントとしてふさわしいと判断されたのだろう。今回から都市対抗が加わり、一般、中学と計3部門で順位が競われた。都市対抗では、八重樫栄太郎、渡辺逸、浜田常盛、永谷寿一、大藪貫一と中長距離のスペシャリストを揃えた大連が従来の大会記録を3分近く縮めて優勝した<sup>728</sup>。八重樫は絵に描いたような苦労人で、岩手県の小学校を卒業後、農業移民として父とともに北海道に渡るが、事業は失敗し、下層労働者となって札幌、小樽を転々とし、大連にやって来た。満鉄で夜勤の仕事に就くが、無学を恥じて夜学に通おうと決意した。それには、昼間の勤務にしてもらわねばならず、上司に認めてもらうためにランニングの練習を始めたのだった<sup>729</sup>。

1926年夏、東京高師陸上競技部が来連した(第19話参照)。引率者の金栗四三はマラソン指導会を実施、永谷寿一、浜田常盛、金光秀三ら満洲の一流ランナー約30名が指導を受けた<sup>730</sup>。この年の全満陸上競技選手権大会では、満洲で初めて42.195キロのフルマラソンが挙行され、永谷が3時間13分30秒8のタイムで優勝した<sup>731</sup>。翌1927年の天長節(4月29日)には、遼東新報社主催の旅大マラソンが開催された。前年まで旅大駅伝として開かれていたが、アムステルダムオリンピックを念頭に入れてマラソンに変更したものと思われる。1位は渡辺逸(2時間46分36秒6)、2位は八重樫栄太郎(2時間51分16秒)、3位は溝上信吉(2時間51分17秒)だった<sup>732</sup>。永谷寿一の名がないが、彼は4月10日に開かれた大阪毎日新聞社主催の阪神クロスカントリーレースに出場していた。2時間50分の自信があると言って臨んだが、9位と振るわなかった。優勝したのは山田兼松で、タイムは2時間33分45秒、世界記録にあと1分あまりという好記録だった<sup>733</sup>。1マイル半不足していたとの噂もあったようで、岡部は旅大マラソンのほうは距離を精査したと強調している<sup>734</sup>。

<sup>728</sup>「戦跡リレーの都市対抗リレー」『大連新聞』1932年8月11日；「驚異的な新記録で大連チーム第一着」『満日』1931年10月18日。

<sup>729</sup>「マラソンの八重樫君が青訓の一生徒」『大連新聞』1933年5月21日。

<sup>730</sup>「金栗マラソン王の精細なコーチ」『満日』1926年8月11日。

<sup>731</sup>「神宮競技予選を兼ねた全満陸上競技大会」『満日』1926年10月11日。

<sup>732</sup>「マラソン競走」『満日』1927年5月1日。

<sup>733</sup>「大毎の廿六哩マラソンへ永谷選手出場」『満日』1927年3月26日；「意気高き九十六健児長駆廿六哩を走破す」『大阪毎日新聞』1927年4月11日。

<sup>734</sup>「画時代的なマラソン競走」『満日』1927年5月3日。

翌年の旅大マラソンは主催者の遼東新報社が満日社に合併されたため、満日社主催で開かれ、名称も蔡大嶺マラソン大会と改められた。天長節にオリンピック予選が予定されていたこともあってか、4月15日の開催だった。コースは満日本社から蔡大嶺を往復する42.195キロである。参加選手は30名、優勝は渡辺逸でタイムは2時間48分43秒、2位は八重樫栄太郎で3時間6分7秒、3位は松本丈太郎で3時間9分56秒だった。満洲の春特有の強風に悩まされて記録が伸びなかった<sup>735</sup>。蔡大嶺マラソンは、これ以後、満洲で唯一のフルマラソン大会として1943年の第17回大会まで続けられる。

## 第22話 陸上競技IV

### (1) 中等学校

満鉄運動会で最も注目を集めた種目の一つに学校対抗リレーがあった。フィールドの外でも、各学校応援団による激しい闘いが繰り広げられた。

1910年に開かれた第1回満鉄運動会での「四百米突旅順中学生」「工科学堂連絡競走」なる種目があったが、これらは同じ学校の選手同士での競走だった<sup>736</sup>。学校対抗の形式が最初に確認できるのは1916年の満鉄運動会である。

愈々問題の商業校、見習、中学、工業校、工業学堂〔旅順工科学堂〕A組の競走となると各団の弥次隊の熱狂声援獐猛を極め、打振る応援旗は砂塵の中に更に大旋風を捲き起さむばかり、スタートを切るや非常の接戦を現じ観衆斉しく手に汗握つたが、工業の選手克く奮闘し中学を抜き工科を抜いて約三十米突の差を残して遂に一着し工科二着に決勝点に入る<sup>737</sup>。

大連中学（1918年創設）の初参加は1920年のことである。応援団員だった並木武夫によれば、丸山英一教頭より「今年から対校陸上競技に参加するから皆で準備する様に」との指示があり、学生は大いに息巻いた。大連中学では初めて全校生を動員して応援団を組織したが、応援団旗の色をめぐる一騒動あった。というのも、対校陸

<sup>735</sup>「運動シーズンに魁けマラソン競走の壮挙」『満日』1928年3月18日；「フル・マラソンの栄冠 渡辺君の頭上に燦たり」『満日』1928年4月16日；「マラソンを見て」『満日』1928年4月17日。

<sup>736</sup>「満鉄の運動会」『満日』1910年10月10日。

<sup>737</sup>「烈風吹荒む西公園」『満日』1916年5月8日。

上競技の色分けは大連商業が黄色、南満工業が白色、見習が赤色、旅順中学が青色と決まっていたところ、学校側はすでに青色の旗を準備していた。大連中学は旅順中学から分離して設立されたからである。しかし学生側は緑色を主張し、青色の旗を黄色の染料に浸して緑色の応援団旗をつくり出陣した（その後、緑は大連中学のスクールカラーとなった）<sup>738</sup>。実のところ、緑色は旅順工科学堂のカラーだった。

旅順工科学堂は1919年の満鉄運動会対抗陸上競技で初優勝を遂げたが<sup>739</sup>、それ以降は参加していない。1920年に関東庁は旅順工科学堂と奉天の南満医学堂を大学に昇格させ満洲大学を創設する提案を行う。満洲大学は実現しなかったが、1922年に両校はそれぞれ旅順工科大学、満洲医科大学に昇格した。この間、旅順工科学堂は中等学校との競技を卒業し、(当時の日本の大学のように)中等学校の競技会を主催する立場に移行し、競技の重心を大学対抗試合に置くようになっていた。例を挙げると、旅順工科学堂は1920年10月には第1回関東州中等学校野球大会(第5話参照)、1921年5月には第1回関東州中等学校庭球大会を主催する一方で、1921年6月より、「満洲に二つある最高学府」である旅順工科学堂と南満医学堂の対抗競技が開始された<sup>740</sup>。

満洲の各中等学校で本格的な陸上競技が開始されるのは1921年のことである(前述)。1922年10月に全満競技連合が開いた第1回全満陸上競技選手権では、大連中学の佐川親雄、徳永誓、相生四郎、南満工業の田島貞夫らが活躍した。1923年10月には南満洲中等教育研究会の主催で全満中等学校陸上運動会が開かれることになっており、旅順中学、大連中学、南満工業、大連商業、奉天中学、撫順中学、長春商業が参加予定だったが、関東大震災の影響で中止された<sup>741</sup>。

1926年3月、奉天中学校長熊谷政直は南満洲中等教育研究会の主催で全満中等学校陸上競技大会を開くこと、同会以外の競技会には参加しないことを大連一中の服部校長に呼びかけた。5月には奉天中学校で州外中等学校男子生徒の各種競技会に関する打ち合わせがなされた。このいわゆる中等学校対校競技不参加問題は「四五年前」か

<sup>738</sup> 並木武夫「開校当時の思い出」大連第一中学校校友会編『創立九十周年記念誌』大連第一中学校校友会事務局、2008年、104-105頁所収。

<sup>739</sup> 「応援団本部より」『靈陽』12号、1920年11月。

<sup>740</sup> 「関東州中等学校第一回庭球大会」『満日』1921年5月28日；一総務「医学堂工科学堂対校競技に就て」『靈陽』13号、1921年11月、192-193頁所収。

<sup>741</sup> 「全満中等学校陸上競技大会」『大連新聞』1923年8月3日。

ら中等学校長の間で議論されていたもので、1926年5月の満鉄運動会中等学校対校リレーに育成と大連商業しか出場せず、6月の奉撫対抗競技に奉天中学と撫順中学の生徒が出場しなかったことで、大きな関心を集めることになり、小学校や女学校にまで波及した<sup>742</sup>。

結局、奉天中学は9月19日に第1回満鉄中等学校連合競技大会を開催し、州外各中等学校（安東中学、鞍山中学、撫順中学、奉天中学、長春商業）が参加した<sup>743</sup>。一方、州内の各中等学校はその翌週に開かれた関東庁主催の始政二十年記念運動会に参加した。この大会には州外各中等学校も参加した。翌年以降は州内各中等学校が参加して関東州中等学校陸上競技大会が開かれた。

中等学校の二大競技会から排除された満鉄育成学校の陸上競技部は、大連市民運動会と満鉄運動会中等学校対抗リレーを目標に練習に励んだ。1930年、育成は満洲の代表的選手として知られていた多田増太郎を筆頭に、島田高志、山崎義男、増井正和と優秀な短距離走者が揃った。5月の大連市民運動会1000mメドレーリレーと9月の満鉄運動会800mリレーで育成は大連二中、大連商業を押さえ、優勝を勝ち取った（表22-1）<sup>744</sup>。育成（若葉会）は全満リレーカーニバルや地方都市チームとの対抗戦にも積極的に取り組んだ。とくに鞍山とは1927年以来毎年対抗戦を実施していた<sup>745</sup>。

表 22-1 満鉄運動会中等学校リレー成績

	1位	2位	3位
1924	工業	育成	
1925	一中	工業、大商、育成*	
1926	大商	育成	
1927	一中	大商	二中
1928	一中	大商	二中
1929	大商	二中	一中
1930	育成	二中	大商
* 2位以下の順位不明			

学校対抗陸上競技は大連一中と大連二中の間で行われた。1回目は1927年で一中が勝った<sup>746</sup>。2回目は1929年で二中が雪辱

<sup>742</sup>「州外中等学校武道及競技協議会」『満日』1926年5月5日：「全満中等学校の対校競技不参加問題」『満日』1926年6月11日：「対校競技不参加小学校も申合」『満日』1926年6月12日：「多数で可決した児童の対外競技」「満洲体育界に暗流漲る」『満日』1926年6月13日。

<sup>743</sup>「満鉄中等校連合技競」『大連新聞』1926年9月21日。

<sup>744</sup>竹沢正和「陸上部回想」満鉄若葉会編『曠野に生きた若者たち』126-128頁所収。増井は翌年大連二中に転校し、活躍を続ける。

<sup>745</sup>「若葉対陸上競技」『大連新聞』1927年6月21日など。

<sup>746</sup>「好結果を示した両中学陸上競技」『満日』1927年8月31日。



した<sup>747</sup>。1931年、大連一中陸上競技部は「何とかして二中を破る」を合い言葉に、西内精四郎校長（服部から改姓）に頭を下げ、二中の丸山校長を口説いてもらって、対抗戦を実現させた。大連一中44名の陸上部員は夏休みに猛練習をこなし、その日の計画を消化できなければ上級生でも制裁を受けた。本番では最後のリレーを前に同点となった。序盤でリードを広げた一中が二中アンカーの猛追をしのいで優勝した<sup>748</sup>。新聞報道によれば、今回の対校競技と、9月に予定されていた関東州内男子中等学校体育大会は、対校競技全廃論者に対する反撃であった<sup>749</sup>。後者の大会は関東庁体育研究所が主催する総合競技大会で、関東州中等学校陸上競技大会もこの大会に吸収された。

満洲の教育関係者の間に競技への懐疑が広がっていたことは、満洲中等競技界の発展に大きな影響を及ぼしていた（第19話参照）。そんななか、彗星の如く現れたのが、「ジャンプの三羽烏」、鞍山中学の山崎満男、旅順中学の最上義満、大連一中の湊川捨三であった。1930年末、岡部は「本年度特に注目すべきことは中等学校選手の進出である、山崎（鞍山）最上（旅中）港川（一中）山口（二中）君堂々と第一流選手に伍する様になつて来た」と中学選手の躍進を讃えた。三羽烏は中学校を卒業後、山崎は明大、最上は慶大、湊川は早大に進学した（湊川は早大競走部で主将。最上は早慶戦やインカレに出場したが、中退。山崎は不明）。折角芽生えた才能を満洲は手放さざるをえなかった。その主たる理由は、満洲に彼らを受け入れる高等教育機関がなかったことに求められるだろう。

## (2) 大学、専門学校

南満医学堂では、1920年の夏休みに母校岸和田中学のグラウンドに顔を出した山岡義郎が、棒高跳で日本記録を更新していた岸和田中学4年生の中沢米太郎に刺激され、南満医学堂にも陸上競技を導入しようと円盤を購入して帰った。山岡は平野正朝舎監の後援を得て陸上競技の用具を買いそろえ、その普及のために旅順工科学堂に試合を申し入れた。旅順側は角力部なら試合に応じるとのことであった。3月から折衝を重

<sup>747</sup>「大連一二中陸上競技」『満日』1929年9月11日。

<sup>748</sup>幡田克彦「陸上部の思い出」大連一中創立五十周年記念行事実行委員会編集部編『大連一中創立五十周年記念』158-159頁所収。

<sup>749</sup>「胸一つの差で一中勝つ」『満日』1931年8月30日。

ねて、1921年6月に旅順で両校の第1回対校競技が開かれた。競技種目はサッカー、テニス、相撲だった。秋には奉天で柔道、剣道、野球の対校競技が行われた<sup>750</sup>。

全校の信望をうけ、責任を一身に負うた両校選手の決死の競技。応援団の白熱的意気。かくの如きは正に日露戦争以来のことであつたらう。やがては満洲の年中行事となり、模範的対校競技とならねばならん<sup>751</sup>。

いまにも熱気が伝わってくるような文章である。

陸上競技が導入されるのは1922年6月の第2回対校競技からである。第1回対校競技で陸上競技が採用されなかったのは、両校に陸上競技部がなかったからであろう。旅順工大では1922年10月に陸上競技部が設立された<sup>752</sup>。1923年秋、アントワープオリンピックのマラソンに出場した経験をもつ茂木善作が赴任し、陸上競技部長に就任した<sup>753</sup>。茂木も東京高師の出身で、水戸高校から満洲に転じたところは岡部とそっくりである。

1922年秋、アントワープオリンピックの水陸両競技に出場した経験をもつ斎藤兼吉が体操教師として満洲医大に赴任した<sup>754</sup>。このころ満洲医大予科に入学した北河清は他の学生らと陸上競技部をつくった<sup>755</sup>。

メス(満洲医大)が勝つか、ハンマー(旅順工大)が勝つか。「決死の競技」ゆえにトラブルがしばしば起きた。1923年には条件面で折り合いがつかず、対校競技は中止された<sup>756</sup>。1926年も開かれなかった。その直前から両校代表による協議が何度も開かれ、翌1927年4月に合意に達し、「靈陽輔仁対抗競技規約」を作成のうえ誓約書を交わした。5月28日より第1回対抗競技が開幕するが、野球の判定で紛争が生じ、競技は中止となった<sup>757</sup>。翌年以降の開催が危ぶまれたが、1928年5月に第2回対抗競技が無事開かれると、

<sup>750</sup> 山岡義郎「南満医学堂時代」輔仁会満洲医科大学史編集委員会編『柳絮地に舞ふ』585頁所収：一総務「医学堂工科学堂対校競技に就て」；「工科医学対抗競技大会」『満日』1921年6月3日。

<sup>751</sup> 一総務「医学堂工科学堂対校競技に就て」。

<sup>752</sup> 「本会会則改正」『靈陽』14号、1922年11月、175-176頁所収。

<sup>753</sup> 「陸上競技部々報」『靈陽』15号、1924年1月、202-203頁所収。

<sup>754</sup> 「オリンピック選手権の予選大会出場権の全満陸上競技会近づき各選手猛習を継続中」『大連新聞』1922年10月8日。斎藤については、高嶋航、金誠編『帝国日本と越境するアスリート』49-56頁(執筆は佐々木浩雄)を参照。

<sup>755</sup> 北河清「陸上競技部の初期のころ」。

<sup>756</sup> 「医科大学工科大学対校競技の件」『靈陽』15号、1924年1月、198頁所収。

<sup>757</sup> 興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』321-326頁。

年々盛んとなり、「満洲に於ける対抗陸上競技の白眉」「満洲の早慶戦」とみなされるまでになった<sup>758</sup>。陸上競技では最初の3回に工大、続く3回に医大が勝利した。双方3勝3敗で迎えた1930年の対校競技は同点に終わる。翌年3月、旅順工大側が種目削減案を出す、満洲医大側がこれを拒否、これによって医大と工大の対抗競技はその歴史に幕を下ろすことになった<sup>759</sup>。

1925年に開校した奉天の満洲教育専門学校は、斎藤兼吉を助教授として迎え、スポーツに力を入れた。全学年が揃った1927年6月、教専は南満洲工業専門学校との対抗戦に臨み、僅差でこれを破った<sup>760</sup>。教専と工専の対校競技は「旅順工大、奉天医大の各種運動競技対抗試合につぐ対校ゲーム」として知られるようになる<sup>761</sup>。対抗戦は1929年まで3回実施されるが、いずれも教専が勝った。

第3回対校競技の直後、教専陸上競技部は内地遠征を敢行した。1928年末に斎藤が洋行にかけた後、岡部平太が教専の講師として陸上競技部をコーチしていた<sup>762</sup>。内地遠征は岡部の発案であろう。満洲の学校陸上競技部として初の内地遠征であった。教専チームは19日に東京文理科大学に快勝、26日に広島高師を大差で破り、意気揚々と凱旋した<sup>763</sup>。翌1930年には広島高師の陸上競技部が奉天に遠征し、教専と対戦するが、教専はふたたびこれを打ち破った<sup>764</sup>。

1929年12月、医大、工大、工専、教専の代表が医大に集まり、満洲学生陸上競技連盟の設立を決定した<sup>765</sup>。翌1930年1月6日に発会式を挙げる予定であったが4月に延期となった。規約では毎年6月第2日曜日に満洲学生陸上競技対抗選手権大会を開催することになっており、初年度は来満する秩父宮の台覧を仰いで満洲医大で第1

<sup>758</sup>「工大軍の猛練習」『満日』1929年5月2日；「工大-医大第四回陸上競技」『満日』1930年4月12日。

<sup>759</sup>興亜寮史編纂委員会編『興亜寮史』392頁。

<sup>760</sup>「僅に一点半の差で工専惜敗す」『満日』1927年6月13日。

<sup>761</sup>「雪辱の念燃ゆる工専の陸上選手」『満日』1929年6月14日。

<sup>762</sup>「教専対大連鉄道軍陸上競技」『満日』1929年6月14日。岡部は奉天の馮庸大学でもコーチをしていた。

<sup>763</sup>「教専対大連鉄道軍陸上競技」『満日』1929年6月14日；「独選手には歯がたつまい」『満日』1929年7月3日；「教専軍広島高師を破る」『満日』1929年7月27日；「柏木宝丸「内地遠征便り」」『満日』1929年7月30日-8月1日、8月9日。

<sup>764</sup>「遠来の高師軍再び大敗す」『満日』1930年7月21日。

<sup>765</sup>「満洲学生陸上競技連盟愈々成る」『大連新聞』1929年12月16日。

回大会を開催するはずだった<sup>766</sup>。秩父宮は5月14日に満洲医大を訪れて陸上競技を観戦する。教専、工専、医大の学生が参加したが、学生選手権大会ではなかった<sup>767</sup>。

連盟の結成を促進したのは村上国平の来満であった。村上は日本短距離界の第一人者で、1929年に100m10秒6、200m21秒5の日本新記録を樹立、また全日本学生陸上競技聯合会でも役員として活躍していたが、病に冒され、競技界から引退していた。村上は東京帝大を卒業後、満鉄に就職が決まり、1931年7月に来満した<sup>768</sup>。これを契機に満洲学生陸上競技連盟結成に向けた動きが起り、9月6日に工専、医大、工大の代表が集まり（教専は同年1月に廃校が決定していた）、連盟の結成と競技会の開催を決定した<sup>769</sup>。第1回満洲学生陸上競技会は10月18日に大連運動場で開かれ、工専が0.5点差で医大を破り優勝した<sup>770</sup>。もっとも、その記録（表22-2参照）は芳しいものではなく、「内地中等学校大会にも及ばざる貧弱なものであつた」と酷評された<sup>771</sup>。

表 22-2 日満学生記録比較

	満洲学生陸上競技会		全国中等学校選手権記録	
100m	今井利武（医大）	11秒2	吉岡隆徳（島根師）	10秒9
400m	坂田恒夫（工専）	53秒4	相原豊次（下野中）	51秒4
1500m	松浦敏雄（工専）	4分43秒4	堀鉦一郎（郡山中）	4分19秒4
800mR	工専チーム	1分38秒2		
高障碍	林不二太郎（工大）	17秒1	吉岡隆徳（島根師）	16秒3
走高跳	大崎安二（工専）	1m70	安達清（関西中）	1m84
走幅跳	野田剛一郎（医大）	6m63	将積雄二（御影師）	7m00
棒高跳	野田剛一郎（医大） 津山豊雄（工大）	3m10	望月倭夫（静岡師）	3m70
円盤投	山田源市（医大）	34m95	入江巻雄（鳥取師）	37m43
砲丸投	高木末吉（工専）	11m23	栗原伝次郎（鳥取師）	13m90
槍投	高木末吉（工専）	47m35	池永正治（京都師）	53m66

<sup>766</sup>「秩父宮の台覧を仰ぎ満洲学生陸上競技大会」『満日』1930年1月9日。

<sup>767</sup>「砂塵吹き揚る中に陸上競技を御覧」『満日』1930年5月15日。

<sup>768</sup>「村上選手満鉄へ」『満日』1931年7月9日。

<sup>769</sup>「工大、医大、工専の三校が対抗競技会」『満日』1931年7月15日；「工専、医大、工大で学生競技連盟組織」『満日』1931年9月9日。

<sup>770</sup>「満洲学生陸上連盟であす第一回競技会」『満日』1931年10月17日；「若人の意気燃えて空前の白熱戦」『満日』1931年10月19日。

<sup>771</sup>「今年の運動界を回顧して（上）」『満日』1931年12月24日。

### (3) 女子陸上競技

女子スポーツを重視した全満競技連合は、早くも 1922 年夏の第 1 回全満水上競技選手権大会に女子選手を参加させたが（第 14 話参照）、同年秋の全満陸上競技選手権大会（第 19 話参照）には女子選手の姿が見られなかった。水泳と違って、陸上競技は女性に相応しいスポーツだと考えられていなかったからだろう。全満競技連合が 1923 年初めに発表した年間予定では、10 月に女子陸上競技会を開催することになっていたが<sup>772</sup>、これも実現には至らなかった。

1924 年 7 月、南満洲中等教育研究会は全満高女聯合競技会の開催を決定、陸上競技では「八百リレー、四百、二百、百、五十米突、マラソン、円盤投、槍投、砲丸投、バスケットボール投、ベースボール投（野球二号）、走巾跳、走高跳、ホップスジャンプ〔三段跳〕、ハードル」が挙げられていた<sup>773</sup>。同年 10 月、旅順、大連の高女 3 校による連合競技大会が開かれたが、陸上競技は採用されなかった<sup>774</sup>。その 2 週間後、東京で第 1 回明治神宮競技大会が開催された。満洲代表監督の田村羊三（満鉄社会課長）は女子選手の活躍に強い感銘を受けた。柔道選手の二宮宗太郎も「来年は満洲から女子選手を送りたい」と感想を述べている<sup>775</sup>。

1925 年 6 月、弥生高女と旅順高女の対校競技が開かれた（神明高女も参加予定だったが、競技種目をめぐって意見が合わず、参加を取りやめた）。陸上競技の実施種目は 50m、100m、400m リレー、砲丸投、走幅跳であった<sup>776</sup>。女子選手はこの年 10 月の全満選手権大会にも姿を見せた。50m では神明高女 2 年生の高見静が弥生高女の黒田通子をおさえて優勝（タイムは 7 秒 4）、100m では逆に黒田が高見をおさえて優勝した（タイムは 14 秒 4）<sup>777</sup>。『満蒙年鑑』はこの選手権大会を「女流選手の参加は満洲女性が体育運

<sup>772</sup>「全満競技連合事業計画成る」『満日』1923 年 1 月 20 日。

<sup>773</sup>「中等学校女子体育を如何にするか」『大連新聞』1924 年 7 月 13 日。

<sup>774</sup>「全満高女競技会」『大連新聞』1924 年 7 月 30 日；「高女連合競技大会」『満日』1924 年 10 月 18 日。

<sup>775</sup>「日本内地に於る運動熱は素晴らしい」『満日』1924 年 11 月 27 日；「柔道の二宮君は運が好くて勝つたと謙遜する」『満日』1924 年 11 月 11 日。

<sup>776</sup>「旅大高女連合競技会」『満日』1925 年 4 月 18 日；「高女同志のいがみ合ひ」『大連新聞』1925 年 4 月 28 日；「紅白に分れ戦ふ花の乙女の選手」『満日』1925 年 6 月 12 日；「散る花の様に美はしかつた高女の連合競技」『満日』1925 年 6 月 15 日。

<sup>777</sup>「初めての女子競技もあり全満陸上競技」『満日』1925 年 10 月 18 日。

動に目覚めた一証左として特筆に値す」と高く評価した<sup>778</sup>。彗星の如く現れた高見は今回の走りで「天才的スプリンター」と認められ、その将来を囑望される存在となった<sup>779</sup>。

1926年9月、関東庁の主催で始政二十年記念運動会が開かれた。人々の注目を集めたのは、スウェーデンのイエテボリで開かれた国際女子競技大会に参加、その帰途に旅順に立ち寄った人見絹枝だった。人見は50m、100m、砲丸投に番外として登場、圧倒的な強さを見せつけた。人見はまたハルビン、奉天、大連で講演やコーチもしている<sup>780</sup>。人見の活躍は大連の女子スポーツ界を大いに刺激した。

女子の競技は内地の夫れに比べて立ち遅れてあつたが最近漸く勃興の気運に向つて居る。而して満洲の女流選手は大連の神明弥生の二高女に占められ正式に練習を開始したのは14年で全満選手権大会に尊き記録50米、高見静子（神明）7秒4、百米、黒田通子（弥生）14秒2—が作られ、15年の旅順の新グラウンドに於ける競技会や人見絹枝嬢の来満に刺戟せられた結果は彼女等の感激と努力となつて昭和2年6月の女子競技に於ては従来<sup>マ</sup>のレコードは凡て破られ内地のレベルに迄近づけた<sup>781</sup>。

ここに言及される1927年（昭和2年）6月の全満選手権には、神明、弥生の両高女からなんと64人の選手が出場している（従来は十数人）。高見静は50mに7秒フラットの記録を出した<sup>782</sup>。

1928年の日仏競技も、女学生のスポーツ熱をあおった。日仏競技の直後には全満選手権と州内外生徒児童対校競技が挙行され、関東州だけでなく、撫順や奉天の女学生も参加した。奉天高女の陸上競技部はこの大会に備えて、夏休みの間、午前7時から

<sup>778</sup>『満蒙年鑑』大正十五年版、631頁。

<sup>779</sup>「祝賀運動会に活躍する花形（五）」『満日』1926年9月18日。

<sup>780</sup>「世界陸上競技会の花形人見嬢は来る廿一日に着連」『満日』1926年9月10日；「人見嬢が奉天でコーチ」『満日』1926年9月16日；「人見絹枝嬢十五日着哈」『満日』1926年9月16日；「血を湧かさしめる人見嬢の感想談」『満日』1926年9月19日；「奉天市民の運動会盛観」『大連新聞』1926年9月21日；「スポーツに対する真剣な態度を希望」『満日』1926年9月23日；「大会を飾る陸上競技の開始」『満日』1926年9月27日；「二日に亘つた陸上競技盛況を極めて終る」『満日』1926年9月27日。

<sup>781</sup>『満蒙年鑑』昭和三年版、640頁。

<sup>782</sup>「女流選手の出場多数で大会を彩られん」『大連新聞』1927年6月19日；「全満陸上競技選手権大会」『満日』1927年6月27日。

9時まで教専の運動場で猛練習したが<sup>783</sup>、いずれの種目でも上位3位に入ることができなかった。作家の松原一枝は当時弥生高女に通っていたが、日仏競技のための歌を覚えさせられたこと、学校の運動場の砂場で、ホップ、ステップ、ジャンプといいながら三段跳をすることが流行ったこと、入場式で日本選手の姿に感動したことなどを書き残している。なかでも織田幹雄と南部忠平は人気が高かったという<sup>784</sup>。

1929年10月、張学良の主催により奉天で中日徳国際競技大会（日支独国際陸上競技大会）が開かれ、人見絹枝が60mで世界新と100mで世界タイ記録を出した（第19話参照）。人見は奉天女学校や同沢女子中学で講演を行い、大阪毎日の記者として張学良と会談するなど、競技場の外でも活躍した。

高見静はこの年の明治神宮大会に参加し、100mで2位、200mで3位に入り、日本のトップ選手の仲間入りを果たした。さらに、1930年5月には極東大会に出場、200mで2位となった。極東大会の翌週には、プラハで行われる万国女子オリンピック大会の予選が開かれた。高見は遠征前に走幅跳で脚を痛めており、100mで6位と振るわなかった<sup>785</sup>。高女卒業後も競技活動を続け、「独立したスポーツマン」「若き女流スポーツ批評家」として活躍した高見は、女子選手のロールモデルを提供した。その後、病を得た高見は競技から退き、ほどなくして世を去った<sup>786</sup>。

高見に代わって満洲女子陸上競技界のスターの座に就いたのが砲丸投げの坂田政代である。弥生高女4年生の坂田は1930年5月の極東大会満洲予選で9m92の満洲新記録を出して脚光を浴びる<sup>787</sup>。同年10月の全日本選手権満洲予選では10m43をマーク、これは人見絹枝の10m39を上回る日本新記録であった<sup>788</sup>。満洲代表として大阪の本戦に出場した坂田は見事優勝、三段跳でも2位に入る好成績を収めた<sup>789</sup>。5年生に進んだ翌

<sup>783</sup>「町の便り」『満日』1928年8月22日。

<sup>784</sup>松原一枝『幻の大連』新潮社、2008年、50-51頁。

<sup>785</sup>「高見嬢はよく戦ってくれた」『満日』1930年5月30日；片岡語咲「高見選手奮戦記」『満日』1930年5月31日-6月1日。

<sup>786</sup>「満洲が生んだ女流運動家（5）」『満日』1931年6月19日；恩田静枝「高見静選手」満洲美会編『合歓の花』120頁所収。

<sup>787</sup>「時ならぬ寒さに氣勢余り揚らず」『満日』1930年5月5日。

<sup>788</sup>「女子砲丸投げに坂田政代嬢日本新記録」『満日』1930年10月6日。

<sup>789</sup>「砲丸投げに気を吐いた」『大連新聞』1930年11月1日。

年も毎日練習に励み、第6回明治神宮大会に出場し準優勝した。坂田は高女卒業後も活動を続け、1933年の第7回明治神宮大会では3位に入っている。引退後は幼稚園の先生になったことが報じられている<sup>790</sup>。

あとから振り返ると、1920年代末は満洲女子陸上競技界は黄金時代だったことがわかる（表22-3）。1939年時点の関東州記録9種目のうち、坂田政代の砲丸投（1933年）と高石信恵の走幅跳（1937年）を除く、7種目が1927年から1929年に樹立されたものだった<sup>791</sup>。

表 22-3 満洲女子陸上競技記録（1932年）

種目	名前	記録	年月日
50m	高見静	7秒0	1927.6.26
100m	高見静	13秒3	1929.9.1
200m	高見静	27秒3	1929
200mR	神明高女	27秒0	1930
走高跳	平塚順子	1m32	1928.9.25
走幅跳	森本温子	4m59	1927.6.26
三段跳	平塚順子	10m095	1928.9.27
砲丸投	坂田政代	10m43	1930.10.5

【附記】本稿はJSPS科研費JP18H00722の助成を受けて行った研究成果の一部である。

<sup>790</sup>「満洲が生んだ女流運動家（1）」『満日』1931年6月14日；「女子スポーツ界を辿る（4）」『大連新聞』1932年1月26日；「童心は投げざるがよろし」『満日』1937年2月21日。

<sup>791</sup>『満蒙年鑑』昭和十五年版、461頁。